

豊中市蛸池中町所在

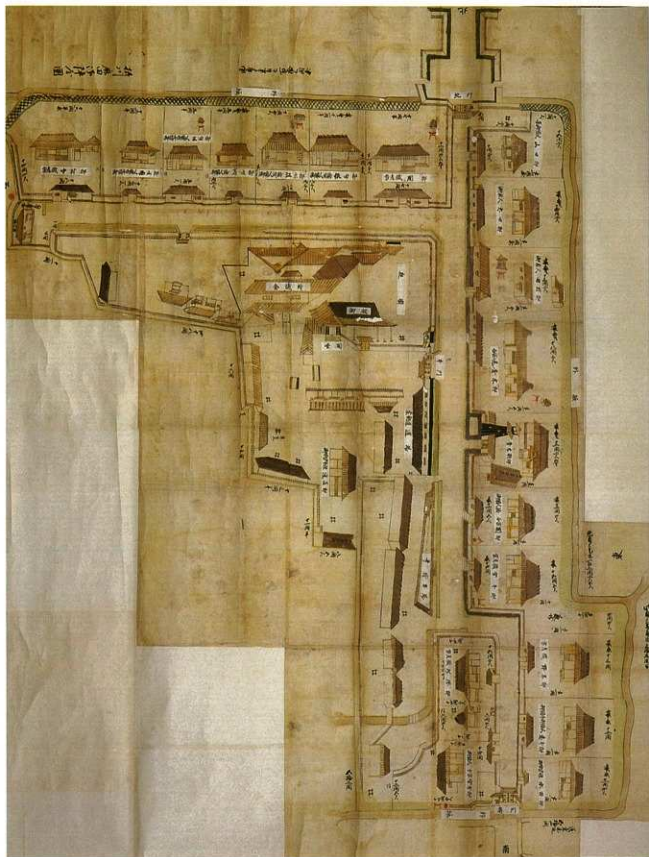
麻田藩陣屋跡

－蛸池駅西地区第1種市街地再開発工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－

近世陣屋跡・古墳時代～古代集落の調査

2002年9月

(財)大阪府文化財センター

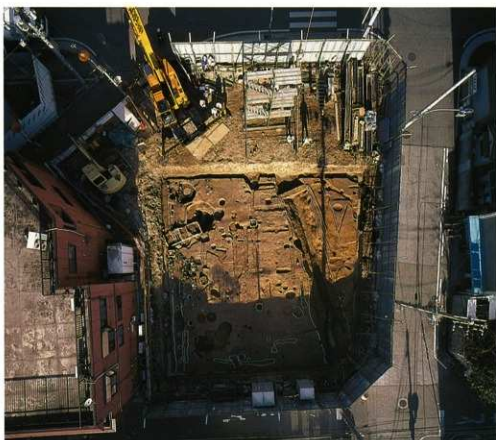


1. 麻田藩陣屋絵図(豊中市教育委員会所蔵)

江戸時代後期のものとされる。北門(画面上)から南門(画面下)へ抜ける道の東側(調査地)に重臣の屋敷地が並ぶ。



2. 区画7 外堀(溝312)屈曲部(西から) 外堀の内側に土塁が巡り、外堀の付替えが認められた。白線が後出する外堀。



3. 区画9 溝326 陣屋の地割方向と異なった溝326が検出された。断面V字形を呈する。出土遺物から陣屋造営直前に掘削され、造営に伴って埋められたことがわかる。



4. 17世紀初頭～中頃一括遺物(区画9 溝326)

陣屋造営直前に掘削され、造営に伴って埋められた溝。



5. 17世紀末～18世紀前半一括遺物(区画2 落込46)

伊丹郷町遺跡享保14年(1729)の火災層出土遺物と共通。



6. 19世紀第2四半期一括遺物(区画2 土坑26)

明治4年(1871)廃藩置県による陣屋廃絶の際の廃棄遺構より1段階古い遺構。



7. 19世紀第3四半期一括遺物(区画3 落込5)

明治4年(1871)廃藩置県による陣屋廃絶の際の廃棄遺構。



8. 窯道具(匣鉢・ハマ・カワセ・溶壁・磁器溶着破片)

調査区全域から窯業生産に係わる遺物が多量に出土した。窯本体は検出されていないが、近辺での生産は間違いないことであろう。柴付溶着・青磁溶着物が出土している。



9. 「仁清」銘京焼鉄絵碗(区画4 土坑835)
(17世紀後半)



10. 高台内蒔印「仁清」銘

野々村仁清は仁和寺門前に窯を開き、明暦から延宝(1655~1680)にかけて茶陶を主に焼いていた。麻田二代目藩主青木重兼は仁和寺造営・仁清の窯業の成立に係わっていた。



12. 高台畳付「帯山」銘



11. 「帯山」銘京焼鉢(区画3 溝105)(19世紀前半)

帯山与兵衛は延宝年間(1673~1681)に京都粟田東に窯を開き、明治中期の九代まで、主に茶陶器・酒器を焼いていた。



13. 「道八」銘京焼色絵碗(区画4 溝262)(19世紀前半)



14. 高台内「道八」銘

高橋道八は宝暦年間(1751~1764)に京都粟田口に窯を開き、五代目まで受け継がれる。二次焼成を受ける。



15. 肥前磁器染付皿(18世紀)
(区画3 落込5)
鍋島藩様式。



16. 肥前磁器染付皿側面



17. 肥前磁器色繪大皿内面(18世紀前半)
(区画4 溝194)
南川原窯の辻窯の製品と思われる。



18. 肥前磁器色繪大皿外面



19. 中国製青花皿(区画3 落込5)
(17世紀前半)
ガラス継ぎ。高台内に朱色で「そ子八(そねはち)」、重複して黒色で「森」の文字。



20. 中国製青花皿外面



21. ヨーロッパ製転写磁器皿(区画7 清397)
(18世紀末～19世紀前半)
漆継ぎ。ストーンチャイナと呼ばれる軟質磁器。
ウィローパターンといわれる文様。



22. オランダ製染付楼閣山水文深皿
個人蔵
慶應二年(1866)箱書を有する伝世品

序 文

麻田藩陣屋跡は豊中市蛍池に所在し、阪急電鉄と大阪モノレールの蛍池駅前の西側に位置しています。

この陣屋は大坂夏の陣（元和元年 1615 年）以降に作り始められ、明治 4（1871）年の廃藩置県まで江戸時代を通じて、青木氏が藩主として国替えなく連綿と続きました。また、陣屋の絵図が豊中市に保管されており、土地割りが現在まで基本的に続き、現水路や道が陣屋の外堀や屋敷境の名残として見受けられます。

このたび、蛍池駅西地区において市街地再開発が進められることとなり、当センターがそれに先立ち発掘調査を行ってきました。その後の整理事業も終了し、ここにその成果を報告できる運びとなりました。

調査地は陣屋の東側に連なる重臣の屋敷地にあたり、屋敷境溝が絵図と整合性をもって検出されました。その一方、調査区南端では陣屋の地割りと方向が異なる大溝が検出され、絵図ではわからない陣屋の成立期の様相も明らかになりました。

また、江戸時代初期から明治時代に至る各時代の土器が出土し、近世陶磁器の編年を考える上で、重要な資料を提示することができました。さらに、陶磁器を焼き上げる時に使用する匣鉢が多量に出土し、麻田藩が窯業に関わっていたことも明らかになりました。窯業生産は全く知られていなかったことでした。

陣屋跡の下層では古墳時代から古代にかけての掘立柱建物や土壇墓の可能性をもつ不定形密集土坑群が検出されました。建物群は周辺既調査の成果と共にその広がりが増えてきました。密集土坑は建物の存在する範囲とは溝により区画されており、居住域と墓域が分離されていたことが考えられます。

その他に旧石器時代の成果もあり、近世の陣屋のみならず、この地域の動向が明らかになってきたと言えます。

最後に、発掘調査および整理事業の実施にあたり、多大な御協力と御配慮をいただきました地元関係各位をはじめ、蛍池駅西地区市街地再開発組合、大阪府教育委員会、豊中市教育委員会に深く感謝して序の言葉といたします。

2002 年 9 月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は蛸池駅西地区第1種市街地再開発事業に伴う麻田藩陣屋跡(あさだはんじんやあと)発掘調査報告書である。麻田藩陣屋跡は大府府豊中市蛸池中町に所在する。なお、麻田藩陣屋跡下層とその南側には蛸池遺跡という名称の遺跡が存在するが、今回の調査は麻田藩陣屋跡の名称で、調査を実施した。

2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、財団法人大阪府文化財調査研究センター(2002年度より財団法人大阪府文化財センター)が、大阪府教育委員会の指導の下、蛸池駅西地区市街地再開発組合の委託を受けて実施した。

3. 発掘調査は1999年11月1日から2002年3月29日まで、整理事業は2001年2月28日から2002年9月30日まで実施した。

4. 発掘調査・整理作業ならびに本報告書作成は大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪府文化財センターが実施し、北部調査事務所が所管した。発掘調査は北部調査事務所所長藤田憲司(1999年度)・小野久隆(2000年度以降)、調査第1係長金光正裕(1999年度)・阪田育功(2000年・2001年度)の指示の下、技師合田幸美・市本芳三が担当した。本書作成に関わる整理作業は北部調査事務所所長小野久隆、調査第1係長阪田育功(2001年度)・森屋美佐子(2002年度)の指示の下、技師市本芳三が行い、主査上野貞子が写真を担当した。報告書執筆は目次に示した通りであり、技師森本徹(弥生時代～古代の遺物・観察表)、専門調査員手島美香(石器・観察表)、非常勤職員赤松和佳・渡辺晴香(近世遺物・観察表)をはじめとする当センター職員の協力を得た。

また、出土近世陶磁器について佐賀県有田町歴史民俗資料館学芸員村上伸之氏、京焼・仁清銘陶器について大手前大学助教授岡佳子氏、三田焼について三田市教育委員会石神由貴氏、ヨーロッパ陶磁器について神戸市立博物館学芸員岡泰正氏、墨書遺物について大阪城天守閣学芸員跡部信氏・宮本裕次氏・当センター水野正好理事長から調査指導を受けた。

5. 各分析について、以下の機関に依頼した。

密集土坑群の脂肪酸分析 ㈱ズコーシャ 中野寛子

近世土器胎土分析 ㈲第四紀地質研究所 井上巖

また、胎土分析比較試料として、以下の機関・諸氏の協力により窯跡出土試料の提供を得た。

・有田 佐賀県有田町教育委員会 村上伸之

・三田 兵庫県三田市教育委員会 石神由貴

・瀬戸 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤良祐

・砥部 愛媛県砥部町教育委員会 三好尊史

愛媛県埋蔵文化財調査センター 岡田敏彦・柴田圭子

・波佐見 佐賀県波佐見町教育委員会 中野雄二

・備前 岡山県備前市教育委員会 石井 啓

・三川内 長崎県佐世保市教育委員会 久村貞男

6. 発掘調査および整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏に御指導、ご教示を賜った。記して厚く感謝の意を表する次第である。

麻田茂(伊丹市立博物館友の会)、市川秀之・吉井克信・平野淳・辻敬子(大阪狭山市教育委員会)、川口宏海

(大手前大学)、能芝勉((財)京都市埋蔵文化財研究所)、榎本洋、尾上実、稲垣正宏((財)滋賀県文化財保護協会 現(株)国際航業)、鈴木裕子(㈱四門 文化財研究室)、浅田尚子、清水篤・橋田正徳・服部聡志・柳本照男(豊中市教育委員会)、清水喜美子(豊中市市史編纂室)、加藤真司(土岐市教育委員会)、西垣健一(豊中歴史同好会)、別所秀高((財)東大阪市文化財協会)、富田好久(池田市史編纂副委員長)、阿澄昌夫(北摂麻田史談会)、関西近世考古学研究会、関西陶磁史研究会、仏日寺

7. 発掘調査および整理作業の過程で次の方々を中心に参加、協力を得た(五十音順)。

—発掘調査—

阪田信男・高田香織・高田泰子・中川寿美・長本幹・藤原夏青・山田久美

—整理作業—

赤松和佳・安東裕世・上河善子・川崎朝子・阪田信男・高田泰子・立岩美津子・田中正子・中川寿美・前田千津子・波岸初美・二宮栄子・野口佳子・樋口玲子・平田麻希・松岡聖美・八十千里・山田久美・山本香織・渡辺晴香

8. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は(財)大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

9. 表紙の揮毫は当センター総務部 白橋鐘道による。

凡 例

1. 挿図の縮尺は各図のスケールに縮尺率を明示している。
2. 遺構および断面図中の標高は東京湾平均海面(T. P.)からのプラス値である。
3. 遺跡発掘調査に伴う地区割りは国土座標の第VI座標系(日本測地系)に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた方位の矢印はいずれも座標北を示す。座標の記載はすべてm単位とする。ちなみに他の方位との関係は、真北が東へ $0^{\circ} 12'$ 、磁北が西へ $6^{\circ} 40'$ 振っている。
4. 遺構図における断面位置および見通し位置は図面上に「L」形によってその位置を明記した。
5. 挿図および写真図版における遺物番号は各挿図内で完結する番号を付与している。
6. 遺物実測図の縮尺は1/4を基本としている。それぞれの縮尺は、各スケールに明示している。
7. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
8. 近世土器において「京焼系磁器」と分類したものは、以下の基準により使用した。
兵庫県三田市の三田焼、同県篠山市の王地山焼の窯資料に類似品がみられる。三田・王地山焼は、京都の陶工欽古堂亀祐から磁器焼成技術の指導を受けているため、類品が多く、特に、土型による型物は区別が困難である。また、欽古堂亀祐は、三田・王地山焼以外にも和歌山県の男山焼でも技術指導しており、窯跡資料から類品が出土している。このようなことから、京焼の影響を受けてはいるが、生産地の特定が難しいため、これらの製品であると考えられるものは京焼系磁器と分類した。
9. 本書の執筆については目次に記したが、近世遺物とその観察表については、陶磁器・石製品—赤松、土師質土器・土製品—銭貨—渡辺、瓦・金属製品・木製品—市本が主に担当した。編集は市本がおこなった。

カラー図版

序文

例言・凡例

挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章 調査の経過と方法

- 第1節 発掘調査の経緯と経過……………(合田幸美)…………… 1
第2節 発掘調査の方法……………(合田)…………… 4

第2章 位置と環境

- 第1節 地理的・歴史的環境……………(合田)…………… 7
第2節 麻田藩陣屋をめぐる歴史的動向と絵図……………(市本芳三)…………… 10

第3章 調査の概要……………(市本)…………… 14

第4章 調査成果

- 第1節 基本層序……………(市本)…………… 25
第2節 旧石器から弥生時代の遺物……………(市本・森本徹・手島美香)…………… 25
第3節 古墳時代から中世の遺構・遺物
1. 古墳時代の遺構……………(市本)…………… 29
2. 古代の遺構……………(市本)…………… 49
3. 中世の遺構……………(市本)…………… 51
4. 古墳時代から中世の遺物……………(市本・森本)…………… 57

第4節 近世の遺構・遺物

1. 遺構……………(市本)…………… 59
2. 遺物…………… 93
1) 陶磁器・土師質土器・木製品・石製品・金属製品……………(市本・赤松和佳・渡辺晴香)…………… 96
2) 窯道具……………(赤松)…………… 144
3) 銭貨……………(渡辺)…………… 148
4) 瓦類……………(市本)…………… 148
5) 火打石・貝類……………(市本)…………… 156

第5章 基礎分析

- 第1節 蛭池遺跡・蛭池東遺跡における古墳時代～奈良時代の様相……………(合田)…………… 157
第2節 古墳時代密集土城群の脂肪酸分析……………(髙ズコーシャ・市本)…………… 163
第3節 近世遺構の様相……………(市本)…………… 171
第4節 近世出土陶磁器の時期別組成・変遷……………(市本・赤松・渡辺)…………… 179
第5節 近世出土窯道具と溶着磁器の様相……………(市本・赤松)…………… 193
第6節 近世遺物の胎土分析……………(第四紀地質研究所・市本)…………… 196

第6章 総括……………(市本)…………… 210

主要近世遺構一覧

掲載遺物一覧

カラー図版目次

1. 麻田藩陣屋絵図（豊中市教育委員会所蔵）
2. 区画7 外堀（溝312）屈曲部
3. 区画9 溝326
4. 17世紀初頭～中頃一括遺物（区画9 溝326）
5. 17世紀末～18世紀前半一括遺物（区画2 落込46）
6. 19世紀第2四半期一括遺物（区画2 土坑26）
7. 19世紀第3四半期一括遺物（区画3 落込5）
8. 窯道具（狸鉢・ハマ・カワセ・浴壁・磁器浴着破片）
9. 「仁清」銘京焼鉄絵碗（区画4 土坑835）
10. 高台内廟印「仁清」銘
11. 「帯山」銘京焼鉢（区画3 溝105）
12. 高台畳付「帯山」銘
13. 「道八」銘京焼色絵碗（区画4 溝262）
14. 高台内「道八」銘
15. 肥前磁器染付皿（区画3 落込5）
16. 肥前磁器染付皿側面
17. 肥前磁器色絵大皿内面（区画4 溝194）
18. 肥前磁器色絵大皿外面
19. 中国製青花皿（区画3 落込5）
20. 中国製青花皿外面
21. ヨーロッパ製転写磁器皿（区画7 溝397）
22. オランダ製染付樓閣山水文深皿 個人蔵

挿図目次

- 図1 麻田藩陣屋跡周辺の既立調査区
- 図2 トレンチ配置と地区割り
- 図3 国土標系とそれによる地区割り
- 図4 豊中市内遺跡分布図（1:50,000）
- 図5 麻田藩土家系図
- 図6 陣屋絵図（上田一『摂津麻田藩陣屋』1984
日本古城友の会より転載）
- 図7 5面（古墳時代～中世）遺構全体図（1）
- 図8 5面（古墳時代～中世）遺構全体図（2）
- 図9 3面（近世）遺構全体図（1）
- 図10 3面（近世）遺構全体図（2）
- 図11 3面（近世）遺構全体図（3）
- 図12 基本順序柱状図・調査区コーナー図
- 図13 旧石器～弥生時代の遺物
- 図14 5面D地区遺構図
- 図15 5面E地区遺構図
- 図16 建物1
- 図17 建物2・3
- 図18 建物4・5
- 図19 櫓1・3・4・5
- 図20 竪穴住居1
- 図21 建物6・7
- 図22 櫓6・落込111
- 図23 溝158・258 土坑55・267・445・774 落込80・81
- 図24 落込99 土坑164～166・168
溝215 びつ212・216・242・245・549・759～762
土坑161・162・442・443 井戸7・8 びつ80・234・248
- 図25 D地区密集土坑群
- 図27 E地区密集土坑群
- 図28 土坑448～450・461・462・477・
480・499・505・525・767・775・777・781
- 図29 土坑778・783・784・790・792・793・795・796・804
- 図30 土坑464・467・469・481・494・505・634・
635・850・858・859・924・927～929・931
- 図31 土坑516・766・773・783・786・797・798・801 溝161
- 図32 E地区密集土坑群 土器・石出土分布図
- 図33 中世遺構図
- 図34 櫓7～9 落込35
- 図35 落込122
- 図36 土坑・溝 出土遺物
- 図37 溝・落込 出土遺物
- 図38 密集土坑群出土遺物
- 図39 密集土坑群出土遺物 土坑814 溝161・258
- 図40 古代 土坑・溝・井戸・落込・びつ 出土遺物
- 図41 包含層出土遺物
- 図42 井戸7 井戸枳村
- 図43 区画1遺構図
- 図44 土坑116・117・143～145・148・234・235・1366 落込7
溝10・12 土坑45・137・1334 落込8・28
- 図45 区画2遺構図
- 図47 土坑139・140・204・236～238 溝100
- 図48 井戸5 土坑38 落込17・25
- 図49 粘土探掘坑群 土坑206・207・1335・1339
- 図50 区画3遺構図
- 図51 溝211石列
- 図52 溝105 土坑228・229 落込5・6
- 図53 道路遺構 土坑1367
- 図54 建物10
- 図55 区画4遺構図
- 図56 区画4北西部遺構図
- 図57 溝211・402 井戸22 土坑841・844～846・952
- 図58 びつ1068・1217 土坑618・620・621・838・840・
920・922・923 溝261・262・282
- 図59 区画5遺構図
- 図60 溝229
- 図61 溝220・224・226・228 びつ994・1142
井戸16・19 土坑649 落込94
- 図62 びつ986・991～993・1006 土坑656・659
- 図63 土坑644・646～648・655・658・662・673
びつ990・995 溝219・220・398 外堀
- 図64 区画6遺構図
- 図65 建物11
- 図66 土坑417・422・435～437・599 井戸13 びつ727・730
- 図67 区画7遺構図
- 図68 外堀（溝312）・暗渠・土塁
- 図69 落込118 土坑439 井戸14 溝145
- 図70 区画8遺構図
- 図71 溝360 土坑960・1257・1268
- 図72 溝364 土坑1251 落込118
- 図73 区画9遺構図
- 図74 溝324～326 土坑1111
- 図75 区画1出土遺物（1） 溝10・12・76 井戸1・
3・6 土坑106・121・234
- 図76 区画1出土遺物（2） 土坑48・60・91・127・136・
226 落込7・9

- 図77 区画1出土遺物 (3) 落込28・30
ビッド31・32・72
- 図78 区画1出土遺物 (4) 包含層
- 図79 区画2出土遺物 (1) 溝57・63・100
井戸5・9
- 図80 区画2出土遺物 (2) 土坑25・203・204・211・
1335・1337・1366
- 図81 区画2出土遺物 (3) 土坑26
- 図82 区画2出土遺物 (4) 落込25・46
- 図83 区画2出土遺物 (5) 落込17 包含層
- 図84 区画3出土遺物 (1) 溝13・105・211
井戸25
- 図85 区画3出土遺物 (2) 土坑215・216・223・224・821
- 図86 区画3出土遺物 (3) 落込3
- 図87 区画3出土遺物 (4) 落込3
- 図88 区画3出土遺物 (5) 落込6
- 図89 区画3出土遺物 (6) 落込6
- 図90 区画3出土遺物 (7) 落込5
- 図91 区画3出土遺物 (8) 落込5
- 図92 区画3出土遺物 (9) 落込5
- 図93 区画3出土遺物 (10) 土坑1367 包含層
- 図94 区画4出土遺物 (1) 溝221・261
- 図95 区画4出土遺物 (2) 溝194・262 井戸22
- 図96 区画4出土遺物 (3) 井戸20・21・23・24
- 図97 区画4出土遺物 (4) 土坑618・622・623・827・
835・836・845・923
- 図98 区画4出土遺物 (5) 土坑920
- 図99 区画4出土遺物 (6) 土坑920
- 図100 区画4出土遺物 (7) 落込59・89 包含層
- 図101 区画5出土遺物 (1) 溝148・218・220・222・
224・226・228・229・398
井戸32
- 図102 区画5出土遺物 (2) 井戸18
- 図103 区画5出土遺物 (3) 井戸17
- 図104 区画5出土遺物 (4) 土坑644・656・659・683・
763
- 図105 区画5出土遺物 (5) 土坑654
- 図106 区画5出土遺物 (6) 土坑642・645・672・677・
800
- 図107 区画5出土遺物 (7) 落込60・92
- 図108 区画5出土遺物 (8) 落込91
- 図109 区画5出土遺物 (9) 落込91
ビッド989・998・1006
包含層
- 図110 区画6出土遺物 (1) 溝152・399
井戸13・37
- 図111 区画6出土遺物 (2) 土坑415・435・598・
599・601
- 図112 区画6出土遺物 (3) 落込72・76・86
- 図113 区画6出土遺物 (4) 落込61・83 ビッド727
包含層
- 図114 区画7出土遺物 (1) 溝145・293・312
- 図115 区画7出土遺物 (2) 溝294・298・397
- 図116 区画7出土遺物 (3) 井戸38・39
土坑1042・1043
落込70・84
- 図117 区画7出土遺物 (4) 落込66
- 図118 区画7出土遺物 (5) 落込65・68・73
- 図119 区画7出土遺物 (6) 落込103
- 図120 区画7出土遺物 (7) 落込103 包含層
- 図121 区画8出土遺物 (1) 溝324・325・364
- 図122 区画8出土遺物 (2) 溝360 井戸36
土坑1041・1267
- 図123 区画8出土遺物 (3) 土坑960・1111・1207・
1232・1230・1251・1257
- 図124 区画8出土遺物 (4) 落込117・118
- 図125 区画8出土遺物 (5) 包含層
- 図126 区画9出土遺物 (1) 溝326・375 井戸29
- 図127 区画9出土遺物 (2) 井戸28・29
土坑1099・1254
ビッド1423 包含層
- 図128 竈道具・溶着磁器
- 図129 銭貨
- 図130 軒丸瓦 (1)
- 図131 軒丸瓦 (2) ・道具瓦
- 図132 軒平瓦
- 図133 丸瓦 (1)
- 図134 丸瓦 (2) ・道具瓦・瓦製品
- 図135 平瓦
- 図136 軒瓦出土分布図
- 図137 古墳時代中期～後期末・奈良時代の検出遺構
- 図138 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成と
ステロール組成
- 図139 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図
- 図140 試料中に残存する脂肪の
脂肪酸組成による種別異性相関
- 図141 土坑448・767分析試料抽出地点
- 図142 調査区と検出
- 図143 出土遺物分布図 (17世紀)
- 図144 出土遺物分布図 (18～19世紀初頭)
- 図145 出土遺物分布図 (19世紀前半～中頃)
- 図146 井戸・便槽分布図
- 図147 陶磁器碗の分類
- 図148 陶磁器皿の分類
- 図149 産地別構成比グラフ
- 図150 碗タイプ別構成比グラフ
- 図151 皿タイプ別構成比グラフ
- 図152 匣鉢の出土分布
- 図153 Qt-P1図 (麻田藩青磁)
- 図154 SiO₂-Al₂O₃図 (麻田藩青磁)
- 図155 Fe₂O₃-Na₂O図 (麻田藩青磁)
- 図156 K₂O-CaO図 (麻田藩青磁)
- 図157 TiO₂-MnO図 (麻田藩青磁)
- 図158 Qt-P1図 (麻田藩磁器)
- 図159 SiO₂-Al₂O₃図 (麻田藩磁器)
- 図160 Fe₂O₃-Na₂O図 (麻田藩磁器)
- 図161 K₂O-CaO図 (麻田藩磁器)
- 図162 TiO₂-MnO図 (麻田藩磁器)
- 図163 Qt-P1図 (麻田藩京焼系)
- 図164 SiO₂-Al₂O₃図 (麻田藩京焼系)
- 図165 Fe₂O₃-Na₂O図 (麻田藩京焼系)
- 図166 K₂O-CaO図 (麻田藩京焼系)
- 図167 TiO₂-MnO図 (麻田藩京焼系)

挿図写真目次

- 写真1 現地説明会
- 写真2 現地説明会
- 写真3 調査連絡掲示板
- 写真4 陣屋北門付近 写真左側が調査区(北から)
- 写真5 現地説明会資料
- 写真6 備前胎土分析試料
- 写真7 波佐見胎土分析試料
- 写真8 瀬戸胎土分析試料
- 写真9 三川内胎土分析試料
- 写真10 有田胎土分析試料
- 写真11 三田胎土分析試料
- 写真12 砥部胎土分析試料

表目次

表1	土壌試料の残存脂肪抽出量	表21	掲載近世遺物一覧 (4) (図83～85)
表2	試料中に分布するステロールの割合	表22	掲載近世遺物一覧 (5) (図85～90)
表3	産地別構成	表23	掲載近世遺物一覧 (6) (図90～95)
表4	産地別・器種別出土点数 (1)	表24	掲載近世遺物一覧 (7) (図95～98)
表5	産地別・器種別出土点数 (2)	表25	掲載近世遺物一覧 (8) (図98～101)
表6	匣鉢計測表	表26	掲載近世遺物一覧 (9) (図101～105)
表7	麻田藩陣屋跡出土遺物 胎土分析試料一覧	表27	掲載近世遺物一覧 (10) (図105～109)
表8	他産地胎土分析試料一覧	表28	掲載近世遺物一覧 (11) (図109～112)
表9	胎土性状表	表29	掲載近世遺物一覧 (12) (図112～114)
表10	化学分析表	表30	掲載近世遺物一覧 (13) (図114～117)
表11	組成分類表	表31	掲載近世遺物一覧 (14) (図117～121)
表12	近世主要遺構一覧 (1) 区画1～3	表32	掲載近世遺物一覧 (15) (図121～123)
表13	近世主要遺構一覧 (2) 区画3～5	表33	掲載近世遺物一覧 (16) (図123～128)
表14	近世主要遺構一覧 (3) 区画5～9	表34	掲載近世遺物一覧 (17) (図128、図版49・83・84)
表15	掲載石器一覧 (図13)	表35	掲載面子・人形・遊玩具一覧 (図版84)
表16	掲載弥生時代～中世遺物一覧 (1) (図13・36～38)	表36	掲載銭貨一覧 (図130)
表17	掲載弥生時代～中世遺物一覧 (2) (図38～42、図版36)	表37	掲載軒丸瓦・隅瓦・鳥倉瓦一覧 (図130・131)
表18	掲載近世遺物一覧 (1) (図75～77)	表38	掲載軒平瓦一覧 (図132、図版85・86)
表19	掲載近世遺物一覧 (2) (図77～80)	表39	掲載丸瓦・平瓦・道具瓦一覧 (図133～135、図版84・85)
表20	掲載近世遺物一覧 (3) (図80～83)		

写真図版目次

図版1	航空写真 1. 麻田藩陣屋跡全景 (1996年) 2. 調査地全景 (2001年 南西から)	図版10	古墳時代～古代 密集土坑群 E地区 1. 1E トノテ全景 (南西から) 2. 4E トノテ南半全景 (南西から) 3. 4E トノテ北半全景 (南東から)
図版2	古墳時代～古代・中世遺構面 空中写真 1. D地区モザイク写真 (S=1/500)	図版11	古墳時代～古代遺構 E地区 1. 2E トノテ北半全景 (南東から) 2. 2E トノテ南半全景 (北から) 3. 5E トノテ全景 (北西から)
図版3	古墳時代～古代・中世遺構面 空中写真 1. E地区モザイク写真 (S=1/500)	図版12	古墳時代～古代遺構 E地区 1. 落込111 (6E 西から) 2. 7E トノテ全景 (北西から) 3. 落込111 (8E 西から) 4. 9E トノテ全景 建物7 (北西から)
図版4	古墳時代～古代遺構 D地区 1. 1D トノテ全景 (西から) 2. 2D トノテ北半全景 (北から) 3. 3D トノテ北半全景 (西から) 4. 4D トノテ北半全景 (北西から)	図版13	古墳時代～古代 密集土坑群 E地区 1. 土坑448・449 (1E 東から) 2. 土坑461 (1E 東から) 3. 土坑462 (1E 東から) 4. 土坑472 (1E 東から) 5. 土坑480 (1E 東から) 6. 土坑525 (1E 東から) 7. 土坑481 (1E 西から) 8. 土坑767 (4E 南西から)
図版5	古墳時代～古代遺構 D地区 1. 4D トノテ南半全景 (北西から) 2. 7D トノテ全景 (北西から) 3. 8D トノテ全景 (北西から) 4. 9D トノテ全景 (北西から)	図版14	古墳時代～古代 密集土坑群 E地区 1. 土坑777 (4E 西から) 2. 土坑805 (4E 東から) 3. 土坑784 (4E 東から) 4. 土坑806 (4E 南から) 5. 土坑793 (4E 北東から) 6. 土坑809 (4E 東から) 7. 土坑804 (4E 東から) 8. 土坑774 (4E 北から)
図版6	古墳時代～古代遺構 D地区 1. 建物3 (2D 北から) 2. 櫓3 (1D 北から) 3. 建物1 (4D 西から) 4. 竪穴住居1 (3D 北東から)	図版15	古墳時代～古代遺構 E地区 1. 落込99 (4E 南から) 2. 溝258・308・309 (4E 東から) 3. 落込99 (4E 北西から) 4. 落込81 (2E 北東から) 5. 溝161 (4E 西から) 6. 落込122 (2E 西から) 7. 溝161 (2E 北西から) 8. 落込122 (2E 西から)
図版7	古墳時代～古代遺構 D地区 1. 建物4 (3D 東から) 2. 櫓1 (2D 南東から) 3. 建物5 (4D 西から)		
図版8	古墳時代～古代・中世遺構 D地区 1. 土坑55 (2D 北から) 2. 井戸7 (2D 西から) 3. 櫓9 (4D 南から) 4. ビット248 (3D 南から) 5. 落込35 (3D 北から) 6. 土坑247 (4D 西から)		
図版9	古墳時代～古代遺構 D地区 1. 土坑267 (4D 西から) 2. 井戸8 (3D 西から) 3. 土坑161 (3D 東から) 4. ビット80 (2D 東から) 5. 土坑928 (7D 北から) 6. 土坑265 (4D 東から)		

- 図版16 近世遺構面 空中写真
1. D地区モザイク写真 (S=1/500)
- 図版17 近世遺構面 空中写真
1. E地区モザイク写真 (S=1/500)
- 図版18 近世遺構 区画1～3
1. 区画3東半全景 (1D 西から)
2. 区画2中央部全景 (2D 南から)
3. 区画1西半全景 (2D 北東から)
- 図版19 近世遺構 区画1・2
1. 区画1東半全景 (3D 南西から)
2. 区画1・2東半全景 (3D 西から)
- 図版20 近世遺構 区画1～3
1. 区画1・2西半全景 (4D 北西から)
2. 区画2西半全景
粘土採掘工 (4D 南西から)
3. 区画3中央部全景 (4D 南西から)
- 図版21 近世遺構 区画1・2
1. 区画1・2 溝10 (2D 東から)
2. 区画1・2 溝12 (2D 北から)
3. 区画1・2 溝12 (4D 北東から)
4. 区画2 溝100 (4D 南東から)
5. 区画1・2 溝12 (4D 東から)
6. 区画1 土坑91 (3D 東から)
- 図版22 近世遺構 区画1～3
1. 区画2 土坑26 (2D 北東から)
2. 区画1 落込28 (3D 東から)
3. 区画2 土坑139・140 (3D 南から)
4. 区画1 土坑117 (3D 南から)
5. 区画1 土坑1366 (3D 南東から)
6. 区画3 土坑228・229 (4D 南西から)
7. 区画1 落込7焙培出土状況 (2D 西から)
8. 区画2 土坑236・237・238 (4D 北から)
- 図版23 近世遺構 区画4
1. 東端 7Dハツテ全景 (北西から)
2. 中央部 5Dハツテ全景 (北西から)
3. 北西部 6Dハツテ北半全景 (北西から)
- 図版24 近世遺構 区画3・4
1. 区画3・4 溝211 (5D 北東から)
2. 区画3・4 溝211 (5D 北から)
3. 区画3・4 溝211 (6D 北東から)
4. 区画4 溝262杭列 (6D 南から)
5. 区画4 溝262 (6D 西から)
6. 区画4 井戸23 (6D 北西から)
7. 区画4 土坑841・844・845・951・952 (6D 北東から)
8. 区画4 土坑920 (7D 北から)
- 図版25 近世遺構 区画5～7
1. 区画5東端 (1E 南東から)
2. 区画6東端 (3E 南東から)
3. 区画6・7 (2E 北から)
4. 区画6 (2E 北東から)
- 図版26 近世遺構 区画5・8・9
1. 区画5 (4E 南東から)
2. 区画5 (7E 北西から)
3. 区画9 (6E 南東から)
4. 区画8 (8E 西から)
- 図版27 近世遺構 区画7
1. 外堀 溝312・294、土塁1 (5E 西から)
2. 外堀 溝312・294、土塁1 (5E 南西から)

- 図版28 近世遺構 区画1・5・7
1. 区画7 土塁1 (5E 北西から)
2. 区画7 土塁1内暗渠 (5E 北東から)
3. 区画7 土塁1内暗渠 (5E 南から)
4. 区画7 土塁1内暗渠石除去 (6E 南西から)
5. 区画7 土塁1盛土 (5E 東から)
6. 区画7 土塁1、溝145・405 (2E 北東から)
7. 区画5 東側外堀断面 (1E 北西から)
8. 区画1 北側外堀断面 (3D 南から)
- 図版29 近世遺構 区画4～6
1. 区画4・5 溝219・221・218 (4E 東から)
2. 区画4・5 溝220 (4E 北東から)
3. 区画4・5 溝220 (4E 南東から)
4. 区画5・6 溝229 (4E 南西から)
5. 区画5・6 溝228 (4E 東から)
6. 区画5 溝226 (4E 北西から)
- 図版30 近世遺構 区画5
1. ビット1006 (4E 北から)
2. 土坑656 (4E 東から)
3. 落込94 (4E 北から)
4. ビット993 (4E 南から)
5. 落込60埋土 (1E 北東から)
6. 土坑659 (4E 東から)
- 図版31 近世遺構 区画6～8
1. 区画6 土坑417 (2E 南西から)
2. 区画6 井戸13 (2E 北から)
3. 区画6・7 溝399 (2E 北東から)
4. 区画7 土坑439 (2E 南西から)
5. 区画6・7 溝399 (9E 北東から)
6. 区画8 土坑1257 (8E 北東から)
- 図版32 近世遺構 区画7～9
1. 区画7・8 落込118 (8E 北東から)
2. 区画7・8 落込118礎除去 (8E 北東から)
3. 区画7・8 落込118空堀三年銘瓦出土状況 (8E 東から)
4. 区画7・8 落込118匣鉢出土状況 (8E 西から)
5. 区画8・9 土坑1251 (8E 東から)
6. 区画8・9 土坑1251礎除去 (8E 北から)
- 図版33 近世遺構 区画8・9
1. 区画9 溝326 (6E 北東から)
2. 区画9 溝326 (6E 南西から)
3. 区画8・9 溝324・325 (6E 北東から)
4. 区画8・9 溝324・325 (6E 南西から)
5. 区画9 土坑1111礎除去 (6E 東から)
6. 区画9 土坑1099 (6E 東から)

- 図版34 近世・近代遺構 区画2～4
 1. 区画3 建物10 (4D 西から)
 2. 区画3 建物10
 ビット455・466間壁体
 (4D 南西から)
 3. 区画3 建物10北側石列
 (4D 東から)
 4. 区画3・4 溝407、道路遺構
 (5D 北東から)
 5. 区画3・4 溝407、道路遺構
 (5D 北から)
 6. 区画2 粘土採掘坑群 土坑336・1339
 (4D 北から)
 7. 区画2 粘土採掘坑群 土坑1335
 (4D 北東から)
 8. 区画2 粘土採掘坑 土坑1366
 (4D 西から)
- 図版35 古墳時代～古代遺物
 土坑783・771、ビット48、井戸7
 井戸7枠材
- 図版36 古墳時代・中世・近世区画1 遺物
 落込7・9・28・30・35・122、溝12、
 土坑06・448
- 図版37 近世遺物 区画1
 落込28 (1～6)、包含層(7・8)
- 図版38 近世遺物 区画1・2
 区画1—包含層、区画2—井戸5、
 土坑25・26・211
- 図版39 近世遺物 区画2
 土坑26
- 図版40 近世遺物 区画2
 土坑26、落込25
- 図版41 近世遺物 区画2
 落込25・46
- 図版42 近世遺物 区画2・3
 区画2—落込46、区画3—土坑215・821
- 図版43 近世遺物 区画3
 溝103・211、土坑215・224・821
- 図版44 近世遺物 区画3
 土坑224、落込3
- 図版45 近世遺物 区画3
 落込3
- 図版46 近世遺物 区画3
 落込3・6
- 図版47 近世遺物 区画3
 落込6
- 図版48 近世遺物 区画3
 落込6
- 図版49 近世遺物 区画3
 落込5
- 図版50 近世遺物 区画3
 落込5
- 図版51 近世遺物 区画3
 落込5
- 図版52 近世遺物 区画3
 落込5
- 図版53 近世遺物 区画3
 落込5
- 図版54 近世遺物 区画3～5
 区画3—包含層、区画4—溝261、井戸20、区
 画4・5—溝221
- 図版55 近世遺物 区画4
 溝194・261・262、井戸20
- 図版56 近世遺物 区画4
 土坑320、井戸20・21

- 図版57 近世遺物 区画4
 土坑320
- 図版58 近世遺物 区画4
 土坑320、落込89
- 図版59 近世遺物 区画5
 井戸18・32、溝222・444
- 図版60 近世遺物 区画5
 井戸17・18
- 図版61 近世遺物 区画5
 井戸17、土坑654・656・659・672
- 図版62 近世遺物 区画5
 土坑654・672・642
- 図版63 近世遺物 区画5
 土坑654・672、落込60・91・92
- 図版64 近世遺物 区画5
 落込91
- 図版65 近世遺物 区画5
 落込91、ビット1006
- 図版66 近世遺物 区画5～7
 区画5—落込91、包含層、区画6—土坑
 598、区画6・7—溝399
- 図版67 近世遺物 区画6
 井戸13、土坑598・599、落込72・76・86
- 図版68 近世遺物 区画6
 落込61・76・86
- 図版69 近世遺物 区画6
 落込61、包含層
- 図版70 近世遺物 区画7・8
 区画7—溝312、区画7・8—溝293
- 図版71 近世遺物 区画7・8
 区画7—溝294・298、土坑1043、
 区画7・8—溝293・397
- 図版72 近世遺物 区画7
 落込66・84、土坑1043
- 図版73 近世遺物 区画7
 井戸39、落込65・66・84、土坑1043
- 図版74 近世遺物 区画7
 落込65・68・73・103
- 図版75 近世遺物 区画7
 落込103
- 図版76 近世遺物 区画7
 落込103、包含層
- 図版77 近世遺物 区画8・9
 溝324・325
- 図版78 近世遺物 区画8・9
 区画8—土坑267、井戸36、区画8・9—溝325
- 図版79 近世遺物 区画8・9
 区画8—土坑960・1251・1257・1267、
 区画9—井戸29
- 図版80 近世遺物 区画8・9
 区画8—落込117、包含層、
 区画9—井戸29、溝325
- 図版81 近世遺物 区画9
 溝375、井戸28・29、土坑1099・1254
- 図版82 近世遺物 区画9、窯業関係
 区画9—包含層、窯業関係
- 図版83 近世遺物 窯業関係、五輪塔
 窯業関係、火輪
- 図版84 近世遺物 遊玩具、石製品、瓦
 遊玩具、白、石製品、鬼瓦
- 図版85 近世遺物 瓦、瓦製品
 鬼瓦、道具瓦、瓦製品、軒棧瓦
- 図版86 近世遺物 瓦
 軒棧瓦、丸瓦

第1章 調査の経緯と方法

第1節 調査の経緯と経過

豊中市の北に位置する阪急電鉄宝塚線蛸池駅は、大阪国際空港（伊丹空港）の最寄り駅として活用されており、駅の東側には大阪市と池田市を結ぶ幹線道路である国道176号線が南北に走り、西側には古くからの商店街と住宅地が建ち並ぶ。1997年の門真市と大阪国際空港（伊丹空港）を結ぶ大阪モノレールの開業により、阪急電鉄宝塚線蛸池駅に連結して大阪モノレール蛸池駅が設置され、空港へのアクセスの拠点駅として機能するようになった。この利便な立地を活かすため、駅西側に蛸池駅西地区市街地再開発事業が計画され、蛸池駅西地区市街地再開発組合がこの事業にあたることとなった。

再開発事業は、駅西側に商業施設の入る住居棟および住居専用棟からなる2棟の高層建物の建築が主要内容である。建築予定地である蛸池駅西側には麻田藩陣屋跡、蛸池東遺跡、蛸池遺跡の周知の3遺跡がひろがることから、建築に先立つ埋蔵文化財発掘調査の実施が豊中市教育委員会から蛸池駅西地区市街地再開発組合へ指導された。

これを受け、平成11年10月8日付けで蛸池駅西地区市街地再開発組合から大阪府教育委員会宛に蛸池西地区市街地再開発事業の予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査について依頼が出され、大阪府教育委員会は平成11年10月13日付けで(財)大阪府文化財調査研究センター〔現(財)大阪府文化財センター〕へ上記3遺跡の埋蔵文化財発掘調査の実施を通知した。その後、平成11年10月20日付けで蛸池駅西地区市街地再開発組合から(財)大阪府文化財調査研究センターへ埋蔵文化財調査の依頼があり、平成11年11月11日付けで蛸池駅西地区市街地再開発組合と(財)大阪府文化財調査研究センターは委託契約を結ぶに至った。

平成11年11月から12月にかけて、現地詰所の設営、測量をはじめとする準備を終え、平成12年1月当初より現地での掘削を開始した。

調査地は駅前の人家密集地であった。当初、調査に入った段階では一部、駐車場として利用されているものの、その大半は店舗・人家が建ち並ぶ状況であった。

駅前再開発に伴う調査という性格上、店舗営業の継続などの諸条件を満たすため、調査に入るにあたっては、仮設店舗の設営、店舗の引っ越し、建物除却時の建物基礎除去に伴う立ち会い後、機械掘削に入るという手順を繰り返すこととなり、再開発事業の全体計画のなかで、調査地の区画割り、調査の順序および期間を密に調整しながらの調査となった。よって、調査区設定は当初計画より細分された設定になった。また、建物基礎により、すでに遺構面が破壊されていたため、調査対象から除いた部分も存在する。

調査の進捗に伴い、麻田藩藩主青木氏の裏紋をもつ隅瓦の出土など、遺構、遺物ともに成果が蓄積されたことから、平成12年12月9日に現地説明会を開催し、約550名の来場を得ることができた。また、調査中は近隣住民の方々に調査状況を伝えるため、調査速報の掲示板を設けた。

平成13年3月に至り、建物除却を終えることができなかった地点と市道部分を残し、一旦、北部調査事務所に引き上げることとなった。その後、建物除却・市道閉鎖に伴い、6月1日から9月28日と11月28日から12月21日に本体工事が進められる中、発掘調査を行い、現地での調査を完了した。

また、発掘調査と並行して、平成13年2月28日から平成14年9月30日まで、遺物整理事業を実施し、陣屋敷地の様相、近世陶磁器の編年資料の提示、陣屋での窯業生産、古墳時代集落の様相など、重要な成果を明らかにすることができた。



図1 麻田藩陣屋跡周辺の既応調査区

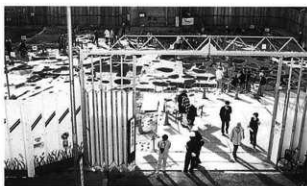


写真1 現地説明会



写真2 現地説明会

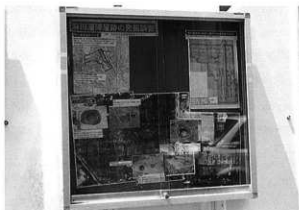


写真3 調査速報掲示板



写真4 障壁北門付近 写真左側が調査区(北から)

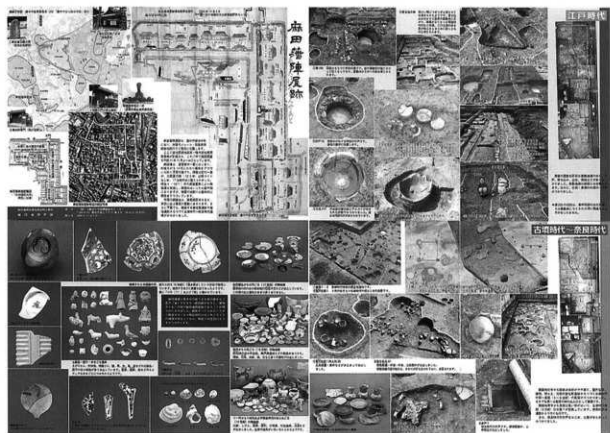


写真5 現地説明会資料

第2節 発掘調査の方法

調査の方法は、基本的に(財)大阪文化財センター1988『遺跡調査基本マニュアル』に依拠した。地区の名称は、1992～1996年に実施した大阪モノレール建設に伴う麻田藩陣屋跡の調査の際、A～C地区を使用していることから、今回は調査地を横断する道路を境に北側をD地区、南側をE地区とした。トレンチの名称は、本来は北または東を起点として付けるべきであるが、今回は調査を行った順番に1Dおよび1Eから付けることとし、トレンチ割りには図2に示した形状の区画割りとなった。調査は、当初駐車場であった1Dトレンチより開始し、2D→3D→4D→1E→2E→3E→4E→5D→6D→7D→5E→6E→7E→8E→9Eの順に実施した。

トレンチ内の地区割りは上記マニュアルをもととし、国土座標軸にのつとった基準線を遺物の取り上げ、及び遺構図作成の基準線として用いた(図2右側)。国土座標軸(第Ⅵ座標系)を基準とし、第Ⅰ区画が1万分の1地形図、第Ⅱ区画が2500分の1地形図の地区割りにあたる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20分割、南北15分割した、一辺100mの範囲となる。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を東西、南北ともに10分割した一辺10mの範囲となる。第Ⅴ区画は第Ⅳ区画を5m単位で区画した範囲となる。遺物のとりあげは、基本的に第Ⅳ区画である一辺10mの範囲でおこなった(図3)。

調査の手順としては、まず、建物基礎の撤去作業に立ち会い、基礎が土中深く残存し、基礎の撤去により遺構が損なわれる可能性がある場合には、基礎を残しての調査とした。その結果、4Dトレンチの南端、5Dトレンチ中央、6Dトレンチ西半、8Eトレンチでは基礎を残しての調査となり、調査後基礎の撤去がおこなわれた。その他の調査地では、基本的に機械により盛土を除去後人力による掘削をおこなった。近世陣屋跡という遺跡の性格をふまえ、当初機械による掘削をどこまでおこなうかが問題となった。そのため、最初に調査に入った1Dトレンチにおいて、機械による盛土除去をビニール、プラスチック、ガラスを含む層までの最小限にとどめ、下層を人力掘削により確認したところ、ビニール、プラスチック、ガラスを含む盛土の下層には廃藩置県後まもない時期のものとみられる近代の耕土層があり、その下層に江戸時代包含層をはじめとする遺物包含層が堆積することがわかった。これを踏まえ、以後の調査地では、盛土および近代の耕土層を機械掘削により除去後、人力による掘削をおこなうこととした。

後章の基本層序において詳細は後述するが、層序は基本的に上層より江戸時代包含層(3層)、中世包含層(4層)、古墳時代～古代包含層(5層)である。江戸時代包含層除去後面(3面)および古墳時代～古代包含層除去後面(5面)の2面においてはクレーンを用いた空中撮影による測量平面図を作成し、中世包含層が遺存する部分および古墳時代～古代包含層が分層される部分においてはその除去後面の状況に応じて適宜平板測量をおこない平面図を作成した。その他、各面において遺構断面図、遺物の出土状況図を作成した。また、調査地全体の堆積状況を示す断面図は、縦断面である南北ラインを調査地幅のほぼ中央を通るラインで作成することを基本とした。トレンチの設定上これがかかわない部分については至近の壁面をその代替えとした。加えて横断面を適宜作成した。

遺物は瓦や性格不明の木片、近現代の陶磁器などを極力排除し、最終的にコンテナ約260箱の量となった。出土遺物は、登録、洗浄、注記までの基本的な整理を発掘調査と並行して現場でおこなった。登録はD地区、E地区で各々1番から番号を付し、D地区では1348番、E地区では1329番を数える。注記は遺跡略称を「アサダ」とし、「アサダ 1D-1」のようにトレンチ名と登録番号を記した。現場での調

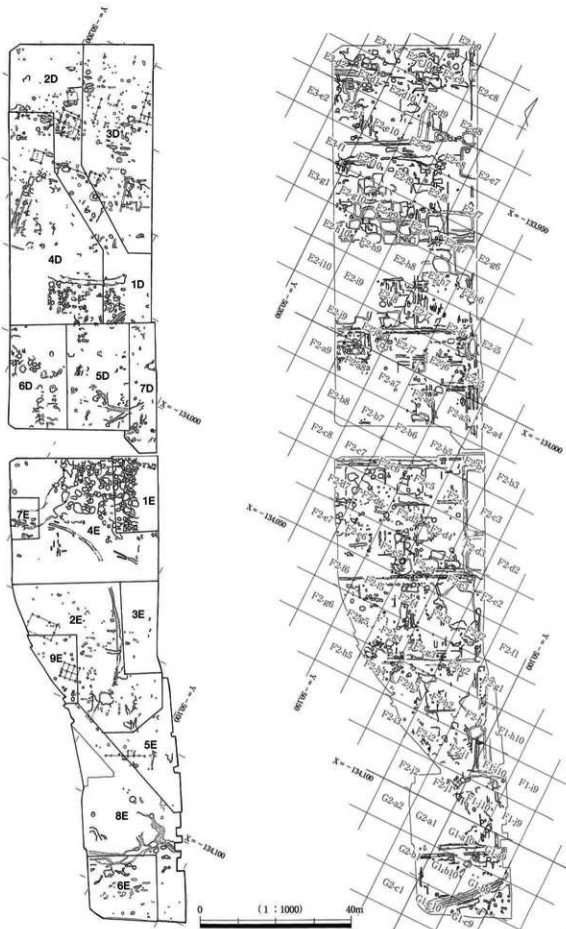


図2 トレンチ配置と地区割り

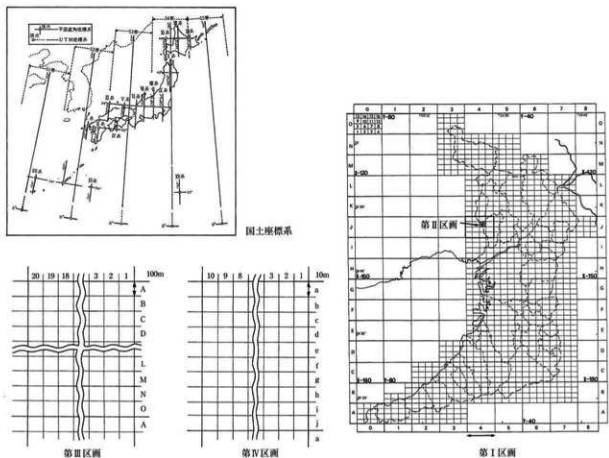


図3 国土座標系とそれによる地区割

査終了後、遺物を北部事務所へ移送し、北部事務所にて遺物の復元、実測、製図など報告書作成に関わる作業を実施した。

今回の調査地と隣接した大阪モノレール建設時には、当センターが発掘調査を実施し、また、大阪府教育委員会、豊中市教育委員会においても調査がなされ、以下の報告書が刊行されている。

(財)大阪文化財センター 1994.3 『宮の前遺跡・蛸池東遺跡・蛸池遺跡・蛸池西遺跡 1992・1993 年度発掘調査報告書』

(財)大阪府文化財調査研究センター 1997.11 『宮の前遺跡・蛸池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛸池遺跡・蛸池南地区・蛸池西遺跡 1993-1996 年度発掘調査報告書』

(財)大阪府文化財調査研究センター 1997.11 『蛸池遺跡(その3-2) 発掘調査報告書』

大阪府教育委員会 1992.3 『麻田藩陣屋跡他発掘調査概要・I』

豊中市教育委員会 1999.3 『豊中市埋蔵文化財年報 VOL.6』

第2章 位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

豊中市は、地勢をみると、北半が北摂山地から南へ派生する千里丘陵の南西部にあたる丘陵地、南半が猪名川や神崎川により形成された沖積地である。交通路をみると、豊中市の北端には西国路および有馬道が東西にはしり、これと石橋付近で交差するかたちで吉野嶺道、近代能勢街道が南北にぬける¹⁾。

北半の丘陵地を仔細にみると、段丘の西および南にひろがる沖積地を望む、段丘の西端および南端には、北から蛭池北遺跡、麻田藩陣屋跡、蛭池遺跡、南刀根山遺跡、御神山古墳、千里川をはさんで新免遺跡、山ノ上遺跡、曾根遺跡、城山遺跡、天竺川をはさんで若竹町遺跡、石蓮寺廃寺、寺内遺跡が並び、稠密な分布を示す。また、西国路がはしる谷筋に面しては待兼山古墳が、千里川に面する段丘の縁辺では野畑遺跡、野畑春日町遺跡、少路遺跡、内田遺跡、柴原遺跡、本町遺跡が並び、同じく稠密な分布を示す。一方、天竺川に面する段丘縁辺では、熊野田遺跡、下原窯跡群、長興寺遺跡など少数の遺跡に限られ、比較的遺跡の分布が散漫である。これは、河川規模に起因するものであろうが、千里川が西国路のはしる谷筋にぬけ交通路としての機能を果たすのに対し、天竺川は段丘を分断することなく、谷筋が行き当たり、交通路としての機能が低いという違いが、遺跡の分布に如実にあらわれていると考えられる。また、段丘内部に目を転ずれば、比較的遺跡の分布がみられない段丘内部においても、吉野嶺道沿いには待兼山遺跡、岡町遺跡、桜塚古墳群があり、吉野嶺道は古くから交通路として利用されていた可能性がうかがえる。

南半の沖積地では、東西南北にはしる現在の道路に顕著なように条里制地割がみられる。遺跡の分布をみると、段丘の西および南の裾に沿って、蛭池西遺跡、箕輪遺跡、原田遺跡、豊島北遺跡、服部遺跡、小曾根遺跡、北条遺跡が立地する。段丘西側の千里川沿いには勝部遺跡、原田中町遺跡が、千里川と猪名川間には原田西遺跡、走井遺跡がみられる。一方段丘南側の猪名川と神崎川にはさまれた沖積地には穂積遺跡、利倉遺跡、上津島遺跡、島田遺跡、庄内遺跡など多くの遺跡が集中しており、南の大坂平野へとつながる吉野嶺道および猪名川、神崎川の水運にめぐまれた立地であることが要因と考えられる。

南半の沖積地は、梶山彦太郎・市原実両氏によって、縄文海進時およびその後の海退時における汀線の変遷が明らかとされており²⁾、その成果を図4に加筆した。これに沿って、旧石器時代以降年代順に遺跡の変遷をみていきたい。

旧石器時代、なかでも約2万年前のウルム氷期最盛期には、海面は100mほど低下しており、大阪湾および紀伊水道は陸地で汀線ははるか紀伊水道沖の大陸棚南縁にあったと考えられている³⁾。豊中市内では、蛭池北遺跡、蛭池西遺跡、箕輪遺跡、柴原遺跡、内田遺跡、大塚古墳で旧石器が出土している。とくに蛭池西遺跡では、国府型ナイフ形石器、翼状剥片、チップ、石核がまとめて出土しており、周辺に製作地の所在が想定されている⁴⁾。待兼山丘陵周辺の段丘縁辺から沖積地にかけて、旧石器は多く分布しており、この周辺で人間活動があったことを明瞭に示す。

ウルム氷期以降、温暖化が進み、海面が上昇し汀線は内陸に移動し、縄文時代前期にはピークに達する。この頃の海岸線は、図4の河内湾I(7,000~6,000年前)のラインで示されるとおり、段丘崖下までいたる。その後、縄文時代を通じて海退が進み、縄文時代中期には河内湾II(5,000~4,000年前)

のライン、縄文時代後期～晩期、弥生時代前期には河内湾の淡水化が進むとともに河内潟(3,000～2,000年前)のラインまで後退し、一方、上町台地北端の陸化は進み、河内潟から瀬戸内海へとぬける水道の幅が狭くなる。

豊中市内では、野畑春日町遺跡で縄文時代草創期の槍先が、新免遺跡で縄文時代早期の石器が出土しているほかは縄文時代前期までの遺跡の様相は明らかではなく、中期以降、遺構、遺物が顕著となる。縄文時代中期には、千里川上流の野畑春日町遺跡で土坑が検出され、中期末から後期前葉には野畑遺跡で炉跡とみられる焼土や礫群、土坑が検出されており集落が営まれたようである。また、沖積地に立地する穂積遺跡では、中期土器や土器片鏝とともに貝殻を多く含む砂層が明らかとされ、この時期の海岸線特定する好資料を提供する⁵⁾。後期には内田遺跡で土坑が検出され、多くの土器が出土するほか、晩期には柴原遺跡、山ノ上遺跡、小曾根遺跡で遺物が出土している。縄文時代には段丘縁辺から裾部にかけて集落が展開し、沖積地では居住域が顕著ではないことから、縄文海退に伴い陸化が進むものの、いまだ沖積地は不安定な状態であったものと想定される⁶⁾。

弥生時代前期の集落は、小曾根遺跡、勝部遺跡など沖積地に営まれる。勝部遺跡の北東段丘上に位置する山ノ上遺跡では、縄文時代晩期の遺物を共存する弥生時代前期の溝が確認されている。

弥生時代中期以降、海退と共に河内湾の淡水化が進み河内湖となり、上町台地北端も一層北へと陸化が進み、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては河内湖Ⅰ(1,800～1,600年前)のラインが、古墳時代中期には河内湖Ⅱ(5世紀)のラインが河内湖北岸および瀬戸内海に面する汀線として復元された。

弥生時代中期には、第Ⅱ様式期に蛭池北遺跡で集落が出現し、方形周溝墓が多数検出されることから拠点集落となる可能性が指摘されている。第Ⅲ様式期には待兼山遺跡でV字状の溝をはじめとする遺構が検出されており高地性集落となる可能性が高い。第Ⅳ様式期の末頃には蛭池北遺跡が衰退する一方、新免遺跡がピークを迎える。新免遺跡の周囲には本町遺跡、岡町北遺跡、山ノ上遺跡などの集落が出現し、後期へと継続する。

弥生時代後期から終末期にかけては、沖積地において服部遺跡、穂積遺跡、上津島遺跡、庄内遺跡など多数の集落が出現する。穂積遺跡、服部遺跡では搬入土器が多く出土しており、河内湖と瀬戸内海をつなぐ東西交通の交易拠点として機能したようである。しかし、こうした弥生時代後期から終末期にかけて勃興した集落は、そのほとんどが短期間で衰退し、古墳時代前期まで継続する集落は小曾根遺跡、利倉西遺跡など少数に限られる。

古墳時代前期には、北部の丘陵上に御神山古墳、待兼山古墳が、中部の豊中台地上では大石塚古墳がつくられるほか、大阪国際空港の北端では住吉宮の前遺跡、豊島南遺跡で堅穴住居が検出されており集落が営まれたことが明らかである。古墳時代中期には大石塚古墳にはじまる桜塚古墳群の築造がつづき、猪名川左岸を代表する古墳群となる。この時期、蛭池東遺跡では倉庫とみられる大形掘立柱建物群が検出されており、桜塚古墳群との関連が考えられる。古墳時代後期には、大形古墳は豊中市内ではみられず北接する池田市で池田二子山古墳、鉢塚古墳が築造される。豊中市内では千里川流域で新免古墳群、新免富山古墳群、太鼓塚古墳群、春日町古墳群が形成される。また、古墳時代中期から古墳時代後期をへて奈良時代まで、桜井谷窯跡群が継続する。

古代には、金寺廃寺およびこれに関連する可能性が指摘される大形掘立柱建物が本町遺跡で検出されている。蛭池北遺跡、小曾根遺跡においても大形掘立柱建物が存在し、官衙的建物となる可能性がある。

中世以降、小曾根遺跡、島田遺跡、穂積遺跡でまとまった遺構がみられるが、集落の全貌を明らかに



- | | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|------------|------------|---------------|--------------|
| 1. 太鼓塚古墳群 | 12. 雲池北遺跡 | 23. 金寺山南寺町石 | 34. 長興寺遺跡 | 45. 原田元町遺跡 | 56. 利倉南遺跡 | 67. 上津島南遺跡 |
| 2. 野畑春日町古墳群 | 13. 雲池東遺跡 | 24. 本町遺跡 | 35. 梅塚古墳 | 46. 堀輪遺跡 | 57. 利倉西遺跡 | 68. 穂積ギョウ馬遺跡 |
| 3. 野畑春日町遺跡 | 14. 雲池西遺跡 | 25. 新免遺跡 | 36. 地輪敷布地 | 47. 豊島北遺跡 | 58. 兼堂の前遺跡 | 69. 島田遺跡 |
| 4. 野畑春日町遺跡 | 15. 雲池南遺跡 | 26. 箕輪遺跡 | 37. 原田西遺跡 | 48. 曾根南遺跡 | 59. 服部西遺跡 | 70. 庄内遺跡 |
| 5. 少路遺跡 | 16. 麻田藤原屋跡 | 27. 山ノ上遺跡 | 38. 勝部遺跡 | 49. 城山遺跡 | 60. 穂積遺跡 | 71. 島江遺跡 |
| 6. 待兼山古墳 | 17. 南刀根山遺跡 | 28. 走舟遺跡 | 39. 勝部東遺跡 | 50. 服部遺跡 | 61. 穂積村御境 | 72. 住吉宮の前遺跡 |
| 7. 待兼山遺跡 | 18. 駒神山古墳 | 29. 岡町北遺跡 | 40. 原田城跡 | 51. 若竹町遺跡 | 62. 小曾町遺跡 | 73. 宮の前西遺跡 |
| 8. 内山遺跡 | 19. 上野遺跡 | 30. 岡町遺跡 | 41. 原田遺跡 | 52. 石蓮寺坂寺 | 63. 藤原日代今西氏屋敷 | 74. 豊島南遺跡 |
| 9. 板井谷石器敷布地 | 20. 郷野田遺跡 | 31. 岡町南遺跡 | 42. 曾根遺跡 | 53. 寺内遺跡 | 64. 北条遺跡 | |
| 10. 榮原遺跡 | 21. 金寺山坂寺 | 32. 板塚古墳群 | 43. 曾根東遺跡 | 54. 利倉北遺跡 | 65. 上津島川床遺跡 | |
| 11. 板井谷遺跡群 | 22. 新免宮山古墳群 | 33. 下原遺跡群 | 44. 原田中町遺跡 | 55. 利倉遺跡 | 66. 上津島遺跡 | |

図4 豊中市内遺跡分布図(1:50,000) 上が北
 (豊中市教育委員会1995『豊中市埋蔵文化財年報VOL.3』掲載図に加筆)

するにはいたらない。小曾根遺跡、穂積遺跡は摂関家の荘園とされる範囲と重複する。荘園は後に春日大社に寄進され、春日社から今西氏が目代として派遣され屋敷を構え、荘園解体後も性格を変えながら存続しつづけた。

注

- 1) 大阪府教育委員会 1990 『西国・丹波街道 歴史の道調査報告書 第6集』
- 2) 梶山彦太郎・市原 実 1986 『大阪平野のおいたち』
- 3) 前掲2)による。
- 4) (財)大阪府文化財調査研究センター 1997 『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛭池遺跡・蛭池南地区・蛭池西遺跡 1993-1996 年度発掘調査報告書—大阪モノレール蛭池東線・西線建設に伴う発掘調査—』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第22集1)
- 5) 豊中市教育委員会 1999 『穂積遺跡第14次・15次発掘調査報告—豊中市南部における縄文海進期の基礎的研究—』(豊中市文化財調査報告第46集)
- 6) 前掲5)では、多角的な分析により詳細な様相が明らかとされている。

第2節 麻田藩陣屋をめぐる歴史的動向と絵図

1. 麻田藩の動向

麻田藩は藩祖青木一重に始まり、外様大名でありながら十四代にわたり、明治4年(1871)の廃藩置県まで一度も転封されることなく同一一族によって続いた藩である。1万石という小さな所領ながら、時代による違いがあるが備中国(岡山県笠岡市)・伊予国(愛媛県東予市、周桑郡)・摂津国(兵庫県三田市他)に飛地をもっていた。

藩祖青木一重は美濃の出身で、もとは今川氏に仕えるが、永禄12年(1569)、今川氏の没落と共に家康の家臣団に編入されていった。天正元年(1573)、家康を離れ、織田信長側近の丹羽長秀に仕え、信長没後、天正11年(1583)の賤ヶ岳の合戦前後に豊臣秀吉の配下となったとみられる。天正13年(1585)には摂津国豊嶋庄、備中国、伊予国内の領地が与えられている。秀吉の死後、秀頼に仕え、大坂冬の陣に参戦する。合戦後の元和元年(1615)、豊臣家と議の使者として、徳川家康のいる駿河に派遣されるが、帰路、京都にて拘禁され、一重自身は夏の陣に参戦できなかった。

夏の陣により豊臣氏が滅亡し、一重は出家するが、家康より一万余石を安堵され、麻田の地に陣屋を構えた。夏の陣に参戦しなかったこと、以前から家康と近かったことが大名取り立ての理由と考えられている。

藩祖一重の父、青木重直は美濃の出自であり、斎藤道三、織田信長、豊臣秀吉に仕えていた。秀吉から摂津国豊嶋郡・菟原郡内の所領を賜っている。

二代藩主青木重兼は麻田藩の基礎の確立に努めた。また、黄檗宗に帰依し、自ら出家、文人としての一面もあり、豊嶋郡東畑村に黄檗宗弘日寺を建立し、藩主歴代の菩提寺になっている。茶をたしなみ、野々村仁清の御室焼の成立にも協力している。この頃、徳川幕府は諸大名の力をそがせる政策のひとつとして多くの普請役を課しており、青木氏も多くの寺社建立、建立奉行になっている。仁和寺御室、黄檗宗本山万福寺の造立奉行を務め、摂津国多田郡(三田市)には大覚山方広寺を創建し、自ら出家している。伊予国の飛地の替地として摂津国多田郡の領地を得ている。

二・三代の時代に幕府公務の増加、上述の寺院造営のため、領主財政が悪化した。藩の経済は苦しく、三代藩主重正は藩札を発行している。18世紀半ばには非常に深刻化し、年貢率が上昇し、宝暦12年(1762)以降、家臣や領内に倭約を繰り返して命じている。

藩財政の立て直しのため、八代一新、九代一貫、十代一貞の頃、家臣団に変化がみられた。領内の富農を御奉公人として小役人に採用され、勘定所、札役所で財政の手腕をふるい、天明から享和(1781～1804)にかけて新しい経済政策を打ち出した。定免制の導入、札役所の成立、儉約令を出す、一時的なもので、藩財政はよくなり、文化7年(1810)には一揆が起こる事態となる。

以後の天保期も藩財政は厳しく、池田や伊丹の問屋などから借銀をするが、返済できず、藩札の引替停止や藩に貸し付けをするものもいなくなった。

十四代藩主重義は明治元年(1868)、新政府からの幕府追討軍参軍の通達により、出京を決め、いち早く維新政府軍についた。この協力により明治2年(1869)の版籍奉還では藩知事に任命される。

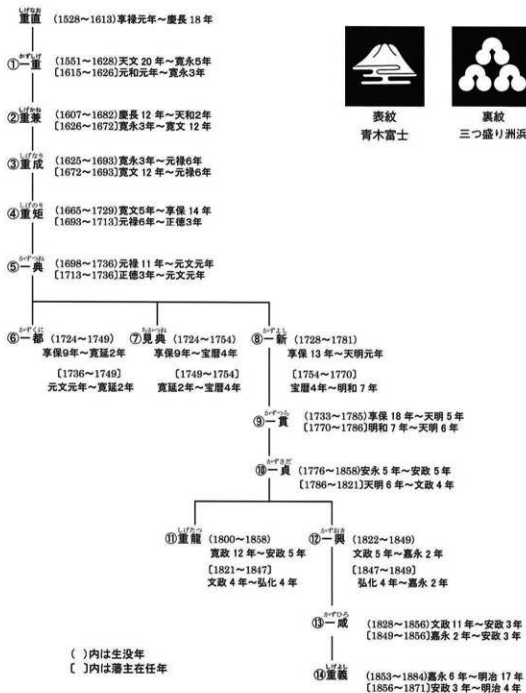


図5 麻田藩主家系図

明治4年(1871)には廃藩置県により麻田県となり、麻田藩は消滅した。その後、麻田県は大阪府豊嶋郡に編入された。

2. 麻田藩陣屋の絵図と屋敷地

陣屋は大坂夏の陣、元和元年(1615)以降、初代藩主一重によりつくり始められ、二代藩主重兼の17世紀なかばには整えられた。

陣屋跡は北東から南西に伸びる低位段丘上の縁辺に位置し、陣屋の西辺と南辺は段丘崖になっており、自然地形を生かしていることがわかる。また、陣屋の北方には西国街道が東西に走り、南北に走る能勢街道は陣屋の東方に位置しており、交通の要衝であることもわかる。この場所は豊嶋郡の領地の南端に位置しており、麻田村を南西に置く。

明治4年(1871)の廃藩置県により麻田藩は消滅したが、陣屋の地割は現代まで踏襲されており、屋敷地の状況を知ることができる。

陣屋の絵図は青木図(豊中市教育委員会蔵(旧青木長太郎氏蔵) 江戸時代後期 巻頭カラー図版1)、小谷図(小谷英一氏蔵 明治6年 図6上)、中村図(中村政昭氏蔵 廃藩置県直後頃 図6下)の3枚が存在する。このうち、青木図には屋敷地の各辺の寸法が明記されており、現代の地割との照合に有効な絵図である。以下、青木図を中心として、陣屋の様相を記述する。

陣屋は逆L字の平面を有し、南北約260m、東西約205mの規模を有する。さらに南東隅部分には南北約74m、東西約20mの突出部を有する。北・東・南に外堀が巡り、西側は段丘崖を利用しているため、堀はなく、塀のみが描かれている。東南隅と南側の外堀は河川を利用しているため、絵図では波打って表現されている。

陣屋には北門(表門)と南門(裏門)があり、道が陣屋の中心を途中、屈曲部を有しながら伸びている。また、北門を入るとすぐに西側にも道がまっすぐ伸びるが、突き当たりになっている。藩主邸はこれら道の角にあり、陣屋の中心に位置する。道をはさんで北・東に藩主邸を囲むように家臣の屋敷地が連なる。藩主邸の東・北には塀の外側に幅1間の内堀が巡る。

外堀の内側は重臣屋敷地の裏庭になっており、外堀に沿って、外堀よりやや幅広の格子状の紋様帯がある。性格について絵図には記述がないが、後述する発掘調査の成果により土塁の表現の可能性が高い。

藩主邸の東側と北側には重臣の屋敷地が連なっている。道に面した重臣屋敷地それぞれ塀が伸び、門が描かれている。各屋敷地には建物が1棟或いは2棟あり、祠と鳥居が描かれているところもある。青木別邸の門には櫓が付随している。塀と門の下部は石垣になっている。建物の屋根はベージュ色が板葺き、茶色が萱葺き、黒色が瓦葺きと推定できよう。屋敷地境は1本線が描かれており、土塀のような恒久的なものの存在より、溝或いは簡素な柵程度の施設を考えるべきであろう。

屋敷地の大きさは表・裏の間口、左右の奥行き寸法が記述されており、陣屋の地割が基本的に現在まで踏襲されていることがわかる。

家臣名は付箋に記され、貼付されているが、左を頭にした横書きなので、後年に貼付された可能性が高い。但し、付箋下部の絵図そのものに縦書きで薄く同一の氏名が記述されているようである。

参考文献

池田市 1999.3 『新修池田市史 第2巻 近世編』

上田一 1984.10 『摂津 麻田陣屋』 日本古城友の会

豊中市教育委員会 1986.10 『麻田藩のあゆみ』「文化財=ニュース豊中No.5」

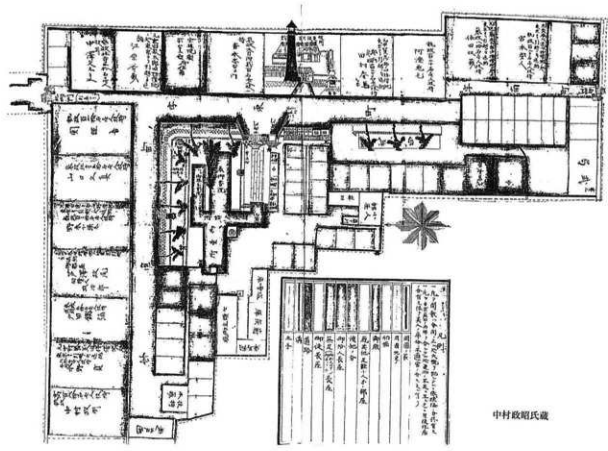
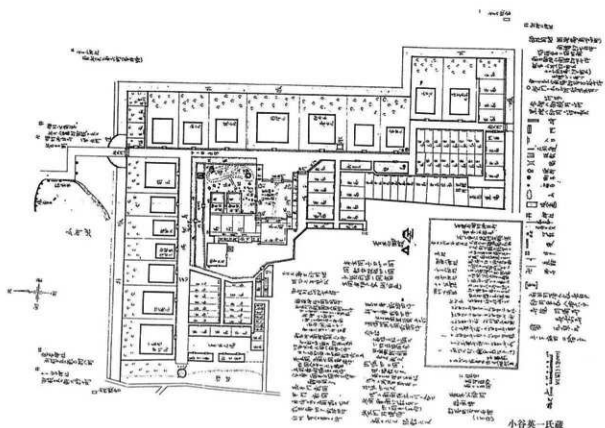


図6 陣屋絵図 (上田一「摂津麻田藩陣屋」 1984 日本古城友の会より転載)

第3章 調査の概要

麻田藩陣屋跡は遺跡名の通り、近世陣屋跡の遺跡であるが、さらに下層には重複する蛭池遺跡や隣接する蛭池東遺跡と連続する古墳時代から古代の遺構を検出した。また、中世遺物、弥生土器、旧石器も少量ながらも出土している。

遺構面は近代から現代の包含層を除去することにより、近世の遺構面が検出され、その基盤層となる古墳時代から中世の包含層を除去することにより古墳時代から古代の遺構面を検出した。部分的に中世の遺構面が残存するが、調査は主にこの近世面と古墳時代から古代面の2面において実施した。

古墳時代から古代面(5面)では調査区北側と南側において掘立柱建物6棟、竪穴住居1棟、柵4列を検出し、調査区中央部からは約310基の密集土坑を検出した。

調査区北側の建物群には1間×1間の2棟の間に柵列を配置しているところがあり、この施設より北側で建物を3棟検出した。調査区南側の建物は2棟あり、北東方向に円弧状に伸びる溝が走る。

密集土坑群はこれらの建物群をはさむように地形的にもやや低い谷地形上に位置している。土坑群の北端、南端には建物群とを区画するように溝が伸びている。土坑は重複した状態で検出され、また、遺物は完形にちがひものが出土している。墓の可能性が考えられるが確定できていない。

建物、密集土坑群共に古墳時代後期を中心とした時期を与えることができる。

古代の遺構は掘立柱建物・井戸を検出した。

中世は土坑、溝を検出し、石仏・五輪塔が出土している。

近世面(3面)は陣屋の絵図と現代の地割を参考にすることができ、外堀に沿って並ぶ家臣屋敷地であることが調査前から想定されていた。その結果、東西方向に伸びる屋敷境溝を検出し、9区画の屋敷地を確認した。北から区画1、区画2という名称を与え、次章以降に説明をしていく。

各屋敷地は絵図によれば、西側は道路に面しており、東側には外堀が存在する。西側の道路は調査区外のため、検出していない。東側の外堀は区画7から8のところ検出し、内側に土塁を有していることが明らかになった。この地点で外堀は屈曲し、陣屋の範囲は東側に広がっている。既往の調査区で検出された外堀につながるが、付け替えが認められ、複数期の変遷があることがわかった。また、区画9では陣屋の地割方向と異なる大溝を検出し、江戸時代初期の陣屋形成直前後の絵図に見られない状況があったことがわかった。

各屋敷地からは明瞭な建物跡は検出されなかった。区画2から5では裏庭にあたる東端に方形の大型落ち込みを検出している。区画2・3では陣屋解体直後の粘土取り穴が連なった状態で検出した。

遺物は近世の各時代の一括資料となる遺物が出土している。また、窯業に関連する匣鉢、窯道具、溶着した青磁・染付が出土した。窯業生産と直接結びつく遺構は検出していないが、19世紀前半に陣屋内、或いは隣接した場所において磁器の生産がなされていたことが明らかになった。隅瓦には瓦当紋に青木氏の裏紋である洲浜紋を採用したものが出土した。

1面・2面からは長方形の3~4m×2m前後の竪穴土坑がE地区を中心に多数検出した。壁面には板材が貼り付けられ、杭を用いて止めている。床面にも板材を置く。これらは第二次世界大戦時の防空壕と思われる。遺跡の西側には当時の空港である現大阪(伊丹)空港があり、空襲もあったようである。機関砲弾頭が出土した。

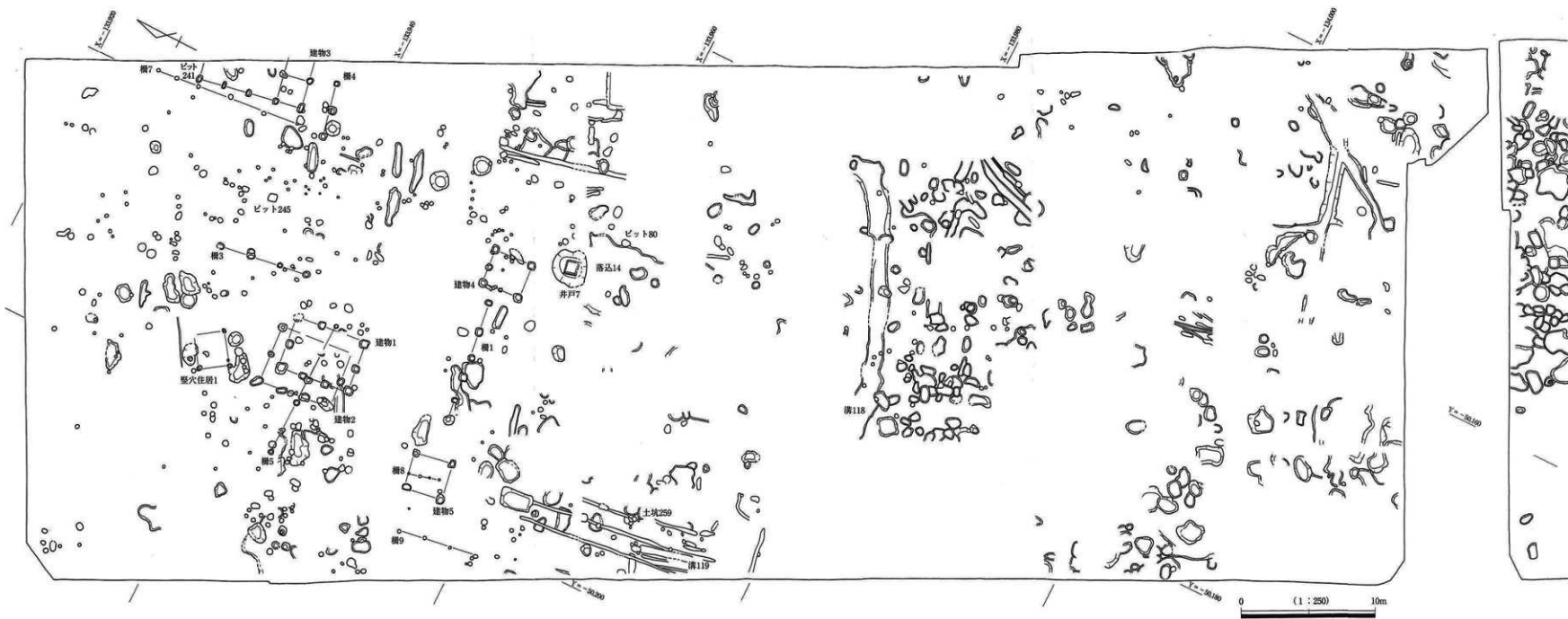


図7 5面（古墳時代～中世）遺構全体図（1）

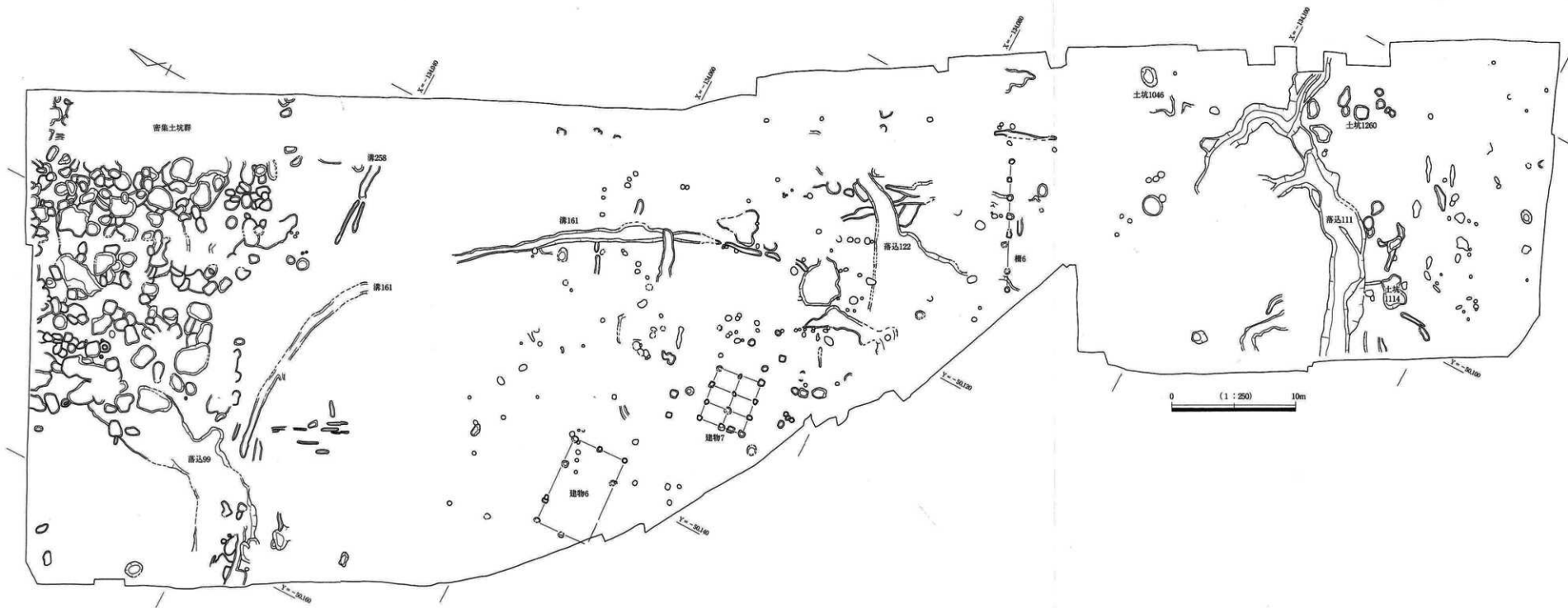


图8 5面(古墳時代~中世)遺構全体図(2)



图9 3面(近世)遺構全体图(1)

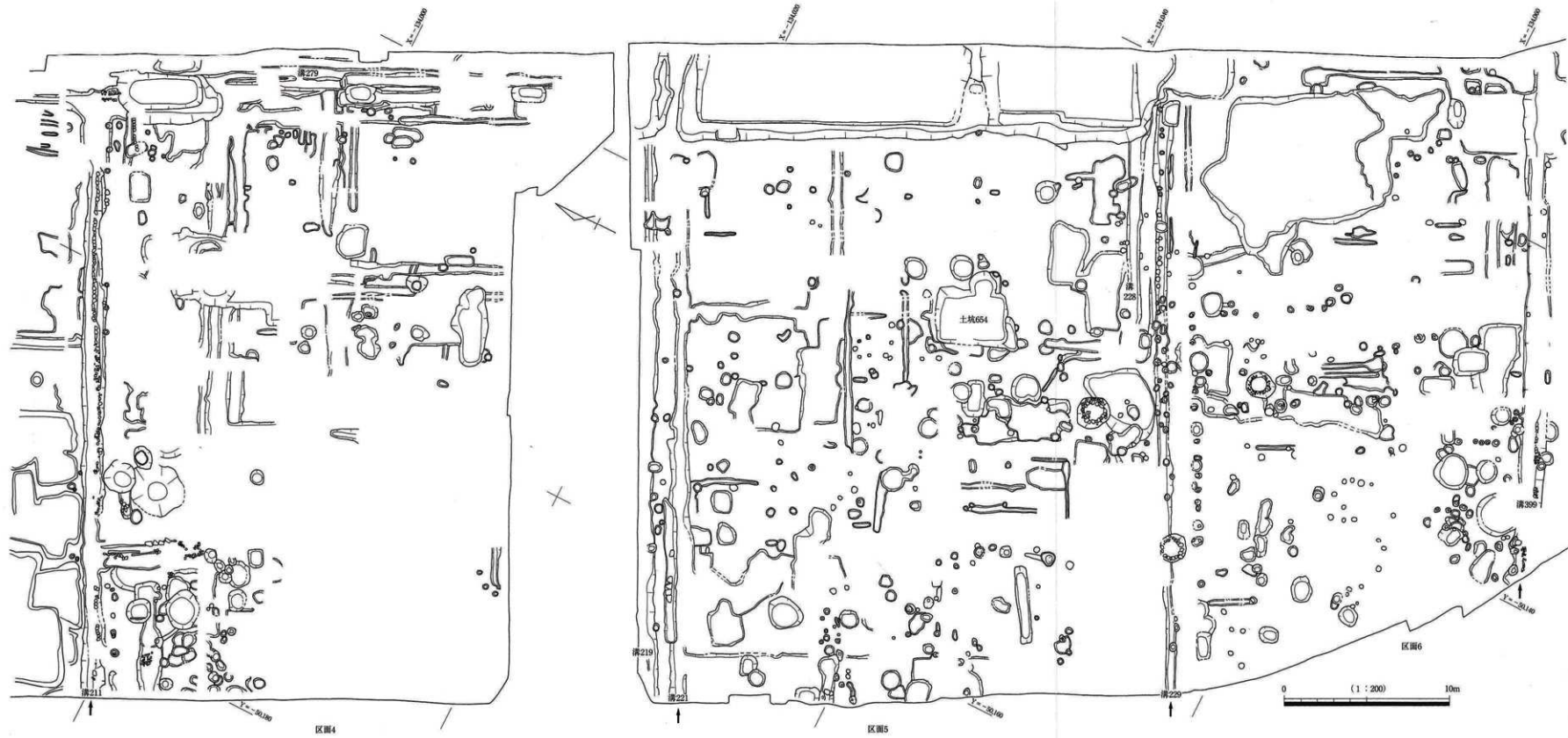


图10 3面（近世）遺構全体图（2）

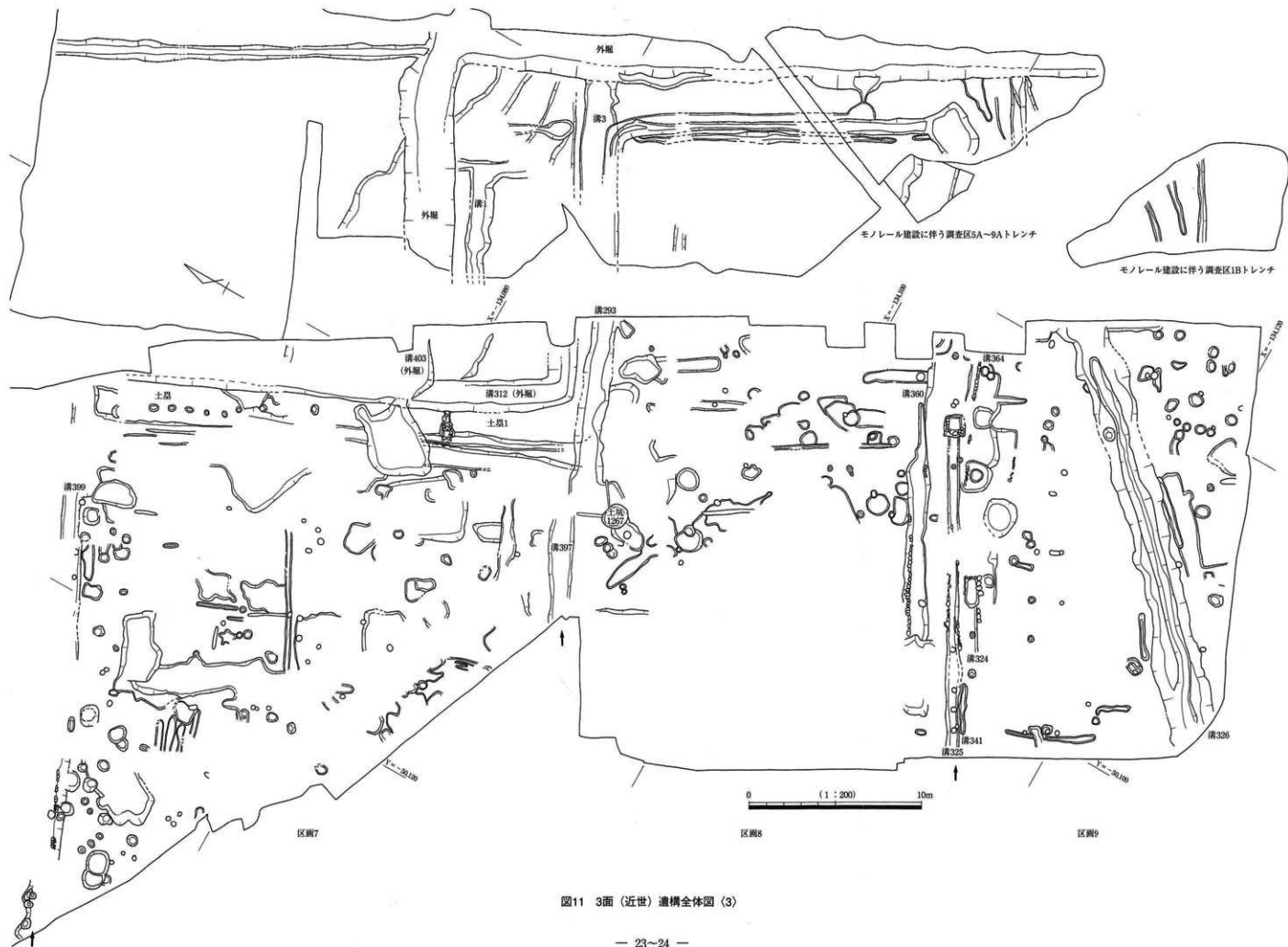


図11 3面（近世）遺構全体図（3）

第4章 調査成果

第1節 基本層序

調査は機械により現代盛土を除去し、その後は人力により掘削を行った。層位名は上層より1層とし、1層除去面を1面と呼称した。以下の遺構面についても同様の呼称をした。

- 1層：褐色シルト層。近代以降の盛土。
- 2層：灰色シルト層。明治4年(1871年)廃藩置県～近代初頭の包含層。
- 3層：茶褐色シルト層。江戸時代包含層。
- 4-1層：灰色シルト～微砂層。中世包含層。
- 4-2層：茶褐色シルト～粘土層。奈良時代～中世包含層。
- 5層：茶褐色粘土層。古墳時代後期～奈良時代包含層。
- 6層：黄褐色粘土層。谷地形に堆積した土層。古墳時代包含層。
- 7層：黄色粘土及び砂礫層。低位段丘を構成する基盤層。

各時代の包含層は以上であるが、遺物は旧石器・縄文・弥生時代の石器や弥生土器も出土している。

1層と3層は調査区の全域に広がっているが、調査地は、市街地の住宅が密集した場所であり、後世の削平がみられ、2層、4-1層、4-2層、5層は部分的に残存するのみである。

3層除去後の江戸時代面(3面)と5層除去後の古墳時代から古代面(5面)において調査区全域的な調査を実施し、他の遺構面は残存状況により部分的に行なった。

3面は麻田藩陣屋が営まれた面であり、部分的に整地土層がみられ、平坦面を作り上げている。5面は部分的に遺構面上層にあたる4・5層が存在せずに5面に達したところもある。調査区の地形は北から南へ向って低くなっており、5面では南北方向に約2.0mの高低差を有する。調査区中央部のD地区南端とE地区北端にかけてはやや浅い谷地形が東西方向に伸びており、その谷地形部分には密集土坑群が分布し、その南北それぞれには建物が分布している。また、E地区中央部には中世の浅い谷が存在し、4層に相当する。6層はE地区に部分的に存在した土層であり、除去することにより、浅い谷地形を確認した。D地区中央部においては、2層除去後の近代初頭面(2面)から建物を検出している。

第2節 旧石器から弥生時代の遺物

これらの時代の遺構は検出していないが、旧石器時代、縄文時代、弥生時代の石器・土器が出土している(図13)。いずれも純粋な各時代の遺構・包含層からではなく、二次的な堆積層からの出土である。

1は国府型ナイフ形石器である。厚みのある平滑な底面を有する横長剥片を素材とする。打面部は、背面に向けての急斜度調整で一部除去されている。刃部は精美な弧状を描く。先端部と基部は欠損している。2は小形の国府型ナイフ形石器である。ポジティブな底面を有する横長剥片を素材とする。打面部には背面に向けて急斜度調整が施されている。背面左側縁下半部と基部は欠損している。3は2側縁加工のナイフ形石器である。平滑な底面を有する横長剥片を素材とする。調整は、打面と未端部に施されている。打面部のそれはインパース・リタッチであり、打面のおよそ半分を除去する。先行剥離面と素材剥片の底面が作り出す縁辺が刃部と考えられる。背面右側縁下半部を欠損する。

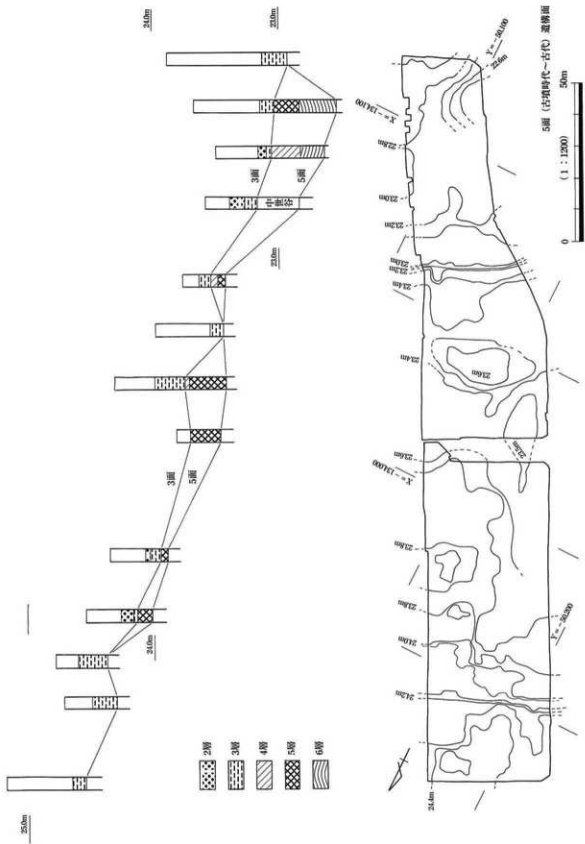


図12 基本層序柱状図・調査区コンター図

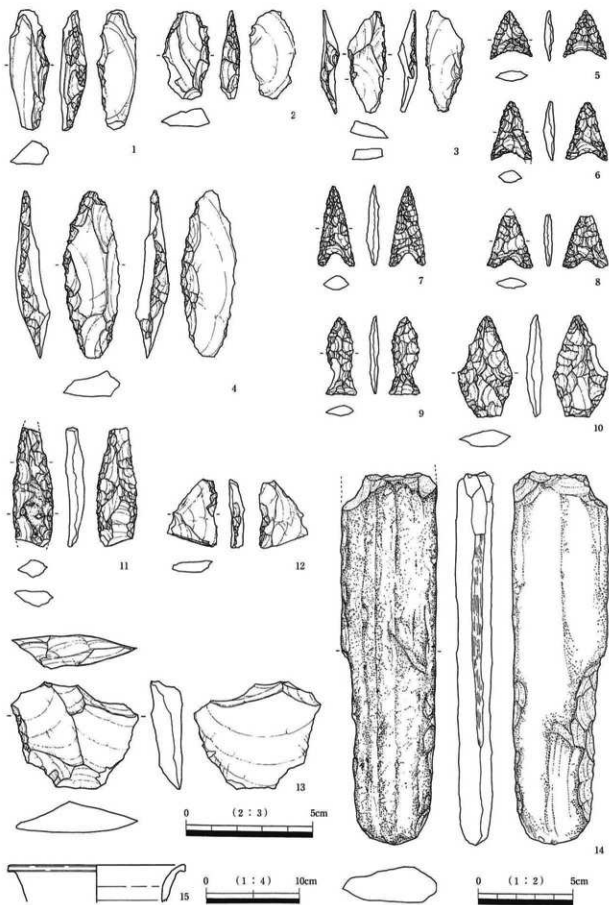


図13 旧石器～弥生時代の遺物

4は横長剥片を素材としたスクレイパーである。打面と末端部にやや平坦な調整が施され、弧状の刃部を作出している。調整は、打面側においてはインパース・リタッチ、末端側では背面側に向けて施されている。5は凹基式の小形石鎌である。脚部の先端は非常に先鋭である。6は凹基式石鎌である。先端部の両側にやや張りがあり、また中央部付近は若干くびれている。7は凹基式石鎌である。鎌身は長く、幅は狭小という特徴的な形態を呈する。8は凹基式石鎌である。先端部を欠損する。9は平基式石鎌である。形態は魚形を呈する。表面左側縁下半部を欠損する。

10は石鎌と考えられる。形態は木葉形を呈し、中央やや基部側に最大幅をもつ。両面に平坦な調整が施されている。基部は折損し、裏面右側縁上半部は欠損している。11は平坦な調整が器面を覆うように施されている。先端右側縁には衝撃痕とおもわれる剥離面がみられる。表面下半部中央には自然面が残る。先端と基部が折損しているため、その詳細は不明であるが石鎌と考えられる。

12は幅広の剥片である。剥離角が非常に大きい。打面に抉りを出すような剥離がみられる。また、打面と接する背面側にも剥離がみられる。上部には自然面を残す。風化の進行があまりみられない。13は幅広の大形剥片である。打面は剥離時の衝撃により大部分が折損したものと考えられるが、右端に一部残置する。背面には、腹面と同一方向の剥離軸をもつものと対向するものがみられる。14は扁平な礫器である。両側縁と端部の一部に磨痕がみられる。また、両側縁には剥離のような割れ面がみられるが、人為的なものかは不明である。片端部は折損している。15は弥生時代後期の壺口縁部である。内外面ともに摩滅が著しい。

以下、各遺物の年代観と評価について若干述べることとする。

ナイフ形石器は、1・2が国府型、3が2側縁加工の形態を有することは前述のとおりである。国府型ナイフ形石器は、小形ながら有底剥片を素材とし、打面部を背面に向けて急斜度調整を施すという点において典型的である。3は有底剥片を素材としているが、打面部と末端部にも調整を施しており、「へ」状の刃部を意識していると考えられる。同様の石器は、兵庫県西脇遺跡において多数出土している（森成 1980、森川 2001）。

4は、素材の末端部を中心として細かい調整を施すものであり、縄文時代でも古い時期のものとされている（有本 1985）。石鎌（5～8）は、凹期式の石鎌がほとんどであるが、9は、魚形石鎌とも呼ばれるもので、非常に特徴的である。同様な石鎌は、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡などからも出土しており、縄文時代早期に特徴的な形態とされている。また、その広がりには和歌山県南部～伊勢湾にかけて及ぶ。

以上、今回出土した定型的な石器についての年代観について述べた。これらは、いずれも後期旧石器～弥生時代に属するものであると考えられる。

15の弥生土器は後述する古墳時代の密集土坑群から出土しているが、この遺構に伴うものではなく、混入と考えられる。

参考文献

- 春成秀爾 1980「明石市西脇遺跡の旧石器」『旧石器考古学』21 旧石器文化談話会
有本雅己 1985「二上山北麓における削器の一樣相」『旧石器考古学』33 旧石器文化談話会
森川 実 2001「近畿地方における横刺ぎ石器群の比較研究」『旧石器考古学』61 旧石器文化談話会

第3節 古墳時代から中世の遺構・遺物

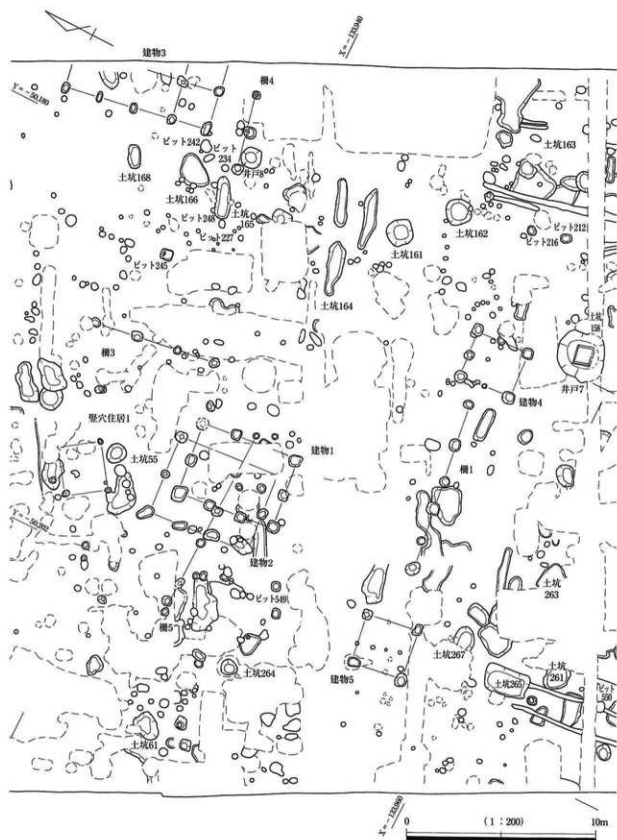


図14 5面D地区遺構図

調査区全域から古墳時代後期から古代の遺構が検出され、中世も散見する。後世の擾乱により遺構が空白になっている箇所もみられる。

1. 古墳時代の遺構

古墳時代後期の主な遺構として建物と櫓をD地区の北側とE地区の中央部で検出し、密集土坑群をD地区の南側とE地区の北側にかけて検出した。

建物、櫓の軸は $N-4^{\circ} \sim 11^{\circ} -W$ を指向し、東西或いは南北の方位軸とほぼ合致している。

D地区の北側では、掘立柱建物跡4棟、竪穴式住居跡1棟、櫓4列の他に土坑を検出した(図14)。

建物1は 3×2 間の南北棟掘立柱建物であり、約 $5.3m \times 約 3.8m$ を測る(図16)。柱間隔は $1.7 \sim 2.1m$ であり、梁間方向が広い。ピットの平面形はいずれも1辺 $0.5 \sim 0.7m$ の方形を呈しており、深さは $20 \sim 38cm$ である。ピット60では直径約 $18cm$ の柱痕を確認し、ピット64の底部からは礫が出土した。ピット59・64・65・77・78から土師器片、須恵器甕小片が出土している。建物2と重複しているが先後関係は不明である。



図15 5面E地区遺構図

建物2は3×2間の南北棟掘立柱建物であり、約5.5m×約4.3mを測る(図17)。柱間隔は1.8~2.2mであり、梁間方向が広い。南東方向のピットは攪乱のため、検出していない。ピットの平面形は円形から隅丸方形を呈するが、統一した形ではない。深さ18~40cmを測る。ピット73から土師器片が出土している。建物1と重複しているが先後関係は不明である。

建物4・5は並列しており、その間に柵1が位置している。これらは同時存在していたと考えられる(図18)。建物4は2×2間の掘立柱建物であり、南北約2.9m×東西約2.7mを測る。柱間隔は1.3~1.5mである。ピットの平面形は1辺0.5~0.6mの隅丸方形を呈しているが、ピット215・310は直径0.4m、0.3mを測り、規模が小さい。ピット52は柱痕が確認でき、直径14cmを測る。ピット52・215・217・218・219から土師器片、須恵器片が出土している。建物5は1×1間の掘立柱建物であり、南北約2.8m、東西約2.7mを測る。建物4と同一規模を有するが、柱筋中間から柱穴が検出されていない。ピットの平面形はいずれも1辺0.5~0.7mの隅丸方形を呈している。ピット545では明瞭な柱痕と基盤層である黄褐色粘土と黒褐色シルトを混合した埋土が重層的に確認できた。ピット545・548から土師器片が出土している。柵1は全長約9.2mの5間を有する。柱間は1.6~2.3mを測り、一定しない。

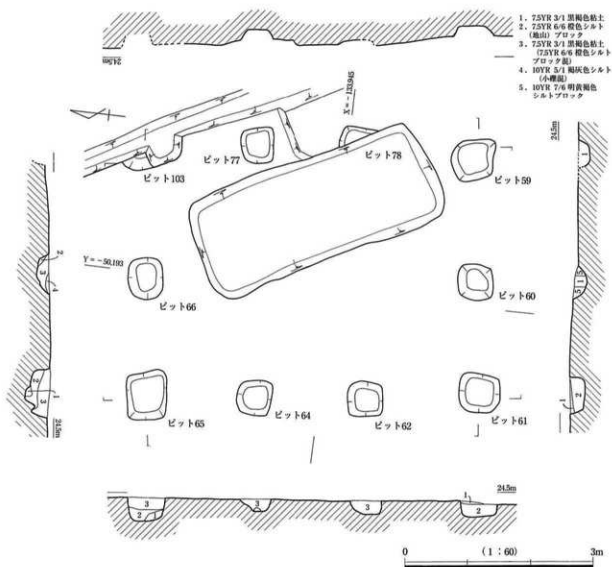


図16 建物1

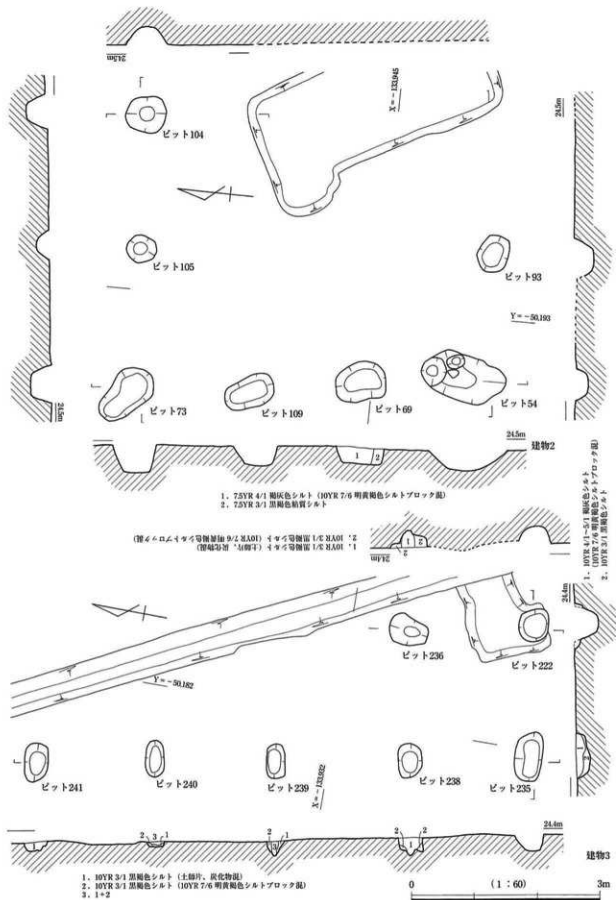


図17 建物2・3

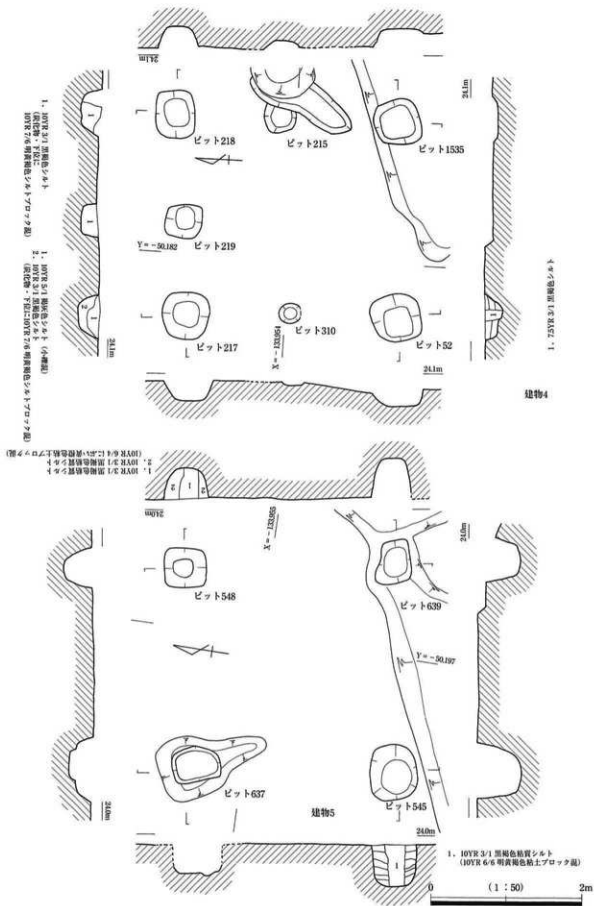


図18 建物4・5

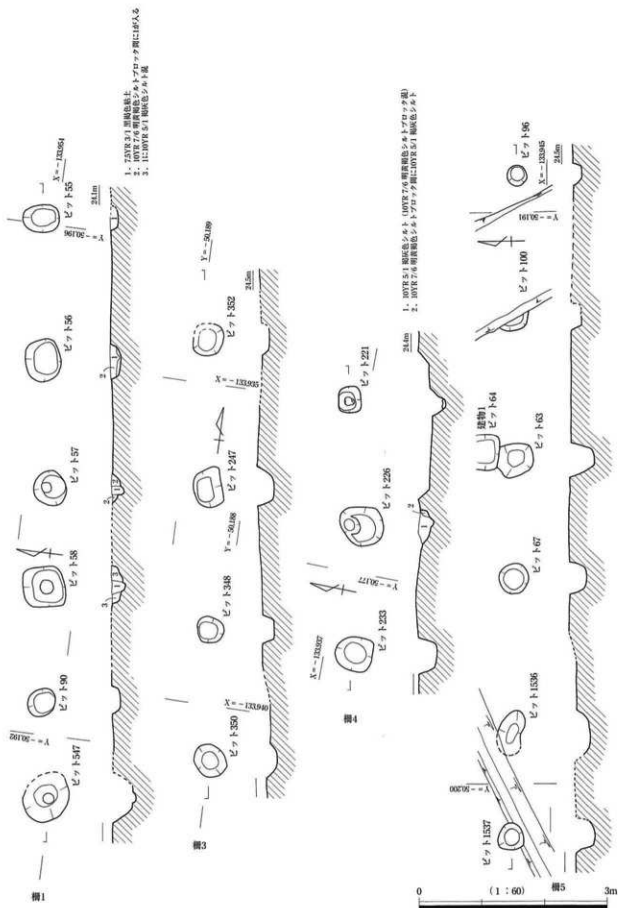


図19 欄1・3・4・5

ピットの平面形は円形、隅丸方形があり、直径・1辺 0.4~0.7mを測る。ピット 57・58・547 において柱底位置が確認され、ピット 547 から土師器片が出土している。建物 4 とは約 1.1m の空間しかなく、建物 5 側には約 3.0m の空間がある。

柵 3 は建物 1・2 の北東に位置し、南北方向に伸びる (図 19)。全長約 6.7m の3間を有し、柱間は 2.1~2.3m を測る。ピットの平面形は方形に近い円形を呈する。南端のピット 350 は建物 2 の北柱筋と合致するが、柵の方位軸とは異なる。ピット 247 から須恵器甕が出土している。

柵 5 は建物 1・2 と重複しており、建物 1 のピット 64 との切り合い関係から、柵 5 が先行することが確認できる (図 19)。東西方向に 5 間伸び、全長約 10.4m を測る。ピット 63 から土師器片が出土している。

竪穴住居 1 は建物 2 の北側に位置し、北辺のみが約 3.7m 残存するのみで、全体規模は明らかでは

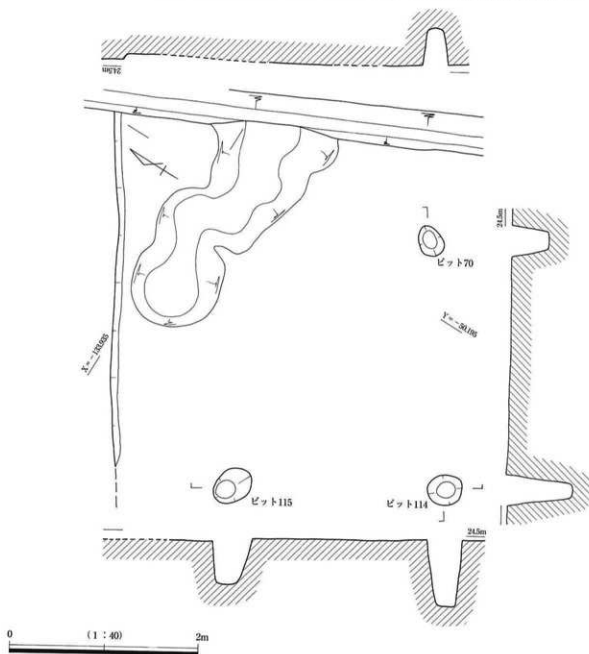


図20 竪穴住居1

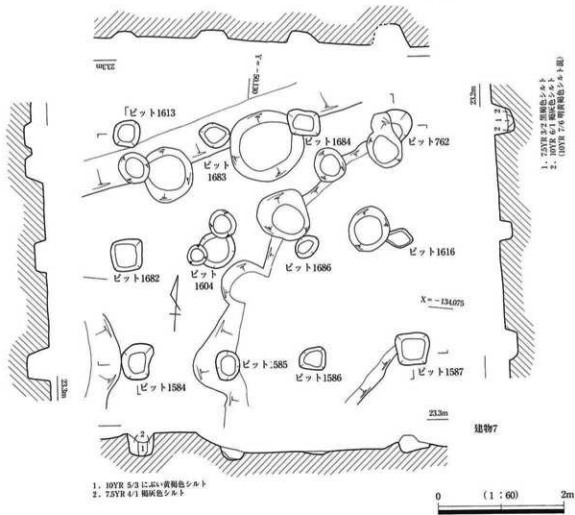
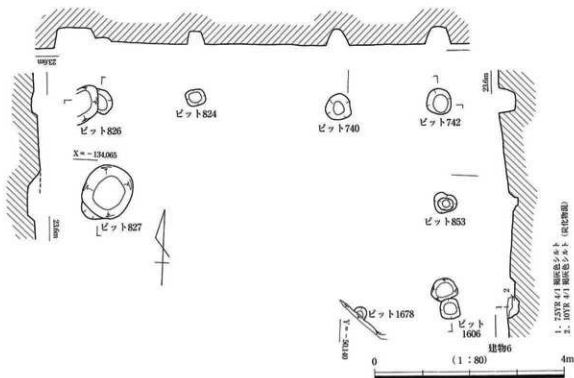
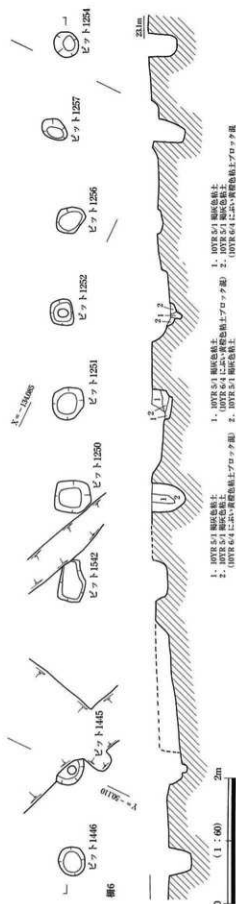


図21 建物6・7



ない(図20)。検出面から床面までは北辺で約4cmを測るが、周溝、床土は認められなかった。支柱穴は4本で、間隔は南北方向約2.3m、東西方向2.6mを測る。ピットは直径22~43cm、深さ40~70cmを測る。ピット70から土師器壺、須恵器甕が出土している。

土坑55は竪穴住居1と重複する。直径約1.0m、深さ約0.3mを測る(図23)。図36-1~7の土師器碗・高杯・壺・甕が一括で出土した。

土坑267は建物5の南方に位置する。断面形態が楕円状を呈しており、礫が出土している(図23)。

E地区の中央部では建物2棟、櫓1列の他に溝、土坑、落込が検出された。

建物6は3×2間の東西棟掘立柱建物であり、桁行約7.2m、梁間約4.3mを測る(図21)。柱間間隔は2.0~2.2mであるが、

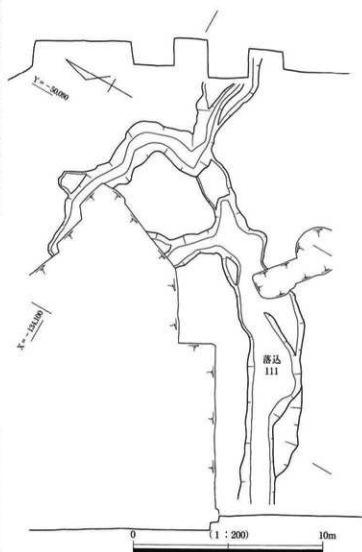


図22 欄6・落込111

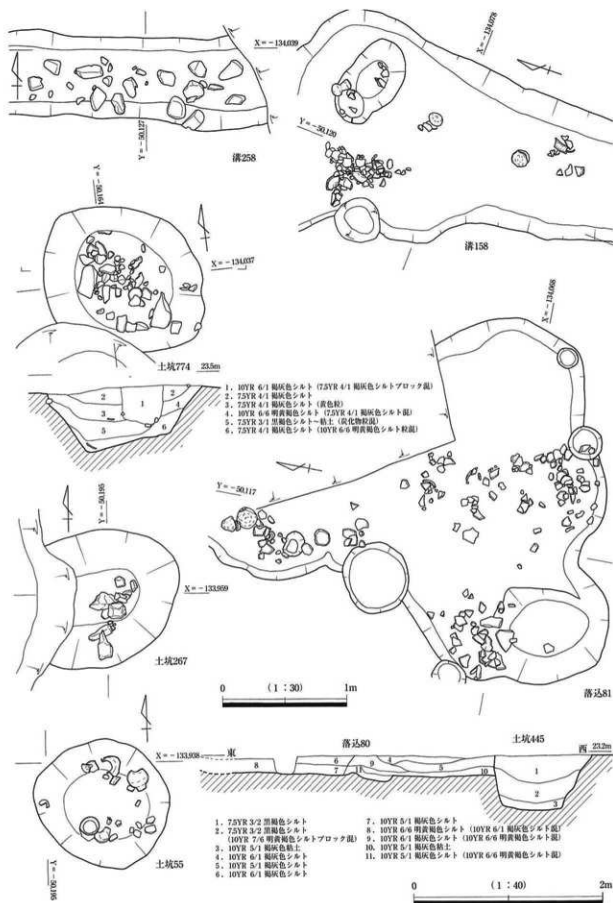


図23 溝158・258 土坑55・267・445・774 溝込80・81

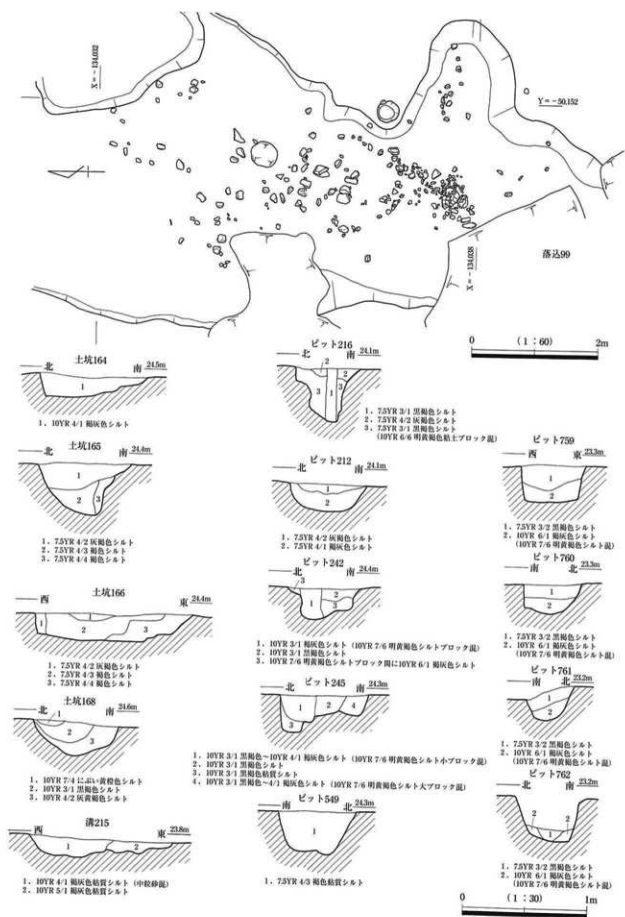


図24 落込99 土坑164~166・168 溝215 ピット212・216・242・245・549・759~762

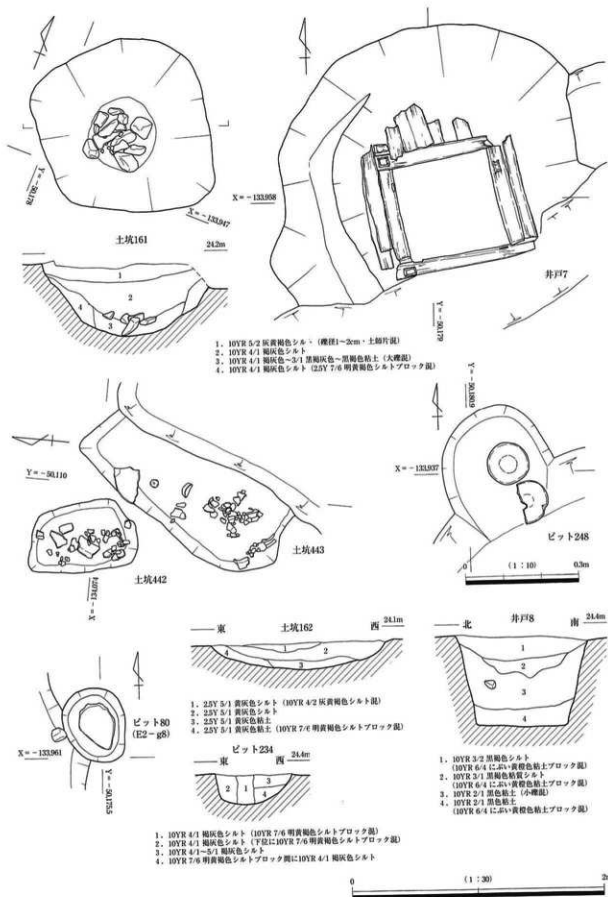


図25 土坑161・162・442・443 井戸7・8 ビット80・234・248

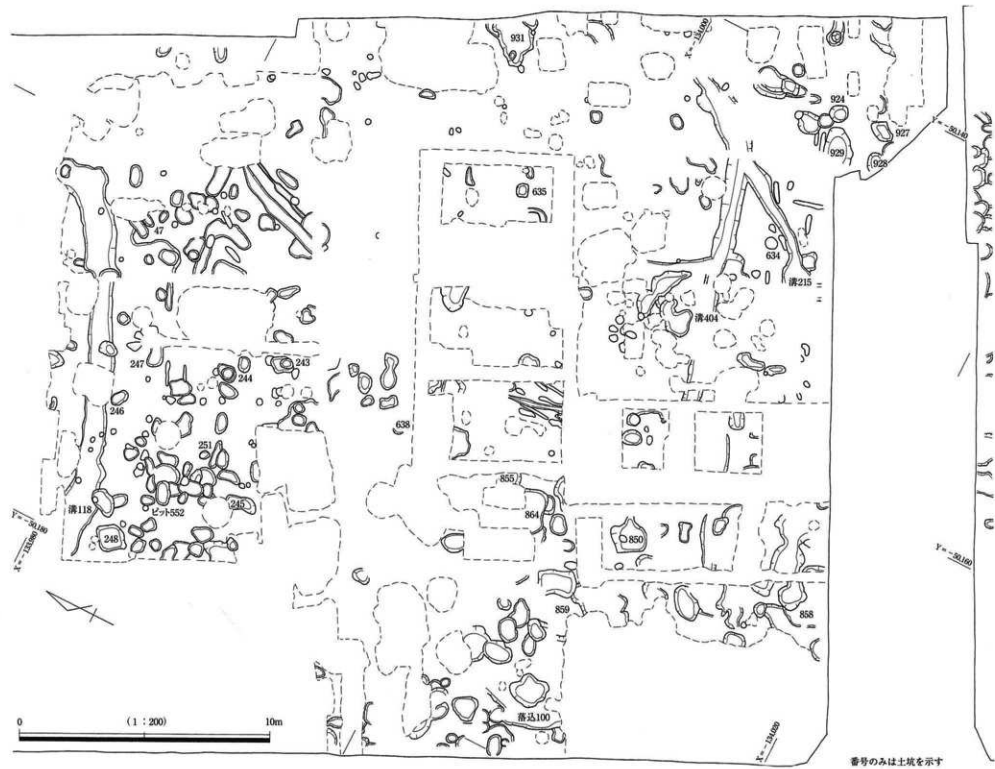


図26 D地区密集土坑群

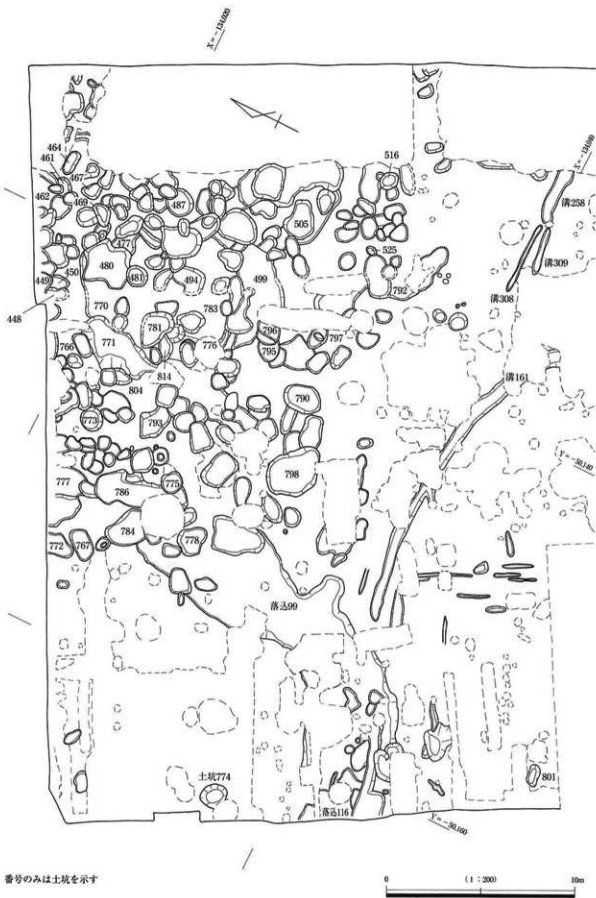


図27 E地区密集土坑群

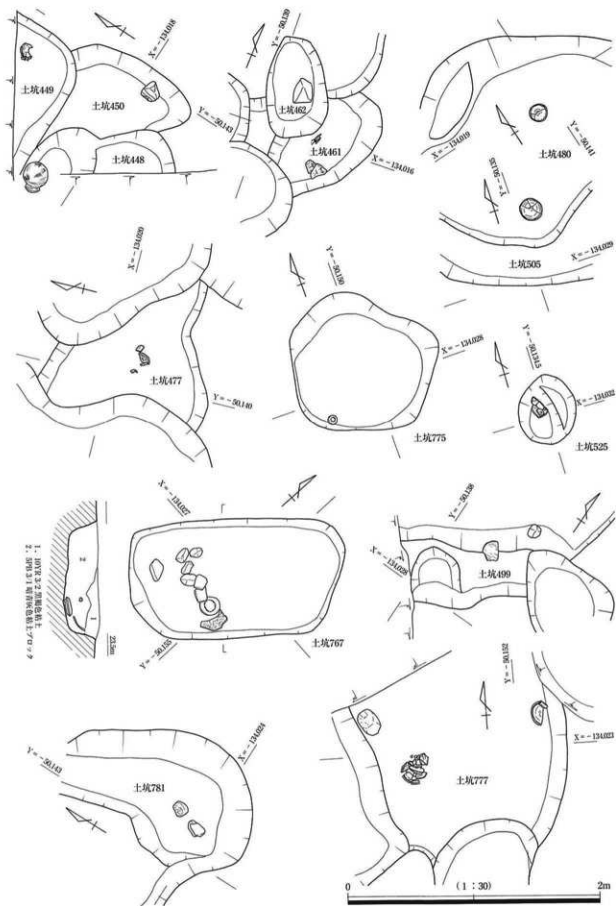


图28 土坑448~450·461·462·477·480·499·505·525·767·775·777·781

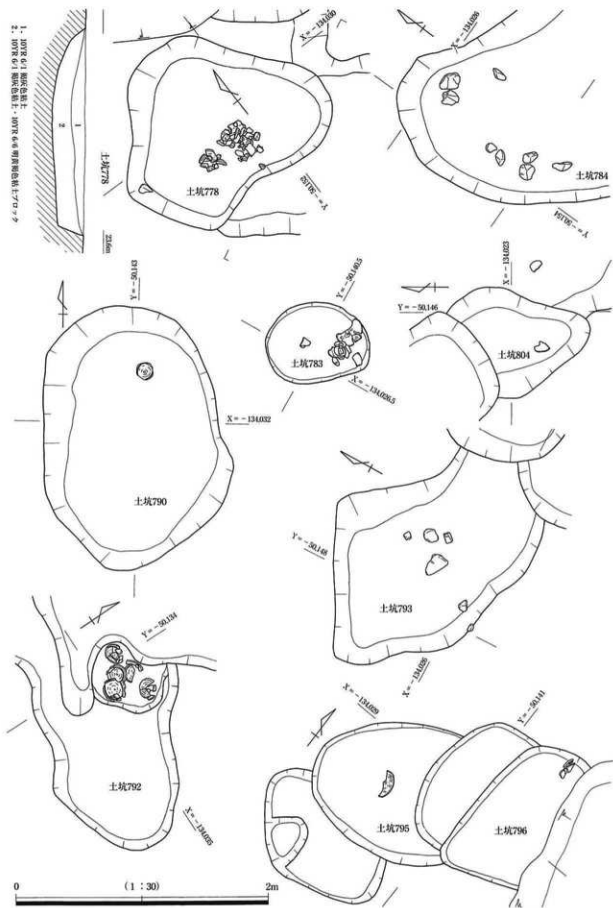


图29 土坑778·783·784·790·792·793·795·796·804

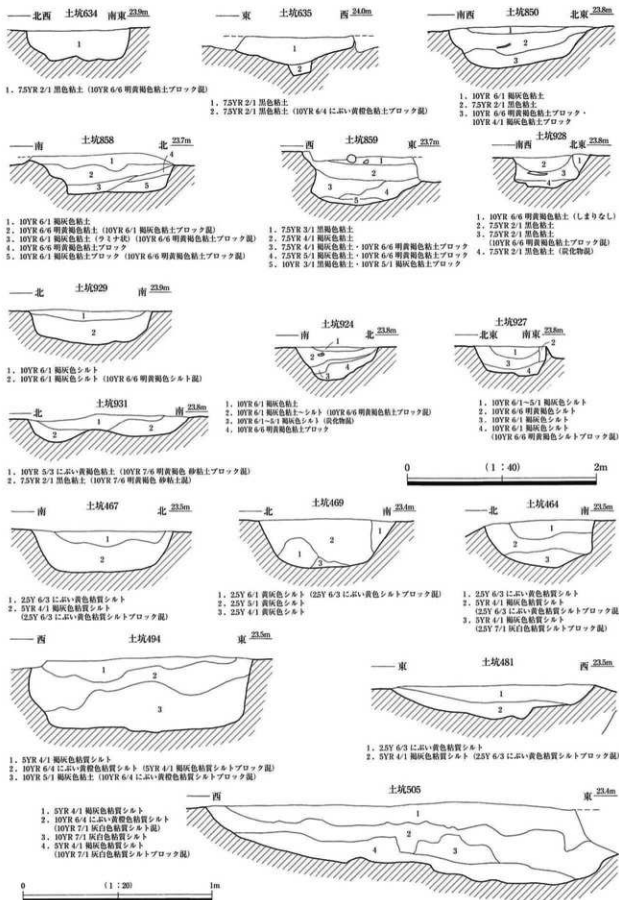


図30 土坑464・467・469・481・494・505・634・635・850・858・859・924・927~929・931

中央柱間が約3.0mを測り、やや広がっている。ピットの平面形は直径0.3~0.5mの円形に近い隅丸方形を呈しており、深さは13~35cmである。

建物7は建物6の南東に位置する3×2間の東西棟総柱掘立柱建物であり、桁行約4.3m、梁間約3.7mを測る(図21)。柱間隔は1.4~1.9mであり、ピットの平面形は1辺0.3~0.5mを測る隅丸方形である。ピット762から須恵器杯身・杯蓋が出土している。

柵6は全長約12.9mの9間を有し、柱間隔1.3~1.5mを測る(図22)。W-25°-Nの軸を向いており、他の建物跡、柵と異なっている。ピット1250・1252・1445では柱位置を確認することができた。

溝158は建物7の南東に位置している。幅1.0~2.0m、深さ約0.1mを測り、平面形は不定形である(図23)。須恵器杯身・杯蓋・はそう、土師器取手付鍋が出土している。

土坑774はE地区の北西端に位置する。直径約1.2m、深さ約0.5mを測り、底部がフラットである(図23)。黒褐色から褐灰色シルトの埋土であり、礫が多量に出土した。

落込81は建物7の東側に位置する。深さ約0.1mを測り、不定形を呈する(図23)。須恵器杯身・杯蓋の他、甕の破片が散乱した状況で出土した。

落込99は後述する密集土坑群のE地区西側に位置する。浅い谷地形部分であり、南西から北東方向に広く、深くなっており、密集土坑群が位置する谷地形へ連なる(図24)。最深部分で約0.2mを測る。

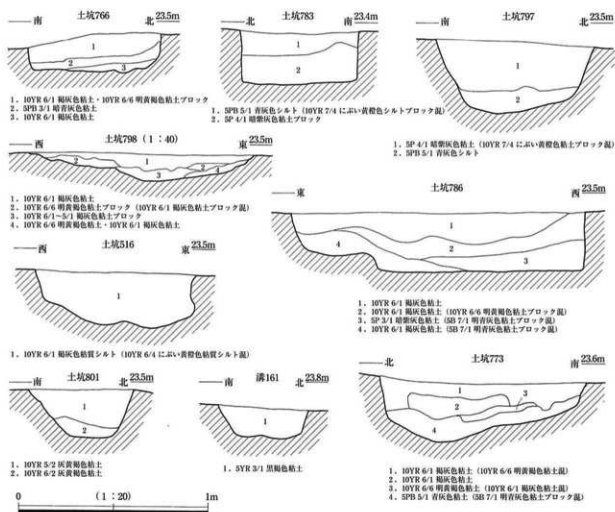


図31 土坑516・766・773・783・786・797・798・801 溝161

礫が散乱しており、須恵器の他、図 37-16 の弥生土器も含まれていた。なお、最上層には中世の瓦器椀が含まれているが、落込の主な埋没時期は古墳時代と考えられる。

落込 111 は E 地区南側に位置する谷地形である (図 22)。東方向から西或いは南西方向に深くなっており、枝分かれした平面形態を呈している。

以上の遺構は、出土土器から 6 世紀中葉から後葉を中心とした時期と考えられる。周辺からは多くの建物の復元が成し得ていないピットを検出しているが、後述する建物 3 と井戸 7 が 8 世紀に位置付けられるところから、これらのピットは古墳時代後期と古代のものが存在すると思われる。

密集土坑群は D 地区南半から E 地区北端にかけて密集しており、約 310 基検出した (図 26~32)。浅い谷地形部分に位置しており、分布域の北端と南端には上述した建物群と密集土坑群を区画するかのようになっている。D 地区部分は密集度が低いようにみえていたが、後世の攪乱が著しいためである。

溝 118 は土坑群の北端に位置し、東西方向にやや円弧を描きながら約 20m 検出した (図 26)。幅 1.1~2.0m、深さ約 0.2m を測る。

溝 161・258・308・309 は土坑群の南端に位置し、西方向から南東方向に伸びる (図 27)。溝 161 は円弧を描き、南東方向へ約 55m 伸びる。幅 0.6~0.9m、深さ約 0.2m を測る。溝 258 は溝 161 から枝分かれをし、西方向に伸びる。礫が集中して出土している (図 23)。

密集土坑は長辺 0.8~2.0m、短辺 0.5~1.3m の平面楕円形を平均的な形とし、大きなもので 1 辺約 3.0m の不定形な土坑もみられるが、規模が大きな土坑は複数の土坑が重複したものと推定される。

断面形態は壁面が垂直気味に立ち上がっている。埋土は基盤層の黄褐色系の粘土或いはシルトがブロック状に観察され、人為的に埋めたと考えられる。出土遺物を伴う土坑は E 地区の場合、45 基あり、全体の約 21% である。出土遺物は完形に近い土器であり、また、破片の場合でも土坑内で散乱した状態ではなく、集中した様相をみることができる。礫が出土した土坑は 69 基、約 32% である。

密集土坑群の形成時期は出土遺物から 6 世紀中葉~後葉と考えられるが、8 世紀の土器も少量出土しており、主に

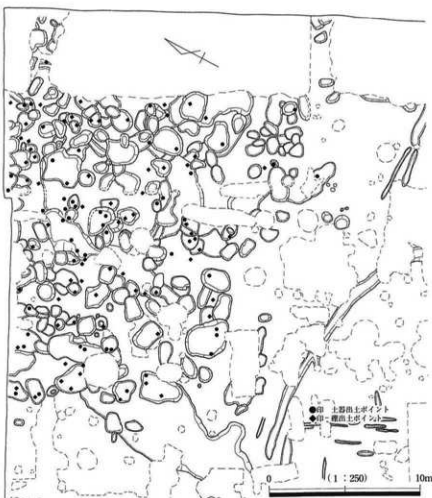


図32 E地区密集土坑群 土器・石出土分布図

この2時期を考えておきたい。これら密集土坑群の性格を他遺跡では「墓」或いは「粘土採り穴」の2者が想定されているが、麻田藩陣屋跡では遺物の出土状況、埋土の状況から墓の可能性が高いものと考えたい。

土坑群の性格を明らかにするため、土坑767埋土の脂肪酸分析を行った。結果は第5章第2節である。

2. 古代の遺構

D地区の北半に集中し、E地区からも検出した。

建物3は建物1・2の東方、調査区の東端に位置し、調査区外に伸びており、約半分のみを検出である(図17)。4×1間以上の南北棟掘立柱建物であり、桁行約7.8m、梁間約2.1m以上を測る。柱間間隔は1.9~2.1mである。ピットの平面形は短辺28~44cm、長辺50~76cmの隅丸長方形を呈しており、深さは8~38cmである。ピット236・238の底部には窪みがあり、柱位置を確認することができる。ピット222・241から8世紀の土師器杯・蓋が出土している。柵4が南側に並行して位置している。

柵4は建物3の南側に並行した位置に東西方向に伸びる(図19)。全長約4.0mの2間を有し、柱間は約2.0mを測る。ピット221の底部には扁平な礎石が埋置してあった。ピット221・226からは土師器片が出土した。

井戸7は直径約2.6mを測り、上面には4方向に角材を井桁状に組む(図25)。井桁下部には縦板がなく、素掘状態である。この角材は遺構面から約0.7m下で検出され、角材周辺から板材が出土している。井桁に組んだ角材上部に板材を使用した構造物が存在していた可能性がある。出土遺物から8世紀に属

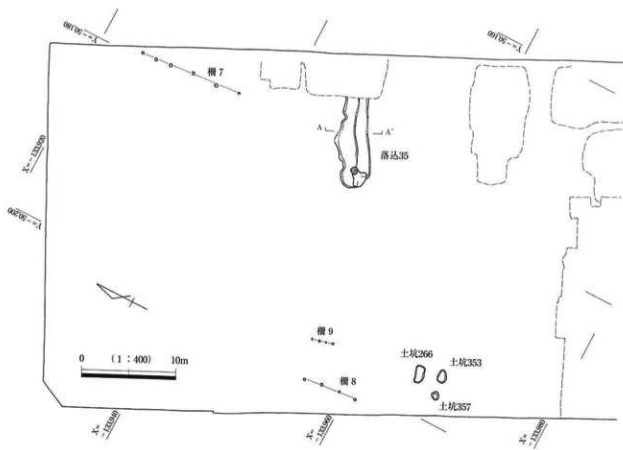


図33 中世遺構図

することがわかる。

井戸8は建物3の南側に位置する。直径約1.0m、深さ約0.7mを測り、底部が直径約0.7mの平坦面を呈する(図25)。

土坑161・162は井戸8の南方に位置する。双方とも直径約1.3mのやや方形の平面形を呈している(図25)。土坑161の底部は丸く、底部中央から礫がかたまつて出土した。

ピット248は井戸8の西方に位置し、直径約28cm、深さ約23cmを測る(図25)。緑釉陶器碗と土師器碗が出土しており、9世紀に属すると考えられる。

また、ピット80(図25)のように扁平な礎石を有するピットも検出されている。

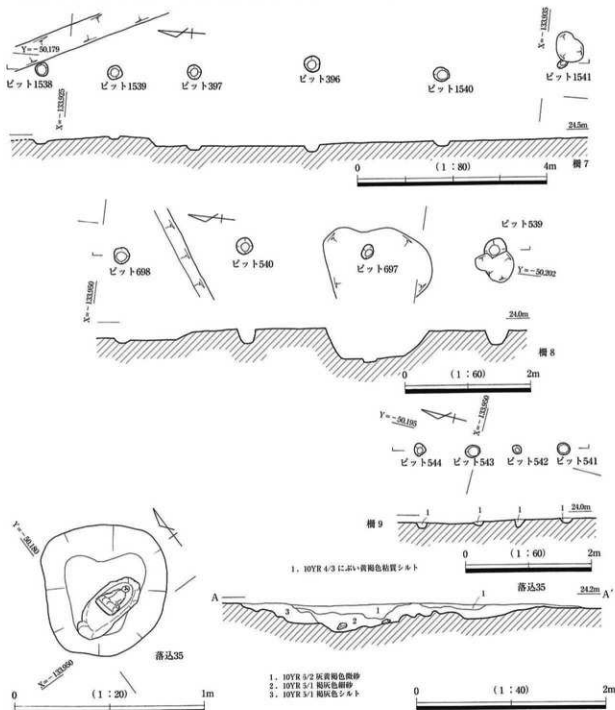


図34 欄7~9 落込35

ビット 227・241・245・550・552 からは 8 世紀の土器が出土しており、井戸 7 と共に、古代の建物の存在が想定できる。

土坑 442・443 は建物 7 の西側に位置している。両者とも深さが 3～10 cm を測り、非常に浅い（図 25）。須恵器杯、土師器杯・取手付鍋が出土した。

3. 中世の遺構（図 33）

D 地区北半からは柵 3 列の他、土坑・落込を、E 地区中央から落込を検出した。柵は古墳時代建物群と同様の方位軸を指向している。

柵 7 は D 地区調査区の東端に位置し、5 間以上、全長約 11.0m を測る。柱間隔は 1.5～1.7m と 2.5～2.7m の狭い箇所と広い箇所がある。ビットは直径約 0.3m の円形である。

柵 8 は D 地区調査区の西端に位置し、3 間、全長約 5.9m を測る。柱間隔は約 2.0m であり、ビットは直径約 0.3m の円形である。

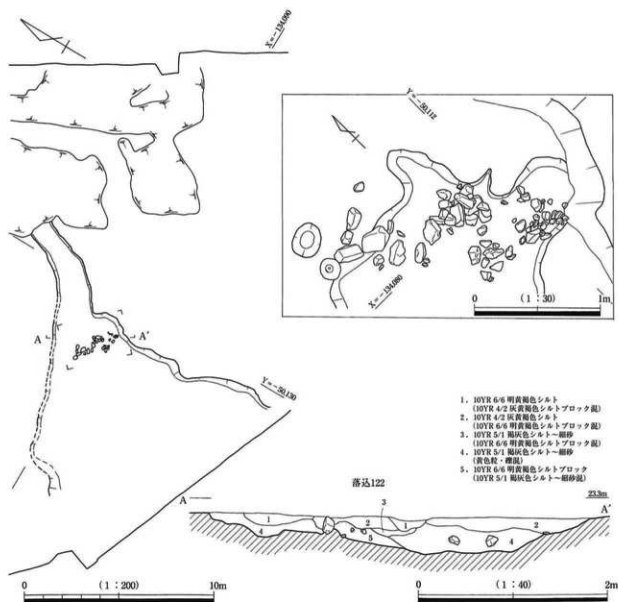


図35 落込122

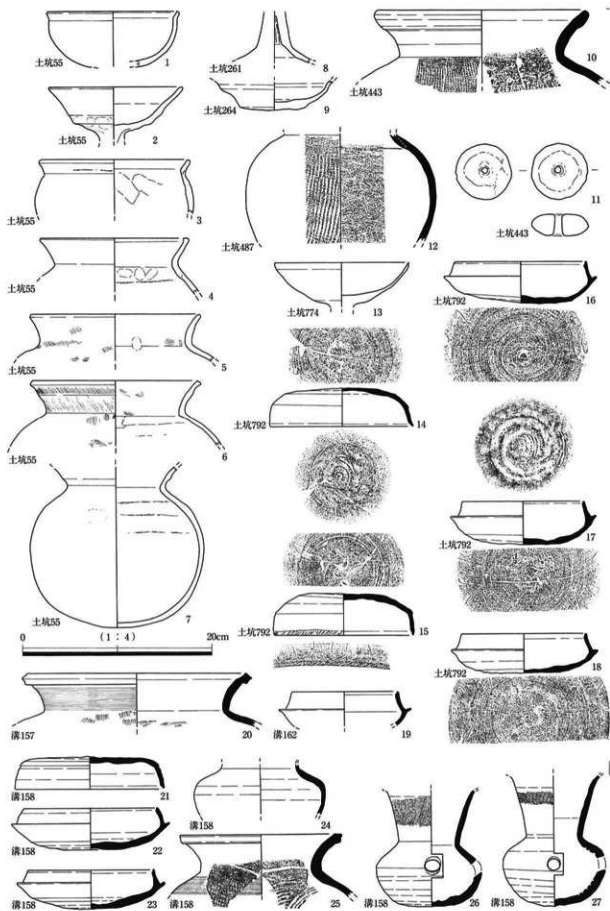


图36 土坑·溝 出土遺物

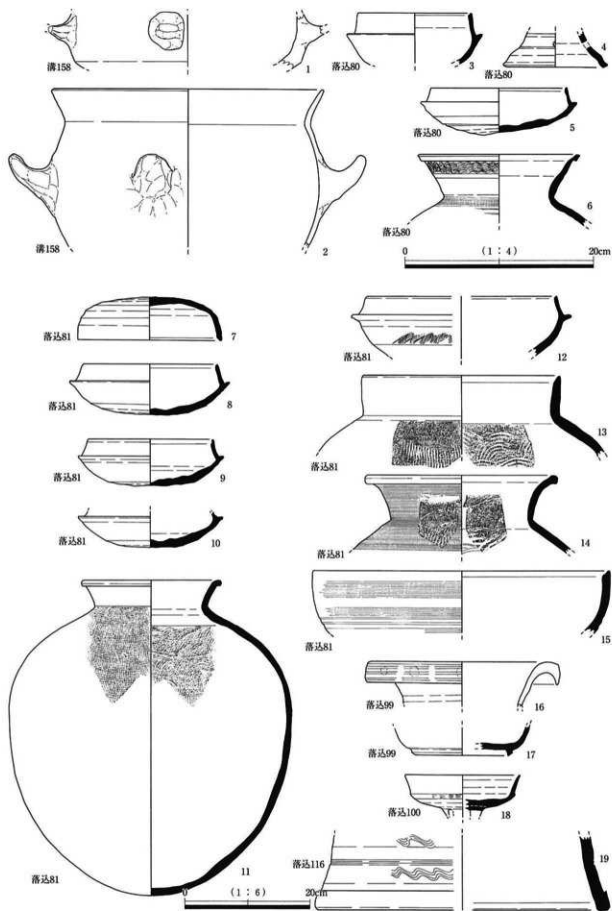


图37 清·落达 出土遗物

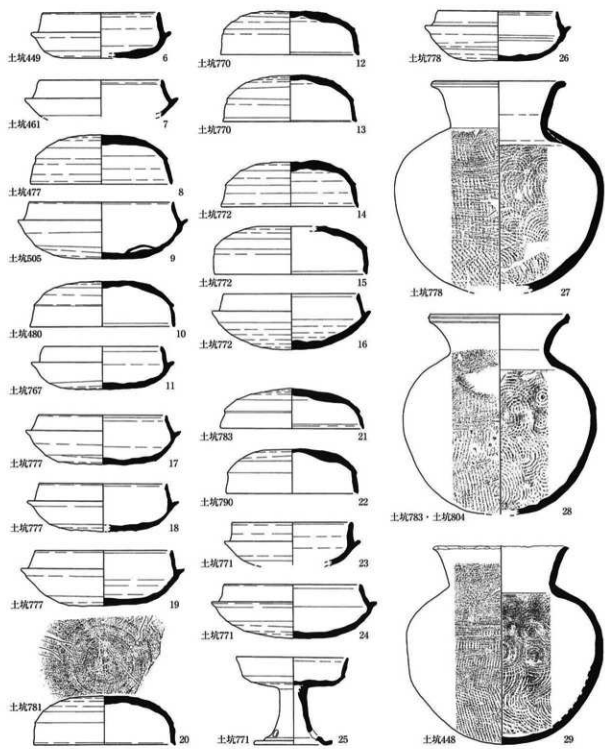
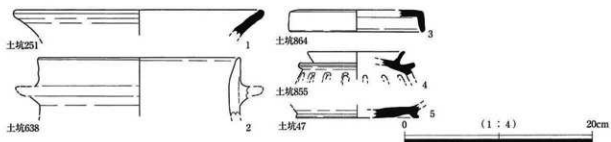


图38 密集土坑群出土遗物

櫛9は櫛8の東側に位置し、3間、全長約2.3mを測る。柱間間隔は約0.8mであり、ピットは直径約0.2mの円形である。

落込35は櫛7の南側に位置し、幅2.5~3.0m、全長約9.5m、深さ0.1~0.2mを測る(図34)。落込の西寄りには直径約0.7m、深さ約0.3mの窪みがあり、石仏(図版36-3)が出土した。

E地区中央からは落込122を検出した。北方から南西に向かって大きく開いた平面形であり、中央付近から礎と共に五輪塔の水輪(図版36-2)が出土した。

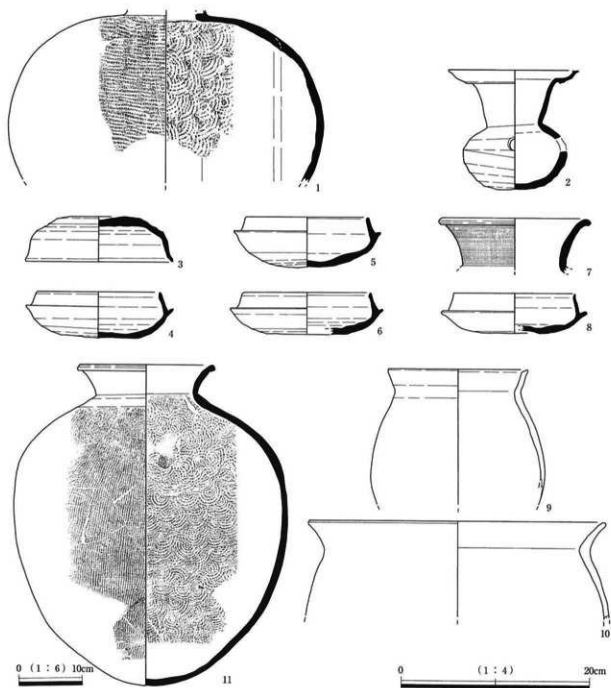


図39 密集土坑群出土遺物 土坑814 (1) 溝161 (2~10)・258 (11)

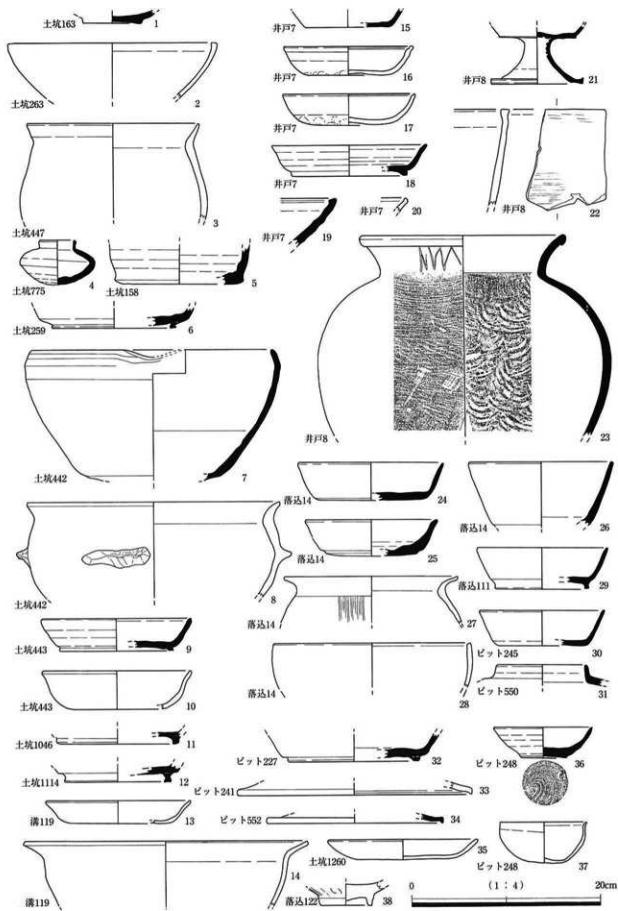


図40 古代 土坑・溝・井戸・落込・ビット 出土遺物

4. 古墳時代から中世の遺物

古墳時代の遺構から図 36～39、包含層から図 41 の遺物が出土した。土師器碗・高杯・壺・甕・鍋、須恵器杯身・杯蓋・高杯・壺・鉢・甕・横瓶・甕がある。

須恵器杯身・杯蓋には土坑 792 出土の図 36-14～18 のように外面にヘラ記号、内面に同心円紋スタンプを有するものがある。15 の杯蓋の口縁外面には刻目がある。溝 158 から出土した図 36-26・27 の甕の口縁端部は打ち欠いている可能性が高い。これら古墳時代の遺構から出土した土器は 6 世紀前葉から中葉の時期と考えられる。建物群のビットからは図化可能な遺物が出土していないが、小片をみる限り、同様の時期と考えられる。

図 38・39 は密集土坑群から出土した遺物である。古墳時代の遺物は図 38-6～29、39-1～10 であり、図 38-11 の杯身には同心円紋スタンプが、20 の須恵器杯蓋にはヘラ記号を有し、29 の壺の口縁端部は打ち欠いている。図 39-2～10 は密集土坑群と建物群を区画していると考えられる溝から出土した土器である。土坑群からは図 38-1～5 のように 8 世紀に属する遺物も出土しており、2 時期に分かれるようであるが、中心となる時期は 6 世紀前葉から中葉と考えられる。

古代の遺物は遺構から図 40、包含層から図 41 が出土した。図 40-36・37 の緑釉陶器碗、土師器碗はビット 248 から出土しており、一括性が認められる。包含層からは 8 世紀代の遺物の他に、7 世紀・9 世紀の遺物が出土している。図 41-13 は単弁蓮華紋軒丸の小片である。図 41-22～27 は緑釉陶器であり、9 世紀に属すると考えられる。図 42 は井戸 7 の木枠である。長さ 117～122 cm、断面 1 辺 12～15 cm の角材である。両端に刳り込みがあり、井桁状に組み合う。1・2 は刳り込み部に 1 辺 65～70 cm の正方形の柄穴がある。井桁四方上部に角材を立てていた可能性がある。

中世の遺物は図 41-18・21 であり、瓦質羽釜、土師器皿が包含層から出土している。中世の遺物は D

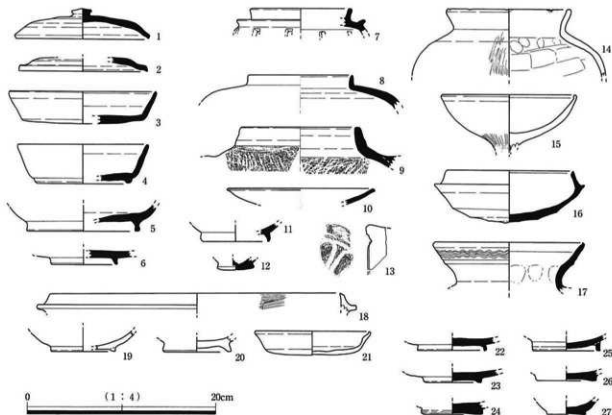


図41 包含層出土遺物

地区中央部からE地区にかけて包含層から少量ながら出土している。いずれも13~14世紀に属するものである。

図版36-3の光背形石仏は、自然石の平坦面1面に龕状に彫り込み、石仏を彫る。台座まで表現されているが膝から下部は龕状の掘り込みがなく、線状の表現になっている。図版36-2は五輪塔の水輪であり、粗粒花崗岩である。最大径は高さ18cmのうち、上部から6cmに位置する。

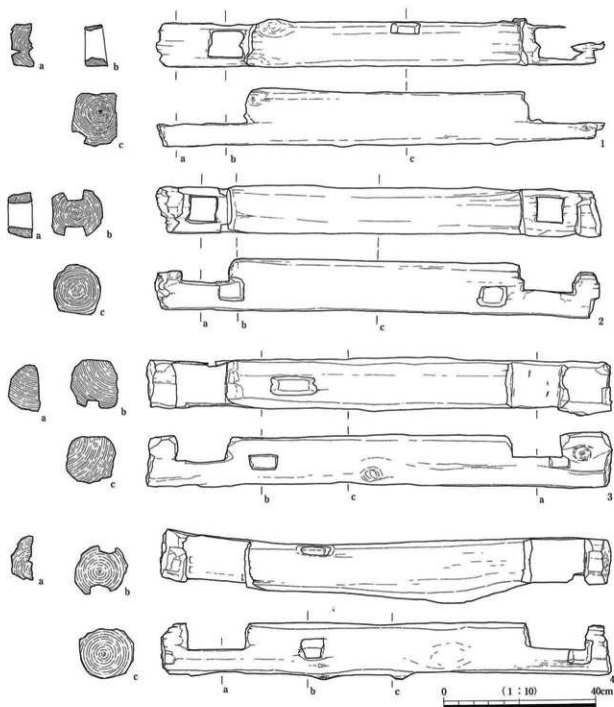


図42 井戸7 井戸杵材

第4節 近世の遺構・遺物

近世の遺構は現代地割と陣屋の地割が一致し、また、市教委所蔵の陣屋絵図から江戸時代後期における屋敷地所有者や間口寸法が推定でき、調査結果においても絵図に合致する屋敷境溝を検出した。

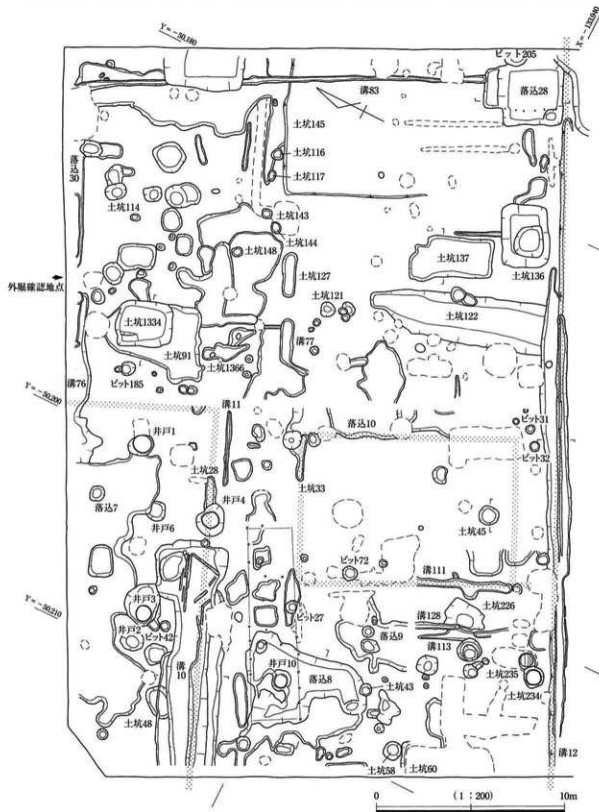


図43 区画1遺構図

以下、調査区北端より検出した溝を絵図から想定できる屋敷境界とし、「屋敷区画」番号を与え、それと共に絵図記述の屋敷所有者名を列記して、遺構・遺物の記述を行った。なお、文章中の寸法の1尺は30.3cm、一間は1.818mとして計算をした。

1. 遺構

区画1 山口邸 (図43~45、図版16・18~22・28)

区画1は陣屋北端に位置し、調査区北端から南側の溝12までである。

北側には溝10・11が東西方向に伸び、溝11東端部に北に折り曲がる空間がある。絵図の北門東側に位置する空間がこれにあたると思われる。調査区内で東西約19.0m、南北約7.6mを測り、絵図記述の数値である十間二尺(18.8m)、五間(9.1m)と近似する。北端を現道路端とすれば約9mを測ることになる。

溝10は幅約3.0m、深さ約0.3mを測り、やや南寄り根深くなった2段掘りである(図45)。屋敷境は溝10の深くなった箇所と考えられる。溝の東端には木材が三角形に組まれており、深さ約0.5mを測り、西に伸びる溝底部より深くなっている。溝10の延長上に幅約0.2mの細い溝11が伸びる。

溝10の北側の空間から井戸を4基検出した。絵図にも井戸の記号が描かれている(カラー図版1)。

井戸1・3は板材を縦に据え、井戸枠とする。井戸2・6は17世紀中～後半、井戸4は18世紀後半、井戸1は18世紀後半～19世紀前半、井戸3は19世紀中葉に属しているところから、2基1組での存在が推定できる。落込7は近世の整地層であり、深さ約0.2mを測る。落込7の南東隅から焙烙が2点正置した状況で出土した(図44)。

屋敷地の間口は溝10から溝12北肩であり、約19.0mを測り、絵図記述の数値である十間三尺(19.1m)と近似する。溝12を境にして高さ0.1~0.4mの段差を有し、区画2よりも区画1の敷地が高くなっていることがわかる。溝中央部分では段差の上部側に溝幅が広がっており、屋敷境溝が若干ながらも時期により移動していることも考えられる。溝12の肩部には丸太材が据えられている箇所もある(図45)。西端では両肩に丸太材がみられ、杭で固定している。

溝83は調査区東端部分に伸びており、幅0.2mを測る。現歩道下に存在が推定される外堀内側にある土塁に伴う溝と考えられる。

溝111は南北に伸びており、東方向約7.2mに溝111と並行して落込10の段差が認められる。土坑33を北東隅とする東西約11m、南北約7mの空間は、遺構密度が粗になっており、建物が存在していた可能性が考えられる。

深さ約0.2mを測る浅い土坑91の北東隅に、土坑1334が位置する。平面2.4×2.9m、深さ約0.6mを測り、堅穴を呈する(図45)。北西隅に幅約0.4mのスロープがあり、出入口の機能が考えられる。

土坑116・144・145は礫が詰まった土坑である(図44)。土坑116の礫はすべて川原石である。土坑117・143・148は瓦が詰まった土坑であり、瓦は立てた状態であった。

土坑43・234・235には桶が埋置され、土坑60には甕が埋置されていた(図44)。屋敷地の西側に集中している。以上の土坑は便槽と考えられる。

井戸は井戸10の1基のみである。西半に位置し、瓦枠を使用する。

落込28は1辺3.1m、深さ0.7mを測る堅穴であり、北側に約2.2×1.0m、深さ約0.1mの浅い部分が付随する(図45)。西寄りに6本の杭列があり、前述の浅い部分の平面ラインと合致する。土留めをしていた可能性がある。最下部に黄灰色粘土が堆積していた。外堀に関係する溝83との切り合い関係

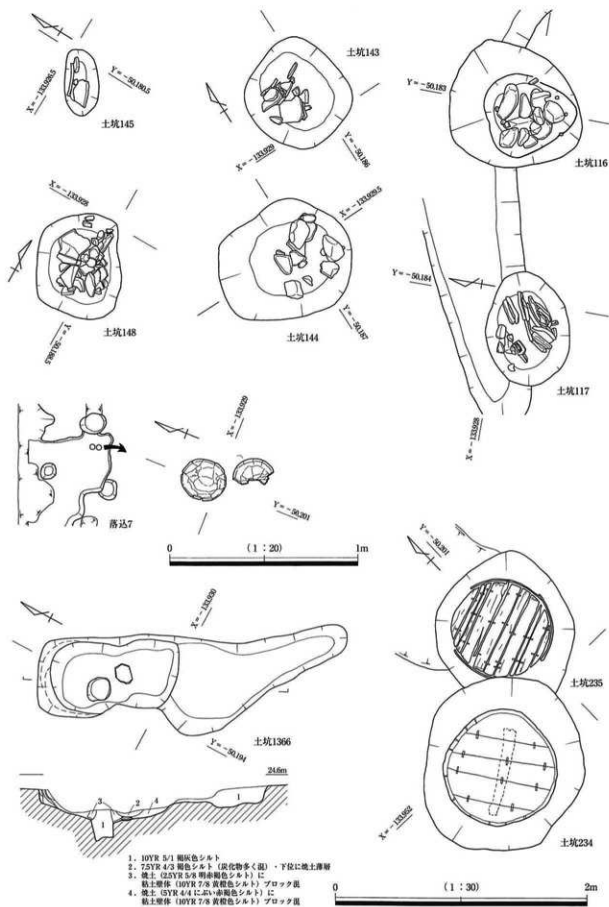


図44 土坑116・117・143～145・148・234・235・1366 落込7

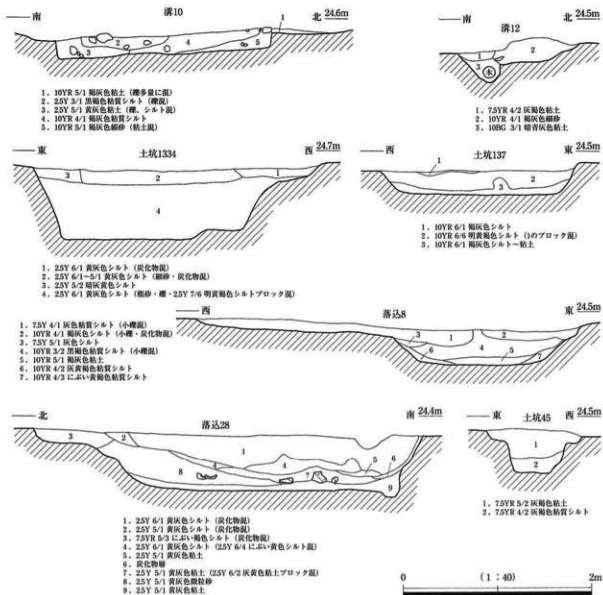


図45 溝10・12 土坑45・137・1334 溝込8・28

から溝込28が後出することがわかる。

溝込8は区画1の西端に位置する。不定形な平面を呈し、東半が深くになっている(図45)。

土坑1366は長さ約2.5m、幅約0.6mを測り、北側が一段深くになっている(図44)。また、直径約16cmの穴が存在する。埋土は赤褐色の焼土に黄褐色粘土壁体が混じり、炭化物も多量にみられた。

溝込8上面からその東側にかけて杭列を東西方向に2列、検出した。間隔は0.8~0.9mであり、10.2×2.5mを測る建物の基礎部と考えられる。

区画2 太田邸(図46~49、図版16・18~22・34)

区画2は北側の溝12から南側の溝58・102までである。屋敷地内は後述する粘土探掘坑群のため、遺構の残存状況は不良である。

溝58・102は東半のみ検出されている。幅約0.7m、深さ約0.2mを測る。屋敷地幅は約26.2mを測り、絵図記載数値の十四間二尺(26.1m)と近似する。

溝62は区画2の東端に位置し、幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。区画1の溝83と同様に外堀内側にある土壁に関連した遺構である。溝406は南北に伸びる溝であり、屋敷内を区画するものである。

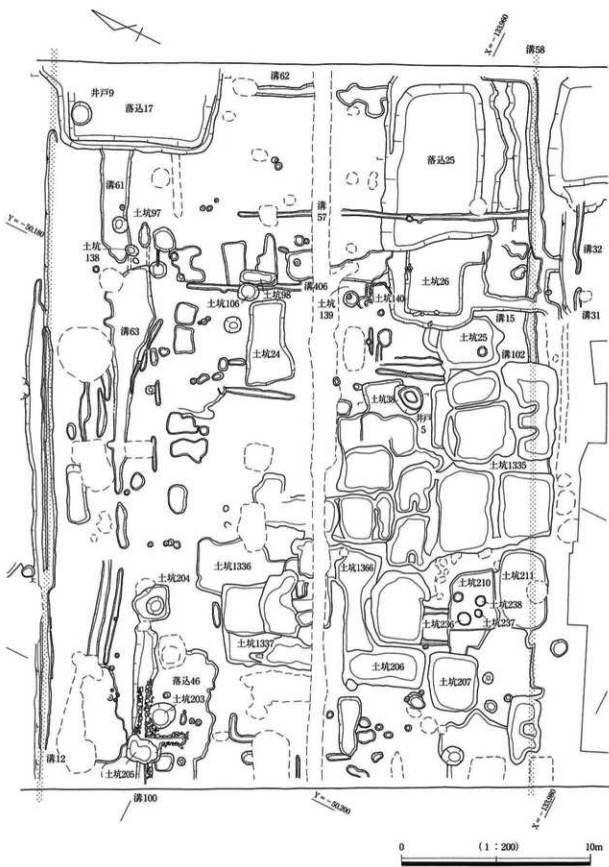


图46 区画2遺構図

溝 100 は区画 2 の西端において T 字に伸びる溝である (図 47)。西端部分では溝の両肩に石組と共に丸木材を横置きにし、杭で固定している。T 字の交差地点が絵図での屋敷表門のコーナー部分にあたることも想定されよう。落込 46 は溝 100 設置時の整地土層と考えられるもので、一括性の高い 17 世紀末から 18 世紀前半の遺物が出土している。

土坑 139・140 には 1 段のみの石列が伴っている (図 47)。

土坑 204・236~238 には桶が埋置しており、集中して検出された (図 47)。桶の直径は 35~65 cm を測る。便槽と推定される。

落込 17・25、土坑 26 は屋敷地の東端に位置する大型方形遺構である。落込 17 は長辺約 8.6m、短辺約 3.5m 以上、深さ約 1.4m を測る (図 48)。壁面はほぼ垂直に掘削されているが、途中幅約 0.2m のステップを有する。埋土は上層に明黄褐色の粘土ブロックが、下層に黒褐色粘土が堆積していた。基盤層の礫層部分をも掘削している。切り合い関係から井戸 9 より後出する。落込 25 は長辺約 9.0m、短辺約 6.1m、深さ約 0.7m を測る (図 48)。切り合い関係から土坑 26 より後出し、19 世紀中頃の遺物が出土

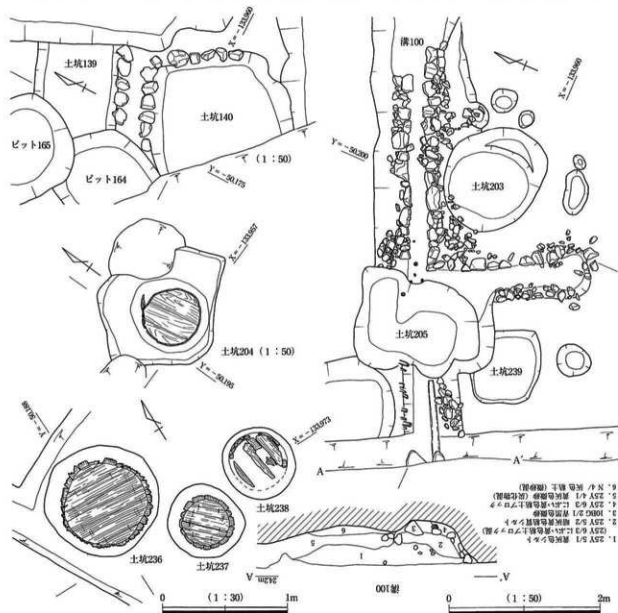


図47 土坑139・140・204・236~238 溝100

溝 105 は区画 3 のほぼ中央に位置し、南北方向に伸びる。溝の両肩に丸木材を据え、杭を打った箇所が 3 箇所検出された (図 52)。溝 105 より東側では幅約 0.1~0.2m、長さ 1.0~2.0m の溝が多数検出されており、耕作痕と想定される。

土坑 228・229 は隣り合った土坑であり、平面形 50×35 cm を測る土坑 228 には壁が赤く被熱痕があり、直径約 30 cm を測る土坑 229 には炭化物が充満していた (図 52)。いずれも深さ約 5 cm を測り、浅い。

土坑 811・821、落込 53 は区画 2 の大型方形遺構群と同様に粘土採掘坑と考えられる。

落込 3・5・6 は区画東側に位置する大型形の遺構である。落込 5 は平面約 8.0×5.5m、深さ約 0.5m を測り、埋土は上層に灰黄褐色シル

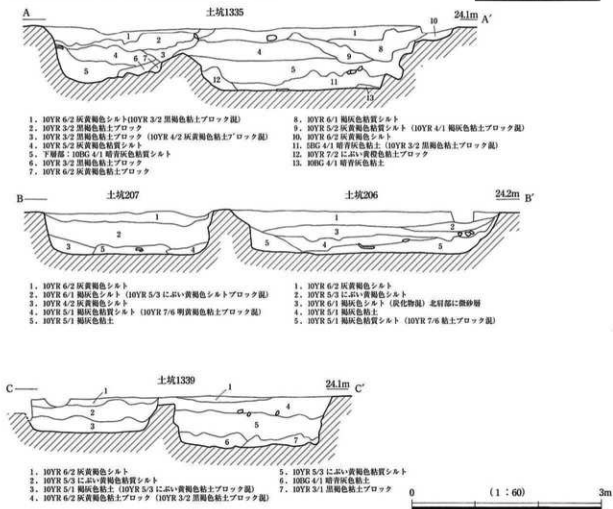
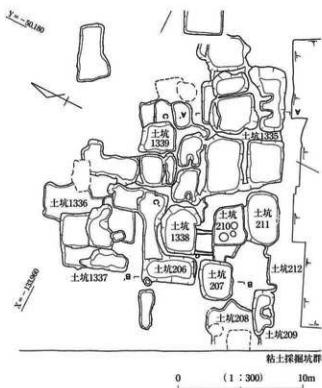


図49 粘土採掘坑群 土坑206・207・1335・1339

している。土坑 26 は内部周囲に幅約 0.7m のステップを有し、方形平面を呈する。これらの遺構は屋敷地の裏側に位置しており、廃棄遺構と考えられる。

東端に位置する井戸 9 は切り合い関係から落込 17 より古い。「波豆川村」の墨書が入った木札が出土している（図 79-13）。井戸 5 は瓦棒とし、直径約 0.6m を測る（図 48）。

区画 2 の南西部分からは 1 辺 2.0~4.5m の大型土坑が密接して検出された（図 49）。深さは 0.5~0.7m を測り、基盤層の礫層面で止まっている。壁面は垂直に掘削されている。土坑は密接しているが、切り合っている場所はあまりみられない。埋土はシルト或いは粘質シルトにブロックが混じる。一度に埋め戻された様相がみられる。この土坑群は屋敷境溝より後出し、また、出土遺物から陣屋廃絶後の掘削時期が考えられる。粘土探掘坑の可能性が高い。土坑 1366 からは粘土運搬機に使用されたと考えられる直径約 50cm のザルが土坑底部から 2 点出土した（図版 34-8）。

区画 3 田村邸（図 50~54、図版 16・18・20・22・24・34）

区画 3 は北側の溝 58・102 から南側の溝 211 までである。両溝間は約 24.2m を測り、絵図記述の数値である十三間二尺（24.2m）と一致する。

溝 211 は幅 1.0~1.4m を測り、南側に石列を伴う（図 51）。一部石列がなく、瓦片を積み上げた地点もある。東端では北側に向かって溝 13 と接合し、南側では区画 4 土坑 920 につながる石列を検出した。

区画 3 の北西部分は現代建物の基礎のため、遺構は残存していなかった。

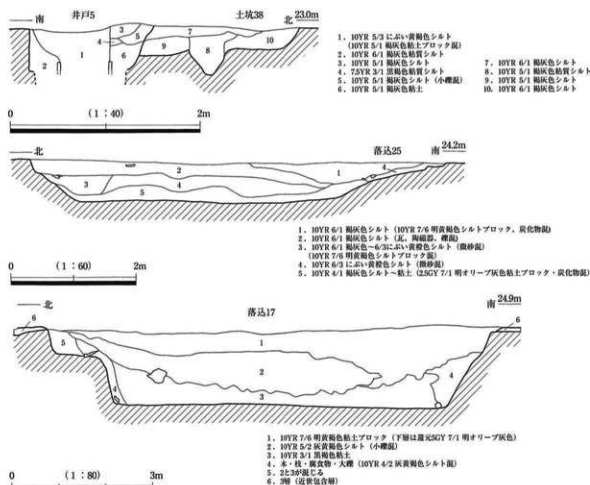


図48 井戸5 土坑38 落込17・25

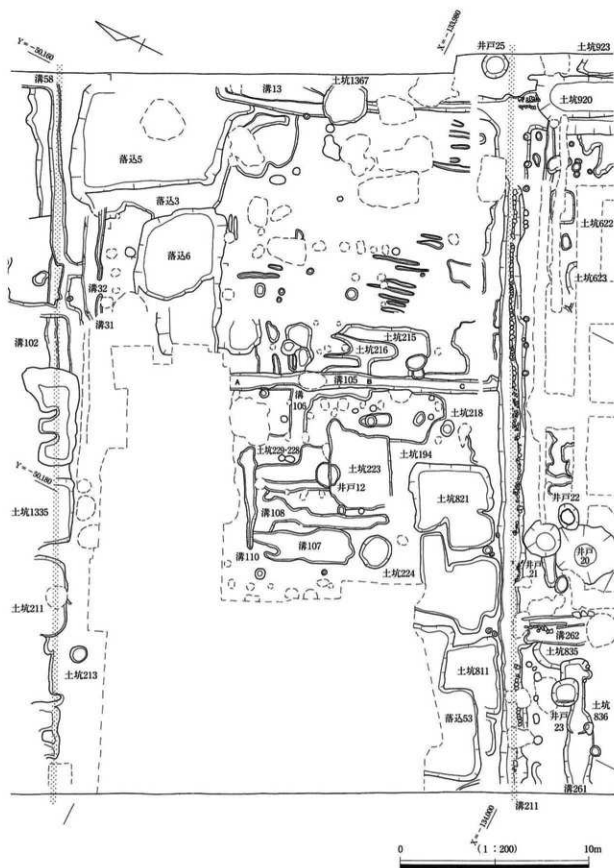


图50 区面3遺構図

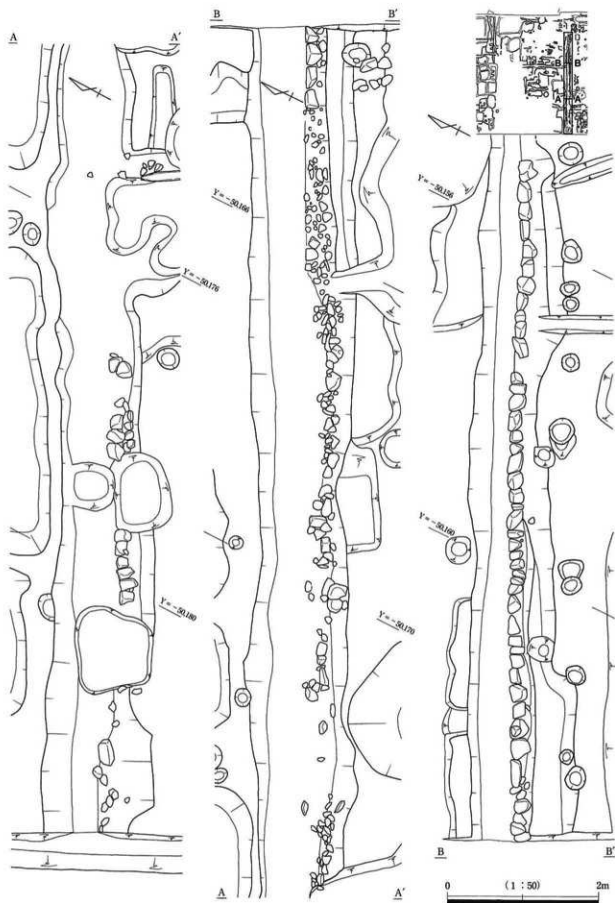


图51 满211石列

ト、下層方に黄灰色粘土が堆積していた(図52)。壁面はほぼ垂直に掘削されている。いずれも出土遺物から陣屋廃絶前後の廃棄遺構と考えられ、落込3-19世紀前半、落込6-19世紀中頃、落込5-19世紀第3-4半期の遺物の様相をみることができる。落込6からは瓦が多量に出土している。井戸は中央部に井戸12があり、調査区東端の井戸25は外堀土塁部分に位置しているところからわかるように陣屋廃絶後の遺構である。

水琴窟(土坑1367)を調査区東端から検出した。直径約2.2mの中央に0.6×0.5mの長方形の堅穴が掘削され、その中に底部を穿孔した甕を天地逆転の状態で開催してあった(図53)。この土坑と周辺の

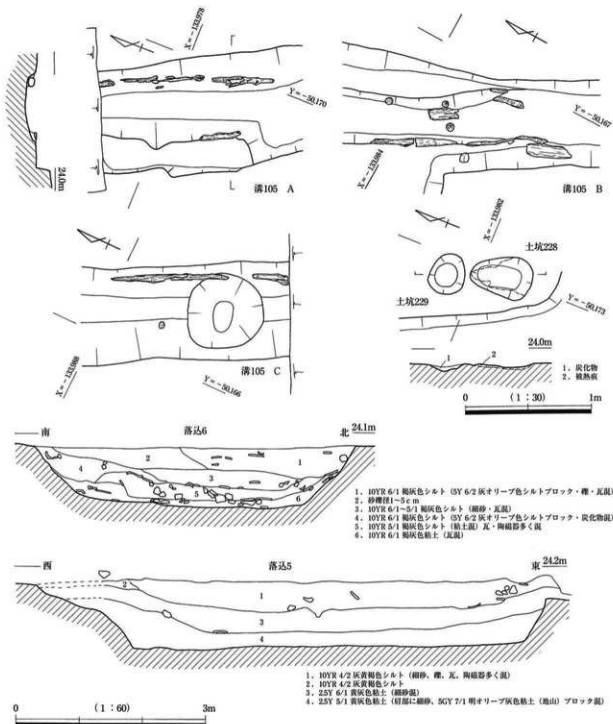


図52 溝105 土坑228・229 落込5・6

攪乱から、1辺1m前後の大型石材が出土しており、この水琴窟に伴う庭石と推定される。陣屋廃絶後の遺構と思われる。

溝211の上層部に溝407があり、南側には並行して、溝255が伸びる(図53)。この両溝間は道路遺構になっており、遺構面としては2面にあたる。陣屋廃絶以後のものであるが陣屋敷境溝を踏襲した遺構である。小礫が多く混じった褐灰色シルトと灰白色シルトブロックが道路敷の整地土として観察でき、溝211の北側においても灰黄褐色シルトの整地土が認められた。溝407は部分的ながら両側に石列を検出し、溝255には北側のみ石列が残存していた。

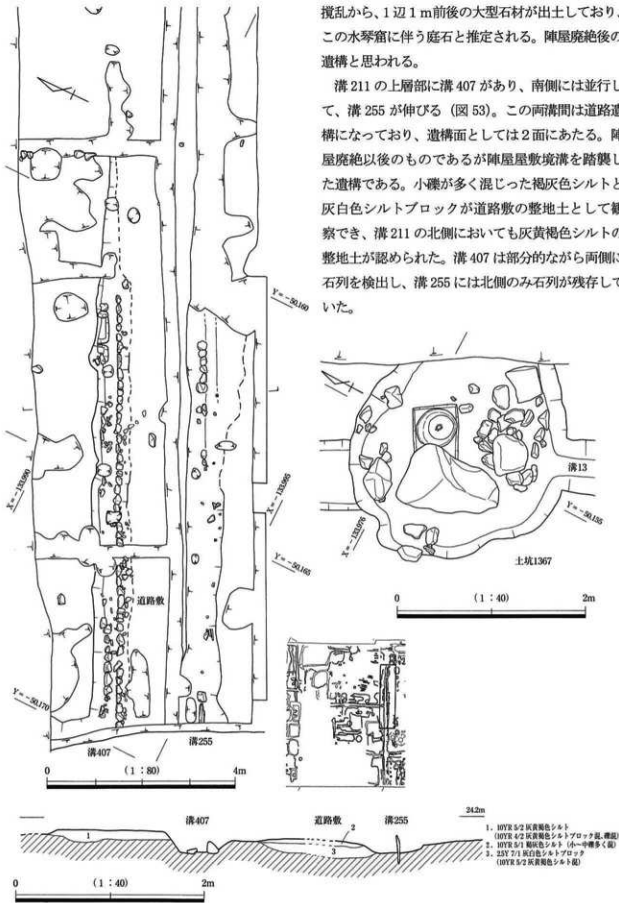


図53 道路遺構 土坑1367

建物 10 は区画 3 の中央部において検出した 2 面の遺構であり、東西約 12.7m、南北約 10.8m の礎石建物と考えられる (図 54)。ピットは南北方向 2 列を 1 組として配置されており、柱間は南北方向約 1.1m、東西方向約 2.0m を測るが柱穴の配列が抜けている箇所もある。直径 0.4~0.6m のピットに礎石が据えられており、中には石を 2 段或いは 3 段積み上げてあるピットも存在する。

ピット 455 と 466 間には壁体の一部を焼土と混じった状態で検出した。

建物 10 の北東側にもピット列を検出し、さらに 1 棟の建物が存在していたと思われる。このピット列の北側には東西方向に石列があり、区画 2 との境界にあたっている。2 面は陣屋焼絶後の遺構である。

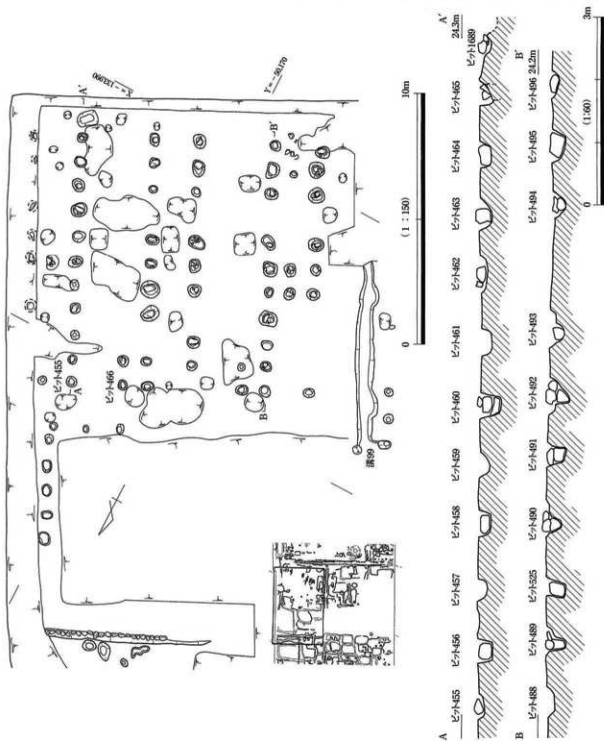


図54 建物10

区画4 分家老青木邸 (図55~58、図版16・23・24・29・34)

区画4は北側の溝211と南側の溝219までである。両溝間は約33.6mを測り、絵図記述数値の十八間三尺(33.6m)と一致する。

溝219はE地区の北端に位置し、幅約0.7mを測るが、大半が調査区外にかかっており南肩のみの検出である。溝219の南側に約2.0m離れて、溝221が並行して伸びる。屋敷境溝が時期により移動があったか、或いは、溝間に土塀のような施設が存在していたことも考えられる。区画4の南西部は現代建物の基礎のため、遺構は残存していなかった。

南北方向に伸びる溝279・280・282・283は外堀に関連した溝であり、土塁に沿った溝と考えられる。

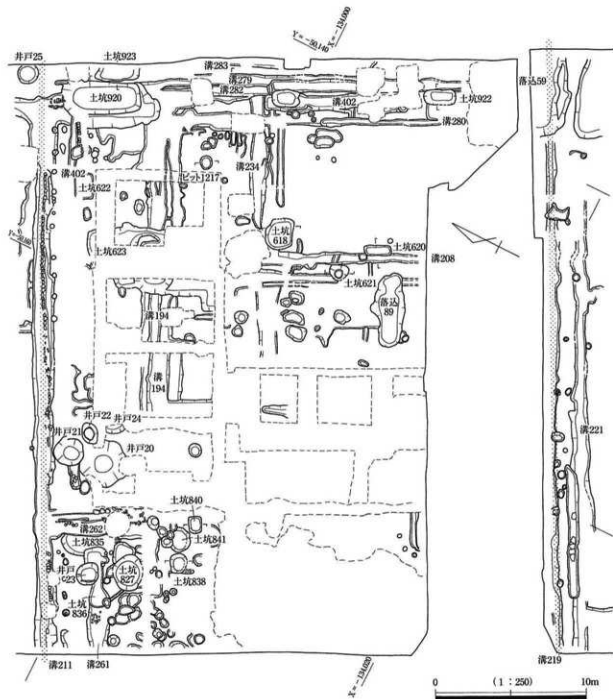


図55 区画4遺構図

溝 208 は区画内中央に位置し、南北方向に伸びる溝であり、屋敷内を区画するものであろう。
 溝 262 は屋敷境溝の溝 221 と直行し、南北に伸びており、東肩に丸太材を設置し、かつ、石列のみられる (図 56・58)。

溝 262 周辺から遺構が集中して検出された (図 56)。

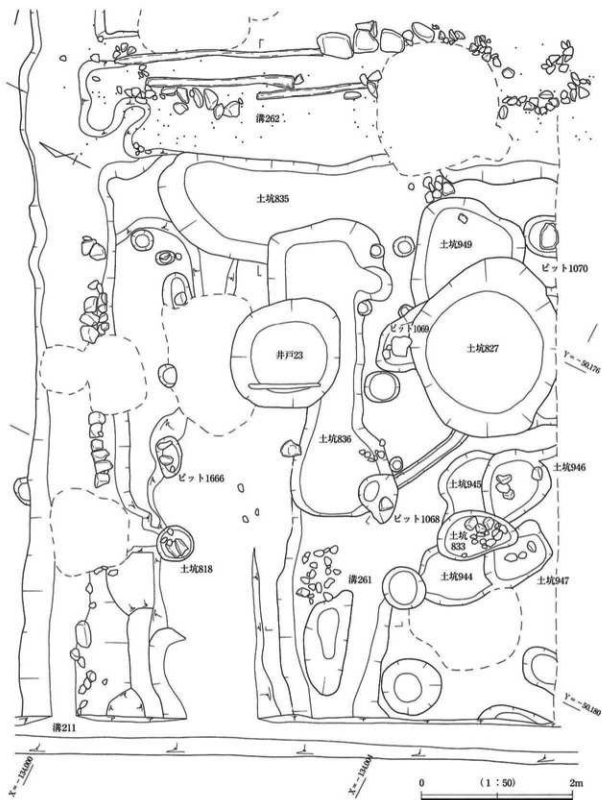


図56 区画4北西部遺構図

土坑 827 は直径約 2.3m、深さ約 0.5m を測り、円筒状を呈している。土坑 833・944～947 は密集しており、礫が充填されていた。ビット 1069・1070 は礎石と考えられる扁平な石が据えられている。

土坑 827 の南側に位置する土坑 841・844・845・951・952 は重複しており、礫が充填されている。土坑 846 には桶が埋置してあった。

土坑 920 は北東隅で検出され、平面 5.2×3.0m、深さ約 0.8m を測る。出土遺物は 19 世紀後半の様相を呈し、かつ、外堀内側に付属する土塁に関係する溝 279・282 を破壊している遺構であるところから、19 世紀後半でも幕末期に属するものと考えられる。

井戸は北西方向に集中して、5 基検出された。井戸 20 は検出面で直径約 3.0m を測り、断面楕円状の素掘りを呈する。井戸 23 には井桁が残存し、井戸 22 は平瓦の枠を施しており、直径約 0.7m を測る (図 57)。他は素掘りである。

区画 5 青木別邸 (図 59～63、図版 17・25・26・28～30)

区画 5 は北側の溝 219 から南側の溝 229 までである。両溝間は約 31.7m を測り、絵図記述の十二間二尺五寸 (22.6m) とは合致しない。31.7m は十七間二尺五寸となる。

溝 229 は幅約 0.7m を測り、両肩に石組を伴う (図 60)。東半は北肩のみの残存であるが、石組は 2 段になっている。溝の南北で高低差があり、区画 5 側において 0.2～0.4m、高くなっている。また、石組を除去することにより下層より直径 0.2～0.4m のビット列が検出されており、柵列の屋敷境であった

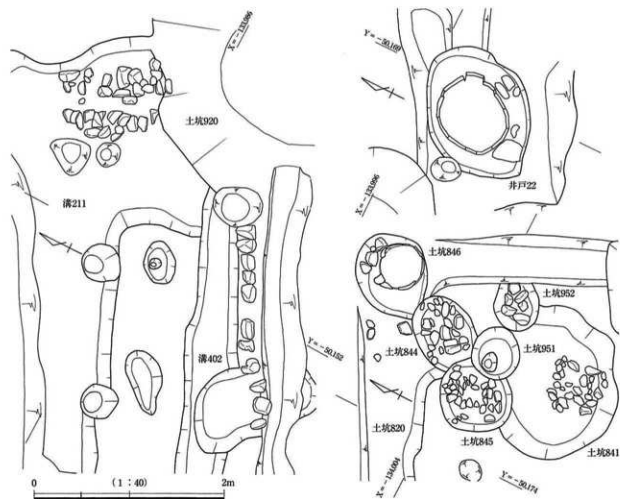


図57 溝211・402 井戸22 土坑841・844～846・952

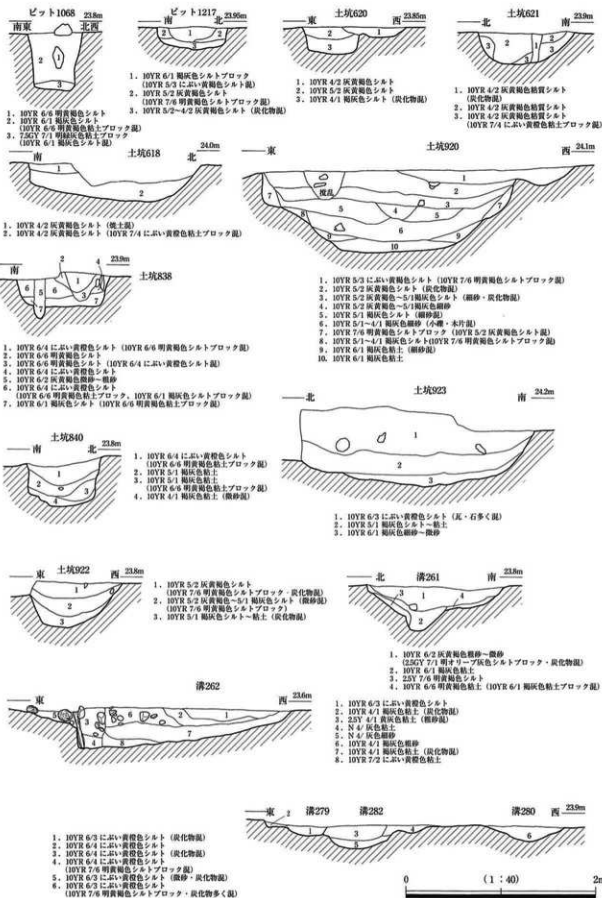


図58 ピット1068・1217 土坑618・620・621・838・840・920・922・923 溝261・262・282

時期も考えられる。溝 228 は溝 229 の北側を並行して伸び、東端では平瓦を立て並べている部分がある。

溝 228 も屋敷境と思われる、時期差による溝の移動も想定される。東端において肩部分に平瓦を立てて設置してあった（図 61）。

溝 220 は北側屋敷境溝の溝 221 と重複しており、幅約 0.7m、長さ約 8.7m を測る（図 61）。中央部に 1 辺約 0.4m の扁平な大型石を並べている。また、南へ約 22.0m の地点に溝 220 と並行して溝 398 が伸びている。幅約 0.7m、長さ約 4.7m、深さ約 0.3m を測る断面方形の深い溝である（図 63）。これらの溝は土坑 644 の東肩ラインと関わる遺構であり、南北約 22.2m、東西約 5.1m を測る建物の基礎部であると考えられる。絵図によると区画 5 の表門は前面道路より控えた位置にあり、土坑 644 の東肩がこれ

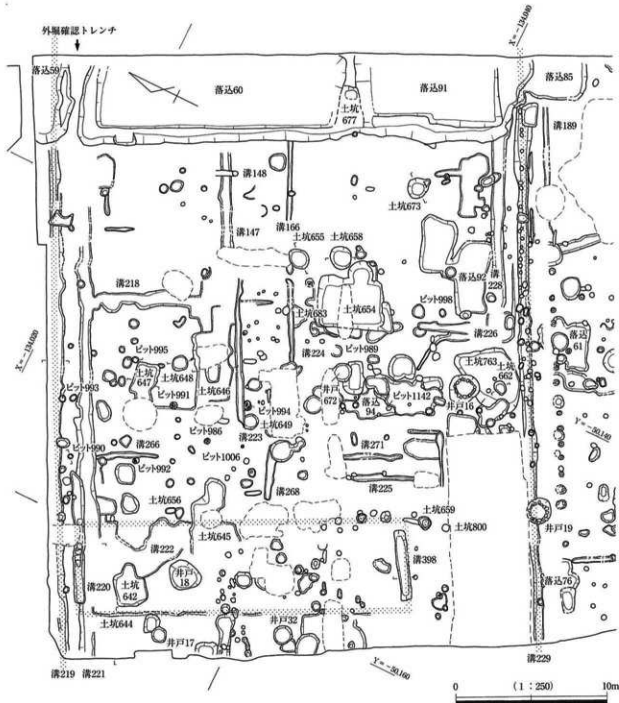


図59 区画5遺構図

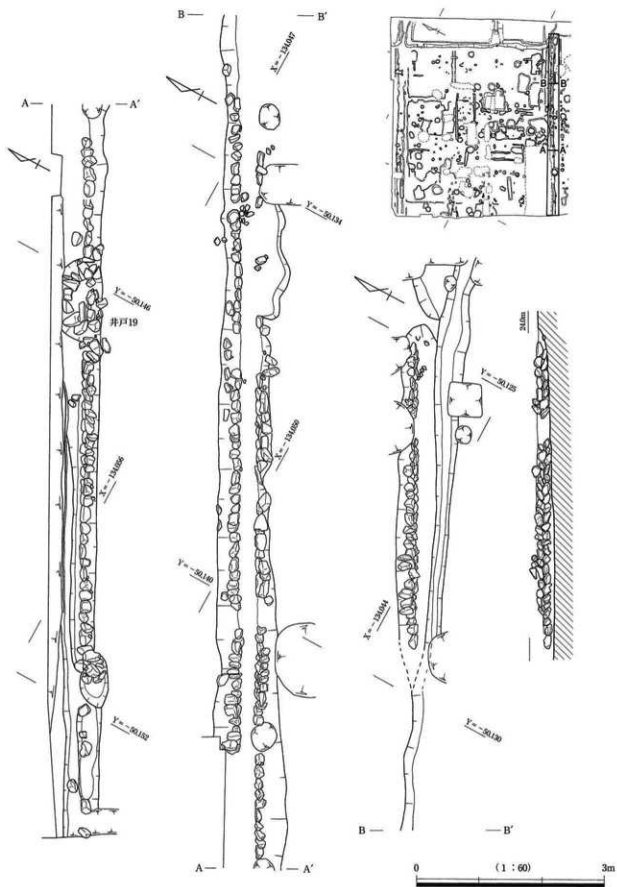


图160 清229

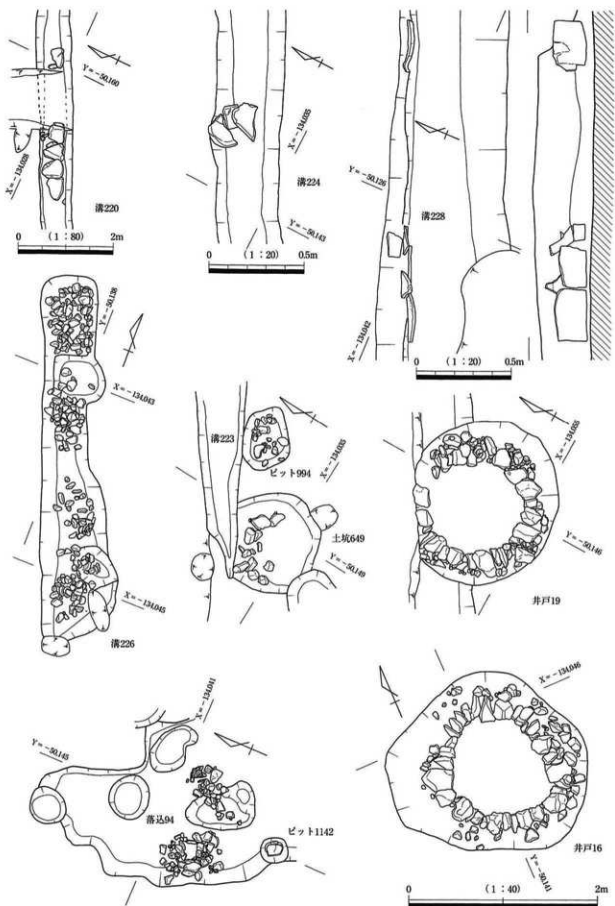


図61 溝220・224・226・228 ピット994・1142 井戸16・19 土坑649 落込94

にあると想定される。

溝 266 と溝 271 は一直線になる溝であり、溝 271 の西側には溝 225 が並行して伸びる。溝 218 は溝 266・271 の東、約 10.2m に並行して位置する溝である。溝 218 より東側は遺構密度が粗であり、裏庭にあたると思われる。

溝 226 は溝 229 の北側に位置し、礫が充填してあった (図 61)。建物の基礎部を構成するものと考えられる。

土坑 654 は平面 4.2×3.2m、深さ 0.7m を測り、方形を呈する。出土遺物から 18 世紀後半～19 世紀初頭の一括廃棄土坑であることがわかる。

土坑 655・658 は 2 基並んでいる。直径約 1.3m、深さ約 0.4m (土坑 655)、約 0.6m (土坑 658) を測り、断面台形を呈する (図 63)。

土坑 656 は長辺約 73 cm、短辺約 40 cm、深さ約 4 cm の浅い土坑である (図 62)。内部から凹面を上に向けた状態の土師皿が 5 点出土した。土坑底部には密着していない。地鎮に関する遺構と考えられ、17 世紀代のものと思われる。

ピット 1006 からは凸面を上に向けた状態の土師皿が 2 点出土している (図 62)。

土坑 659 には底部を穿孔した挿鉢が据えてあった。土坑断面形状は挿鉢底部部分がさらに約 20 cm 深くになっている (図 62)。

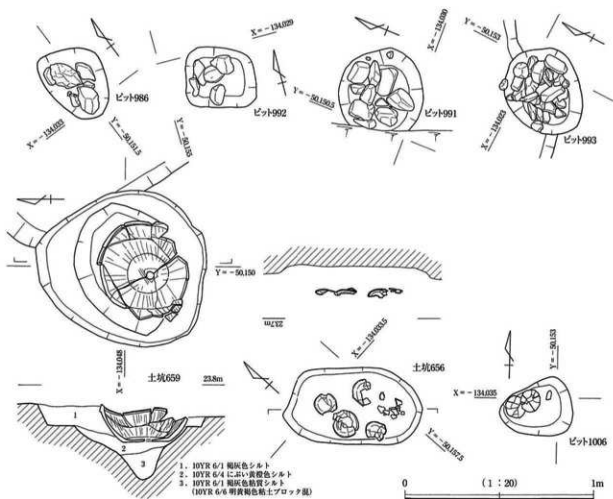


図62 ピット986・991～993・1006 土坑656・659

井戸は西端において3基検出した。いずれも素掘りである。区画5中央の井戸16・19は石組枠であり、幕末遺構に属すると考えられる(図61)。井戸19は屋敷境の溝229より後出する。

落込59・60・85・91は屋敷地の東側に並ぶ大型遺構である。出土遺物から、いずれも陣屋廃絶後の時期が考えられる。落込60は下層に黄灰色粘土に植物遺体がラミナ状に観察でき、堆水していたことが考えられ、また、上層には黄褐色粘土ブロックが堆積している。

調査区東端の落込59と落込60の間で外堀の確認トレンチを設定し、現水路下層部分において陣屋内

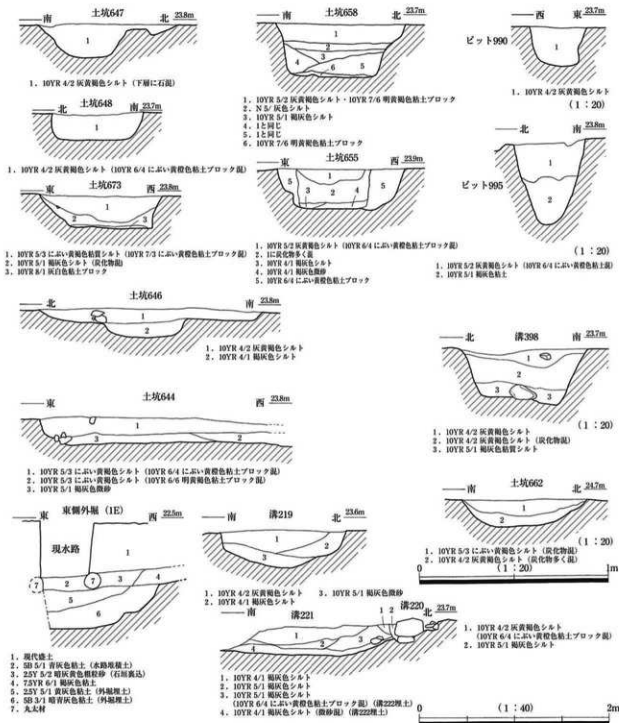


図63 土坑644・646~648・655・658・662・673 溝219・220・398 外堀

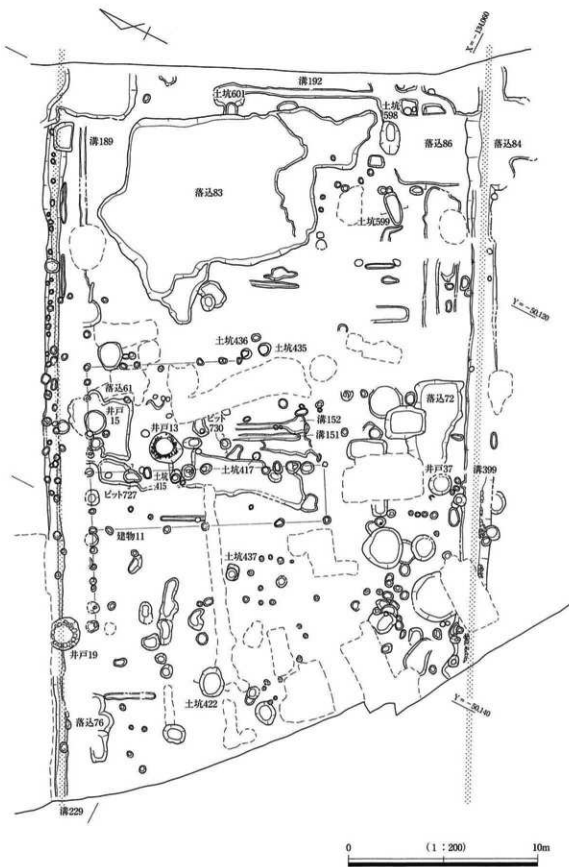


图64 区画6遺構図

側の外堀肩を確認することができた(図63)。現水路の石組設置時の丸太材が置かれており、その下部から黄灰色・暗青灰色粘土の外堀埋土が確認された。現水路底部から深さ約0.4mを測る。

区画6 関邸(図64~66、図版17・25・29・31)

区画6は北側の溝229から南側の溝399までである。溝399は区画1~5の屋敷境溝と平行しておらず、東側がやや開く方位を有する。両溝間は西側で約21.5m、東側で約23.0mを測り、絵図記述数値の表十一間五尺(21.5m)と裏十二間四尺(23.0m)と一致する。

溝399は幅1.0~1.5mを測るが、調査区中央部の北肩は現代の土地段差と合致するため、不明瞭である。しかしながら、この段差は溝399の北肩を踏襲したものであると考えられ、近似した位置に溝が存在していたと思われる。溝の西側では一部石列が残存していた。

溝192は区画6の東端に位置し、幅約0.4mを測る。土塁内側に沿う溝であろう。列をなした礎石を伴うピットを検出した(図65)。溝229と並行して全長約13.6m検出されており、

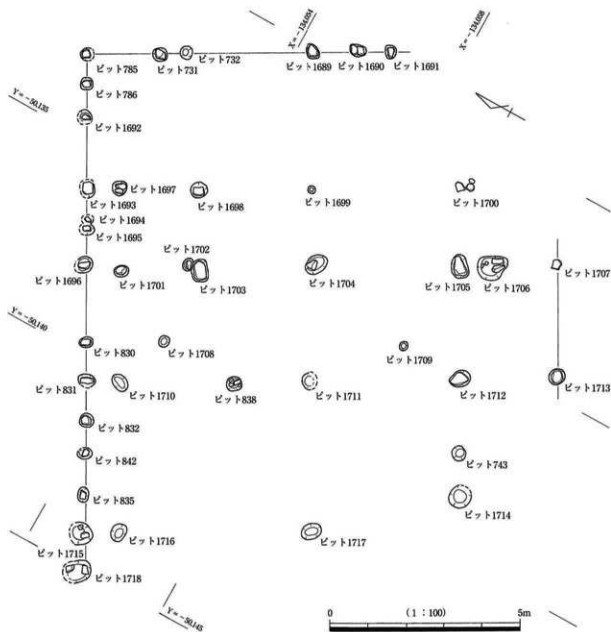


図65 建物11

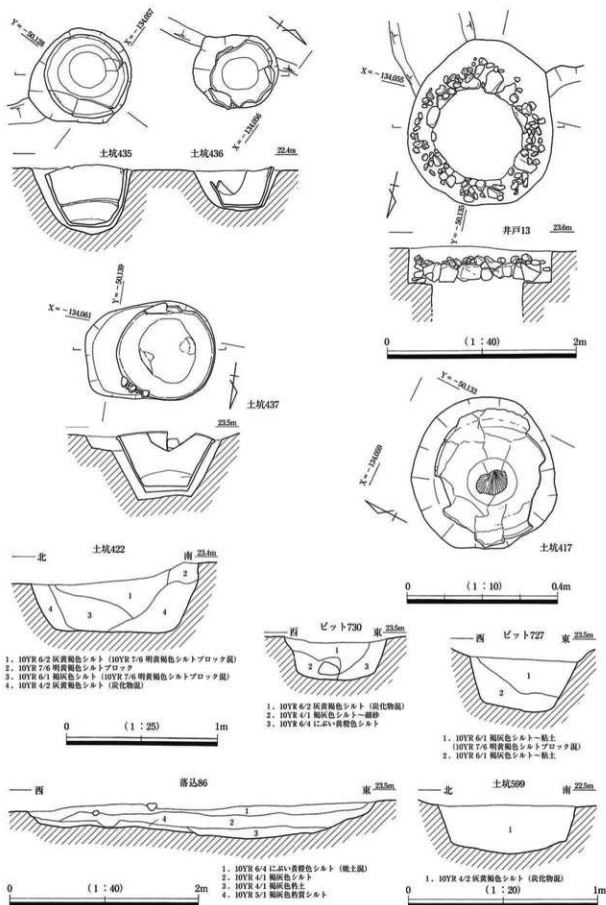


図66 土坑417・422・435～437・599 井戸13 ビット727・730

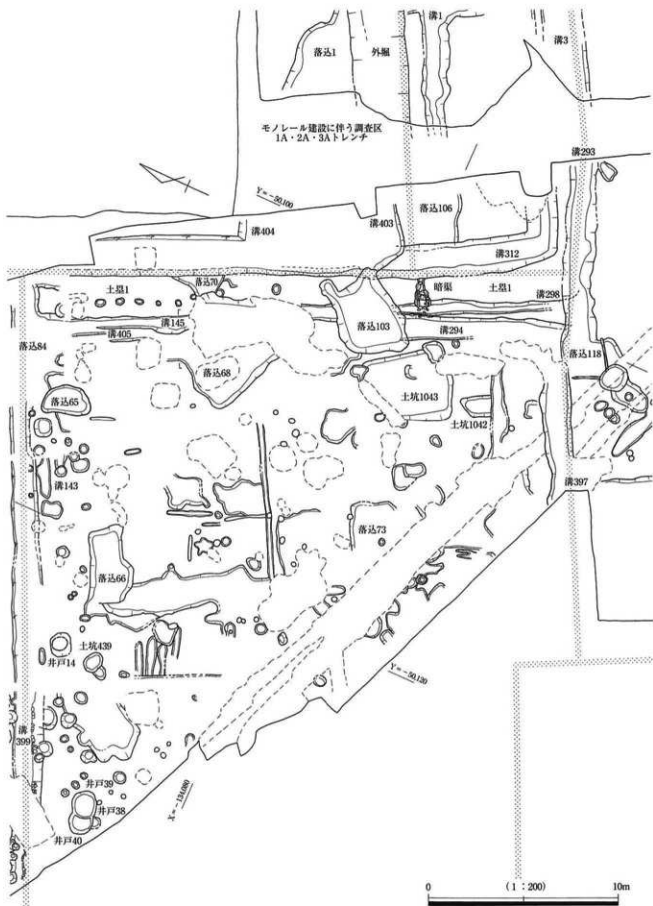


図67 区画7遺構図

ビット785を北東隅にして建物が存在していたと考えられる。ビット1696・831からも南方向へ12.4m、ビット列が伸びている。ビット間は0.8～1.1mを測るが、南北方向のビット列には途中検出されなかったところが多い。建物11の存在を推定した。

土坑415・435・436・437は甕を埋置しており、便槽遺構と思われる(図66)。土坑は甕とほぼ同一の大きさに掘削している。

土坑417は甕を埋置するが、底部が穿孔されており、その穿孔部に貝殻で蓋をしていた(図66)。掘り方と甕の隙間は狭く、浅黄橙色の細砂を掘り方埋土とし、甕を設置している。

井戸13は上部を石組枠としている(図66)。掘り方径約1.5m、石組内径は約1.0mを測り、その下部は素掘である。井戸15・37は素掘り井戸である。

落込86は東端に位置しており、廃棄遺構と考えられる。17世紀第3四半期の一括遺物が出土している。落込61は屋敷地北側に位置しており、不定形を呈する。19世紀初頭の一括遺物が出土している。

落込83は陣屋廃絶後の遺構であり、壁面にモルタルを貼った池である。

区画7 宮本邸(図67～69、図版17・25・27・28・31・32)

区画7は陣屋南東部の張り出し部分であり、外堀の屈曲部にあたる。北側は溝399、南側は溝293・397までである。東端では溝312とした外堀が検出されており、この位置で南北間には約29.0mを測り、溝397の西端の位置で28.5mを測る。絵図記述の数値は表十四間(25.5m)とあるが門構えのラインは調査区外なので確定できない。裏十五間五尺(28.8m)とある数値は南隣の区画8との境界までであり、外堀の屈曲部までの数値ではないようである。すなわち、東端の四間四尺(8.5m)の数値は、前述の「裏十五間五尺(28.8m)」に含まれている数値であり、溝399と外堀屈曲部までが約20.3mを測ると推定できる。

溝293は幅約1.5m、深さ約0.2mを測り、溝312に近接する箇所やや南へ傾く。西端においては落込118が検出された。落込118には丸太材が逆L字状に組まれ、多量の礫と土器・瓦が出土した(図69)。

溝397は落込118を介してクランク状に北側へずれた位置で西へ伸びる。溝397は現代溝と重複している。溝293の北肩が屋敷境に対応すると考えられる。溝293は未調査区の地点で、モノレール調査区の溝3へ連なると考えられる。

溝312は外堀である(図68)。北半は現水路の掘り方と重複しており、かろうじて西肩を検出した。南半は幅約1.8m、深さ約0.4mを測り、ほぼ直角に東へ屈曲する。モノレール調査区の溝3北側の並行した落ちのラインに連なるものであろう。この屈曲部と別にもうひとつの屈曲部が検出されている。絵図記述の数値によれば溝312の屈曲部は区画8との屋敷境に位置し、外堀は落込103東で検出された溝403の肩にあたることになる。今回の調査区では屈曲部が攪乱であったが、かろうじて屈曲部の底部が残存しており、モノレール調査区の「外堀」遺構の南肩に連なるものと考えられる。また、溝404とした北肩はモノレール調査区の「落込1」に対応するものであろう。溝312はモノレール調査区「外堀」より新しい遺構である。

溝312の東側で検出した落込106は陣屋造成時の整地土部分である。

溝の西側には土塁を検出した。上部構造の残存は不良であるが高さ約0.3mの灰黄褐色・褐灰色の粘土の盛土が観察できた。土塁内からは暗渠の石組が検出されている。溝を外堀と直行した位置に掘削し、両肩に沿って、石を据えるための窪みをつくり、石を立てている。その上部に石を橋渡し状に設置し、暗渠とする。これら石組は屋敷地側に寄っており、外堀側は溝のみである。溝312西肩には暗渠の開口部が盛土下から観察された。土塁の西側に沿って、さらに溝298・294が伸びる。溝145は溝298の、

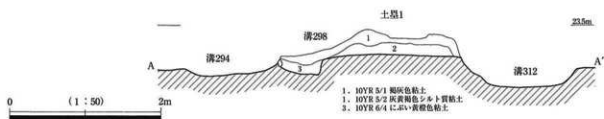
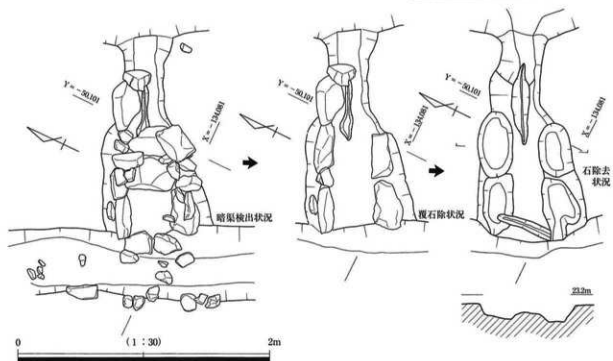
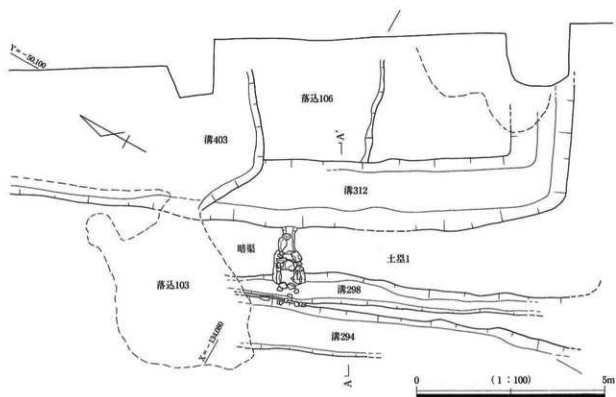


図68 外堀（溝312）・暗渠・土層

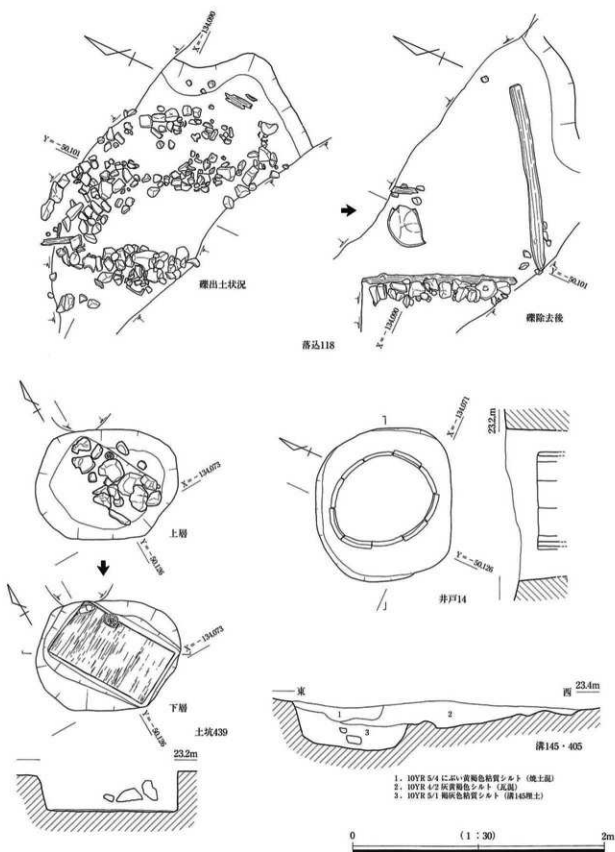


図69 落込118 土坑439 井戸14 溝145

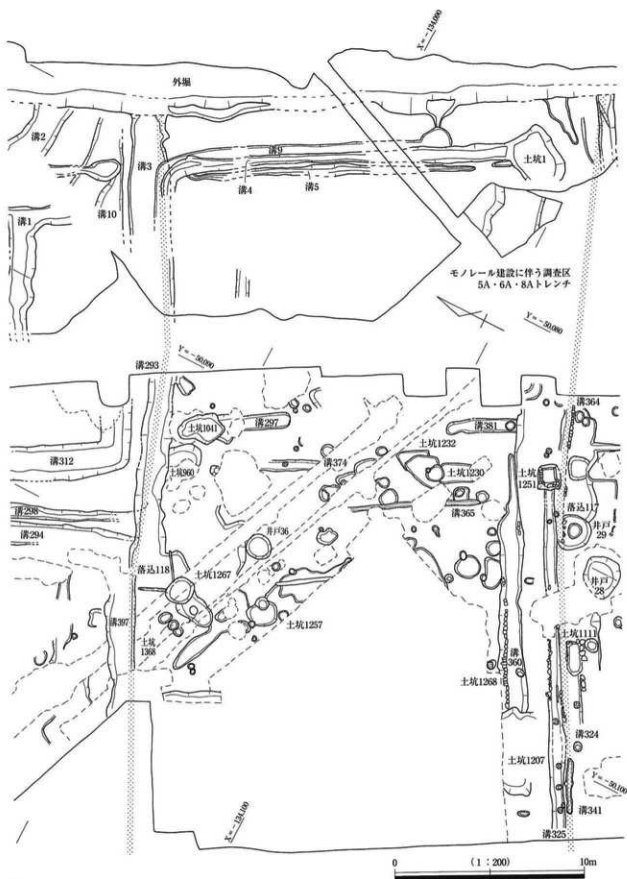


図70 区画6遺構図

溝 405 は溝 294 の延長上にあり、それぞれ同一の溝と考えられる。土塁の幅は土塁盛土の観察から溝 298 が土塁 1 に伴っていた時期と、溝 298 を埋め、土塁 1 の幅を拡張し、溝 294 が土塁 1 と伴った時期の二時期があったと考えられる。暗渠の西側部分では暗渠構築石材が溝 298 の西側に向かって散乱している状況からも土塁を拡張したことが考えられる。

土坑 439 は底部 85×48 cm の木皮が敷かれていた (図 69)。北東部の坑は後世のものである。

井戸 14 は瓦を井戸枠としている。1 周 10 枚を使用している (図 69)。井戸掘り方径約 1.2m、井戸枠径約 0.7m を測る。井戸 14 の西側に井戸 38~40 の 3 基を重複して、検出した。いずれも素掘りである。

落込 103 は土塁 1 を破壊して掘削されている遺構である。陣屋廃絶後のものと考えられ、19 世紀中頃~後半の一括遺物が出土している。

区画 8 野木邸 (図 70~72、図版 17・26・31~33)

区画 8 は北側の溝 293・397 から南側の溝 341・324・364 までである。両溝間は約 23.5m を測り、絵図記述数値の裏表十三間 (23.6m) とほぼ一致する。屋敷地西半は攪乱のため、遺構を検出していない。

北側の屋敷境溝は前述したように落込 118 を境にして南方向に折れ曲がり、また、モノレール調査区溝 3 に連なる。それに対応するように南側の屋敷境溝も溝 364 は土坑 1251 付近から南方向に折れ曲がっている。溝 324・364 からは石列が検出された。溝 364 の石列の状況から南方向に折れ曲がっていることは明らかである (図 72)。溝 324 の北側には溝 325・360 が並行して伸びている (図 74)。屋敷境が³時期により移動していた可

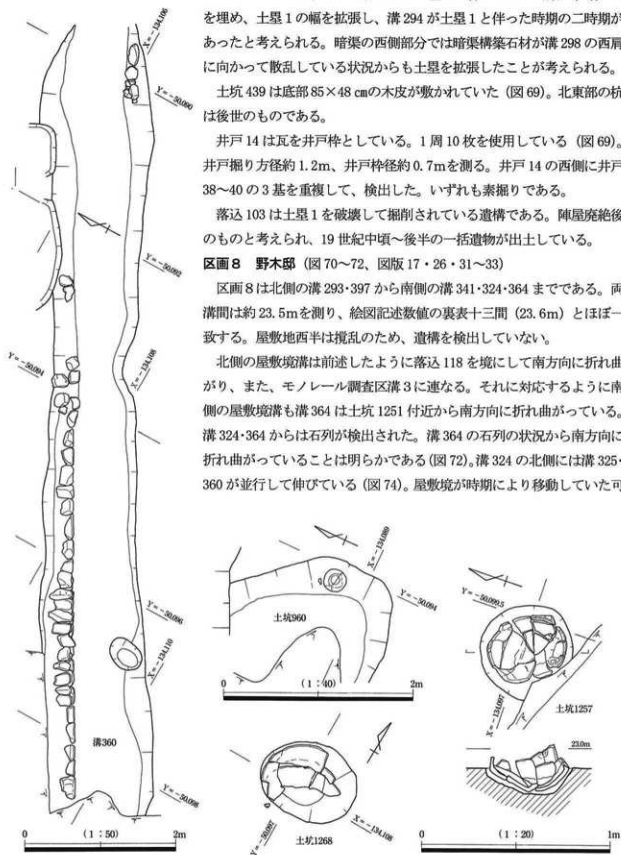


図71 溝360 土坑960・1257・1268

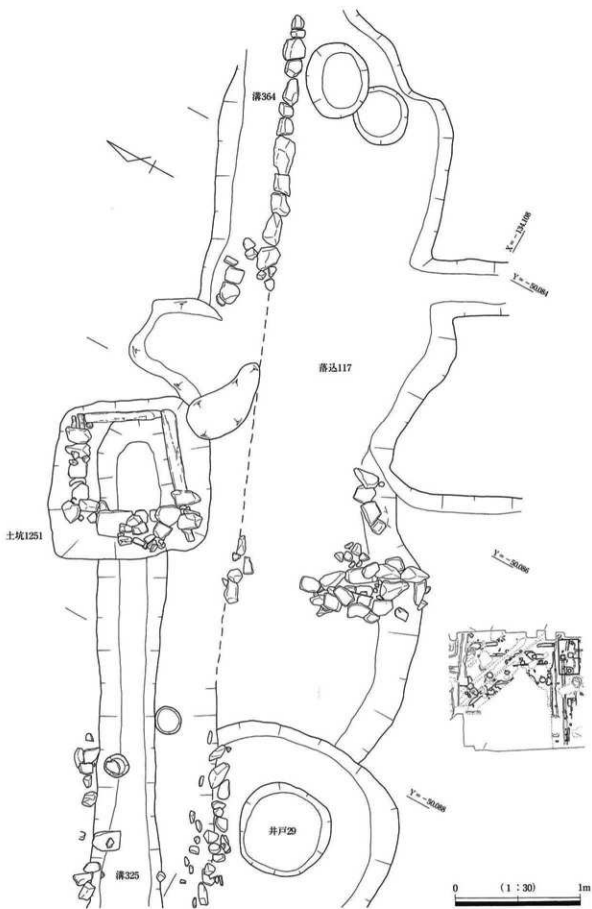


图72 溝364 土坑1251 落込117

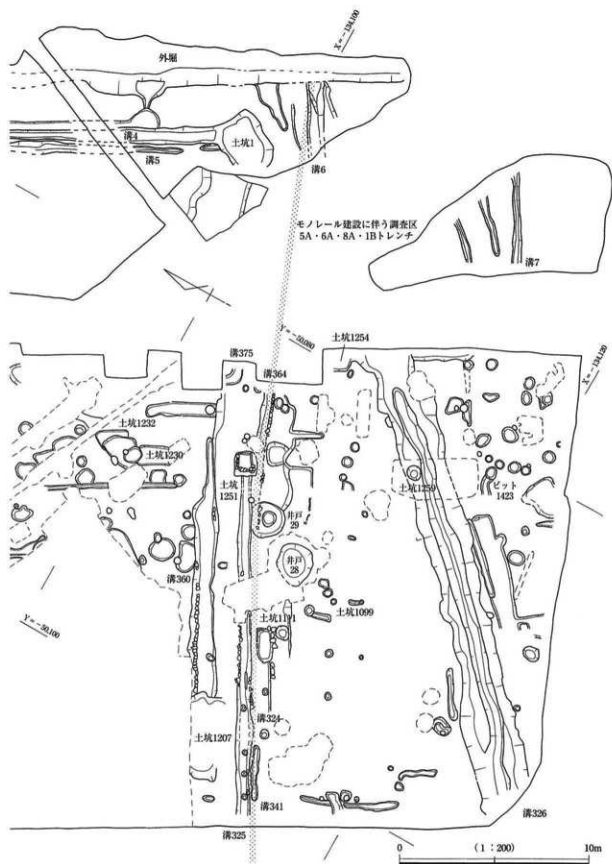
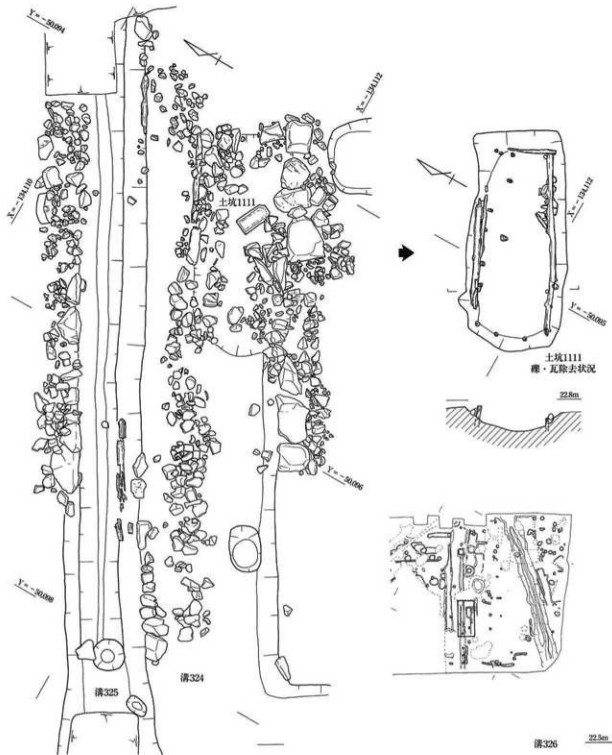


図73 区画9遺構図



1. 10YR 4/1 褐色粘土・10YR 5/6 黄褐色粘土ブロック
2. 10YR 5/6 黄褐色粘土・10YR 6/1 褐色シルトブロック
3. 10YR 5/2 灰黄褐色粘土
4. 10YR 5/1 褐色粘土・10YR 6/4 細かい黄褐色粘土ブロック
5. 10YR 6/4 細かい黄褐色粘土
6. 10YR 5/1 褐色粘土
7. 10YR 5/6 黄褐色粘土・10YR 6/1 褐色シルトブロック多し
8. 10YR 5/2 灰黄褐色粘砂・10YR 6/1 褐色粘土の互層

0 (1:30) 2m

図74 溝324~326 土坑1111

能性が高い。両溝共に石組を有する。溝 325 は幅約 0.7m、深さ約 0.1m を測る。肩に石列を伴い、さらに内側に丸木材を設置している地点もある。西端には溝中心部にビット列が検出され、溝に先行して柵列が存在していたことが考えられる。東端には土坑 1251 が接続し、土坑西壁面から溝 325 が貫いている。

土坑 1251 は 1 辺約 1.3m の方形掘り方に内辺 0.6×0.7m の枠を有する土坑である (図 72)。木枠のみは竹材であり、北・西面には木枠上部に石組が据えられていた。

北側に並行する溝 360 には北肩に石組を有する。

調査区東寄りに溝 297・381 が南北方向に伸びている。裏庭とを区画するものであろう。

土坑 1267 は径約 1.5m、深さ約 0.3m を測り、落込 118 に先行する。17 世紀中頃～後半の一括遺物が出土している。

土坑 1268 には壺が斜め向きに据えられていた (図 71)。土坑 1368 には桶の底のみが残存していた。

土坑 1257 には焔炉が斜め向きに据えられていた (図 71)。

井戸は中央部から井戸 36 が 1 基のみ検出された。素掘である。

区画 9 森本邸 (図 73・74、図版 17・26・32・33)

区画 9 は北側の溝 341・324・364 から南側が調査区外の車道南側溝までである。絵図記述では裏表十二間 (21.8m) とある。

溝 326 は区画 9 の中央部を北東-南西方向に伸びる。幅 2.1~2.9m 測り、断面は V 字の 2 段階掘りを呈する (図 74)。深さは西端で約 1.2m を測る深い溝であり、基盤層の礫層をも掘削している。東端は深さ約 0.5m を測り、浅くなっており、標高値においても 0.9m の差があり、南西に向かって流れていたと考えられる。埋土はブロック土であり、人為的に埋められたと考えられる。溝の方位が陣屋地刺方向と大きく異なっており、また、17 世紀初頭から中葉の遺物が出土していることから陣屋形成直前の遺構であることがわかる。

土坑 1111 は溝 324 下部から検出した (図 71)。平面約 1.8×0.8m、深さ約 17cm を測り、四方に丸木材を据え、杭を内側に打ち込み、丸木材を固定している。木枠内法 1.5×0.5m を測る。

土坑 1099 からは焙烙が正置の状態で出土している。

井戸は調査区北寄りから井戸 28・29 が検出された。井戸 29 は屋敷境の溝 364 の下層にあたり、出土遺物からも陣屋廃絶以後の 18 世紀後半～19 世紀初頭に位置づけられる。

なお、屋敷地の南側より、高台内に「麻 森本」と朱書のある肥前磁器染付鉢が出土している。

2. 遺物

遺構の項目で示したように検出した溝は陣屋絵図の屋敷境ラインと合致していることが明らかになった。遺物についても設定した屋敷単位である区画 1 から 9 ごとに記述を行う。各区画の遺物出土状況は各遺構から多量に出土しているが、一時期に限定できる一括性の高いものがある一方、同一場所で掘削が繰り返された溝などもあり、近世から近代に至る遺物が出土した遺構も存在する。さらに、現代の攪乱であっても、近世の遺物を含んでいるため、できる限り、人力掘削により遺物の抽出を努めた。(市本)

なお、遺物の記述を行うにあたって、「京焼系磁器」について、以下の基準をもって分類した。兵庫県三田市の三田焼、同県篠山市の王地山焼の窯資料に類似品がみられる。三田・王地山焼は、京都の陶工欽古堂亀祐から磁器焼成技術の指導を受けているため、類品が多く、特に、土型による型物は区別が困難である。また、欽古堂亀祐は、三田・王地山焼以外にも和歌山県の男山焼でも技術指導しており、窯跡資料から類品が出土している。このようなことから、京焼の影響を受けてはいるが、生産地の特定が

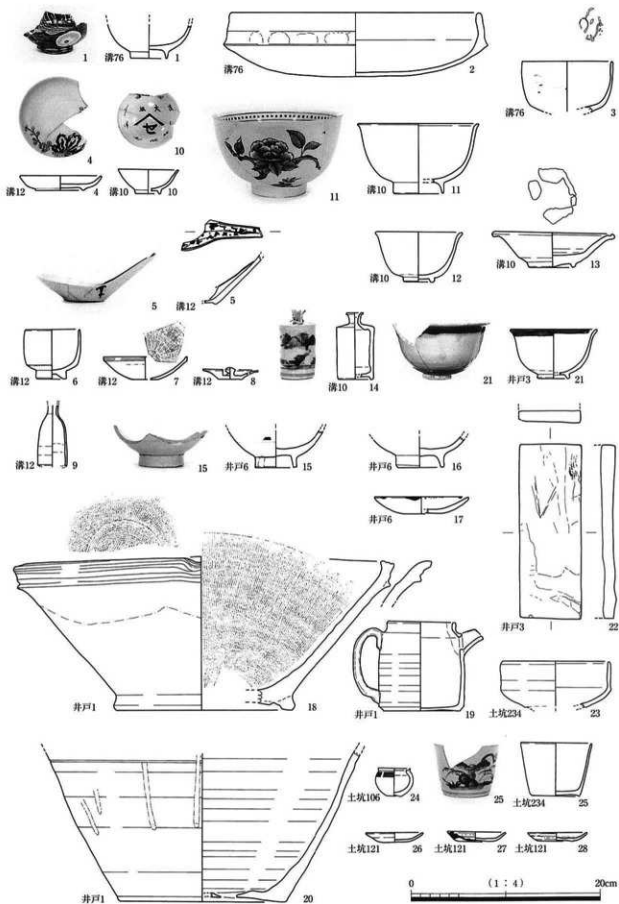


图75 区画1出土遗物 (1) 清10·12·76 井戸1·3·6 土坑106·121·234

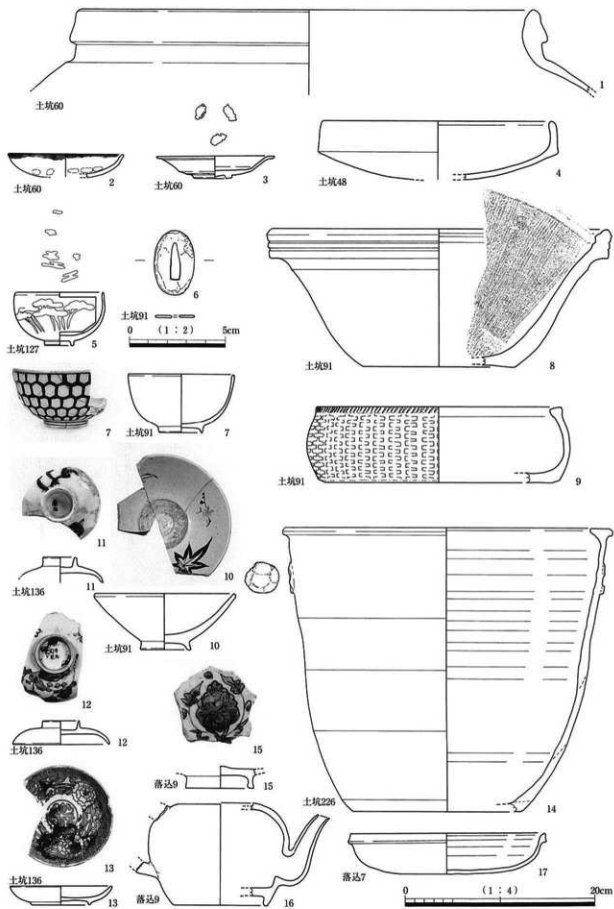


图76 区画1出土遺物 (2) 土坑48・60・91・127・136・226 落込7・9

難しい製品であると考えられるものは京焼系磁器と分類した。

1) 陶磁器・土師質土器・木製品・石製品・金属製品

区画1 (図75~78)

区画1の出土遺物は、17世紀前半~19世紀中頃のものが出土している。

図75-10~14は、溝10から出土したものである。これらの遺構の年代観は19世紀前半~19世紀後半のものであるが、この他にも、17世紀前半代のものも見られることから、この頃には溝が造られていたと思われる。

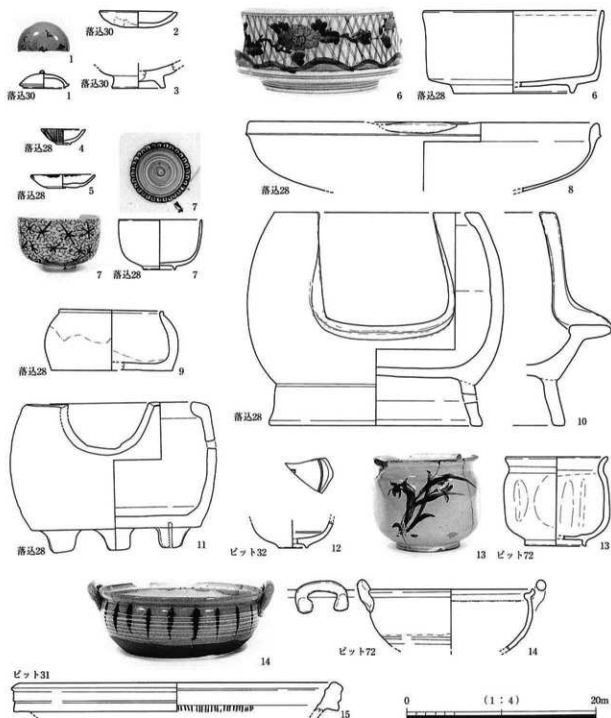


図77 区画1出土遺物 (3) 落込28・30 ビット31・32・72

図75-15~17は、井戸6から出土したものである。15は肥前磁器染付碗で、高台高が高く、高台無軸のタイプである。16は唐津系陶器器手碗で高台皿付が無軸である。15・16共に17世紀中頃の年代観をもつものであり、その他にも、17世紀後半の肥前磁器染付(高台無軸碗)や丹波焼播鉢が出土している。

図75-5は、中国製青花散蓮華である。表面には牡丹唐草文が施されている。伊丹郷町遺跡・大坂城跡などの19世紀前半の遺構から類例が出土している。

区画2 (図79~83)

区画2の出土遺物は、17世紀前半~19世紀中頃のものが出土している。区画2は、良好な一括廃棄土坑を多く検出した。

図79-13は井戸9から出土した木札である。表に「納米四斗 波豆川村 米主 伝右衛門」、裏に「庄や治兵衛 舛(?)口十助」の墨書がある。波豆川村は現三田市に位置する麻田藩の飛地である。

図80-8の涼州窯青花碗は見込みに鶯文が描かれている。高台無軸で、高台皿付に砂が付着している。

図81は土坑26の遺物である。明治4年(1871)の廃藩置県による陣屋の移転の際に廃棄された落込25に切られた1時期古い遺構である。この遺構からは肥前磁器や京・伊賀・信楽焼系製品など大量の陶磁器が出土し、瀬戸磁器端反碗が少量みられた。遺物の様相から19世紀前半の一括廃棄土坑と考えられる。8の備前焼匙は、型押し成形されたものである。遺跡での出土例は少ない。14の土師質土器涼戸は胎土が白色なことなどから京焼の可能性ある。土坑26からは、少なくともあと2個体の涼戸が見つかっている。15は京焼系青磁算木型瓶である。表面にピンホールがみられる。これとは別に1個体出土している。16・17は肥前磁器染付仏花瓶である。主文様は同じであるが、器高、耳部の形態が異なっていた。一対で使用されていた可能性がある。

図82-1~14は落込46の出土遺物である。遺物組成の特徴は第5章第4節で述べるが、一括性の高いものである。1~3は肥前磁器染付小杯である。これらは違う文様だが、器形のタイプは同じである。また、これら以外にも同タイプのものが数点出土している。4~7は肥前磁器染付碗である。高台断面

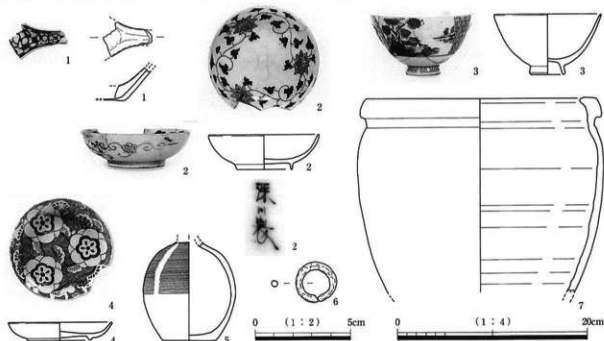


図78 区画1出土遺物(4)包含層

U字状高台狭のタイプのものである。伊丹郷町遺跡の享保14年(1729)の火災層出土遺物と共通する。落込46は遺物の年代観から17世紀末~18世紀前半と考えられる。

図82-15~30は、落込25から出土したものである。遺物の年代観から19世紀中頃の特徴をもつものが多くみられる。15は産地不明陶胎染付碗である。三田焼の三輪明神窯で焼かれた煎茶碗と似ており、三田焼の可能性ある。23・24は備前焼小壺である。器形は口縁端部が外側へ張り出し、体部の膨らみがないものである。このようなタイプは、難波宮跡田中央体育館の文久3年(1863)の大火の焼土層下資料や¹⁾天満本願寺跡の明治4年(1871)の造幣局開設層の下層²⁾から出土したものと似ており、19世紀中頃にみられるものと思われる。27の軟質施釉陶器鉢は、白化粧をした上に唐草文様を施した鉢である。形態から植木鉢になると考えられるが、29の植木鉢と違って美しい装飾が施されていることから、

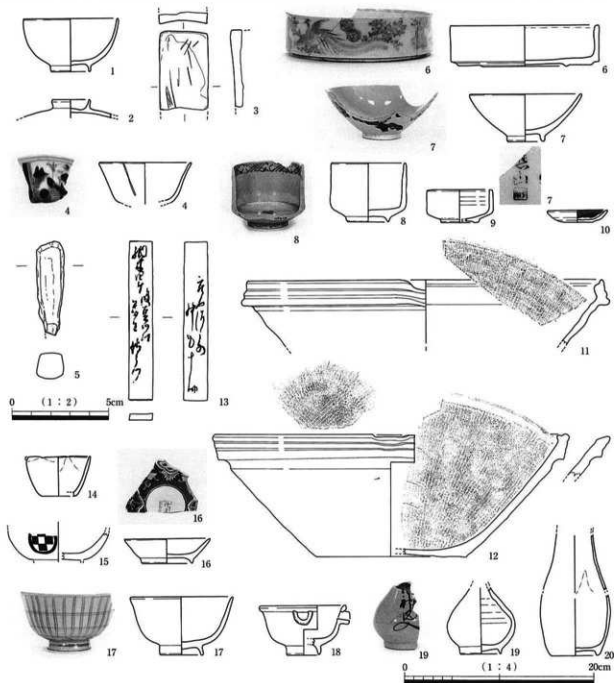


図79 区画2出土遺物 (1) 溝57 (4・5)・63 (6・7)・100 (1~3) 井戸5 (14~20)・9 (8~13)

屋敷内での観賞用かと思われる。

区画3 (図84~93)

区画3からは、17世紀前半~19世紀中頃の遺物が出土している。その中で落込5は、幕末期の年代をもつ良好一括廃棄遺構である。その他にも、落込5に切られた落込3・6は、19世紀前半の遺物が大量に出土し、遺物の組成をみる良好一括廃棄遺構である。

図84-3~13は溝211から出土したものである。遺物の年代観は17世紀前半~19世紀後半である。8は肥前磁器瑠璃釉輪花鉢で、口縁部と体部に金彩で文様を施している。13の美濃焼人形の器形は猿型

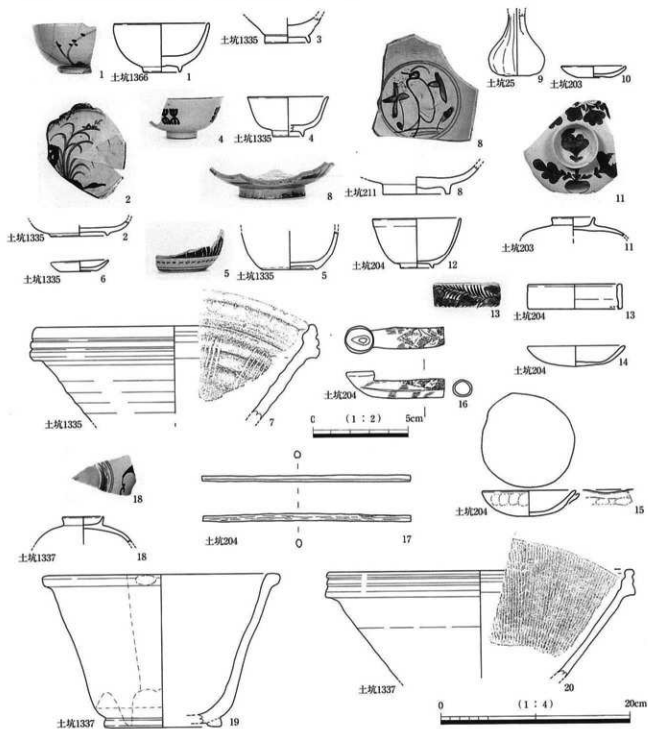


図80 区画2出土遺物(2) 土坑25・203・204・211・1335・1337・1366



图81 区画2出土遺物 (3) 土坑26

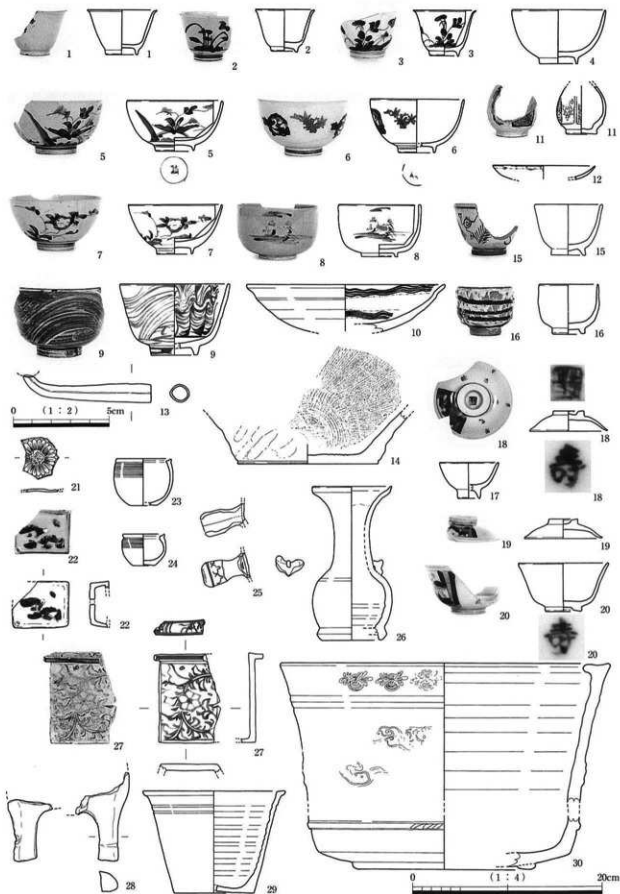


图82 区画2出土遗物(4) 落込25(15~30)・46(1~14)

である。型作り成形で、体毛はヘラ彫りし、全体に灰釉を掛けている。

図84-14～20は溝105から出土したものである。14・15は京焼系磁器染付小杯である。これらの小杯は三田焼・王地山焼の窯資料と類似している。16の京焼系青磁算木型瓶表面にはピンホールがみられる。算木型を模範したものと思われる。20は京焼鉢である。竹雀文で、竹葉を呉須、それ以外の部分を錆絵で施している。高台皿付部に「帯山」の銘がみられる。帯山は、京都の陶工帯山与兵衛の銘である。初代高橋藤九郎が延宝年間（1673～1681）に京都粟田東町に住み陶業を創始し、帯山と称した。明治中期の九代まで続き、茶陶器や酒器を主に焼いていた。

図85-1～5は、土坑215から出土したものである。3は肥前磁器染付鉢である。全面施釉されており、1640～1650年代のものである。4・5は唐津焼砂目積み皿である。4は折縁皿、5は溝縁皿で、灰釉が掛けられている。この他にも、備前焼播鉢や丹波焼播鉢が出土している。これらの特徴から、土坑215は17世紀中頃の年代観が与えられる。

図86-87は、落込3の遺物である。図86は施釉製品である。1・2は京焼系磁器染付製品である。1は小杯であり、各区画で同じタイプのものが出土している。2は青磁染付碗であり、外面の青磁部分にはピンホールがみられる。4・5は肥前磁器染付碗・蓋である。ハの字状高台のタイプであるが、この他にも文様は違うが同タイプのものが多くみられた。87-1は京焼系青磁急須である。型押し成形で、内

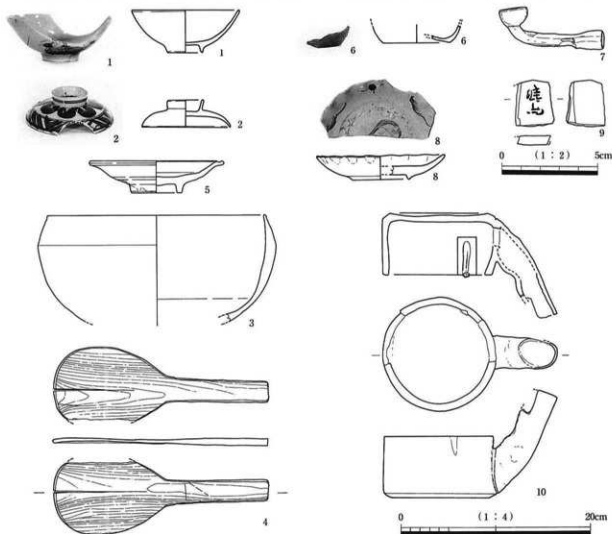


図83 区画2出土遺物(5) 落込17(1~4) 包含層(5~10)

面に指押さえ痕がみられる。7の軟質施釉陶器涼炉には台形状の脚部が三足ある。体部外面は鮫肌状を呈し、黒色釉が掛けられている。底部には「楽」の刻印がみられる。この他には、瀬戸磁器染付端反碗や京・伊賀・信楽焼系製品が出土している。全体的な特徴としては、磁器は肥前磁器、陶器は京・伊賀・信楽焼系が中心となっている。落込3の年代観は、区画2土坑26と組成が似ていることから19世紀前半と考えられる。

図88・89は、落込6の出土遺物である。88-1~11は磁器類である。5は肥前磁器染付端反碗であり、この大型の端反碗はこの遺構から多く出土している。10は肥前磁器染付鉢である。口縁部は欠損しているが、口縁端部は内側へ傾くタイプのものである。見込みに籠文が描かれており、これと同じタイプの

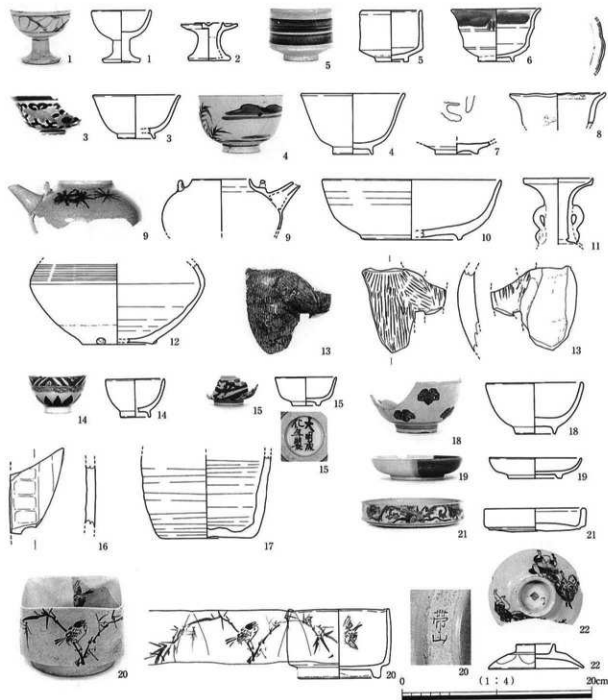


図84 区画3出土遺物 (1) 溝13 (1・2) ・105 (14~20) ・211 (3~13) 井戸25 (21・22)

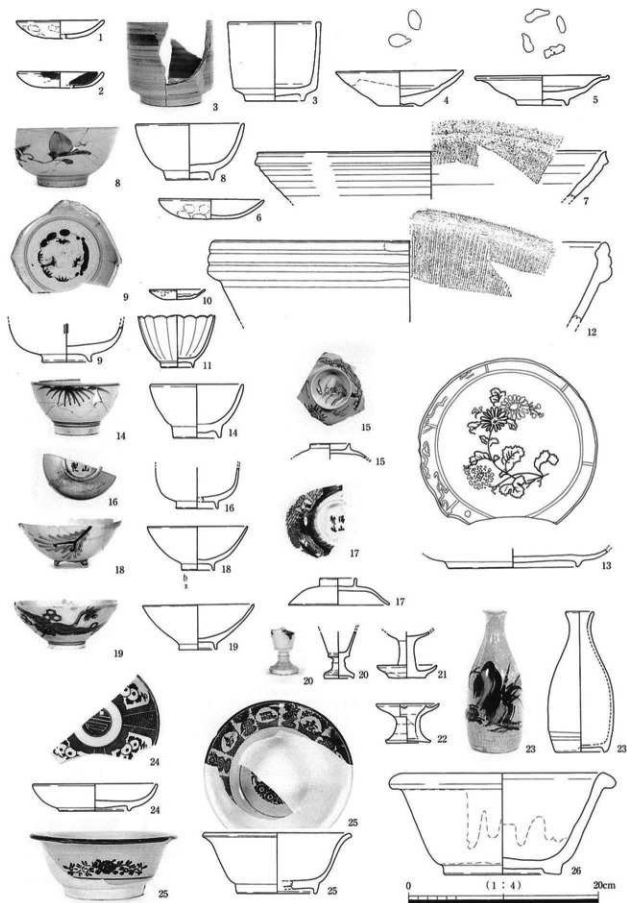


图85 区画3出土遺物(2) 土坑215(1~5)·216(6·7)·223(14·15)·224(16~26)·821(8~13)

ものがモノレール建設調査時の5Aトレンチ1面井戸2から出土している。11は京焼系磁器染付鉢である。これと同器形で同文様の資料が区画7・8の屋敷境溝の溝293から急須と溶着した形(図128-1)で出土している。この資料の説明は第2節-2の窯資料の項で述べる。図88-9は肥前磁器染付皿である。図89-5は堺・明石焼播鉢である。口縁部断面が三角状を呈し、器高の低いタイプのものである。落込6の遺物は落込3に比べて、瀬戸磁器・京焼系磁器が若干多く、また、外面に光沢のある鉄釉を施した丹波焼の播鉢が出土していることから、落込3より新しい様相をもつと考えられる。

図90-92は、落込5の出土遺物である。遺物の様相が、文久3年(1863)の大火の焼土層下から検出した難波宮跡旧中央体育館SK790資料や、明治4年(1871)の造幣局開設層の下層と思われる天満本願寺跡TN96-1第3層資料と様相が似ており、1871年の廃藩置県による陣屋機能停止の際に廃棄された遺構と考えられる。90-1・3は京焼系磁器染付猪口であり、三田・王地山焼の窯資料からこれと類似するものが出土している。90-8は肥前磁器染付端反碗である。これに伴う蓋が同遺構から出土している(図版49-9)。90-14は産地不明陶胎染付鉢である。漳州窯系製品によく似ており、胎土も灰白色を呈する。高台皿付には沈線がみられる。三田焼の窯資料から似たタイプのもものが出土している。90-16は中国製青花皿である。芙蓉手タイプであり、17世紀前半のもので、伝世品と思われる。高台内には朱色で「そ子八」(そねはち)、「子八」部分には重複して黒色で「森」の文字がある。「そ子八」は人名、「森」

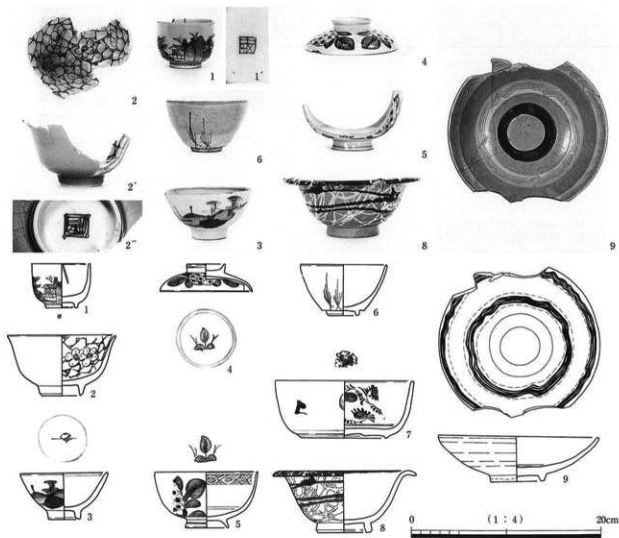


図86 区画3出土遺物(3)落込3

は森本を意味すると考えられる。90-15は肥前磁器染付皿である。七宝結文、櫛高台の木盃形でいわゆる鍋島藩窯の製品である。主文様は松竹梅文である。18世紀中頃のものと考えられている。鍋島藩窯の製品は当遺跡からは1点のみである。90-17・18は肥前磁器染付皿である。大きさ・文様も同じであり、これら以外にも数点出土していることから、数枚セットで使用されていたと思われる。91-8・9は肥前磁器染付皿である。91-8は八角輪花皿である。18世紀前半の年代観が与えられるもので、モノレール調査の1面外堀上層（モノレール調査報告書P.62 図50-4）でも同じものが出土していた。91-9の口縁部は玉縁状を呈し、文様は91-8に比べると簡略している。91-3は京焼系青磁瓶である。型作り成形で、器表面にピンホールがみられる。91-6の京焼系青磁植木鉢は、3と同様、器表面にピンホールがみられた。91-2・7は京焼系磁器急須である。2・7とも型作り成形であり、内面に指押え痕が残っている。2は染付急須である。成形は体部上部と下部は別作りで、型押し成形された後、合わせている。7は底部内面を施釉しているが、外面は無釉である。また、体部の注ぎ口部分は1ヶ所しか開いていないので、水注の可能性が高い。2・7ともに、三田焼の窯資料から同タイプのものが出土している。

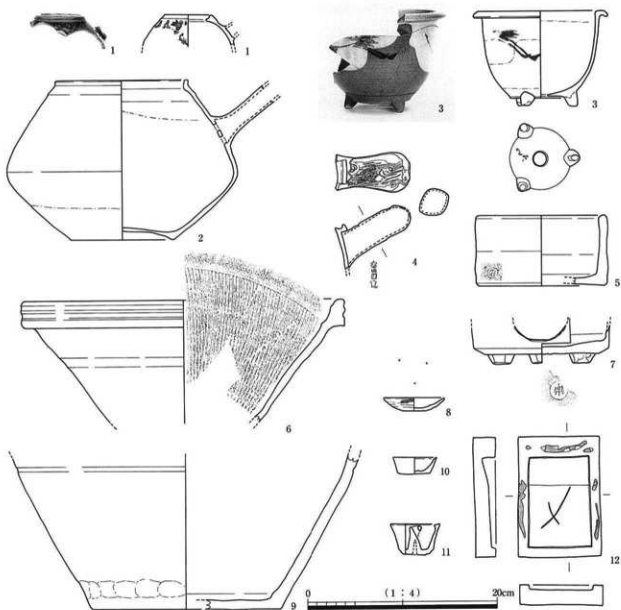


図87 区画3出土遺物 (4) 落込3

92-1・2は備前焼小壺・蓋である。この遺構から他に3点同タイプのもが出土している。92-8の丹波焼播鉢の外面には光沢のある鉄釉が掛けられている。図版84-27は柄穴を有する直方体の石材である。

図93-1は包含層から出土した京焼系磁器染付碗である。これ以外にも区画4（図96-10）から1点出土している。高台内には「道八」の銘が見られる。「道八」は京都の陶工、高橋道八のことである。

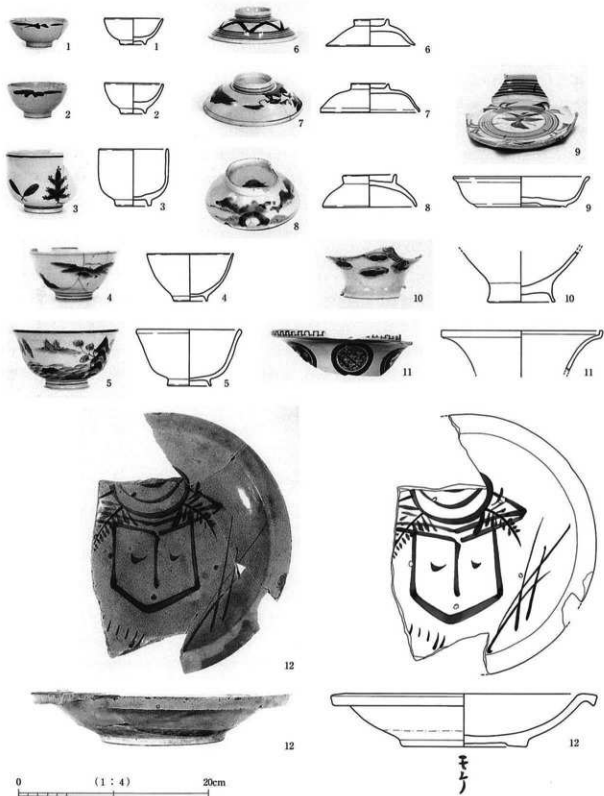


図88 区画3出土遺物〈5〉落込6

初代道八が宝暦年間（1751～1764）に粟田口に窯を開き、五代目道八まで業が受け継がれる。三田焼の窯資料で同タイプのものが出土しており、この碗は三田焼製品と思われる³⁾。3は産地不明陶器碗である。高台内には「歛山精製」の銘がある。

区画4（図94～100）

区画4は17世紀前半～19世紀代の陶磁器が出土している。この区画からは、幕末期～明治初頭頃の一括廃棄遺構が検出されている。

図94-1～3は、溝261の出土遺物であり、17世紀中頃～18世紀中頃のものが出土している。1は京・伊賀・信楽焼系色絵碗である。腰折れタイプで、体部には丁寧に笹文を施している。3は丹波焼播鉢である。大平茂氏の編年IV期に属するものである（大平1992）。この他にも、17世紀末～18世紀前半ものを中心に出土している。

図94-4～11は溝221から出土したものである。4～7は肥前磁器である。6は色絵碗であり、文様は丁寧に描かれており、上質の製品だと思われる。7は染付猪口であるが、器厚は薄く、染付も丁寧に描かれていることから有田内山製品と思われる。8は備前焼灯明受皿である。受けの部分にドーム状に切り込みが入れられている。この備前焼灯明皿は麻田藩陣屋跡では1点のみの出土で、近郊の大坂城跡や枚方宿遺跡などでも出土量は少ない。多くみられるのが、岡山城跡や徳島城下町遺跡・高松城跡で、18世紀前半を中心に大量に出土している。10・11は土師質土器焙烙であり、11は口縁部が直立するタイプである。溝221から出土した遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀中頃と考えられる。

図95-4は、肥前磁器色絵大皿である。内面に唐草花文、外面には飛龍文が丁寧に描かれている。高台内には「大明萬曆年製」銘が見られる。南川原窯の辻窯の製品と思われる（カラー図版17・18）。

図95-8は溝262から出土した京焼色絵碗である。2次焼成を受けているが、鉄絵と黄色釉、緑色釉

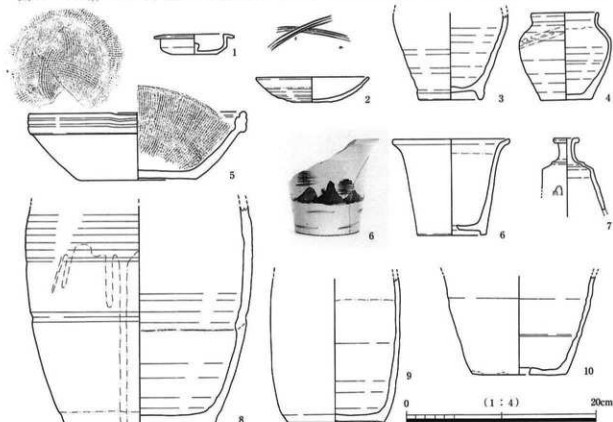


図89 区画3出土遺物〈6〉落込6



图90 区画3出土遺物〈7〉落込5

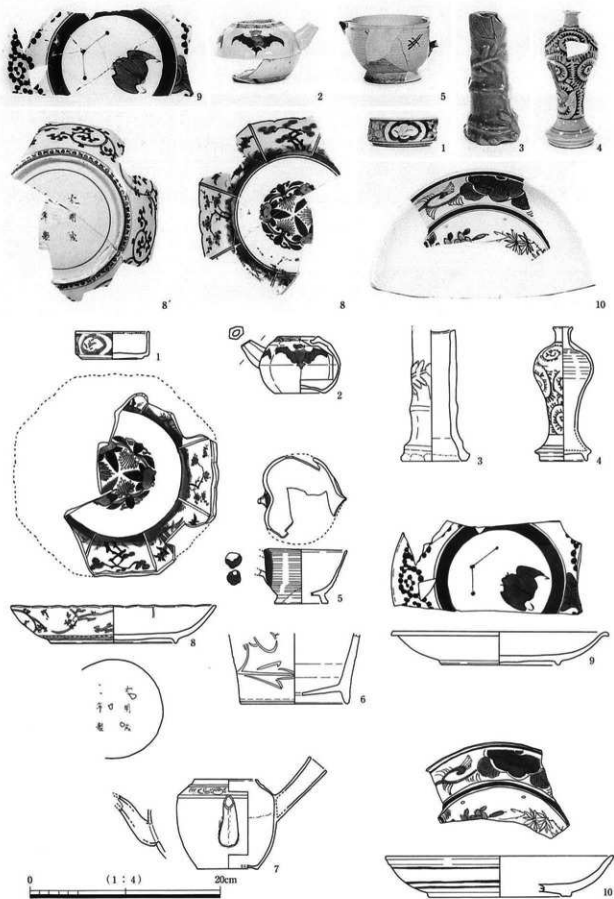


图91 区画3出土遗物 (8) 落込5

で山草文を丁寧に描いている。高台内には「道八」の銘がみられる（カラー図版 13・14）。

図 96-1~8は、井戸 20 から出土したものである。1~4は肥前磁器である。この遺構からは肥前磁器が大量に出土している。1は肥前磁器染付碗である。器形は、体部から口縁部に向かって開いている。文様は丁寧に梅樹文を描いている。2は肥前磁器染付皿である。外面の連続唐草文は一本描きで施されている。3はいわゆる「くらわんか手」のものである。この他に、土師質土器（5~7）も出土している。井戸 20 の出土遺物を概観すると、18 世紀後半~19 世紀前半と考えられる。

図 96-10~15の井戸 21 から出土した遺物のうち、10は京焼系磁器染付碗である。高台内に「道八」銘がみられる。三田の三輪明神窯で同タイプのものが出土しており、三田焼の可能性はある。外面には丁寧に笹文が施されている。12は肥前磁器色絵皿である。器厚は薄く、内面に色絵で雲流文を丁寧に描いている。有田内山の製品と思われ、17 世紀末のものである。

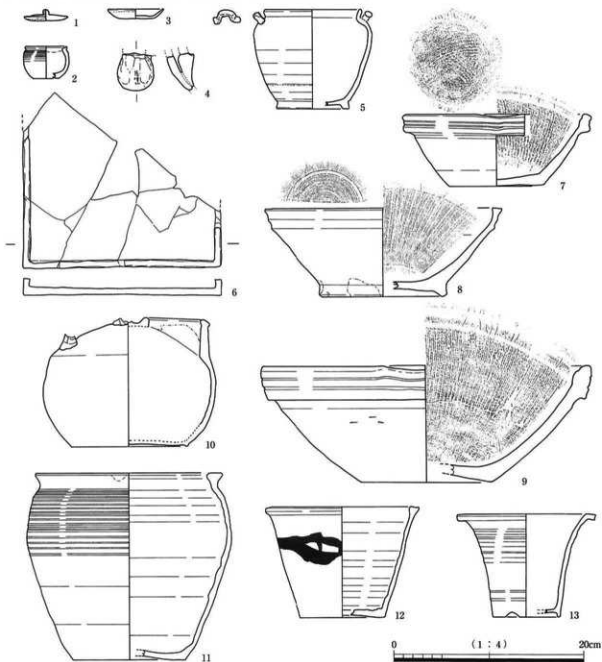


図92 区画3出土遺物(9) 落込5

図97-7・8は土坑835から出土したものである。7は京焼鉄絵碗である。体部は薄作りで、文様も丁寧に若松文が描かれている（カラー図版9・10）。高台内に蒔印で「仁清」の銘がみられることから、野々村仁清作の可能性ある。野々村仁清は京焼の陶工で、仁和寺門前に窯を開き、明暦（1655～1658）から延宝（1673～1681）にかけて茶陶を中心に焼いていた。8は唐津系陶器呉器手碗である。口縁部に緑釉が施されているものは、あまり出土例が少ないタイプのものである。

図98-99は、土坑920から出土したものである。遺物の組成から、幕末期の一括廃棄土坑と思われる。98-1～4は瀬戸磁器染付端反碗・蓋である。この遺構からは、1・2のような中碗タイプのもと3・4のような小碗タイプが出土しており、小碗タイプが多くみられた。6～8・10・13は肥前磁器である。6・7は染付碗で、6は高台U字状高台高低タイプである。器厚は薄く、呉須の発色も良好で、文様も丁寧に施されており、有田内山の製品と思われる。8は染付鉢である。これも6と同様に有田内山の製品と考えられる。文様は、外面に筆・硯などの文具文様が丁寧に描かれている。10は三叉青磁鉢である。

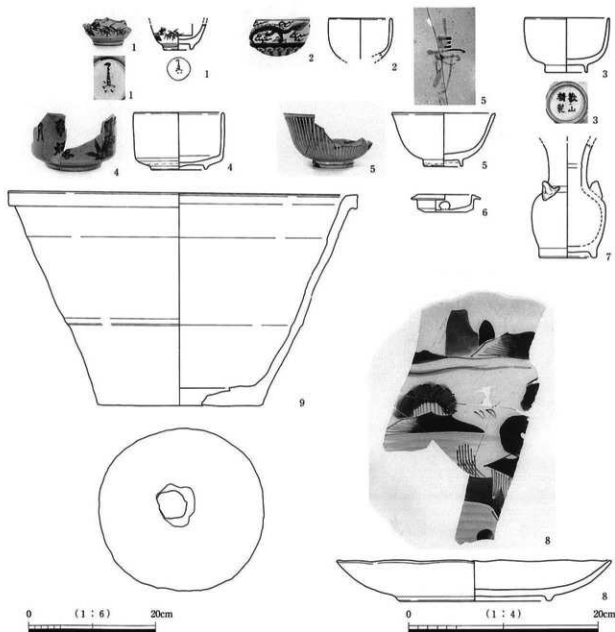


図93 区画3出土遺物 (10) 土坑1367 (9) 包含層 (1~8)

内面には半菊状の竈を施している。17世紀末～18世紀初頭のもので、伝世品と思われる。11は備前焼型押し小皿である。表面に型押しによって雷文帯と龍文が施されている。99-2・3は京・伊賀・信楽焼系製品である。2は水滴、3は餌鉢であり、他にも、鬘水入れや灯明具などの調度具が多く出土している。

落込 89 から出土した遺物は、図 100-1～4である。18世紀後半～19世紀前半頃の遺物が出土しているが、2・3のような17世紀代の年代観をもつものも出土している。3は肥前磁器色絵皿である。表面に桜樹文が描かれている。南川原窯の辻窯の製品と思われる。

包含層からは、土師質土器製の鳩竈（図版 84-12）が出土している。掲載していないが、他の区画からも数個体出土している。

区画 5（図 101～109）

区画 5 からは、17世紀前半～19世紀中頃の遺物が出土している。

図 101-1～3は溝 148 から出土したものである。1は初期伊万里染付碗である。体部しか残っていないが、おそらく天目型を呈する。外面は竈を施し、その部分に寿文・草文を入れている。1610～1630年頃のものである。2は瀬戸・美濃焼天目茶碗である。高台は削り出し高台で、藤澤良祐氏の連房式登窯編年第1段階第3小期に属する（藤澤 1999）。これら出土遺物を概観すると、溝 148 の出土遺物は17世紀前半と考えられる。

図 101-11 は溝 222 から出土した御深井碗である。18世紀前半のもので、見込みに摺絵で花文が施されている。本調査においての御深井の出土はこれ1点のみである。

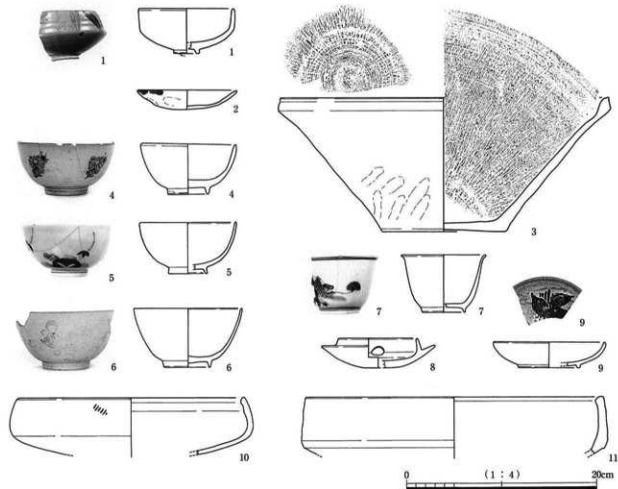


図94 区画4出土遺物〈1〉 溝221（4～11）・261（1～3）

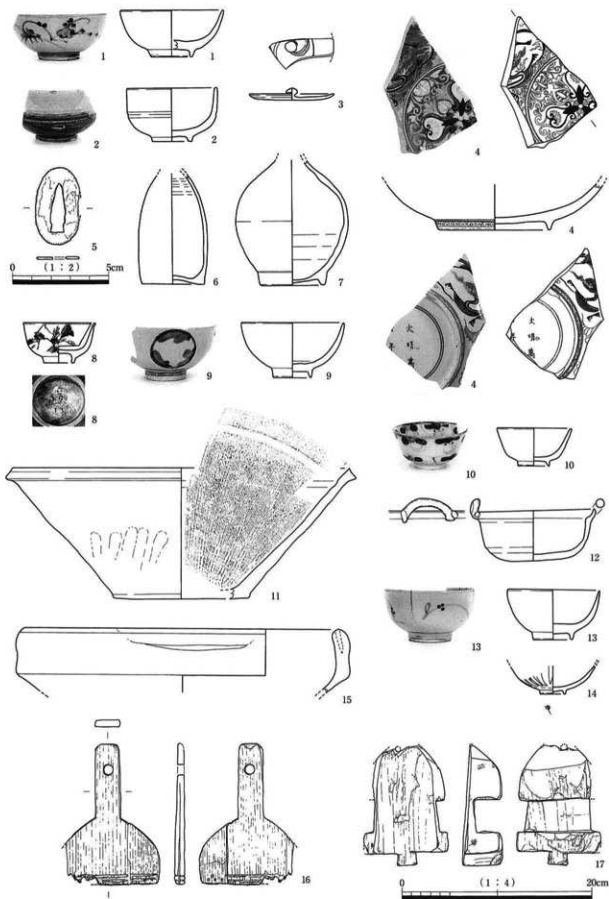


图95 区画4出土遺物(2) 溝194(1~7)・262(8~12) 井戸22(13~17)

図101-12~18は溝229から出土したものである。16は産地不明磁器ゴム版絵付け鉢である。文様はゴム版絵付けで施されている。ゴム版絵付けは、明治中頃から使用されたといわれているが、実用化されたのは大正末~昭和初期からである(成瀬2001)。このことから、16の鉢も20世紀初頭頃のものと思われる。また、この他にも数点ゴム版絵付けのものがみられた。16以外には、13~15の肥前磁器製品が出土している。溝229の出土遺物を概観すると、18世紀後半~20世紀初頃と考えられる。

図101-22~26は、井戸32から出土したものである。22~25は肥前磁器である。22は肥前磁器染付

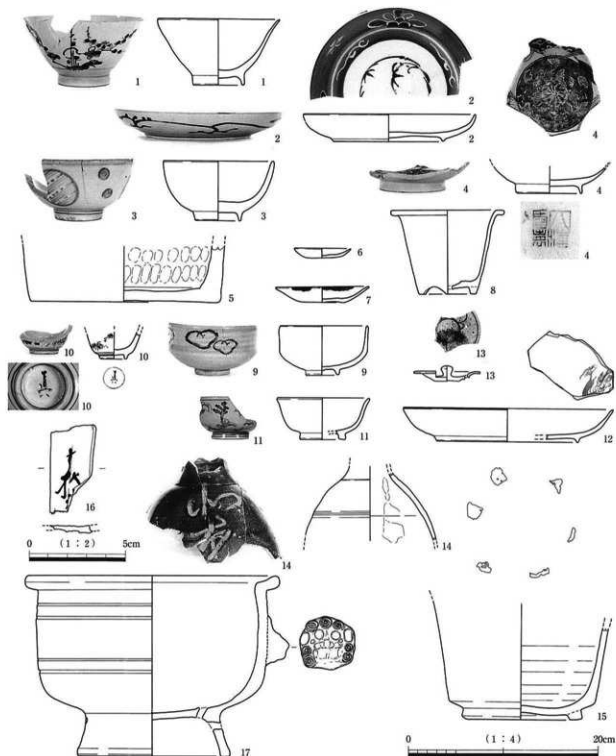


図96 区画4出土遺物(3) 井戸20(1~8)・21(10~15)・23(9)・24(16・17)

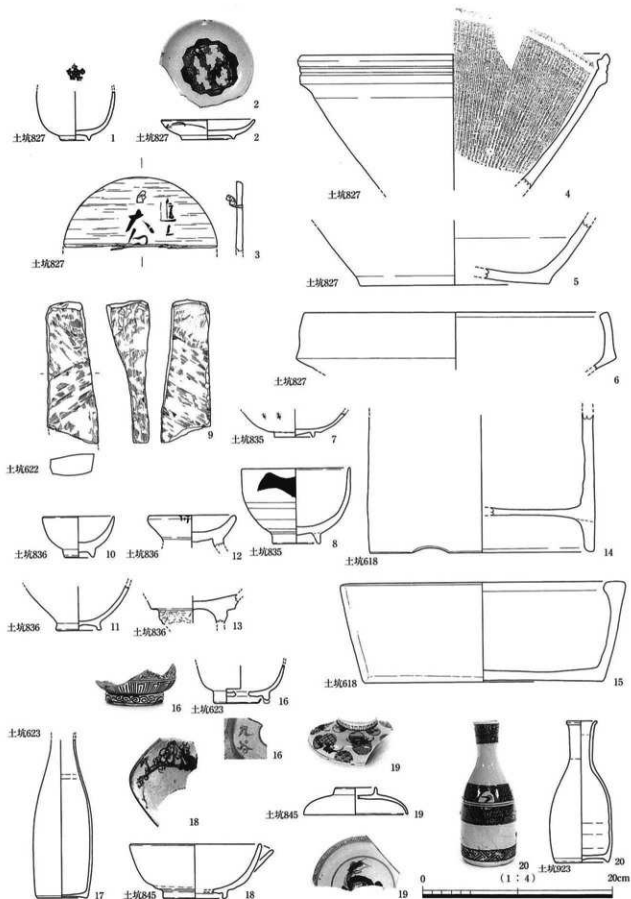


图97 区画4出土遺物(4) 土坑618・622・623・827・835・836・845・923

碗であり、ハの字状高台碗のタイプである。23は肥前磁器染付蓋である。文様は丁寧に唐草文が施されている。24は青磁香炉、25は染付段重である。井戸32の年代観は18世紀後半と考えられるが、肥前磁器広東型碗が出土していないことから、18世紀後半でも中頃に近いと思われる。

図102は井戸18から出土したものである。1～4は肥前磁器染付碗である。2～4は高台U字状高台高低タイプである。4の文様は雪輪草花文で、「くらわんか手」のタイプのものである。7は産地不明植木鉢である。胎土の色調は7.5Y8/2灰白色を呈し、底部に三脚痕がみられる。11は丹波焼甕である。体部は欠損しているが、口径の大きさ(28.8cm)から中甕クラスのものと思われる。井戸18の出土遺物を概観すると、18世紀中頃に考えられる。

図103は井戸17から出土した遺物である。1～4は肥前磁器染付である。1・2は肥前磁器広東型碗である。どちらも器厚は薄く、文様も丁寧に描かれており、有田内山の製品と思われる。4は染付鉢である。型押しによって楕円状に成形され、口縁部は波状を呈する。文様は丁寧に描かれおり、一部金彩痕がみられる。また、これと同じものが区画5の土坑654(図105-10・11)から出土している。3の

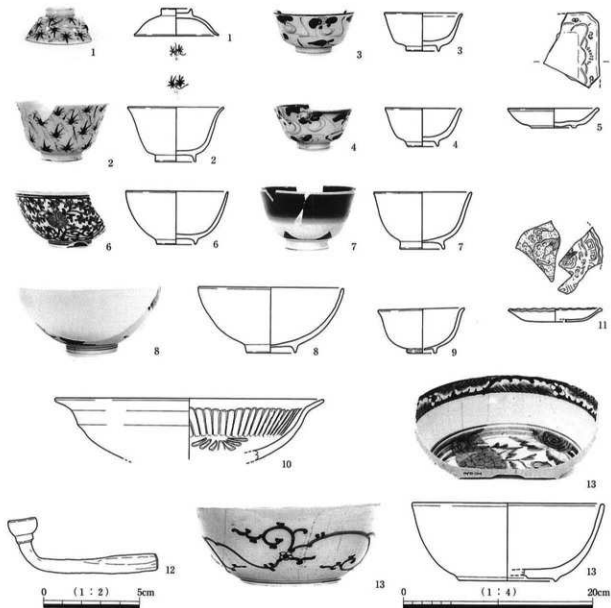


図98 区画4出土遺物 (5) 土坑920

染付皿は器厚が薄く、文様も丁寧に描かれている。漆継ぎ痕があった。6は瀬戸・美濃焼片口である。高台無軸で、見込みに2カ所、目跡がみられた。また、この井戸17からは、瀬戸磁器端反碗は出土していない。井戸17の出土遺物の年代観は、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

図104-9～15は土坑656出土の土師質土器皿7枚である。ロクロ成形の皿で、全て口径約11cm(3寸半)のサイズである。地鎮に関係した遺構であることが考えられる。16は京焼系磁器染付灰落しである。口縁部内面に段が見られることから、蓋を伴うものと思われる。高台は蛇ノ目凹型高台である。文様は楼閣山水文を施している。

図105は土坑654から出土したものである。18世紀後半～19世紀初頭の一括廃棄土坑である。1・3・4・7～11は肥前磁器である。3は染付広東型碗であるが、器厚は薄く、文様も丁寧に描かれている。4は広東型蓋で、これも丁寧に文様が描かれている。3・4とも有田内山の製品と思われる。7・8は染付筒型碗であり、文様が少し異なるが、これらによく似た文様の筒型碗が数点出土している。10・11は染付鉢である。これら以外にも同遺構から2点出土し、井戸17(図103-4)で1点出土していることから、5客組で使用されていた可能性がある。2は京・伊賀・信楽焼系碗である。高台内には「萬吉」の銘がみられる。この遺構からは、遺物が大量出土しており、産地別組成によれば肥前磁器が半数を占めていた。

図106-13の硯石は土坑672から出土しており、裏表共に非常によく使い込まれており、厚みが3mmになっている部分がある。

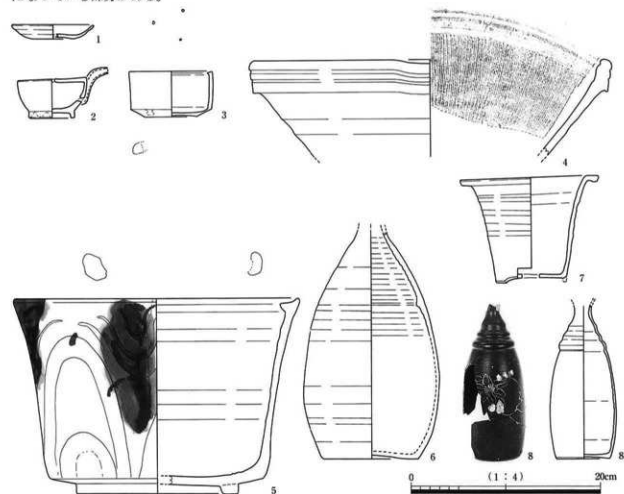


図99 区画4出土遺物(6)土坑920

図107-10は落込92から出土した大型の牛の人形である。牛は民間信仰上様々な祈願を掛ける対象になる。区画2(図82-28)や、図版84-25の他にも数点出土している。

図108・109-1～5は落込91の出土遺物である。108-2は瀬戸磁器色絵脚付輪花鉢である。表面に銅版摺で舞妓姿の女性や桜などの花木文様が施されている。底部に「JAPAN」の銘がみられ、おそらく海外向けに造られたものと思われる。108-3・4は産地不明磁器染付碗であり、文様は銅版摺による。108



図100 区画4出土遺物(7) 落込59(5~7)・89(1~4) 包含層(8~19)

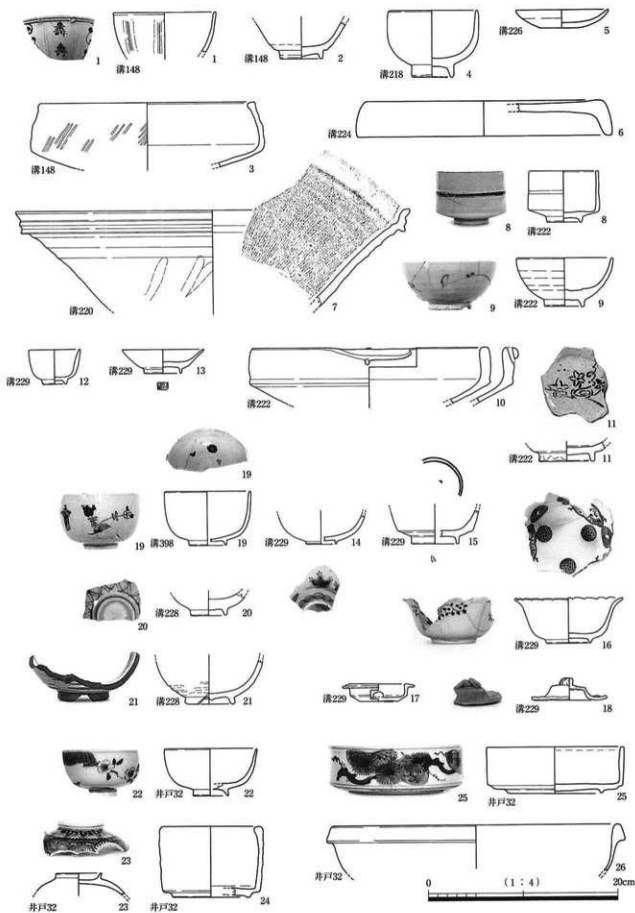


图101 区画5出土遺物 (1) 清148・218・220・222・224・226・228・229・398 井戸32

— 5・8 は肥前磁器色絵端反碗・蓋である。5 は見込みの蛇ノ目刺ぎ部にも色絵文様が施されている。
 108—9・10 は京焼系磁器染付輪花鉢である。これ以外にも3点出土しており5客組の可能性ある。
 109—4 は丹波焼播鉢であり、高台以外に鉄軸を施している。この遺構から出土している丹波焼播鉢は光沢のある鉄軸を使用している。

区画6 (図110~113)

区画6からは17世紀前半~19世紀末の遺物が出土している。

図110—2~6は溝399からの出土遺物で、3は溝石列裏込から出土し、2・4~6は溝内から出土したものである。17世紀中頃~19世紀中頃のものが出土している。3は京・伊賀・信楽焼系色絵碗である。半球型を呈し、赤絵と緑色釉で丁寧に菊文を施している。4は京焼系青磁鉢である。型作り成形で

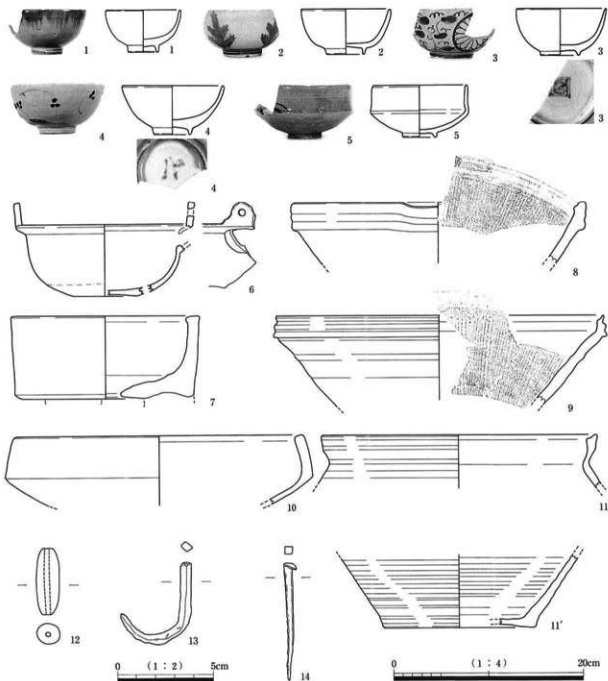


図102 区画5出土遺物(2) 井戸18

あり、内面に指押え痕がある。これと同タイプのもので、三田焼の三輪明神窯で出土している。5は肥前磁器染付碗である。筒型腰張碗タイプである。6は備前焼皿である。表面の文様は型押しによる。出土遺物を概観すると、溝石列裏込から出土した遺物は、3の京・伊賀・信楽焼系色絵碗の他に、肥前磁器染付広東型碗などがみられることから、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。溝399から出土した遺物は、5の肥前磁器染付碗は17世紀中頃のものであるが、中心は18世紀後半～19世紀中頃のもので

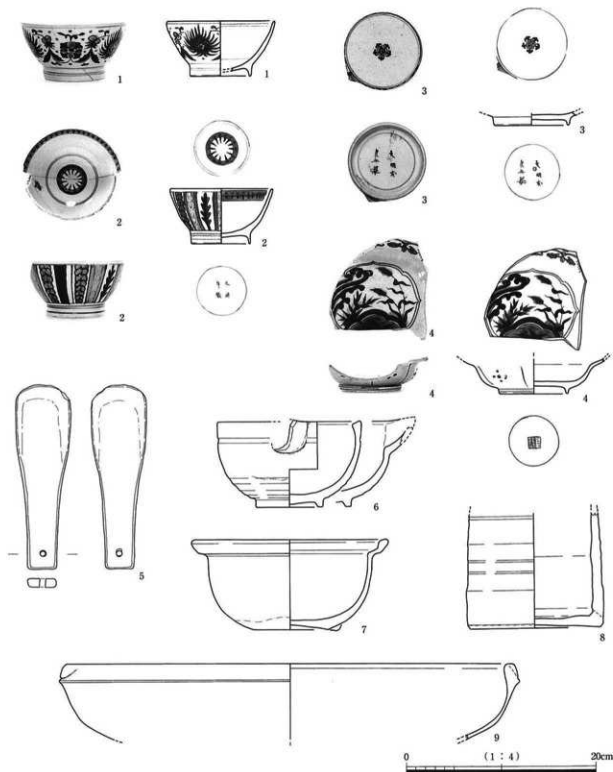


図103 区画5出土遺物 (3) 井戸17

みられた。

図 111-1～3は土坑 601 から出土したものである。1・3は肥前磁器である。1は染付碗、筒型腰張碗タイプである。3は染付皿である。表面に吹き墨で文様を施している。2は唐津系陶器碗である。体部に透明釉、高台脇から下には錆釉を施している。土坑 601 の出土遺物を概観すると、17 世紀前半～17 世紀後半と考えられる。

図 111-7は、土坑 599 出土の肥前磁器染付碗である。高台断面 U 字状で、高台高が高く、高台径が狭いタイプのものである。高台内に「麻」の銘がみられる。類似資料が 1994 年度モノレール調査溝 2 出土遺物（モノレール調査報告書 P. 44 図 33-1）として報告されている。「麻」の文字の上部に顔が呉須で描かれている。

図 112-1～8は、落込 86 から出土したものである。1は中国製青花小杯である。文様は丁寧に花文が施されている。2・3・5・6は肥前磁器である。2は染付小杯で、外面に花文が施されている。3

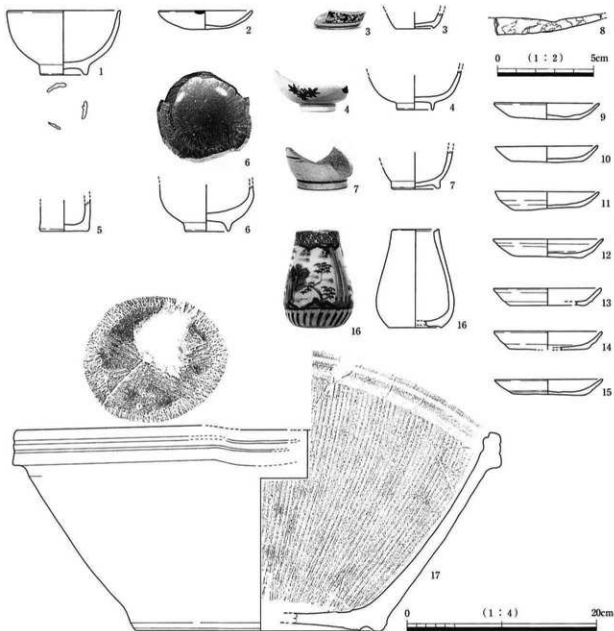


図104 区画5出土遺物(4) 土坑644(8)・656(9～15)・659(16・17)・683(1～2)・763(3～7)

は青磁碗で、5は白磁碗である。4は唐津焼皿である。高台内の削りは丁寧に施されている。7は唐津系陶器刷毛目文鉢である。胎土は赤褐色系を呈し、白色釉で刷毛掛けし、緑色釉・鉄釉で文様を施している。8は丹波焼播鉢である。口縁断面は箱型を呈し、体部外面には指押え痕がみられる。落込86の出土遺物を概観すると、17世紀前半～17世紀後半と考えられるが、肥前磁器碗高台U字状、高台高高、高台径広が出土していないため、17世紀後半でも中頃に近い段階と思われる。

図112-9～14は、落込76からの出土遺物である。この遺構からは肥前磁器碗東型碗が出土しておらず、出土遺物は18世紀中頃のものが中心に出土している。9は肥前磁器染付輪花小鉢である。文様は丁寧に施され、呉須の発色も良好である。11は肥前磁器染付半球型碗である。9と同様で、文様は丁寧に施され、呉須の発色も良好である。14は丹波焼鉢である。高台皿付以外に鉄釉が施されている。

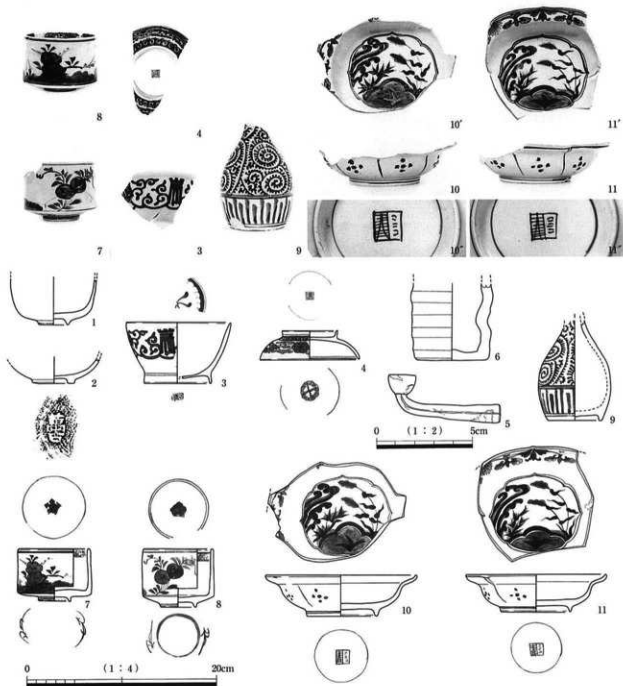


図105 区画5出土遺物〈5〉 土坑654

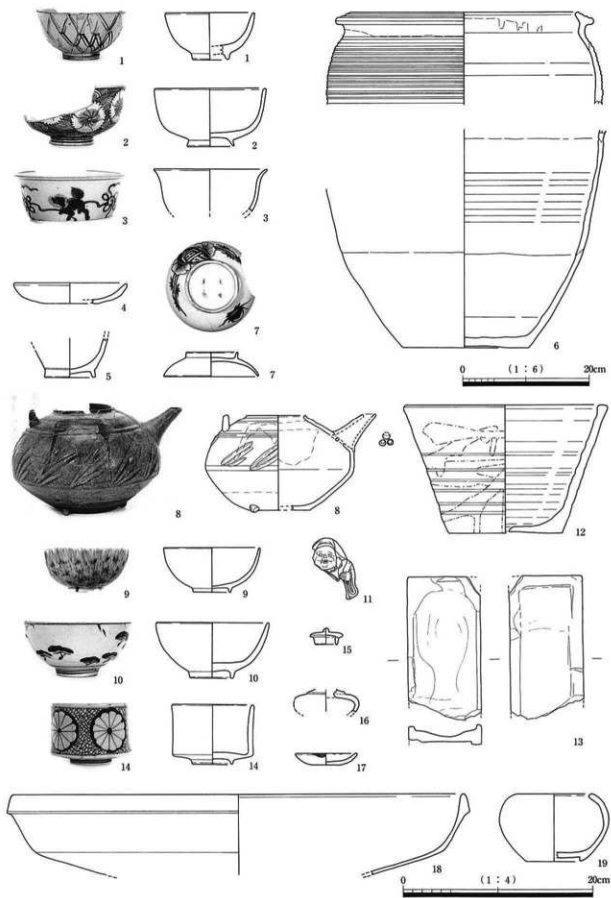


图106 区画5出土遺物 (6) 土坑642 (7·8) · 645 (9~11) · 672 (12~19) · 677 (1~5) · 800 (6)

図113-1~20は、落込61の出土遺物である。19世紀前半~中頃までの遺物が大量に出土しており、遺物の様相から、幕末期の一括廃棄遺構と思われる。3・5は、瀬戸磁器端反碗である。3は染付であるが、焼成不良で白く変色している。5は色絵で、赤絵・青色釉で花文を施している。6は肥前磁器染付広東型碗である。文様は外面に剣先文、見込みに瓢箪文がみられる。肥前磁器碗は、この他に、端反碗やハの字状高台碗が出土しているが、瀬戸磁器碗の方が6：4の割合で多かった。7は肥前磁器染付鉢である。内面全体に輪花文を施している。17世紀中頃の年代観をもつもので、伝世品と思われる。15~19は柿釉灯明皿である。落込61の出土遺物の年代観は、18世紀初頭と考えられる。

26は備前焼播鉢である。外面調整は丁寧に作られており、底部には高台を呈する。外面には火拂痕がみられる。乗岡実氏の編年近世3期bに属する(乗岡2000)。

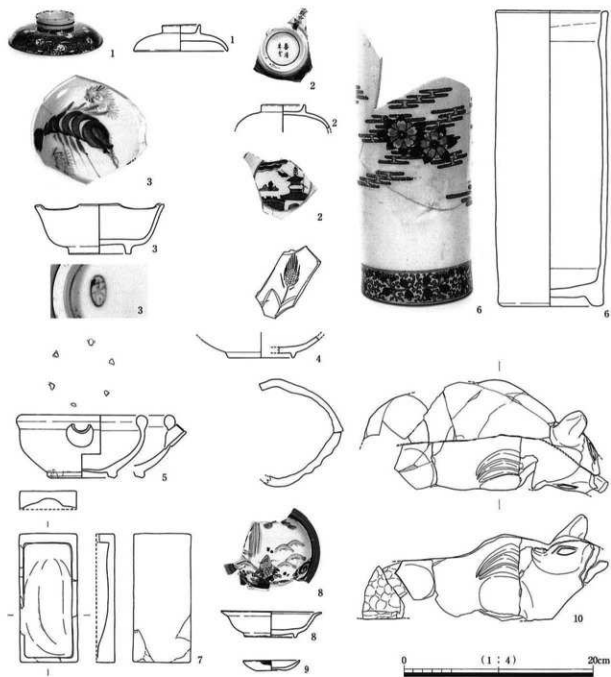


図107 区画5出土遺物〈7〉 落込60(1~7)・92(8~10)

図 113-25 の土師質土器植木鉢は、焼成前に底部穿孔しており、植木鉢専用器である。27 は備前焼碗である。押し型によって縮緬状の文様を施している。高台内には「桃蹊堂備前」の銘がみられる。桃蹊堂は現在でも窯元があり、大正 2 年 (1913) に開窯といわれている (上西 1997)。器種は違うが、同じ銘をもつものが伊丹郷町遺跡の A-6 区 SX244 から出土している (川口他 2001)。

区画 7 (図 114~120)

区画 7 は、17 世紀前半~19 世紀後半までの遺物が出土している。この区画からは、17 世紀中頃、19 世紀前半、19 世紀中頃~19 世紀後半の良好な一括廃棄遺構を検出した。

図 114-6~26 は、溝 293 から出土したものである。6 は瀬戸磁器染付小杯である。見込みには「金口」の文字がみられる。7・8 は肥前磁器染付碗である。7 は小広東型碗であり、文様は楼閣山水文が

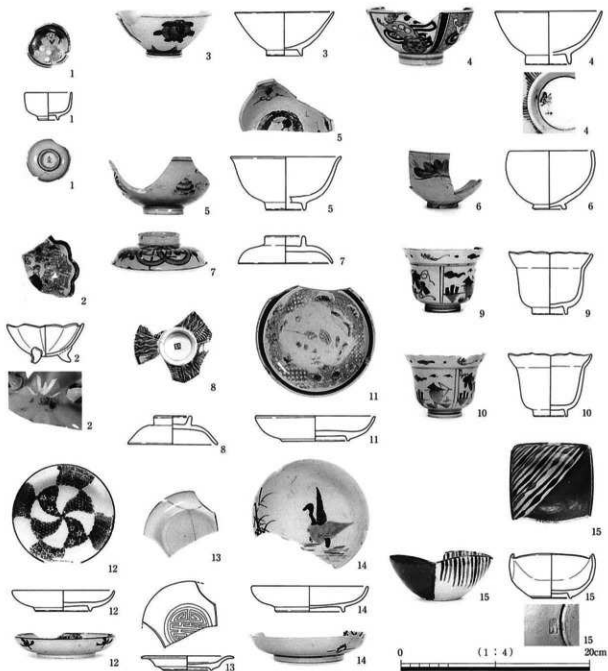


図108 区画5出土遺物 (8) 落込91

施されている。8は端反碗で、外面には瓢箪文が描かれている。9は肥前青磁碗である。高台無軸で、17世紀中頃の年代観をもつものである。12~14は肥前磁器染付端反碗の蓋である。12・13は同器形で文様も同じなところから、組物の可能性がある。17は瀬戸白磁木型打込皿である。見込みに「寿」陰刻がみられる。17以外にも、10個体出土している。18は肥前磁器染付皿である。見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施されている。26の丹波焼鉢は筒型状を呈し、全体に鉄釉を施している。溝293の出土物を概観すると、17世紀中頃(9・10・18)と、19世紀前半~19世紀中頃(6~8・12~17・18~26)の年代観をもつものものとに分けられることから、2時期が与えられる。

図115-1~11は、溝397から出土したものである。1・2は京焼系磁器染付碗である。これらと似たタイプのものが、三田焼の三輪明神窯で出土している。1は丁寧に島梅樹文が描かれている。2には焼継ぎ痕がみられる。6はヨーロッパ製磁器転写皿である。ストーンチャイナといわれる軟質磁器である。銅版転写によって文様が施され、文様は柳・唐子・樓閣などの東洋風で、ウイローパターンといわれるものである。大量に生産され輸出されたものであるが、日本においては、武家屋敷跡・公家町跡な

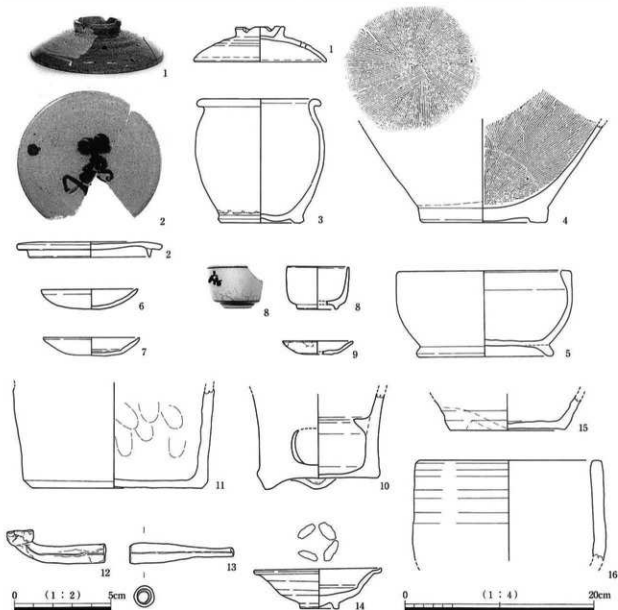


図109 区画5出土遺物(9) 落込91(1~5) ビット989(11)・998(8~10)・1006(6・7) 包含層(12~16)

どで出土しているが、量は少ない。鋳部裏面に Triple stilts (三カ所目跡) がみられる。伝世品との照合によって、オランダ製と考えられる。また、破片には漆継ぎ痕があった。3・9は瀬戸磁器である。3は染付端碗である。文様は仙芝祝寿文を施している。9は染付木型打込皿である。文様は陰刻で施された草文の上から染付が施されている。7は産地不明磁器銅版摺蓋である。文様は銅版摺によって施している。溝 397 の出土遺物を概観すると、19 世紀前半～20 世紀初頭と考えられる。

図 115-14 は溝 294 出土の肥前磁器色絵皿である。文様は緑色釉・赤絵・紫色釉・黄色釉で垣根草花文を施している。他の出土遺物を概観すると、19 世紀後半～20 世紀初期と考えられる。

図 116-3・4 は、井戸 38 から出土したものである。3 は肥前磁器染付筒型碗で、文様は花文が施されている。4 は白磁六角皿である。胎土の色調は灰白色を呈する。これら以外にも、肥前磁器染付仏飯具などが出土しており、井戸 38 の出土遺物を概観すると 18 世紀後半と考えられる。

図 116-5～9 は、土坑 1042 の出土遺物である。5 は肥前磁器染付碗である。筒型腰張碗タイプであり、高台内に「大明」の銘がみられる。6 は瀬戸・美濃焼碗で、全面施釉されている。7 の唐津焼瓶の外表面全体に藁灰釉が掛けられている。8 の肥前磁器染付壺外表面には草文が描かれている。これら以外にも、肥前磁器染付碗などが出土している。土坑 1042 の年代観は、肥前磁器三角高台碗や丹波焼播鉢の口縁断面三角形のものが出土していないことから、17 世紀中頃と考えられる。

図 117 は落込 66 から出土した遺物である。1～8・10・12 は肥前磁器である。肥前磁器は 18 世紀後半～19 世紀前半のものが中心に出土している。4・5 は肥前磁器染付小杯であり、文様は菊文が施されている。これら以外にもあと 1 個体出土している。7 は肥前磁器染付蓋であり、端碗に伴うタイプのものである。12 は肥前磁器染付小瓶である。底部無釉で、糸切り痕がみられる。外表面には草文が施されている。13 は京焼系青磁香炉である。釉厚は厚く、青緑色を呈する。15 の丹波焼大甕は口径 43.2cm を測る。二次焼成を受けたのか、全体的に灰色に変色している。18 世紀前半のものと思われ、他の遺物の年代観から伝世品と思われる。落込 66 の出土遺物を概観すると、瀬戸磁器は出土しているが極少量であることと、区画 2 の土坑 26 と様相が似ていることから、19 世紀前半の遺構と考えられる。

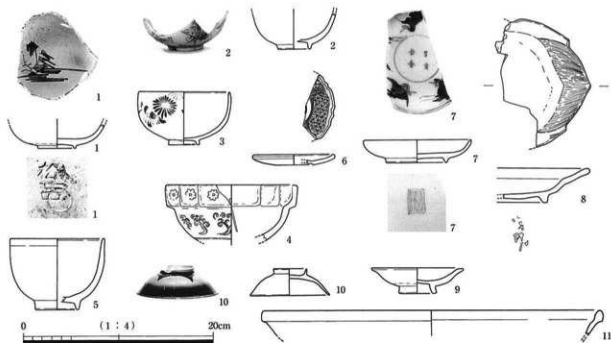


図110 区画6出土遺物 <1> 溝152 (1)・399 (2~6) 井戸13 (9~11)・37 (7・8)

図 118-18 は落込 65 から出土した京焼系土瓶である。外面に白色釉を厚めに掛けている。注ぎ口下に呉須で「道八」の銘を入れている。

図 119・120-1~16 は、落込 103 の出土遺物である。119-2 は産地不明磁器銅版摺碗である。文様は銅版摺で酸化コバルトによって施されている。119-6 の瀬戸クロム青磁皿は鉄絵で鶴文、白色釉の上絵付けで雲文を施している。119-8・9 は瀬戸磁器木型打込皿である。8 は見込みに陰刻された花文の上から呉須を施されている。9 は見込みに陰刻された鳥波文部に呉須を施している。119-10 の肥前磁器色絵皿は口縁部を輪花状に呈する。文様は呉須で下絵を施した上から、赤絵と金彩で上絵付けをしている。文様は宝尽くし文である。119-12 は肥前磁器色絵皿である。115-14 と同じタイプのものである。120-5・6 は万古焼系急須である。5 は後手形タイプであり、120-4 の蓋はこれに伴うものである。

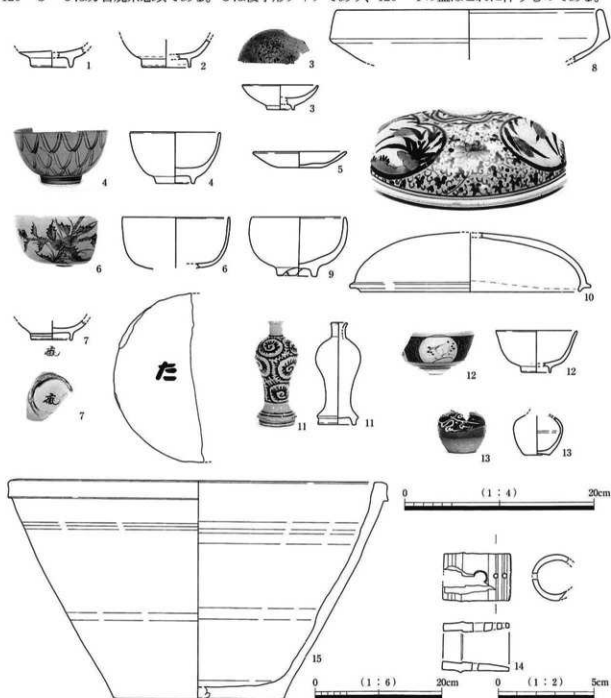


図111 区画6出土遺物(2) 土坑415(11~14)・435(15)・598(9・10)・599(4~8)・601(1~3)

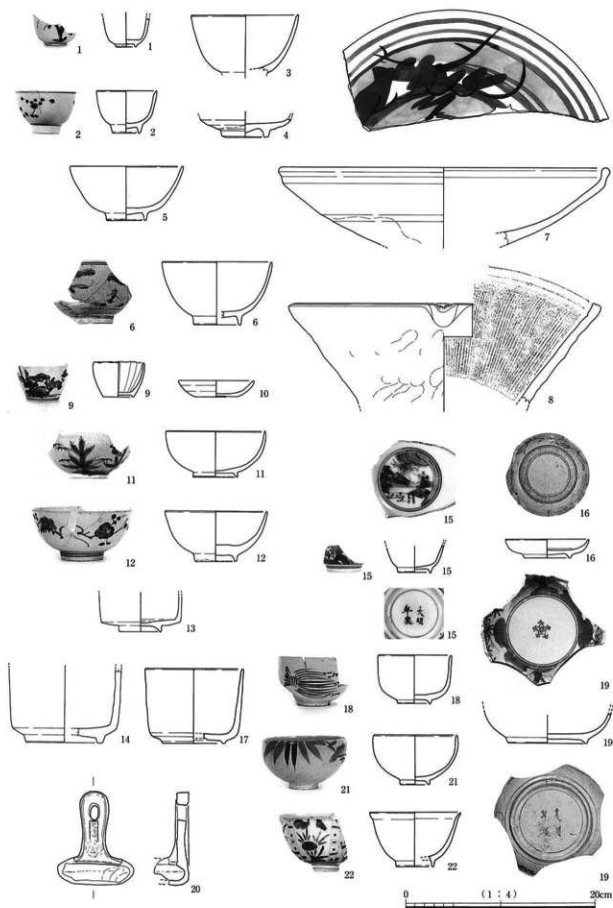


图112 区画6出土遺物 (3) 落込72 (15~22)・76 (9~14)・86 (1~8)

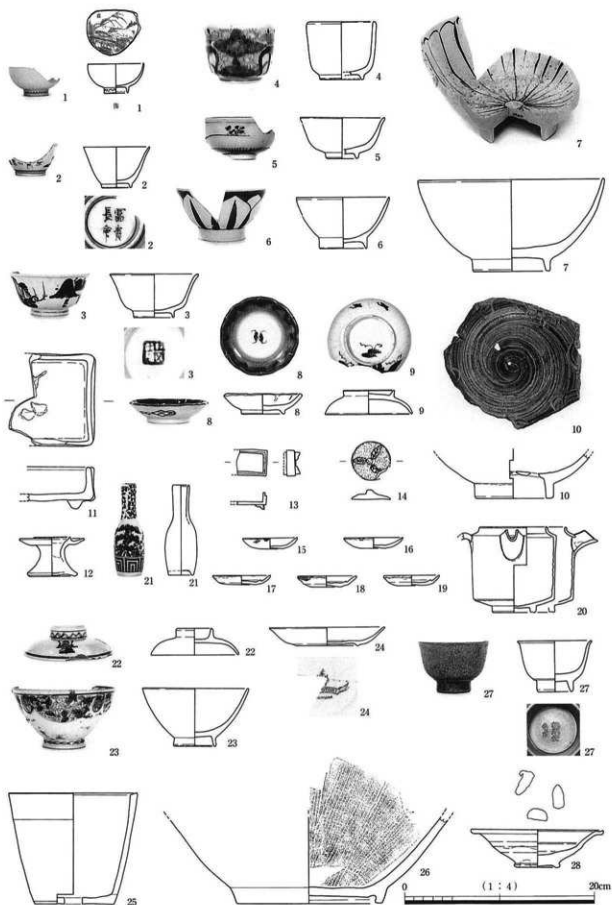


図113 区画6出土遺物(4) 落込61(1~20)・83(21~25) ヒット727(26) 包含層(27・28)



图114 区画7出土遗物(1) 满145(1·2)·293(6~26)·312(3~5)

6は横手形タイプのものであり、胎土は暗赤褐色を呈し、やや光沢がある。注ぎ口下には刻印がみられる。8の万古焼系土瓶は八角に型押しした体部の上に、型押しした龍文を貼り付けている。これに伴う蓋が120-7である。120-14は三河高浜焼の七厘であり、引き戸を閉めると「三河名産製造組合角谷百太郎」の印がある。もう1個体同じ三河高浜焼の七厘と思われる個体が、同遺構から出土している。これら以外にも、瀬戸磁器端反碗や光沢のある鉄軸を施した丹波焼播鉢など大量に遺物が出土している。落込103の出土遺物を概観すると、クロム青磁や酸化コバルトなどの製品がみられることから、19世紀中頃～後半と考えられる。

図版84-21は溝145出土の手捻り、京都産と思われる土人形である。胎土は灰白色で精緻なものである。出土陶磁器が17世紀後半～18世紀初頭を示しており、このタイプの土人形の年代を示す良好な資料である。

区画8 (図121～125)

区画8からは17世紀前半～19世紀後半の遺物が出土している。17世紀中頃から後半の一括廃棄土坑が検出されている。

図121-1～14は、溝324の出土遺物である。1は肥前磁器染付碗である。筒型腰張碗タイプで、外面に草花文が施されている。2の肥前白磁紅皿は型押し成形、外面の一部無軸である。3は肥前青磁染付筒型碗であり、見込みにコンニャク印判で五弁花文を施す。4の肥前磁器染付碗は高台三角形タイプ

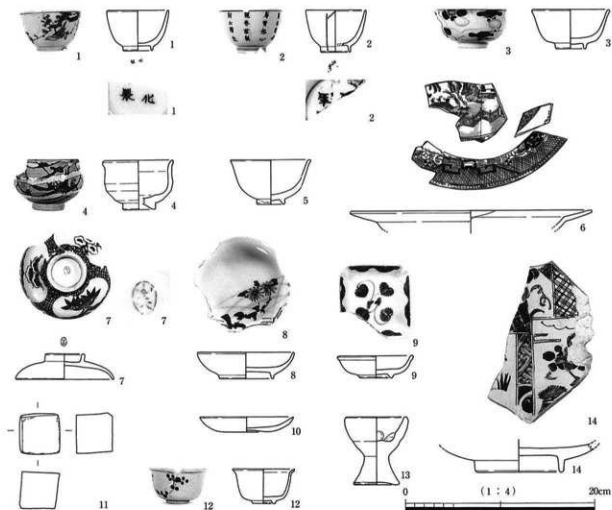


図115 区画7出土遺物 (2) 溝294 (14)・298 (12・13)・397 (1～11)

であり、外面に松竹梅文を施す。5の瀬戸・美濃焼鉢は全体に鉄軸を施し、高台無軸である。6は備前焼鉢で、外面に火櫛痕がある。7・8は京・伊賀・信楽焼系碗であり、7は小杉碗、8は端反碗タイプで、見込みに貝須で圏線を描き、白色釉で花文を施す。9は肥前青磁染付蓋、10は肥前磁器染付鉢である。初期伊万里製品である。溝324の出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられるが、肥前磁器広東型碗や端反碗が出土していないことから、18世紀後半でも中頃に近い段階と思われる。

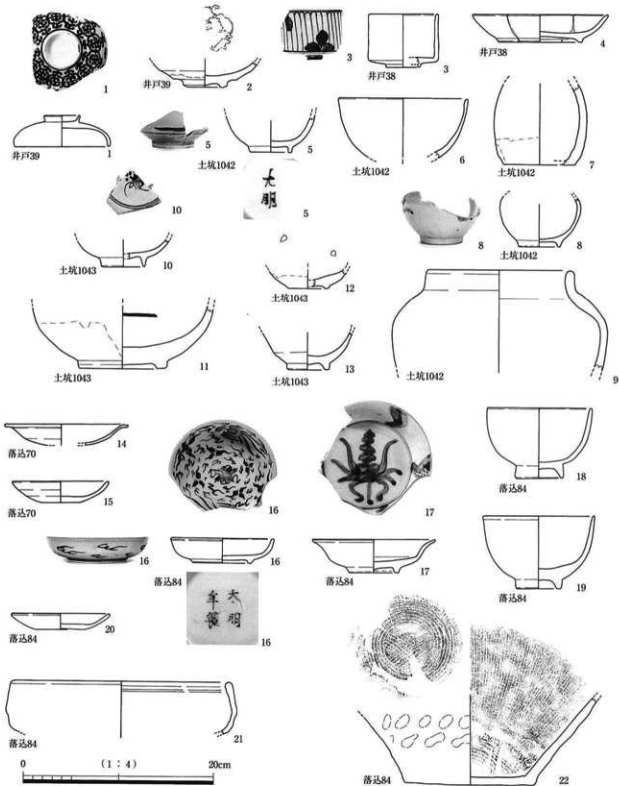


図116 区画7出土遺物(3) 井戸38・39 土坑1042・1043 落込70・84

図 121-17~23 は、溝 325 から出土したものである。17 は肥前磁器染付碗である。高台無軸碗タイプであり、外面に草文が施されている。18・19・21 は唐津系陶器碗である。18 は銅緑青釉碗であり、内野山窯の製品と思われる。19 は腰折れ碗タイプで、体部に灰釉を掛けている。21 は刷毛目文碗であり、赤褐色系の胎土に白色釉で刷毛目文様を施している。22 は瀬戸白磁木型打込皿である。23 の備前焼色絵型押皿は、型押しされた文様部に黄色釉、緑色釉を施している。これと同タイプのものが備前市天保窯跡で出土している⁴⁾。図版 84-26 は上白の破片である。溝 325 の出土遺物を概観すると、17 世紀前半~19 世紀中頃のもの断続的ではあるが出土していることから、17 世紀前半~19 世紀中頃と考えられる。

図 122-10~20 は、土坑 1267 から出土した遺物である。17 世紀中頃~17 世紀後半の一括廃棄土坑である。10~14・16・18 は肥前磁器である。14 は染付小杯であり、外面に草花文を施す。12 は白磁碗、高台三角形タイプである。10・11・13 は染付碗、筒型腰張碗タイプであり、文様は 10 が一重網目文、11 が草文である。16 は色絵皿であり、赤絵・緑色釉で草花文を施す。18 は白磁皿で、見込みに蛇ノ目

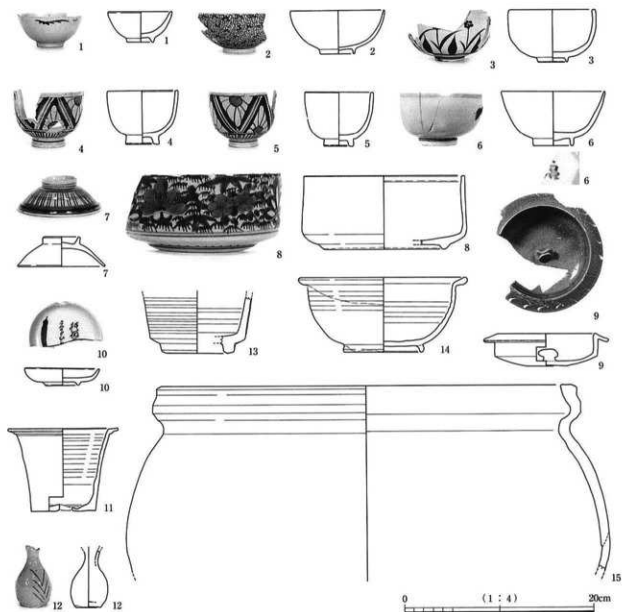


図117 区画7出土遺物(4)落込66



图118 区画7出土遺物(5) 落込65(11~19)・68(2~10)・73(1)

釉刺ぎを施す。15は土師質土器皿である。17は唐津系陶器呉器手碗である。卵手タイプで、高台壘付に目跡痕がある。土坑1267の出土遺物を概観すると、17世紀中頃～17世紀後半のものが出土しているが、肥前磁器碗の高台U字状高台高広タイプや丹波焼播鉢の口縁断面が三角を呈するものがみられないことから、下限は17世紀後半でも中頃に近い段階と思われる。

図123-1は、珉平焼磁器染付小杯である。器形は薄作り、文様は丁寧に草花文を施している。高台内に「珉平」の銘がみられる。珉平は、賀集珉平の名で、兵庫県淡路島に文政年間（1818—1830）に窯を開く。黄色・青色釉を施した小判型皿は多く焼かれ、各地の19世紀代の遺跡から多く出土している。16は焼塩壺である。当調査では焼塩壺の出土数は少なく、概ね18世紀後半頃の遺構から出土している。

図125-3は肥前磁器染付鉢である。蛇ノ目凹型高台で、見込み文様は簡略した環状松竹梅文、内面体部は草花文、外面体部は1本描きの連続唐草文である。高台内に「麻」「森本」の朱書がある。「本」の筆跡の右端の溜りは文字本来のものではないと思われる。この区画8は、絵図資料によると家臣森本邸であり、その関係資料と思われる。

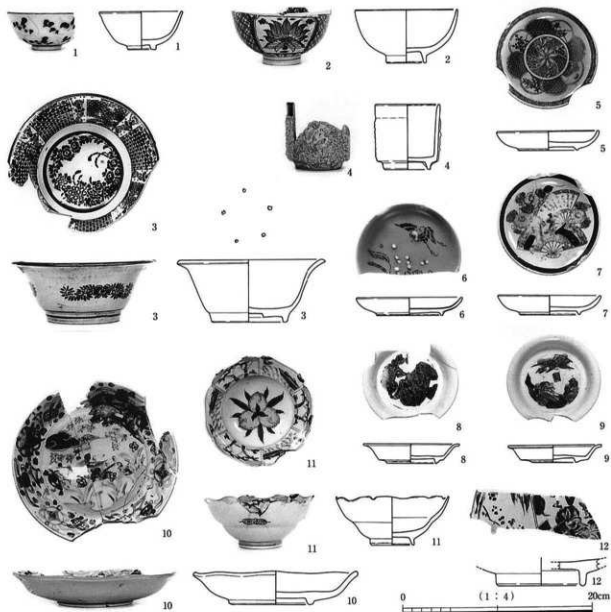


図119 区画7出土遺物〈6〉落込103

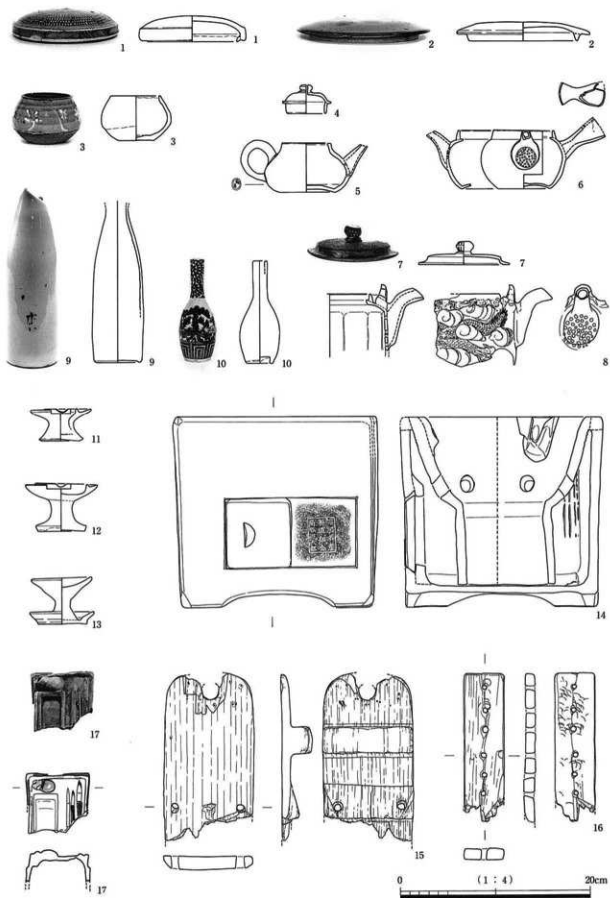


图120 区画7出土遗物 (7) 落込103 (1~16) 包含層 (17)

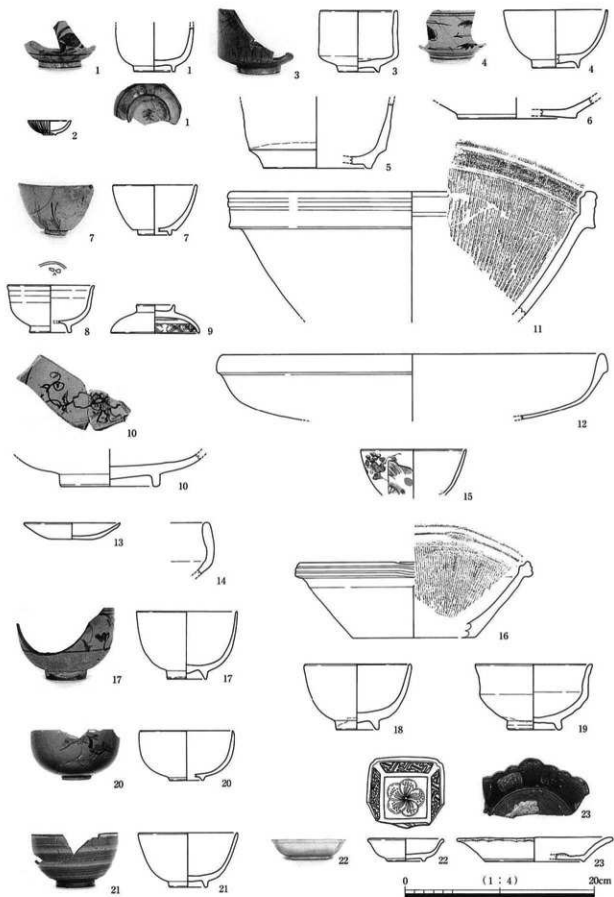


图121 区画8出土遺物 (1) 清324 (1~14) · 325 (17~23) · 364 (15·16)

区画9 (図126・127)

区画9からは、17世紀前半～19世紀後半の遺物が出土している。17世紀中頃の溝326や、18世紀後半～19世紀初頭の井戸29が注目される。

図126-1～6は、溝326から出土した遺物である。1の中国製磁器小杯は端反型を呈し、全面に鉄釉を施している。2の唐津焼胎土目積み皿には、見込みに3カ所目跡がみられる。3～5は土師質土器

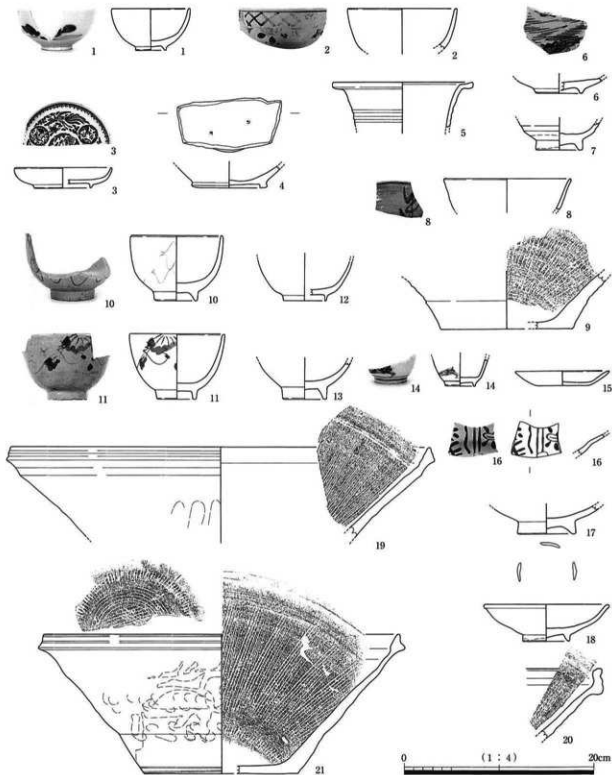


図122 区画8出土遺物 (2) 溝360 (1～5) 井戸36 (6～9) 土坑1041 (21)・1267 (10～20)

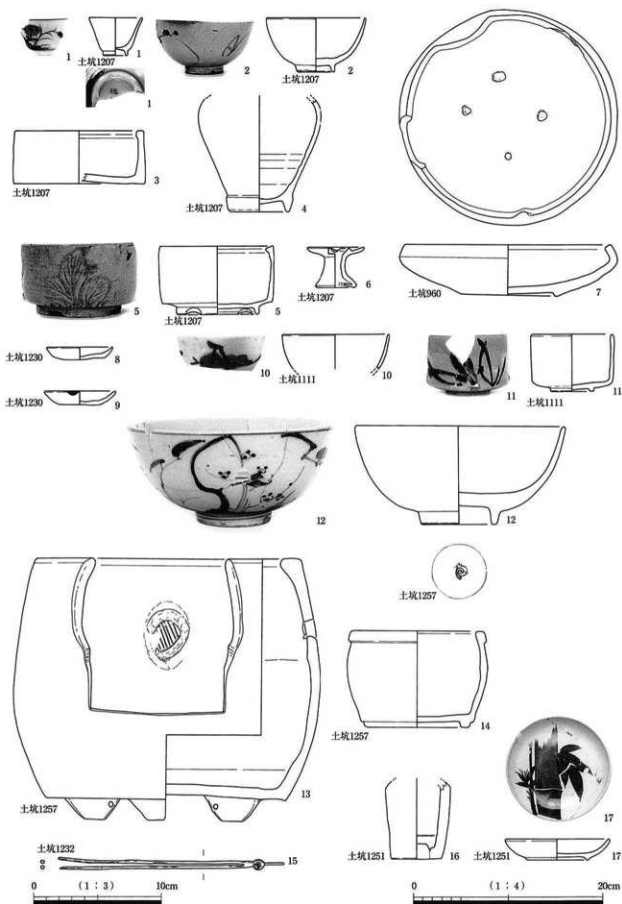


图123 区画8出土遺物 (3) 土坑960・1111・1207・1232・1230・1251・1257

皿である。ログロ成形（4）と手づくね成形（3・5）のものがある。5の手づくね成形の皿はそれ以後の時期に続く手づくね成形の皿とは違い、内面見込みの沈線がしっかり入っており、体部立ち上がりの屈曲もはっきりしている。6は丹波焼播鉢である。播目は5本一単位の櫛描で施しており、外面体部には指押え痕がみられる。溝326の出土遺物を概観すると、唐津焼胎土目積み皿や土師質土器皿など、17世紀初頭の年代観をもつものが中心であるが、6の丹波焼播鉢の形態から、17世紀中頃と考えられる。

図126-8~16・図127-1~5は井戸29から出土したものである。13~15は肥前磁器染付碗である。13・14は高台断面U字状高台低タイプのものである。13は青磁染付碗である。口縁部内面に四方樽文、

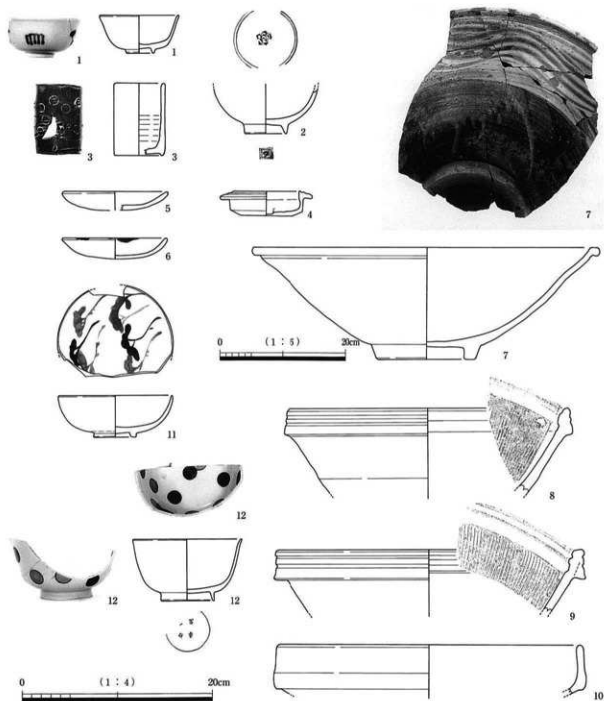


図124 区画8出土遺物 (4) 落込117 (1~10)・118 (11・12)

見込みに草文が施されている。14の染付碗の文様は団扇文である。15の青磁染付筒型碗の見込みに、コンニャク印判で五弁花文を施している。11は肥前磁器染付蓋である。文様は丁寧に松文が描かれている。12の京・伊賀・信楽焼系半球型碗の高台径は、口径に比べて小さい。127-4は木製の把手であり、黒漆の上から金泥にて文様を描いている。井戸29の出土遺物を概観すると、端反碗蓋が出土しており、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

図127-14は京焼系磁器染付瓶である。図128-1の溶着資料の鉢と器形、文様が同じものである。(赤松・渡辺・市本)

2) 窯道具 (図128)

今調査において、116点の匣鉢が大量に出土している。区画3・4と区画8から多くみられた。

1の磁器染付溶着資料は、染付急須と染付鉢片が溶着された状態のものである。この鉢と同資料のものが区画3の落込6から出土している(図88-11)。2はハマであり、素地は陶質である。3はカワセであり、焼成時、製品に高低差をつけ、製品が溶着しないようにするための道具である。今調査からはこれ一点のみである。4・5は皿蓋である。4は方形状を呈し、内面に青磁が溶着している。5も方形状を呈し、内面に匣鉢が溶着している。表面にはカワセの付着痕がみられる。7から16は匣鉢である。10の体部に「上」の刻印がある。13・14の匣鉢内、16の匣鉢の外底部には青磁が溶着していた。17は窯壁である。胎土の色調は灰黄色を呈する。(赤松)

注

- 1) 佐藤隆他 2000 『難波宮址X1』 (財) 大阪市文化財協会
- 2) 積山洋 1998 『天満本願寺跡Ⅲ』 (財) 大阪市文化財協会
- 3) 江戸後期ころから煎茶道が流行し、それに伴い、京都や瀬戸など各窯業地で煎茶道具が焼かれるようになる。三田焼の三輪明神窯からも、急須や小杯、茶入、水注等の煎茶道具が大量に出土している。その量は、全体の生産量の半数を占めている。その中には、高橋道八の「道八」、水越与三衛「与三」、尾形周平の「周平」銘が入った製品がみられる。三田焼に彼らが直接指導したという記録はなく、また、銘の特徴から複数の陶工が銘を入れた可能性が高いと考えられている(石神2002)。おそらく、当時流行したこれらの陶工の影響を受けて生産されたと思われる。
- 4) 備前市教育委員会石井啓氏からご教示を得た。

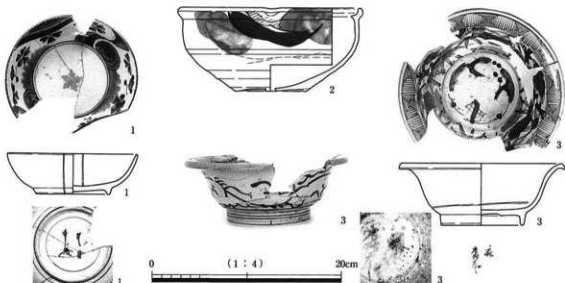


図125 区画8出土遺物 (5) 包含層

参考文献

- 赤松和佳 2002 「近畿3」『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』第12回九州近世陶磁学会資料
九州近世陶磁学会
- 石神由貴 2002 「三田焼に見られる煎茶器について」『伊丹郷町通信』第8号 伊丹郷町研究会
- 上西節雄 1997 『備前焼その技と人』山陽新聞社
- 大平茂 1992 「三田丹波焼播鉢の型式分類と福年」『三田市下相野窯址 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告
書XVⅡ』兵庫県教育委員会
- 川口宏海他 2001 『岡城跡・伊丹郷ⅧⅡ』伊丹市教育委員会
- 成瀬晃司 2001 「10 江戸から東京へ 陶磁器」『江戸遺跡大辞典』柏書房
- 乗岡実 2000 「備前焼播鉢の福年について」『第3回中近世備前焼研究会』発表要旨 中近世備前焼研究会
- 難波洋三 1992 「徳川氏大坂城時代の焙烙」『難波宮址の研究第九』大阪市文化財協会
- 藤澤良祐 1999 「瀬戸・美濃の天目について」『開館20周年記念秋季特別展 茶の湯の銘陶—和物茶碗—』
茶道資料館

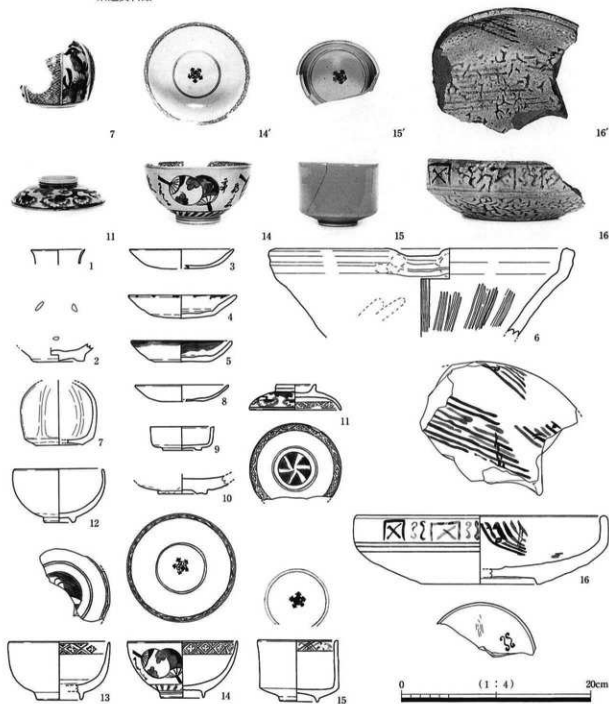


図126 区画9出土遺物 (1) 溝326 (1~6)・375(7) 井戸29 (8~17)

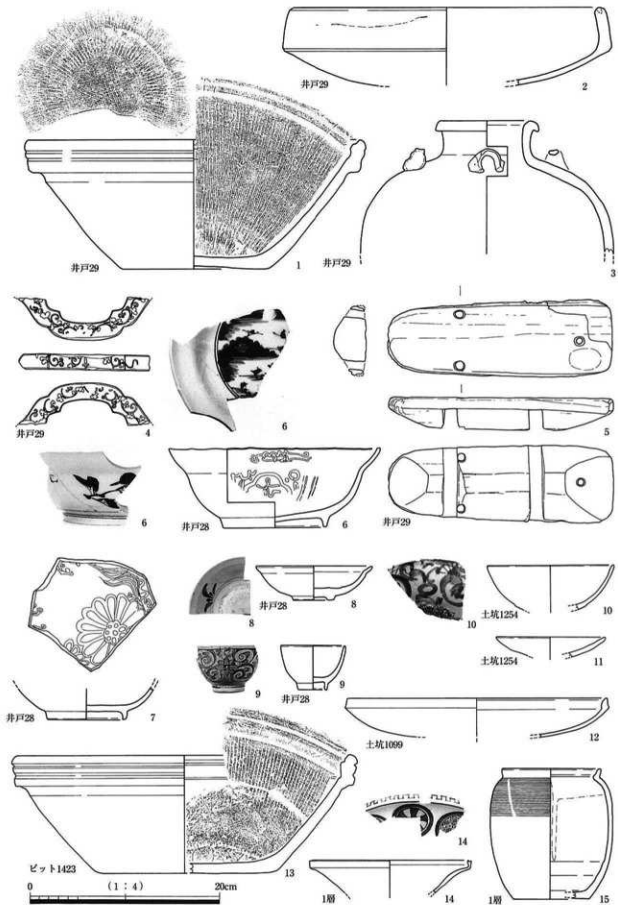


図127 区画9出土遺物 (2) 井戸28・29 土坑1099・1254 ビット1423 包含層

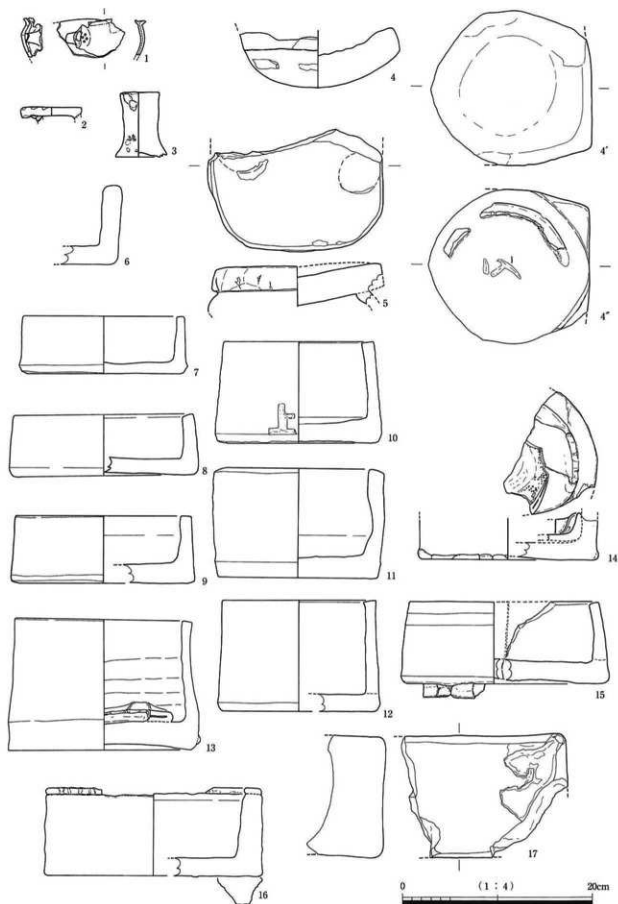


图128 窯道具・浴着磁器

3) 銭貨 (図 129)

近世に鋳造された銭貨は新寛永 (14)・古寛永 (9~13) の他に、十文銭の寛永通寶 (15) が出土している。渡来銭と見られるものは少なく、多くは模鋳銭であった。本銭は永楽通寶 (7) と嘉慶通寶 (8) が出土している。嘉慶通寶は 1769 年初鋳である。

今回見つかった銭貨の多くは江戸後期の遺構・層位に属するが、出土した銭貨の中心は新寛永ではなく模鋳銭と古寛永であった。中でも嘉慶通寶は清朝期の銭貨であり、近世の遺跡でもあまり見ることはないものである。(渡辺)

4) 瓦類 (図 130~136)

軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鳥伏間瓦、道具瓦の他、瓦製品が出土している。出土分布は図 136 の通りであり、調査区全域から出土している。なお、巴紋の巻きの記述は巴頭を始点とし、尾へ向かう方向とした。また、断面図端部のケバは面取を表現している。

軒丸瓦・隅瓦・鳥盆瓦 (図 130~131)

いずれも三巴紋であり、A~C 類の 3 分類でき、さらに、それぞれ瓦范の相違を確認した。

A 類 (図 130 - 1~4) はやや小型の巴頭部を有し、尾とはくびれがある。巴紋は左巻きであり、尾の先端が連結し、圏線となっている。瓦范の違いにより 4 種類を確認した。A-1 類、A-2 類は三巴の頭部

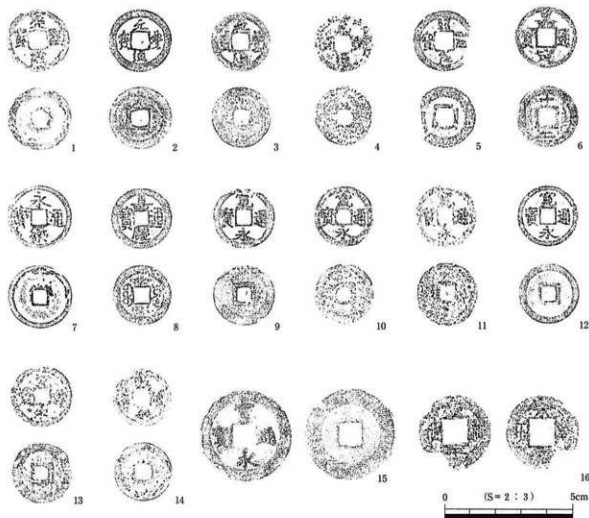


図129 銭貨

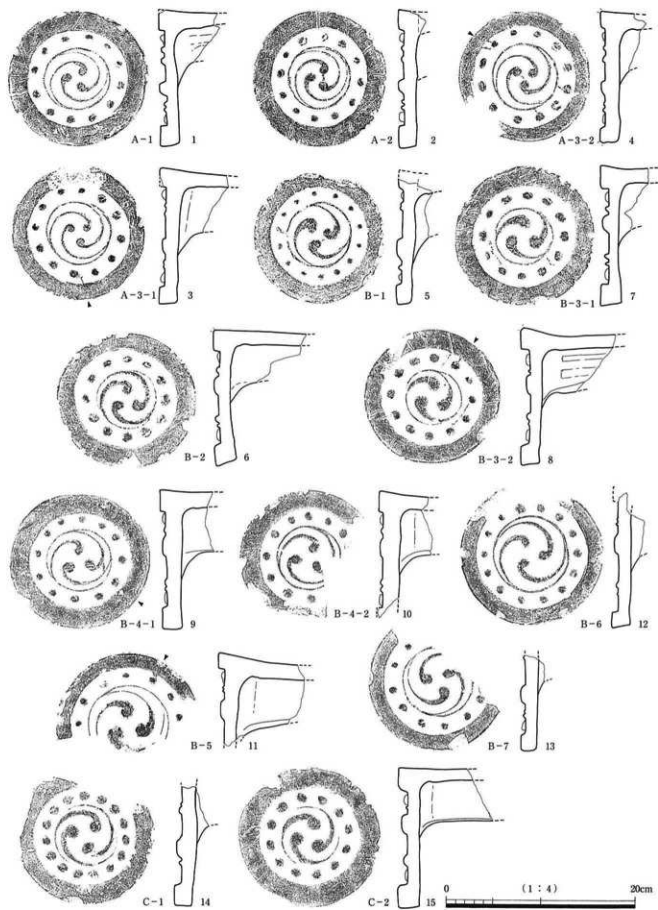


图130 軒丸瓦 (1)

先端の空間が狭く、紋様の隆起は大きい。A-2類は巴頭部1箇所と珠紋と巴の間の1箇所に範傷が認められる。A-3-1・A-3-2類は三巴の頭部先端の空間が広く、巴頭部の紋様の盛り上がりは大きい。図130-3・4の矢印で示した珠紋と外縁の間の範傷から同範であることが明らかであり、4の範傷の状況からA-3-1類からA-3-2類への進行が考えられる。

B類(図130-5~13)は巴頭部がA類と比較して大きい。B-1~6類の巴紋は左巻き、B-7類は右巻きであり、尾の先端が連結し、圏線となっている。B-1類は紋様のメリハリが弱い。珠紋の直径は約0.8cmを測り、小さい。B-2類は巴頭部の巻き込みが大きい。珠紋の直径は約1.3cmを測り、大きい。B-3-1類とB-3-2類は珠紋帯に2箇所、同一の浅い範傷があり、同範である。紋様は巴の尾が短い。B-3-2類は珠紋と外縁の間の1箇所に範傷(矢印)が新たに加わっており後出するものであることが認められる。B-4-1類は外縁高が約0.5cmを測り、低い。巴の尾に1箇所範傷が認められる。B-4-2類はB-4-1類と近似し、同範の可能性はあるが、不確定である。B-5・6・7類の外縁幅は1.5~1.8cmを測り、狭い。B-5類は巴の尾の断面が三角形を呈しており、珠紋と外縁の間に1箇所、範傷が認められる。

C類(図130-14・15、131-1~7)は巴の尾が独立した巴紋であり、C-1~8類の巴紋は左巻き、C-9類は右巻きである。C-3類は巴頭部に範傷が認められる。C-4類、C-7類は珠紋と外縁の間の1箇所に範傷が認められる。珠紋が密に配置されている。C-8類は直径約12.8cmを測り、やや小型である。

D類(図131-8)・E類(図131-9)は珠紋を有さない左巻き巴紋である。D類の尾は独立し、E類の尾の先端はつながり圏線になっている。

図131-10は棟飾り瓦であり、瓦当に青木氏の裏紋である州浜紋を採用している。

図131-11・14は隅瓦である。11は州浜紋であり、紋様断面は台形状を呈する。14は軒丸瓦D類と同一意匠である。12・13は鳥舎瓦である。12の巴の尾は連結し、圏線となっているが、1箇所のみ独立している。13の巴の尾は独立し、尾の長さも短い。

軒平瓦・軒棧瓦(図132)

中心飾り紋様の違いにより、A~D類に分類した。

A類(図132-1)は宝珠唐草紋である。宝珠は線描きであり、左右に伸びる唐草頭部は短く、太くなっている。

B類(図132-2)は巴唐草紋である。左右に伸びる唐草は第2・第3子葉は連続する。瓦当裏面と平瓦接合部をつよくナデる。

C類(図132-3)は水波紋であるが最端部は唐草のように巻き込む。

D類(図132-4~19)は橘唐草紋である。D-1類は顎裏面と平瓦接合部に凹型台の圧痕が観察される。軒棧瓦と考えられる。D-6類の橘紋は形骸化し、三方向に伸びた状態である。D-1・D-6・D-11・D-13類は顎裏面と平瓦接合部に凹型台の圧痕が観察される。D-11類の瓦当右外縁部の角は「角切り」されているので、小丸付軒棧瓦であると考えられる。D-13・D-14類の橘紋は小規模化している。D-16類の右外縁には「岡瓦岩」の刻印が押されている。豊中市岡町の瓦屋、岩何某(人名)と読み取れる。

E類(図132-20)は細い線状の唐草を有し、中心飾りは不明である。顎の出が1.3cmを測り、また、胎土が茶褐色を呈し、A~C類の軒平瓦とは異質のものである。

瓦当部の成形方法は顎貼り付け手法と斜めに貼り付けた瓦当貼り付け手法(図132-3)があり、いずれも接合部にカキ目を施している。瓦当外縁上端部・下端部、外縁内側端、顎裏面端は細く面取するも

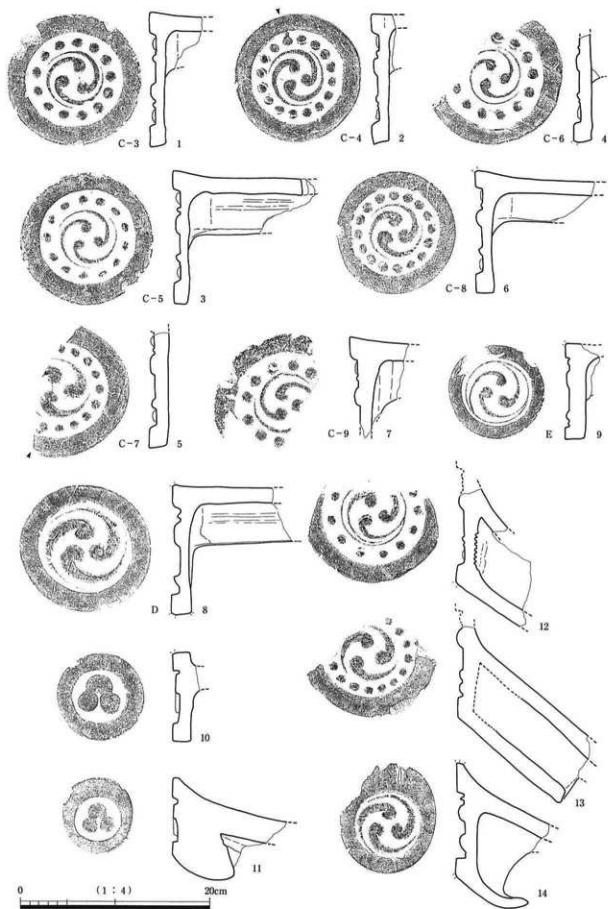


图131 軒丸瓦 (2) · 道具瓦

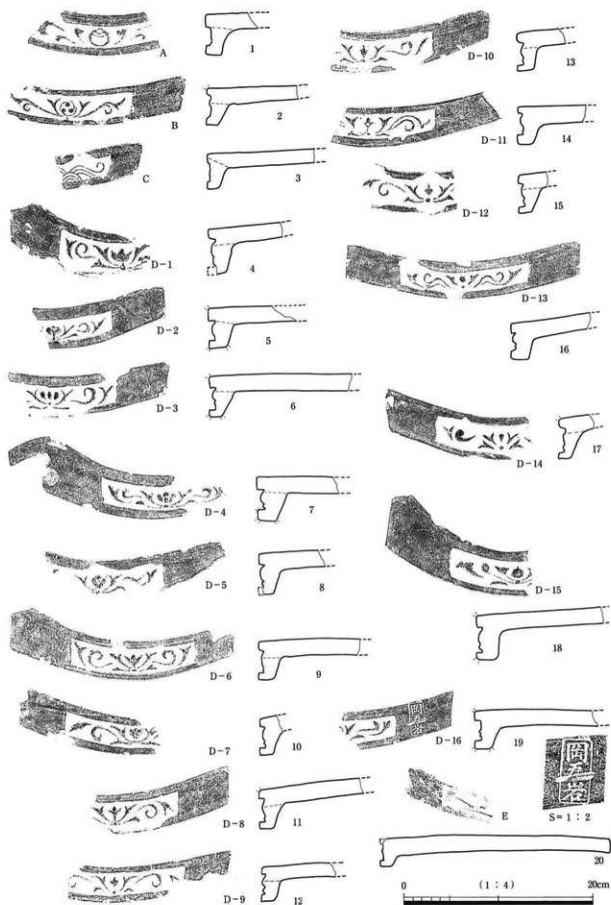


图132 軒平瓦

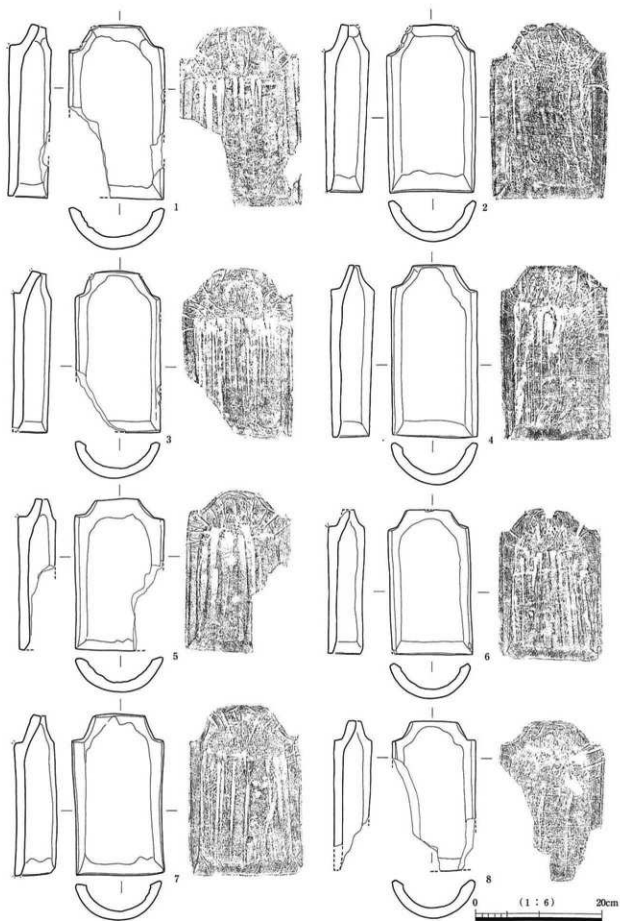


图133 丸瓦 (1)

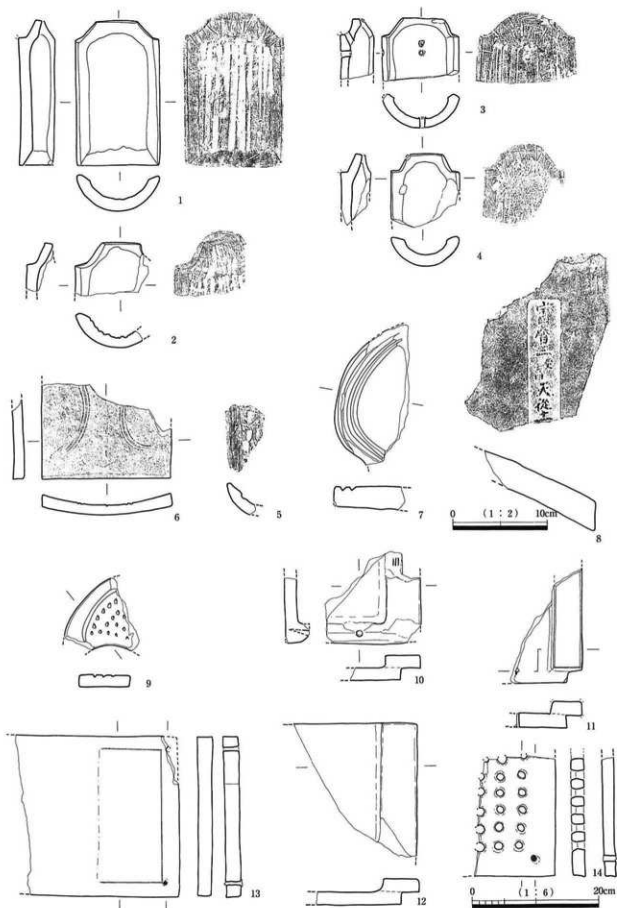


图134 丸瓦(2)·道具瓦·瓦製品

のとナデるものがある。

軒棧瓦は図版 85-11・86-1~4 である。85-11 の巴紋様は軒丸瓦D類と同一意匠と考えられる。

丸瓦(図 133・134)

丸瓦の法量は胴部長 20.0~24.0cm、幅 12.8~15.2cm、高さ 5.4~6.6cm を測る。丸瓦凹面には粘土塊から粘土板を取るとき鉄線切りによる平行線、コピキB(図 133-4・6)や、内面に巻かれたゴザ状圧痕(図 133-2)、凸面の湾曲を整える内叩き痕が観察される。内叩きは幅 1.0cm 前後の棒状の痕跡を残

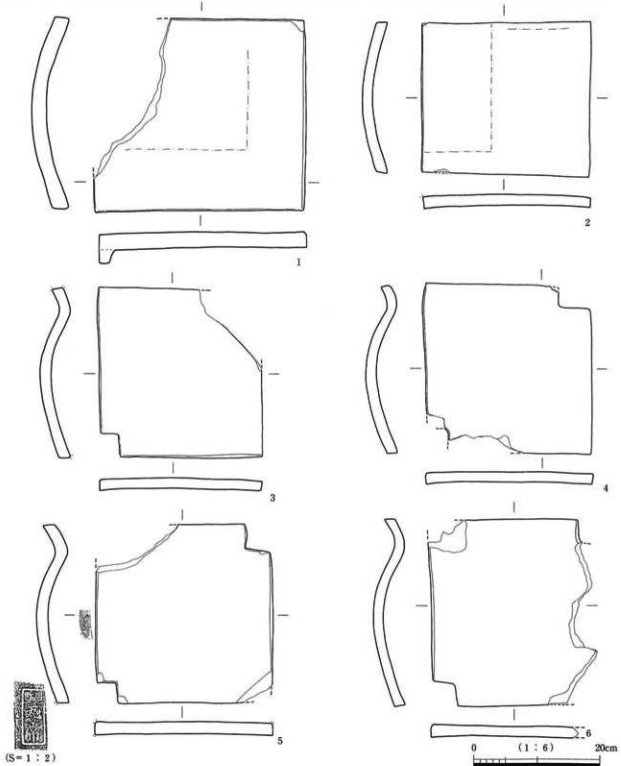


図135 平瓦



図136 軒瓦出土分布図

すが幅が約0.5cm 細いもの(図134-2)や豆粒状のもの(図134-5)もみられる。図134-3・4は胴部幅12.2cm、10.8cmを測り、やや小型の丸瓦である。図133-2は玉縁部分と胴部の一部にゴザ状圧痕がみられ、木型の上のゴザ状袋を被せ、その上部から胴部に布を巻いていることがわかる。胴部凸面広端部、胴部凸面狭端部、玉縁凸面端部は面取するものがあり、胴部凸面側縁はナデ調整をする。

平瓦・棧瓦(図135)

出土平瓦には全法量が確認できる資料は非常に少ない。

図135-1は大型の軒平瓦である。凹面には軒丸瓦、平瓦との葺代の痕跡が残存していた。凹面は丁寧にナデ調整を行う。2の凹面にも葺代の痕跡が残存していた。凹面狭端部のみ細く面取する。

3～6は棧瓦である。いずれも凹面はナデ調整されており、凸面の調整は粗雑である。5の端面には「岡町瓦常」の刻印があり、豊中市岡町の瓦屋、常何某(人名)を表す。凸面には細かい布目の圧痕とハケ状のミガキが格子状に入る。凹面は銀化している。

道具瓦(図134)

7はへらにより二重の圓線を巡らす。鬼瓦であろう。8は伏間瓦であり、凸面に「宝曆三癸酉天從十一口」の刻印が押されている。宝曆三年の干支は癸酉であり、西暦1753年にあたる。9はへら先による刺突紋様を描く。10～12は塀棧瓦の可能性が高い。10は貫いていない穴があり、11は四角の穴があく。13は板状を呈しており、鉄釘が穴に残存する。平面には三方に囲った細い凹線がみられる。

鬼瓦(図版84-28・85-1・5～7)

鬼面を伴ったものは出土していない。宝珠紋を中心に置くもの(図版85-6)が出土している。

瓦製品(図134)

14は隅に鉄釘が残存する。2.5～3.5cm 間隔に1方向から穿孔を行っている。図版85-10は14と同様であるが、1辺1.6～1.9cmの格子紋様をつける。(市本)

5) 火打石・貝

調査区からは火打ち石に使用されたと考えられる淡緑色のチャート剥片が6点出土している。大きさは1辺、1.6～2.9cmを測る小片である。

貝類はシジミ、ハマグリ、アカガイ、バイガイ、ツメタガイ、テングニシ、サザエ、アカニシ、アワビ等が出土している。区画1～4より区画5～9からの出土が多い。(市本)

第5章 基礎分析

第1節 蛭池遺跡・蛭池東遺跡における古墳時代～奈良時代の様相

豊中市遺跡分布図にみられるとおり、麻田藩陣屋跡は、蛭池遺跡と重複して立地しており、今回の調査の成果に明らかのように、上層では麻田藩陣屋跡の近世遺構が検出され、下層では蛭池遺跡の古墳時代～奈良時代を中心とする年代の遺構が検出される。

蛭池周辺は、豊中市教育委員会による長年の調査¹⁾に加え、当センターが関わった平成4年から平成8年にかけて実施された都市計画道路大阪モノレール整備事業²⁾および今回の蛭池西部地区再開発事業において南北約500m、東西約20～60mの範囲が調査され、面的な様相が明らかになりつつある。

ここでは、これらの成果をもとに蛭池遺跡、蛭池東遺跡で検出された古墳時代から奈良時代の遺構をまとめ、各時代の様相を素描したい。

なお、古墳時代中期の遺構・遺物は蛭池東遺跡で集中して検出されており、TK216～TK208 型式以前に位置付けられる大形掘立柱建物群の廃絶後、TK216～TK208 型式の時期に堅穴住居からなる集落がひろがることから、古墳時代中期は以上の2時期にわけて記述する。なお、古墳時代後期、奈良時代には、蛭池東遺跡、蛭池遺跡ともに遺構・遺物が検出されている。

1. 古墳時代中期 (TK216～TK208 型式) 以前

蛭池東遺跡において、大形掘立柱建物計5棟が検出されている。

大形掘立柱建物は、平成4年に実施された当センターの調査により3棟の存在が明らかになり、その後豊中市教育委員会の蛭池東遺跡第9次調査により3棟の建物が検出されている³⁾。

当センターの調査で検出された大形掘立柱建物は、掘立柱建物1～3からなる。掘立柱建物1および3は桁行5間、梁間5間の総柱建物で、屋内に2本の棟持柱を持つ。側柱掘形は方形もしくは長方形で100～110×70～90 cm、柱痕跡は直径30 cm前後である。東柱掘形は一辺40～50 cmの方形で柱痕跡は直径20 cm前後である。掘立柱建物1は、桁行11.0～11.2m、梁間9.15～9.4m、床面積約103 m²、掘立柱建物3は、桁行11.08～11.3m、梁間10.25～10.3m、床面積約115 m²である。掘立柱建物2は掘立柱1・3に比べやや小形の建物である。桁行5間、梁間1間を検出し、桁行長9.3mである。この桁行長は掘立柱建物3の桁行ほぼ4間分に相当する⁴⁾。掘立柱建物2の側柱掘形は一辺70cmの方形で柱痕跡は直径20～25 cmである。東柱は検出されなかったが、削平のため痕跡を留めていない可能性があり、掘立柱建物2は総柱建物になる可能性を残す。掘立柱建物1～3とも棟方向はN-42～43° - Eとほぼ同じである。出土遺物は土師器甕・壺・高杯のほか須恵器杯の小片が出土しており、これら大形掘立柱建物はTK216～TK208 型式併行期以前に位置付けられる。

豊中市教育委員会による蛭池東遺跡第9次調査で検出された大形掘立柱建物は、倉庫1～3の3棟である。倉庫1は桁行5間、梁間4間の総柱建物である。側柱掘形は一辺70～80 cmの方形、東柱掘形は一辺50～70 cmの方形である。梁間中央の側柱掘形は階段状に掘り込まれ、一辺100～120×80 cmと他の側柱に比べ大きく、また深さも深いことから棟持柱と推定されている。桁行9.0m、梁間6.7m、床面積約60 m²である。倉庫2・3は倉庫1と棟方向を同じくし、2.6～2.8mの距離をおいて検出されている。倉庫2は桁行5間、梁行2間、倉庫3は桁行2間が検出されるにとどまり、全容は明らかではないが、柱掘形、柱

間などが倉庫1と共通することから、倉庫1と相似形になる可能性が大きい。倉庫1～3とも棟方向はN-61°-Wである。出土遺物は大きく布留式の範疇に含まれる土師器高杯脚部が出土している。

以上の6棟は、掘立柱建物1～3の棟方向がN-42°-43°-E、倉庫1～3の棟方向はN-61°-Wと、棟方向はほぼ直交するものの、基本的に同軸方向にある。棟持柱の位置が異なるものの、総柱建物で柱掘形が方形もしくは長方形であり、側柱が大きく深く、束柱が側柱に比べ小さく浅いといった建物の構成は基本的に共通する。また、出土遺物からも同年代の建物とするに齟齬はなく、先述したように同じ建物群を構成する建物と考えられる。この場合、掘立柱建物2と倉庫1の桁行、柱間、柱掘形が共通することから、掘立柱建物2が倉庫1と相似形となる可能性がある。が、その場合、掘立柱建物2の梁間を6.7mとすると、掘立柱建物2の東側桁行は掘立柱建物1の東側桁行の延長線上から約30cm東側にずれ、同一線上には並べない。いずれにしても、掘立柱建物2と倉庫1は相似形となる可能性はあるものの、掘立柱建物2の全容が明らかではないため断定にはいたらない。

センター調査地と豊中市教育委員会調査地は約40～60m離れており、検出された6棟の掘立柱建物は微妙に規模が異なり、また直交するとはいえ棟方向が異なる建物の存在が明らかになったことから、建物群の復元は容易ではない。ただし、豊中市教育委員会調査地ではその南東端で大形掘立柱建物は検出されず、調査地の西側は段丘崖であることから、センター調査地周辺では建物が二列となる可能性が高いが、豊中市教育委員会調査地では建物は一列であった可能性が高い。また、豊中市教育委員会調査地から道路を隔てて北側においても建物の建て替えに伴う立会がなされており、遺構は確認されていないことから、掘立柱建物3の南へ連なると想定される建物列についても連続して並べない可能性がある³⁾。この場合、同時期の倉庫群として著名な大阪市法円坂遺跡、和歌山市鳴滝遺跡の整然と同規模の建物が並ぶ倉庫群とは異なり、規格を同じくし計画的に配置される点では同じであるが、棟方向の異なる建物群が空地を置いて並立することとなり、二遺跡とは異なる景観が想定される。いずれにしても、センター調査地と豊中市教育委員会調査地間の調査の進展によって、おのずと建物群の実態が明らかになるであろう。

大形掘立柱建物が検出された地点は段丘上でも頂部にあたり、西側は段丘崖、北側は段丘の開析谷へと下降し、東側はやや距離を置いて刀根山丘陵の斜面に至る。古墳時代中期、南接する蛭池遺跡で並存する遺構は検出されておらず、展望のきく段丘端部に段丘崖にほぼ沿う方向で、建物群が隔絶して存在した景観が復元される。

2. 古墳時代中期 (TK216～TK208 型式)

建物群の廃絶後、竪穴住居からなる集落が段丘頂部に営まれる。集落の範囲は南北150m、東西60mであり、大形掘立柱建物の時期と同じく、段丘上でも展望のきく段丘端部の頂部周辺に集落がひろがる景観が復元される。

この時期に確実に属する竪穴住居は、センター調査地において14棟検出されており、切り合い関係からこの時期に属する可能性をもつ竪穴住居を加えると計21棟となる。また、豊中市教育委員会調査地においても1棟(蛭池東遺跡第9次調査 竪穴住居2)検出されている。

竪穴住居は大形掘立柱建物を切って設けられており、大形掘立柱建物と竪穴住居は時期的に近接するものの、竪穴住居設営に際して大形掘立柱建物をとくに意識した様子はいかかえなない。ただし、住居の主軸は大形掘立柱建物とほぼ同じものが多く、これは建物の方向性を引き継いだというよりも、両者とも段丘崖に沿った方向性を指向しているためであろう。竪穴住居は竈を作り付けるものが多く、竈は甕がかかった状態で出土するなど残存状態が良好な例が多い。竈は北西辺中央に位置する例が多い。集落の北および

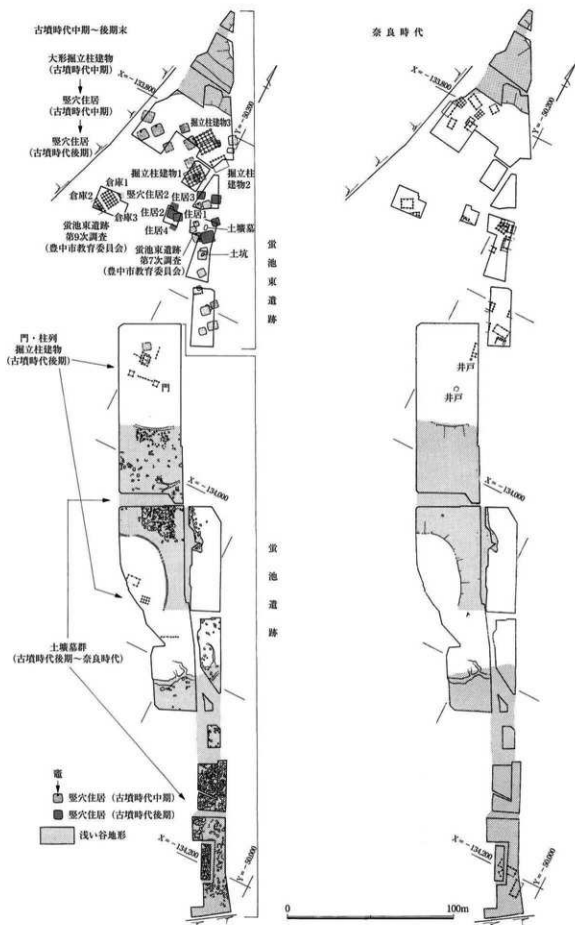


図137 古墳時代中期～後期末・奈良時代の検出遺構

西側は谷および段丘崖であり、集落は南および東へと展開していたと考えられる。日当たりの問題もあり、一般的に竪穴住居では、竈は北側に設置され、入口は南側に想定される事例が多いが、蛭池東遺跡では集落の展開する方向をも加味し、北西辺に竈、南東辺に入口をもつ竪穴住居が多数を占めると考えられる。蛭池東遺跡は、初期須恵器段階を含む時期に属する出現期の竈がみられ、韓式系土器も出土していることから、渡来系の人々の居住地であった可能性が高い。

3. 古墳時代後期

蛭池東遺跡で竪穴住居、土坑が、蛭池遺跡で掘立柱建物、柱穴列、門、土壇墓群が検出されている。古墳時代後期でも土壇墓群を除き前半に特定できる遺構は無く、後半から末にかけての遺構が主体である。土壇墓群では古墳時代後期全般から奈良時代の遺物が出土しているものの主体は古墳時代後期後半から末にかけての時期である。

蛭池東遺跡で古墳時代後期に位置付けられる竪穴住居は、センター調査地で5棟、豊中市教育委員会による蛭池東遺跡第7次調査地で4棟あり⁶⁾、前段階の集落に比べ、谷や段丘崖からやや離れた平坦地に立地する。センター調査地の5棟はTK43型式前後に位置付けられ、5棟中2棟に竈が作り付けられる。この2棟の竈は袖部が黄色粘土で構築される点特徴的である。これら5棟の住居の南側に同時期の土坑が1基あり、多くの遺物が出土していることから廃棄土坑の可能性が考えられる。豊中市教育委員会調査地の4棟は住居2を切って住居1および住居3が検出され、ほかに重複関係をもたない住居4がある。古墳時代後期後半から7世紀を前後する時期(住居3)にかけて設けられた住居である。なお、7世紀を前後する時期の長方形土壇墓が東側のセンター調査地で1基検出されており、この時期まで集落は規模を縮小させながらも継続するようである。

蛭池遺跡では、掘立柱建物が4棟、柱穴列が3条、門が1ヶ所検出されており、南端の柱穴列を除いて軸方向はほぼ同じである。これら遺構の出土遺物はTK10型式前後に位置付けられる。掘立柱建物はすべて3×2間であり、南端の建物のみ総柱建物である。門の北側の掘立柱建物はほぼ同規模の建物が重複し、建て替えがあったものと考えられる。柱穴列は門の北側で南北方向に3間、東西方向に5間、南端で東北東-西南西方向に6間分が確認された。南端の柱列は掘立柱建物と方向が異なり、麻田藩陣屋跡の方向性に近いことから、年代が異なる可能性を残す。

この年代の遺構でとくに注目されるのが門とした遺構である。1×1間の建物が2棟並び、その間を5間の柱穴列が貫く。この遺構以南には顕著な柱穴もなく、南へ向かいゆるやかに下降し、土壇墓群がひろがる浅い谷部にいたる。竪穴住居や掘立柱建物からなる居住域はこの遺構を境に北側にひろがることから、居住域と墓域を画し、居住域へ出入りする施設、すなわち門と考えられる。茨木市溝沢遺跡では、水田と居住域との間に浅い溝とそれが途切れた箇所規模の大きな柱穴が2ヶ所検出されており、鳥居状の門に類する施設と考えられる⁷⁾。他の類例を取集しておらず適切な評価はできないものの、この門とした遺構は稀少例として注目される。

蛭池遺跡の土壇墓群は、直径1~2m前後の土壇墓が重複して検出されるものであり、千基以上を数える。土壇墓群は、段丘上の浅い谷部の斜面から底部にかけて検出され、とくに底部に集中する。遺物は完形に近い須恵器杯もしくは甕が少数出土し、MT15型式からTK10型式を中心とする古墳時代後期から奈良時代にわたる遺物が出土する。

以上より、古墳時代後期、段丘上の微高地は居住域として利用され、後期中頃の門、掘立柱建物からなる集落から後期後葉の竪穴住居からなる集落へと変遷する。一方、段丘上の浅い谷部には後期をと

して土墳墓が築かれ、墓域として利用される。段丘上の微地形を利用し、居住域と墓域を画した集落の景観が復元される。

4. 奈良時代

蛭池東遺跡で掘立柱建物 25 棟、蛭池遺跡で掘立柱建物 4～5 棟、井戸 2 基が検出されている。蛭池遺跡北端の掘立柱建物は、蛭池遺跡の調査地に含まれるものの、奈良時代集落のひろがりとしては蛭池東遺跡に含まれるものであろう。掘立柱建物からの出土遺物は限られており、すべての掘立柱建物が奈良時代に属する確証はないが、掘立柱建物出土遺物はすべて奈良時代のものであることから、奈良時代の掘立柱建物として一括した。

古墳時代に引き続き、段丘上の微高地に一群の掘立柱建物からなる居住域（蛭池東遺跡）がひろがり、その南端から段丘上の浅い谷部へと向かいゆるやかにおちる斜面に井戸が 2 基設けられる。段丘上の浅い谷部をはきんで、段丘の南端にあたる箇所ですべて 3～4 棟の掘立柱建物からなる居住域（蛭池遺跡）がみとめられる。浅い谷部には古墳時代後期から継続して土墳墓群がひろがるが、古墳時代後期に比べ遺物は少なく、土墳墓の数は激減したと考えられる。

5. まとめ

以上、蛭池東遺跡から蛭池遺跡における古墳時代から奈良時代の変遷を概観した。蛭池東遺跡は段丘縁辺でもとくに展望のきく微高地に位置しており、こうした立地を反映してか、ここでは古墳時代中期には大形掘立柱建物からなる建物群、その廃絶後には堅穴住居からなる集落、古墳時代後期においても堅穴住居が、奈良時代には掘立柱建物からなる集落がひろがり、居住域として連続と利用されている。

一方、段丘縁辺でも浅い谷部がはいる蛭池遺跡では、蛭池東遺跡ののる微高地の延長部、および浅い谷部にはさまれた微高地、段丘南端部には古墳時代後期に門および掘立柱建物からなる集落が小規模に展開するものの、遺跡地の大部分を占める浅い谷部は古墳時代後期から奈良時代にかけて土墳墓が築かれ、墓域としての利用が継続する。

遺跡分布図では、蛭池東遺跡の南端と蛭池遺跡の北端は遺跡範囲がわずかに重複して記される。今回の成果から微視的にみると、両遺跡の境は門が検出されているラインが適当と考える。

両遺跡では、古墳時代中期から古墳時代後期末、7 世紀を前後する時期まで集落が継続したのち、7 世紀の第二四半期から後半にかけての遺構、遺物を欠き、一端空白期となる。その後 8 世紀、奈良時代に入り再び集落が営まれる。こうした 7 世紀の第二四半期から後半にかけて空白期をもつといった現象は、周辺の千里川流域を中心とする地域では共通してみられ、巨視的には桜井谷窯跡群の消長と一致する⁹⁾。大変興味深い現象ではあるが、このような現象が何をあらわし、何に起因するのかは性急には明らかにしがつく、今回は興味深い事実として提示するにとどめる。また、蛭池遺跡の門についても、稀少な事例とみられ、今後類例の収集につとめたい。ご教示を請う次第である。

注

1) 今回の調査地周辺において、豊中市教育委員会が実施された調査については第 1 章第 1 節の図 1 参照。

2) 当センターが関わった大阪モノレール関連の調査成果は以下の報告書にまとめられている。

(財) 大阪文化財センター 1994 『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・蛭池遺跡・蛭池西遺跡 1992・1993 年度発掘調査報告書—大阪モノレール蛭池東線・西線建設に伴う発掘調査—』

(財) 大阪府文化財調査研究センター 1997 『(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第 22 集 1 宮の前

遺跡・蜷池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蜷池遺跡・蜷池南地区・蜷池西遺跡 1993-1996 年度発掘調査報告書-大阪モノレール蜷池東線・西線建設に伴う発掘調査-』

(財)大阪府文化財調査研究センター 1997 『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第22集2 蜷池遺跡(その3-2)発掘調査報告書-大阪モノレール蜷池西線建設に伴う発掘調査-』

- 3) 豊中市教育委員会 1997 『豊中市文化財調査報告書第40集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要-阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査-』平成7(1995)年度
- 4) 金光正裕・合田幸美 1992 「蜷池東遺跡の発掘調査-古墳時代前期の大型掘立柱建物と作り付け竈について-」『大阪文化財研究』20周年記念増刊号 において、建物の計画的な配置が指摘されている。
- 5) 大形掘立柱建物群の配置については、豊中市教育委員会 清水 篤氏より多くのご教示を得た。清水氏によると、豊中市教育委員会調査地で検出された倉庫1~3の東側に、距離を置いて平行して3棟の建物が並ぶ可能性が、微地形から復元可能ということである。
- 6) 豊中市教育委員会 1994 『豊中市文化財調査報告書第34集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』
- 7) (財)大阪府文化財調査研究センター 2000 『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第49集 溝咋遺跡(その1・2)-茨木・学園町地区埋蔵文化財発掘調査1次・2次報告書-』
- 8) 当センター技師山元建氏のご教示による。

第2節 古墳時代密集土壌群の脂肪酸分析

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトモロコシ種子²⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した⁴⁾。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中で二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪酸分析法」という。この「残存脂肪酸分析法」を用いて麻田藩陣屋跡の土坑および土坑内の須恵器壺の性格を解明しようとした。

1. 土壌試料

麻田藩陣屋跡から古墳時代後期のものと推定されている密集土壌群が検出されており、その内の土坑767内外と土坑448から出土した須恵器壺内の土壌試料を分析した。土坑内での試料採取地点を図141に示す。試料No.1～No.5は土坑767のもので、No.1～No.3を土坑底面、No.4を土坑中央でNo.2よりも上層部、No.5を対照試料として土坑から約50cm離れた地山から、No.6とNo.7は土坑448出土の壺内のもので、No.6を壺の内部、No.7を壺の口縁部から、それぞれ採取した。

2. 残存脂肪の抽出

土壌試料195～507gに3倍量のクロロホルム-メタノール（2:1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液をろ過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化ナトリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は土坑767試料が0.0078～0.0174%、平均0.0133%、土坑448壺試料が0.0013%と0.0011%、平均0.0012%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器などの試料の平均抽出率0.0010～0.0100%に比べ、土坑767試料はわずかに高め、土坑448壺試料はその範囲内ではあるが低めであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。その中では遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸が結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5%メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサノーエチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサノーエチルエーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した⁵⁾。

残存脂肪の脂肪酸組成を図138に示す。残存脂肪から10種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、ベヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)の8種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料中の脂肪酸組成をみると、試料No.1～No.4はほぼ同一の組成パターンで、No.6とNo.7もNo.1～No.4とは別でほぼ同一の組成パターンであった。このうち炭素数18までの中級脂肪酸は、すべての試料中でパルミチン酸が多く、次いで試料No.1～No.4ではステアリン酸、オレイン酸の順に多く分布し、No.5～No.7ではステアリン酸とオレイン酸がほぼ同程度分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来していると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。オレイン酸はまた、ヒトの骨のみを埋葬した再葬墓試料などにも多く含まれている。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級飽和脂肪酸は、それら3つの合計含有率が土坑767試料では約33～45%、土坑448壺試料では約23～25%であった。通常、遺跡出土土壌中のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級飽和脂肪酸3つの合計含有率は約4～10%であるから、すべての試料中での高級飽和脂肪酸含有量は通常、遺跡出土土壌の植物腐植土中よりも多めで、特に土坑767試料中では多かった。高級飽和脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などの特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分が含まれている場合とがある。高級飽和脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかはコレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、麻田藩陣屋跡の試料中の脂肪酸組成パターンは土坑767内試料、土坑767外対照試料と土坑448壺試料はそれぞれ別々でほぼ同一のパターンであり、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸であることがわかった。高級飽和脂肪酸はすべての試料中で通常、遺跡出土土壌の植物腐植土中よりも多めで、特に土坑767試料中では多かった。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサノール-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジノール-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図138に示す。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No.1~No.3、No.5に約3~5%、No.4に約7%、No.6とNo.7に約13~18%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2~6%分布している。従って、コレステロール含有量は試料No.4でごくわずかに多く、No.6とNo.7で非常に多く、他の試料中で通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。コレステロール含有量は土坑767外対照試料中で最も少なかった。

植物由来のシトステロールは試料No.1~No.5に約12~30%、No.6とNo.7に約4%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30~40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、シトステロール含有量は試料No.1~No.5で通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土中よりも少なめ、No.6とNo.7では非常に少なめであった。シトステロール含有量は土坑448壺試料を除けば土坑767試料中では土坑外対照試料中で最も多かった。

クリ、クルミなどの堅果植物由来のカンベステロール、スチグマステロールは、すべての試料中にカンベステロールが約5~8%、スチグマステロールが4~10%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンベステロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、すべての試料中でのカンベステロール、スチグマステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールはすべての試料中に約1~2%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはエルゴステロールは数%分布している。従って、この程度の量は単に土壌微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.4、No.6、No.7に約6~7%、他のすべての試料中に約1~2%分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壌中には分布していないが、1~2%程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の持主の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある⁶⁾。今回のコプロスタノール含有量は試料No.4、No.6、No.7でかなり多めで、他のすべての試料中では通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。土坑767試料中では試料No.4採取地点のコプロスタノール含有量だけが突出して多いので、この位置にヒト遺体の腹部が存在していた可能性が考えられる。しかし、今回のコプロスタノール含有率は10%以上ではないためにヒトの性別まで推測することは不可能であった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上⁷⁾、土器・石器・石製品で0.8~23.5である^{8・9)}。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように、分布比は試料No.1~No.5が0.6以下、No.6とNo.7が0.6以上で、土坑767外対照試料No.5が最も低かった。このことは試料No.6とNo.7には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性が非常に高いことを示している。また、試料No.4の分布比は0.59でほぼ0.6

に近く、No.3のそれも0.45で他の土坑767内試料よりは高く、これら2試料中にも動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性があることを示唆している。

以上、麻田藩陣屋跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールが土坑448壺試料に非常に多く、土坑767内試料No.4にごくわずかに多く、哺乳動物由来のコプロスタノールが土坑767内試料No.4と土坑448壺試料にかなり多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比は土坑448壺試料が0.6以上、土坑767内試料No.3とNo.4が0.6以下ではあるが0.6に近く、これらの試料中には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性があることがわかった。また、土坑767試料中では試料No.4採取地点のコプロスタノール含有量だけが突出して多いので、この位置にヒト遺体の腹部が存在した可能性が考えられるが、ヒトの性別までは推測できなかった。ステロール分析の結果を考え合わせると、脂肪酸分析で多めに含まれていた高級飽和脂肪酸は、植物体の表面を覆うワックスの構成成分と高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などの特殊な部分のそれぞれに由来する可能性が考えられる。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に試料中に残存する脂肪の持主を特定するために、同じ大阪府内の遺跡で出土土壌や土器にはヒト遺体を直接埋葬した場合と類似の脂肪が残存していると判定した大庭寺遺跡¹⁰⁾、西大井遺跡¹¹⁾、本町遺跡、蛭池遺跡¹²⁾、宮の前遺跡(その2)、服部遺跡、向出遺跡¹³⁾、溝咋遺跡¹⁴⁾、兵庫県寺田遺跡、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡¹⁵⁾、ヒトの体脂肪、出土土壌を再葬墓と判定した宮城県積善遺跡¹⁶⁾、ヒトの骨油試料など、各種遺跡試料や現生試料の脂肪酸との類似度を比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から出土状況を考慮して類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図139である。

図からわかるように、麻田藩陣屋跡の試料No.1～No.4は服部遺跡、宮の前遺跡(その2)の試料と共に相関行列距離0.1以内でA群を形成し、よく類似していた。麻田藩陣屋跡の試料No.5～No.7は大庭寺遺跡、原川遺跡、蛭池遺跡の試料と共に相関行列距離0.05以内でB群を形成し、非常によく類似していた。他の対照試料はC～I群を形成した。これらの群のうちB群とC群は相関行列距離0.1以内の所にあり、互いによく類似していた。また、これらB群とC群はA群とも相関行列距離0.15以内の所にあり、互いに類似していた。

以上、麻田藩陣屋跡の土坑767内試料中に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料の脂肪と、土坑448出土壺試料中に残存する脂肪はそれら遺跡試料の脂肪の他にイノシシ、ニホンジカ試料の脂肪とも類似していることがわかった。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などに由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原

点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植土、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた種特異性相関を図140に示す。試料No.1～No.4は第1象限の原点から離れた位置でA群を、No.5～No.7は第1象限から第2象限にかけての位置ではあるが、主として第1象限内でB群を形成した。これらの群の分布位置は通常は試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などの特殊な部分に由来することを示唆しているが、今回は植物体の表面を覆うワックスの構成成分由来と推定される高級飽和脂肪酸も多いためにそのような位置に分布した可能性がある。

以上、麻田藩陣屋跡のすべての試料はほぼ第1象限内に分布したが、これらの試料中に残存する脂肪は高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などの特殊な部分由来と植物体の表面を覆うワックスの構成成分由来の両方の可能性が考えられ、そのいずれであるかは断定できなかった。

7. 総括

麻田藩陣屋跡から出土した土坑と土坑内の壺の性格を判定するために、土坑内外と壺内の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪の脂肪酸分析、ステロール分析、脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、土坑767に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料の脂肪と類似していることがわかった。特に、哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノール含有量の多さから試料No.4採取地点付近がヒト遺体の腹部に相当した可能性が考えられるが、ヒトの性別までは判定できなかった。今回は土坑内試料が短軸に添った中央部で採取されているが、長軸に添って採取されれば中央部の腹部の他に頭部も推測できた可能性がある。土坑448内の壺中に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料の脂肪やイノシシ、ニホンジカのような動物試料の脂肪とも類似していることがわかった。壺の大きさからすればヒト遺体よりもイノシシ、ニホンジカのような動物で作られた食品が入れられていた可能性も考えられる。(掛ズコーシャ)

8. 分析結果の検討

密集土坑群の性格については土壌墓群説と粘土採掘坑群の説があり、いまだ、明瞭な答えが見いだされていない。

当遺跡に隣接するモノレール設置調査時においても土坑群が検出されており、脂肪酸分析を行なっている。その当時から約10年が経過し、分析方法の向上・分析数の増加等より、より精度の高い結果が期待された。

土坑767は4Eトレンチの南西において検出した。長辺約1.7m、短辺0.9m、深さ0.2mを測り、長楕円の平面を呈する。試料は土坑中央部短辺方向に4点抽出し、対比試料としてベース層の地山も分析した。土坑南半から人頭大の礫の他、須恵器坏身・甕片が出土している。土坑448はトレンチ隅の検出なので平面形態は不明確である。口縁を打ち欠いた須恵器壺(図38-29)が出土しており、内部に有機物質が入っていたことも想定された。

分析結果によれば、コプロスタノールの検出により哺乳動物の存在が確認できた反面、ステロール分析では植物体の表面を覆うワックスに由来する可能性も考えられ、ヒト遺体であることは断定できていない。また、対比試料とした地山も同様な結果となり、差を表わすことはできていない。これらの結果は「墓」としての性格を完全に否定するものではないが、慎重に扱う必要性は要すると考えられる。また、土坑448壺試料は動物試料の脂肪との類似が指摘されたが、イノシシ・ニホンジカに直接結びつけるには、今後の検討が必要になるであろう。(市本)

表1 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No	コブロスタノール(%)	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/ シトステロール
1	1.69	4.04	18.20	0.22
2	1.75	4.29	24.62	0.17
3	1.14	5.49	12.18	0.45
4	6.13	7.35	12.56	0.59
5	0.70	3.13	29.75	0.11
6	6.88	13.38	3.86	3.46
7	6.32	18.41	4.48	4.11

表2 試料中に分布するステロールの割合

試料No	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	土坑767-1	506.6	62.0	0.0122
2	〃 -2	318.0	55.3	0.0174
3	〃 -3	282.6	46.1	0.0163
4	〃 -4	344.7	44.4	0.0129
5	〃 -5地山	401.8	31.4	0.0078
6	土坑448-1壺内部	194.6	2.5	0.0013
7	〃 -2壺口縁部	483.0	5.2	0.0011

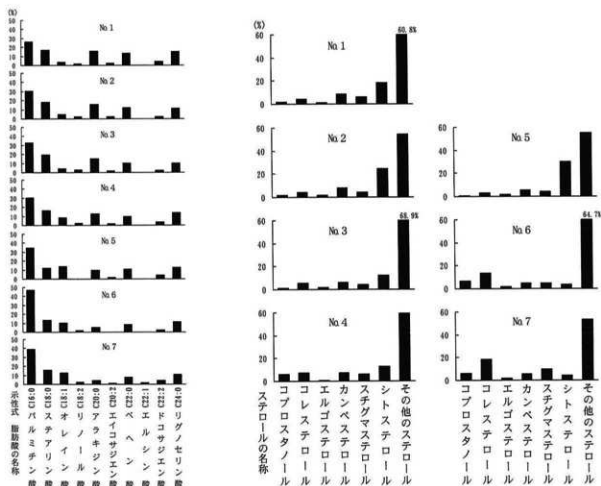


図138 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成とステロール組成

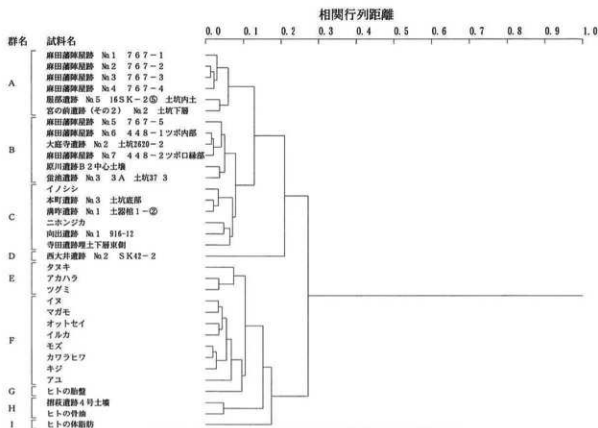


図139 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

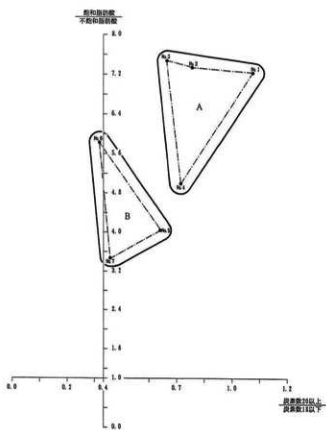


図140 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

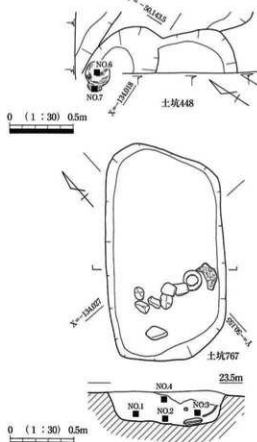


図141 土坑448・767分析試料抽出地点

注

- 1) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle: 「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10巻, 1979, pp260.
- 2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold: 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292巻, 1981, pp146.
- 3) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle: 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäßinhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70巻, 1983, pp33.
- 4) 中野益男: 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻(6), 1984, pp124.
- 5) M. Nakano and W. Fischer: 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM20021」, 『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.』, 358巻, 1977, pp1439.
- 6) 中野益男: 「残留脂肪酸による古代復元」, 『新しい研究法は考古学になにももたらしたか』, 田中 琢, 佐原 眞編, クハプロ, 1995, pp148.
- 7) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本敦博, 畑 宏明, 久吹俊男, 佐原 眞, 田中 琢: 「古代遺跡に残存する脂肪の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- 8) 中野益男: 「真麻遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真麻遺跡』, 石川県鳳至郡能登町教育委員会・真麻遺跡発掘調査班, 1986, pp40.
- 9) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子: 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書第3集, 北海道文化財研究所, 1987, pp191.
- 10) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男: 「大庭寺遺跡から出土した土壌に残存する脂肪の分析」, 『大庭寺・伏尾遺跡』, (財)大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書第27集, 1998, pp147.
- 11) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男: 「西大井遺跡から出土した土壌に残存する脂肪の分析」, 『西大井遺跡発掘調査概要・1992年度'92-1区の調査』, 大阪府教育委員会, 1994, pp37.
- 12) 中野益男, 中野寛子, 菅原利佳, 長田正宏: 「宮の前・蛸池遺跡採集土壌の残存脂肪分析」, 『宮の前遺跡・蛸池東遺跡・蛸池西遺跡』, 1992・1993年度発掘調査報告書, (財)大阪府文化財センター, 1994, pp167.
- 13) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏: 「向出道跡の縄文時代土坑埋土中の残存脂肪分析」, 『向出道跡』, (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第55集, (財)大阪府文化財調査研究センター, 2000, pp370.
- 14) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏: 「溝ヶ谷遺跡(その2)脂肪分析」, 『溝ヶ谷遺跡(その1・2)』, (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第49集, (財)大阪府文化財調査研究センター, 2000, pp387.
- 15) 中野益男, 幅口 剛, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏: 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡1』, 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第17集.
- 16) (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.
- 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏: 「櫻萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, 『櫻萩遺跡』, 宮城県文化財調査報告書第132集, 宮城県教育委員会・宮城県土木部水資源開発課, 1990, pp629.

参考資料

- 中野益男, 中野寛子, 菅原利佳, 長田正宏: 「大阪府豊中市本町遺跡から出土した土壌に残存する脂肪の分析」
 中野益男, 中野寛子, 長田正宏: 「大阪府豊中市宮原部遺跡から出土した遺構・遺物に残存する脂肪の分析」
 中野益男, 中野寛子, 長田正宏: 「大阪府豊中市宮の前遺跡(その2)から出土した土壌に残存する脂肪の分析」
 中野益男, 中野寛子, 福島道広, 長田正宏: 「兵庫県芦屋市寺田遺跡土壌腐状遺構に残存する脂肪の分析」

第3節 近世遺構の様相

1. 検出遺構と絵図との整合性

第2章第2節において記述したように陣屋の絵図が存在しており、中でも江戸時代後期とされる豊中市教育委員会蔵絵図（カラー図版1）は各屋敷地の所有者や屋敷地の表・裏の間口の寸法・屋敷境ごとの奥行き寸法が記述されている。この数値と現代の地割や検出された遺構を照らし合わせることで、溝、或いは遺構面の段差により屋敷境を認定することができた。

各間口の絵図の寸法と検出遺構の数値は図142の通りである。それぞれの数値はほぼ絵図記述寸法と合致するが、区画5の青木別邸の間口のみ異なった数値になっている。区画5を溝219と溝229間とするならば、約31.7mを測り、絵図記述の十二間二尺五寸（約22.6m）と合致しない。溝219から十二間二尺五寸の距離を測れば、おおよそ溝398に位置するが、屋敷地西端の一部に伸びる短い溝なので屋敷境の溝とは考えにくい。溝229を区画5・6の境として認定すれば、南側に連なる区画6～9の屋敷境が絵図寸法と合致していくのである。検出した間口数値の約31.7mを尺間法に直せば、十七間二尺五寸となり、「十二間」は「十七間」の誤記と考えられないであろうか。

絵図に描かれた屋敷境の位置はそれぞれの屋敷地の大きさに合わせて描かれている。図142のように検出された遺構と絵図の縮尺を南北方向に合わせてみると、東西方向の屋敷地奥行きも合わせた平面形が合致し、絵図の平面図としての正確さも確認することができる。

外堀は区画1～6にかけて調査区外の東側に沿って位置している。区画1の北側と区画5の東側の一部においてトレンチを設定し、外堀の存在を確認した。現歩道下の水路と重複し、検出した。区画7では溝312・403とした外堀が検出され、その内側には土塁と土塁に沿った溝が伸びていることが明らかになった。区画1～6の東端には細い溝を検出しており、区画7と同様、土塁に伴った溝であると考えられる。絵図による外堀内側に描かれた格子状の薄緑部分にあたる。

区画7において、外堀の屈曲部分を検出した（図67）。溝312は南北に伸び、途中、溝403が東へ屈曲し、モノレール調査時に検出された外堀と接合する。これとは別に溝403からさらに南へ溝312が伸び、屋敷境とした溝293手前で東へ屈曲する。この位置に屈曲部をもつ平面形は図6の小谷図、中村図の絵図と整合し、屋敷境とした溝293はこの時点で埋められたと考えられる。溝312からは19世紀初頭の遺物が、溝293からは19世紀前半～中頃の遺物が出土し、また、小谷図・中村図は共に廃藩置県（1871）直後のものであり、この頃に外堀の位置が溝403から溝312へ変更したと考えられよう。

区画5の南北両隣の屋敷境溝はそれぞれ2条ずつ検出した（図59）。北側の溝219と溝221、南側の溝228と溝229は並行して存在しており、溝心々間、約1.8m（約一間）を測る。それぞれの溝の出土遺物による時期差はなく、また、2条並行の溝が南北両側に検出されたのはこの区画5両側のみである。よって、時代による屋敷境の移動は考えにくく、区画5のみ2条並行の屋敷境溝を有した屋敷地であったと思われる。絵図によると藩主青木の別邸に位置しており、他の家臣屋敷との格の相違と理解できよう。屋敷地の間口寸法は絵図に記された数値から、北側の溝219、南側の溝229と考えられる。

区画5の門構えは教育委員会絵図と中村絵図によれば櫓（小谷絵図では屋敷地南西隅に火見台を描く）を備えており、前面道路からやや後退した場所に位置している。検出遺構（図59）をみれば、土坑644とした東肩がこの後退したラインとして認識できる。さらに土坑644の北側の溝220には大型の平坦な石が据えられており、南側の溝398には深さ約0.3mを測る竪穴状の溝が検出されており、堅固な建物

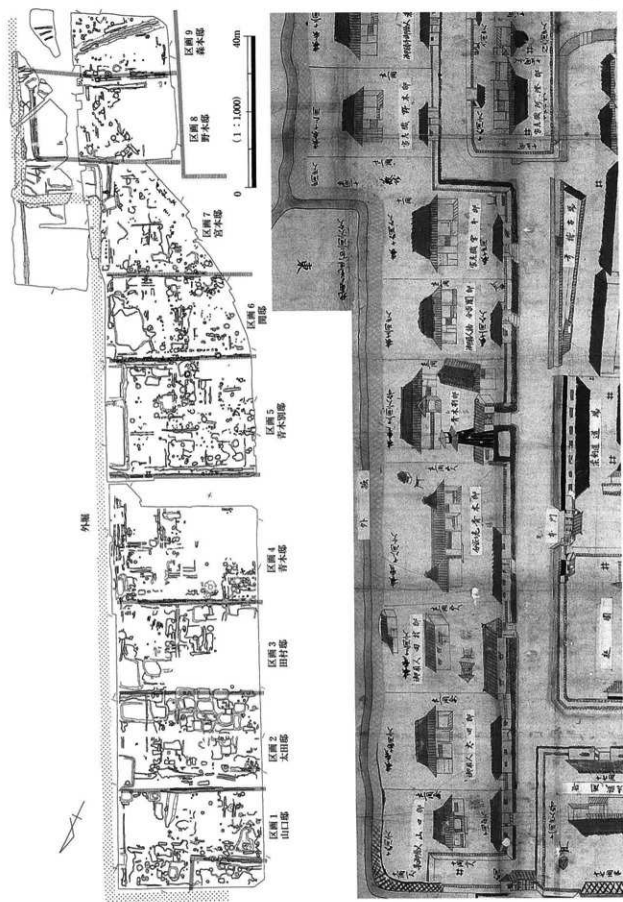


图142 调查区之绘图

の基礎部と考えられる。絵図に近い形態の門構えが検出遺構からも類推できる。

区画1の溝10北側の空間は北門と隣接しており、陳屋内の共有空間として利用されていたと考えられる。絵図では井戸の印がつけられており、変遷で後述するように複数の井戸が検出されている。井戸を伴った共有空間として存在していたことがわかる。

以上のように市教委絵図は平面図、記述数値共に、かなりの信用性があり、区画7の外堀形状の変遷や出土遺物から19世紀初頭以前の状態を描いた絵図であることが考えられる。

2. 変遷

調査区からは17世紀から19世紀に及ぶ各時期の遺物が出土しているが、層位的に先後関係がわかる遺構はわずかである。各時期の遺物を出土した遺構の分布図(図143~145)を作成し、変遷の様相を検討したい。

17世紀代(図143)

陳屋は大坂夏の陣(元和元年 1615)以降、徳川幕藩体制の確立により、この場所に作り始められたとされている。出土遺物もこれに呼応するように17世紀中葉のものから出土している。この時期の遺物出土遺構は区画1~9まで点在しているが、区画1・5・7・9からの比率が高い。この中で屋敷境に係わる溝10・219・221・293・325、外堀に係わる溝145・312を挙げることができ、形成初期から市教委絵図に近い屋敷割と外堀を伴った陳屋であったことが想定できる。

しかしながら、陳屋の地割とは異なった方向に伸びる溝326が区画9から検出された。溝は幅2.1~2.9m、深さ約1.2mを測り、断面V字を呈している。外堀や屋敷境溝とは全く異なった形状の深い溝である。17世紀初頭から中葉の遺物が出土しており、陳屋造成に伴い、人為的に埋められた遺構であることがわかった。陳屋形成以前に何らかの行為があったことを示す遺構である。17世紀初頭の遺物は極少量しか出土しておらず、また、溝326と同一方向を示す遺構がこれ以外検出されておらず、この場所に陳屋形成以前に集落等があったとは考えにくい。溝326を地割方向とした陳屋造成の計画があったことも想定すべきであろう。

18世紀~19世紀初頭(図144)

調査区全域から出土している。各屋敷地の裏側にあたる東半に大型方形遺構がみられるようになる。区画1一土坑91、落込23、区画2一土坑26、区画5一土坑654がこれにあたる。平面は方形、断面は台形状を呈しており、ごみ溜と考えられる廃棄遺構である。但し、土坑91は穴蔵からの転用遺構である。

区画1北側に、北門に沿った空間があり、井戸が検出されている。出土遺物から井戸2・6(17世紀中~後半)→井戸1・4(18世紀後半~19世紀前半)→井戸3(19世紀中)の変遷が考えられ、2基1組での基本的なあり方が想定できる。絵図の中では、この空間には井戸のマークが描かれており、陳屋内の共有空間としての機能を有していたと考えられよう。

区画7東端の外堀屈曲部が変更された。溝403とした屈曲部の東は埋められ、19世紀初頭には溝312を掘削している。屈曲部南側の溝293は19世紀前半~中頃の遺物が出土しており、溝312と並存していたことが考えられる。

19世紀前半~中葉(図145)

引き続き、ごみ溜と考えられる廃棄遺構が屋敷地東半にみられる。区画2一落込25、区画3一落込3・6、区画6一落込85がこれにあたる。

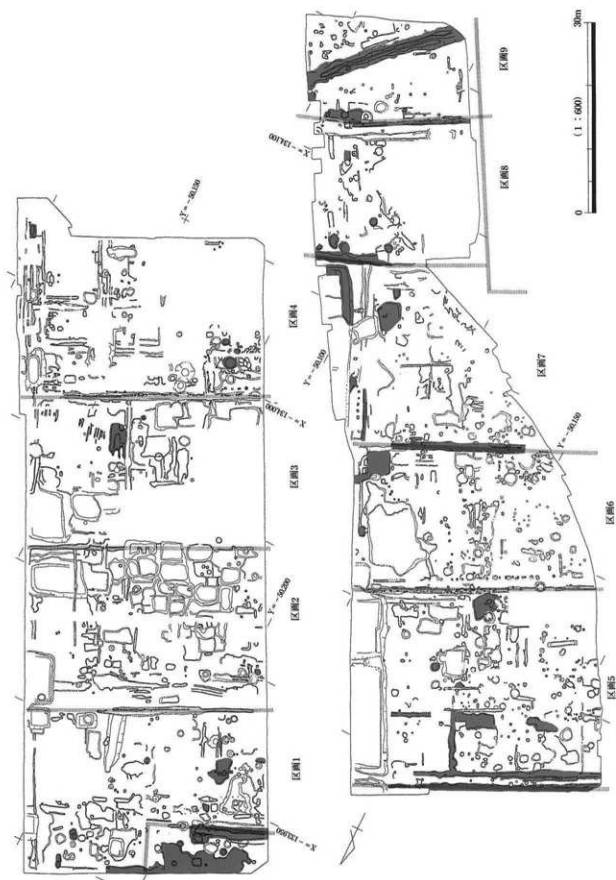


图143 出土遺物分布图 (17世紀)

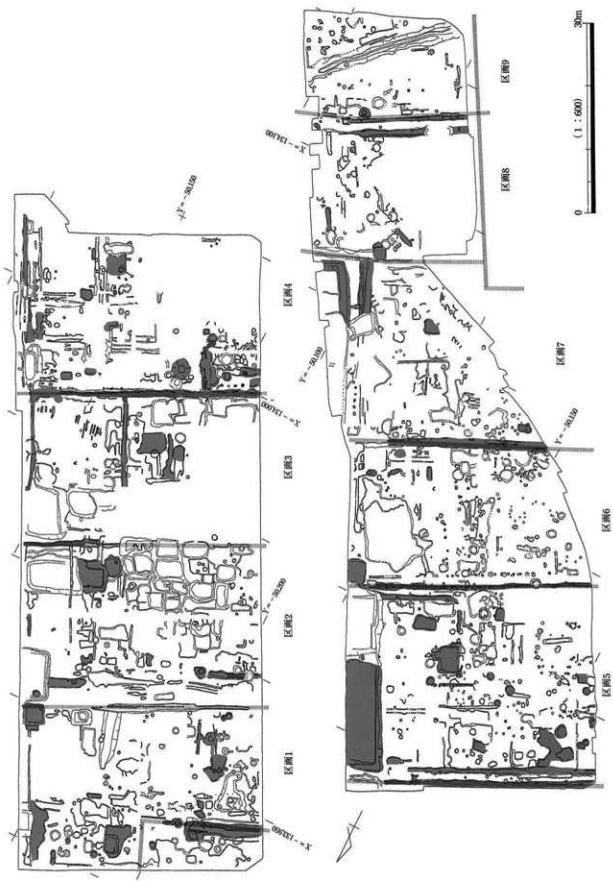


图144 出土遺物分布图 (18~19世紀初頭)

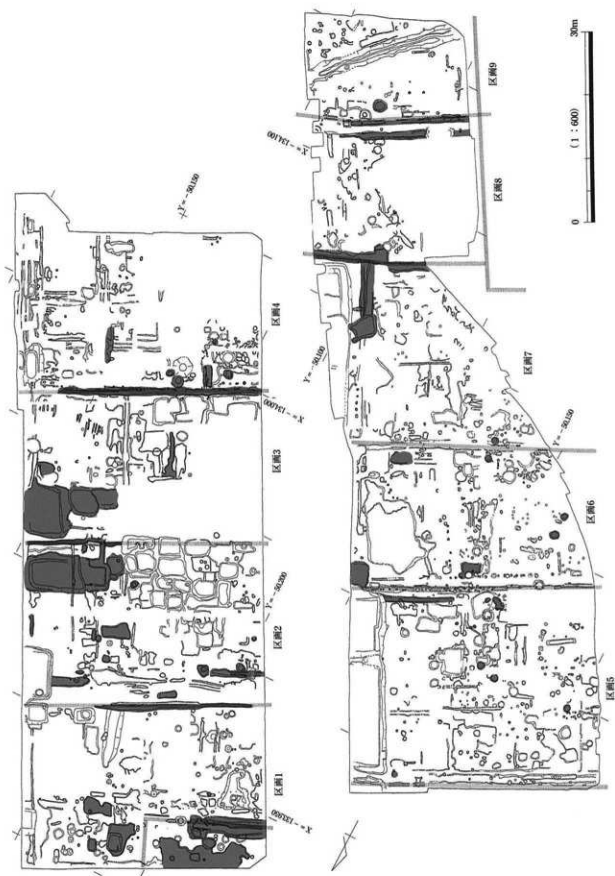


图145 出土遺物分布图 (19世紀前半~中頃)

19世紀後半（廃藩置県後）

廃藩置県（1871）により、陣屋は解体され、それに伴う廃棄遺構が屋敷地東半にみられる。区画2－落込17、区画3－落込5、区画4－土坑920、落込59、区画5－落込60・91、区画7－落込103がこれにあたる。

また、区画2・3の西半からは粘土採掘坑が密集した状態で検出された。遺構は切り合っておらず、隣接する遺構には壁を有する。19世紀中葉までの遺物が出土しているが、屋敷地内の建物があったと考えられる場所に位置しており、陣屋解体直後の遺構と考えられる。

廃棄遺構は、外堀内側の土塁を破壊して掘削しているものが多くみられ、屋敷地全面から中央部にかけて粘土採掘も行なわれ、陣屋が急速に解体されていったことが考えられる。

3. 屋敷地内の遺構とその配置

屋敷内には建物の他、井戸・便槽・ごみ溜めなどの施設があるが、発掘調査により、確認できる施設は地下部分に残ったもののみである。そういった限界があるが、残存する遺構から屋敷地内の利用状況を検討したい。

いずれの屋敷地も東側に外堀と土塁が存在し、西側に面して表門が配置されている。

建物跡は区画6において礎石建物を検出した。礎石はピット内に埋置された状態であるがすべてのピットを検出していない。東西13.6m、南北12.4mを測る建物を想定した。その他の区画では溝や遺構面の段差の配置により、区画1から建物、区画5から門の存在を想定した。建物は屋敷地内の表側西半に配置しているようである。

ごみ溜は大型の竪穴状の遺構であり、区画1～6から検出されている。屋敷内の配置は東側、特に東端に集中してみられる。

井戸はすべての屋敷地から検出されている（図146）。前述したように区画1北側の共有部分では2基1組となって存在していたことがわかった。各屋敷地では表側である西半、或いは中央部に配置されている場合が多いようである。また、複数の井戸が重複したり、隣接して検出されており、この状況は水脈との関係が考えられる。

便槽遺構は埋桶、埋壘として検出されている。各屋敷地でみられ、単独よりも2基或いは3基が隣り合って存在している場合が多いようである（図146）。各屋敷内の配置は西半に寄っているものが多い。

以上の配置状況より、建物は絵図のように中央から西半の表側に配置され、ごみ溜の大型廃棄遺構は東半の裏庭部分に掘削していることが想定できる。

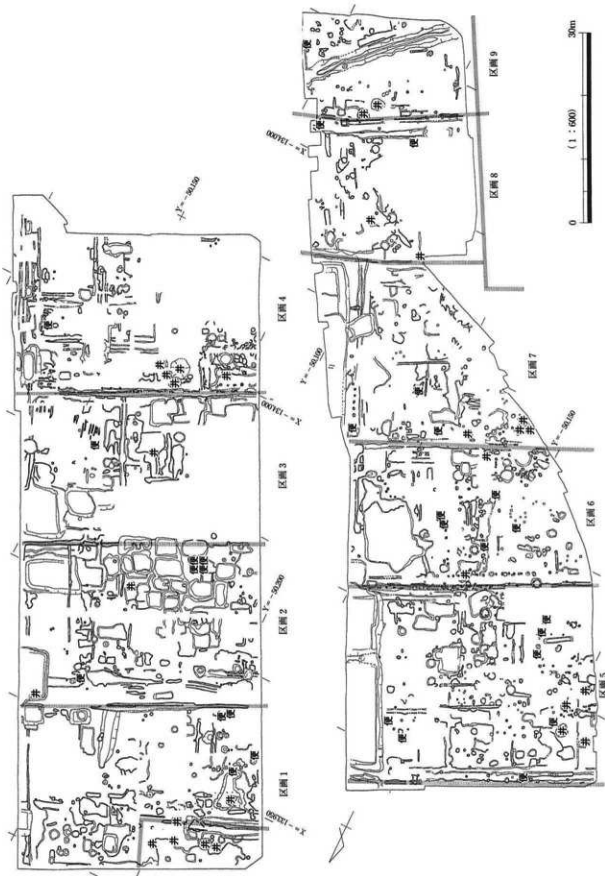


图146 井戸・便槽分布图

第4節 近世出土陶磁器の時期別組成・変遷

当遺跡からは、多くの遺構を検出し、大量の近世陶磁器が出土している。これらの陶磁器類について、一括遺物を対象として、遺物の種類、生産地、器種、器形を基準に分類し、破片計測法を用い、産地別、磁器碗・皿の構成比グラフを作成した。このような分析資料を基に、麻田藩陣屋跡における陶磁器の時間的様相、組成、器種別の変遷について、検討していきたいと思う。(赤松)

1. 対照とした遺構

取り上げた遺構は、いずれも一括廃棄が考えられる遺構である。

区画8 土坑 1267 屋敷地の北端中央部に位置している。径約 1.5m、深さ約 0.3mを測り、落込 118より先行することが、遺構の切り合い関係から認められる。

区画2 落込 46 屋敷地の西端やや北寄りに位置している。平面約 7×3m、深さ約 0.1mを測り、不定形を呈する。北に接する溝 100設置時の整地土層と考えられる。土坑 203・205より先行することが、遺構の切り合い関係から認められる。

区画5 土坑 654 屋敷地のほぼ中央部に位置している。平面約 4.2×3.2m、深さ 0.7mを測り、方形の竪穴を呈する。

区画2 土坑 26 屋敷地の南東隅にあたり、屋敷地の裏側に位置している。土坑内側周囲に幅約 0.7mのステップを有し、2段に掘り込まれている。1辺約 5.0mの方形の平面を呈する。落込 25より先行することが、遺構の切り合い関係から認められる。

区画3 落込 5 屋敷地の北東隅に位置している。平面約 8.0×5.5m、深さ約 0.5mを測り、壁面はほぼ垂直に掘削されている。落込 3より後出することが遺構の切り合い関係から認められる。また、土塁が存在する場所に位置し、土塁を破壊していることから、廃藩置県(明治4年 1871)後の遺構と考えられる。(市本)

2. 磁器類の分類

分類するにあたっては、東京大学埋蔵文化財調査室¹⁾による分類を参考にし、肥前磁器・瀬戸磁器の碗・皿類を分析した。

磁器碗(図 147)

(1) 初期伊万里碗

器形は筒型・天目型の碗。染付が中心。高台壘付以外は全面施釉。文様は手描きによる草花文・山水文がみられるが、ヘラなどで鉢状のケズリを入れるものもみられる。

(2) 肥前高台無釉碗

高台無釉の碗。染付・青磁が中心。寛永 14年(1637)の窯場の整理・統合以後に開窯した窯からはあまりみられなくなる。

(3) 肥前腰張筒型碗

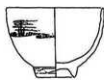
器形は、高台高が高くて、断面がU字状を呈する。高台の作りが粗雑で、降灰のあるものが多く、釉は生掛けでやや器厚が厚いものが多い。文様は柳文・網目文が多い。

(4) 肥前高台三角形の碗

高台の断面が三角に削られているもの。染付が中心。高台壘付以外は全面施釉であるが、高台釉際処理は不十分である。文様は、草花文・山水文がみられ、高台内に「大明」・「大明成化年製」・「宣徳年



1. 初期伊万里碗



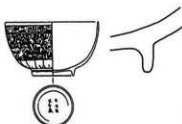
2. 肥前高台無軸碗



3. 肥前腰張筒型碗



4. 肥前高台三角碗



5. 肥前高台U字状高台径広碗



6. 肥前高台U字状高台径狭碗



7. 肥前高台U字状高台高低碗



8. 肥前「くらわんか」碗



9. 肥前半球型碗



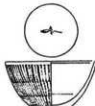
10. 肥前腰張碗



11. 肥前筒型碗



12. 肥前ハの字状高台碗



13. 肥前小広東型碗



14. 肥前広東型碗



15. 肥前端反碗

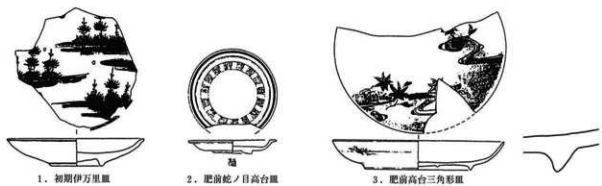


16. 瀬戸端反碗



17. 肥前湯呑

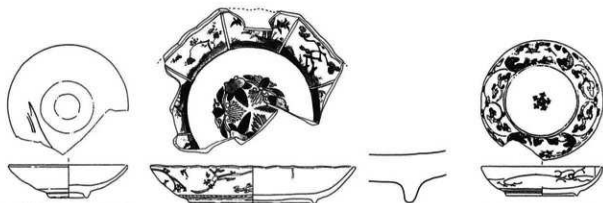
図147 陶磁器碗の分類



1. 初期伊万里皿

2. 肥前蛇ノ目高台皿

3. 肥前高台三角形皿



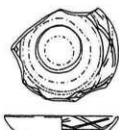
4. 肥前蛇ノ目輪渦ぎ高台無輪皿

5. 肥前高台U字状皿

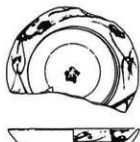
6. 肥前高台U字状粗製皿



7. 肥前蛇ノ目凹型高台高低皿



8. 肥前蛇ノ目輪渦ぎ高台径小皿



9. 肥前蛇ノ目輪渦ぎ高台径大皿



10. 肥前器高低U字状高台皿



11. 肥前蛇ノ目凹型高台高皿



12. 瀬戸木型打込皿

図148 陶磁器皿の分類

製」の銘を伴うものがある。

(5) 肥前高台U字状で高台高が高く、高台径が広い碗

高台の断面がU字状を呈し、高台高が高いタイプで、高台径が4～4.5cmと5～5.5cmのタイプに大別した。本タイプは、高台径が5～5.5cmの大きさをもつものである。文様は、手描きのもが中心であるが、コンニャク印判、型紙摺を用いたものがある。

(6) 肥前高台U字状で高台高が高く、高台径が狭い碗

(5)のものに比べて、高台径が4～4.5cmと狭いタイプのものである。文様は、手描きのもが中心で、コンニャク印判のものも多くみられるが、型紙摺のものは少ない。

(7) 肥前高台U字状で高台高が低い碗

高台断面がU字状を呈し高台高が低いもの。釉薬の処理も完成され、疊付際まで施釉されている。染付・青磁染付などがみられる。文様は手描きが中心であるが、コンニャク印判のものもある。

(8) 肥前「くらわんか」碗

胎土が灰色を呈し、器厚が厚くて呉須の発色も不鮮明のもの。文様は、簡略的なものが多く、梅樹文・雪輪草花文などが多くみられる。

(9) 肥前半球型碗

高台径が小さくて、器高は口径に比して低くて器壁が薄い。文様は、草花文・氷裂文等多種にわたる。

(10) 肥前腰張碗

高台径が小さくて、腰の張る碗。染付・青磁染付が中心。文様は、見込みに五弁花文・花文、口縁部内面に四方禪文が施されているものが多い。

(11) 肥前筒型碗

口径8cm前後、器高6cm前後、高台径5.5cm前後の大きさのもので、染付・青磁染付のものがみられる。文様は、見込みに手描きの五弁花文やコンニャク印判の五弁花がみられるものが多い。

(12) 肥前ハの字状高台碗

高台断面がハの字状に開く高台をもつもの。染付が中心。高台と同様のつまみをもつ蓋を有する。

(13) 肥前小広東型碗

高台径が小さく、広東型碗の底径だけを小さくしたタイプのもの。染付が中心。文様は、暦文、仙芝祝寿文が施されるものが多い。

(14) 肥前広東型碗

器形は、高台高が高く、体部が直線的に開くタイプのものである。染付が中心。文様は、文字文、草花文などがみられる。蓋を伴う。

(15) 肥前端反碗

口縁端部が外反するもの。蓋を伴うものもあり、同様に端部が端反する。染付が中心。文様は仙芝祝寿文、草花文などがみられる。

(16) 瀬戸端反碗

口縁部が端反するもの。蓋を伴うものもあり、同様に端部が端反する。染付が中心。文様は仙芝祝寿文、草花文などがみられる。

(17) 肥前湯呑

湯呑形の深い碗を呈するもの。染付が中心。文様は唐草文、草花文、高台脇に葡萄文が施されている

ものが多い。

磁器皿 (図 148)

(1) 初期伊万里皿

器形は高台径が小さく、軸が生掛けのもの。高台は削りが粗雑で皿付に砂目が付着している。染付・青磁がある。文様は、手描きが中心であるが、吹き墨等を用いたものが中心。

(2) 肥前蛇ノ目高台皿

蛇ノ目高台を有するもの。染付が中心。

(3) 肥前高台三角形皿

浅皿タイプ。高台断面が三角形を呈する。高台径が大きく高台中央にハリ支え痕がみられる。

(4) 肥前蛇ノ目軸刺ぎ高台無軸皿

高台径が小さく、高台無軸で見込みに蛇ノ目軸刺ぎするもの。染付・白磁・青磁がある。染付・青磁のものには簡略化された文様を施されているものが多い。

(5) 肥前高台U字状皿

高台断面がU字状を呈し、高台皿付まで施軸しているもの。東大分類では、上質の南川原窯の辻と有田内山系とを区別しているが本稿では同類とした。染付が中心。銘に二重角枠内満福が施されているものが多い。

(6) 肥前高台U字状粗製皿

高台断面がU字状を呈し、器厚が厚くて、呉須の発色が悪いもの。染付が中心。文様は簡略した扇文・草花文がみられる。高台内には「大明年製」・満福銘が施されている。

(7) 肥前蛇ノ目凹型高台高台高低皿

高台高が低くて、蛇ノ目凹型高台を有するもの。染付が中心。文様は内面に窓絵、外面に唐草文などを施したものが多い。

(8) 肥前蛇ノ目軸刺ぎ高台径小皿

蛇ノ目軸刺ぎの皿で底部が施軸されているものを特徴とするが、このうち、高台径が4~5cmのものと6~8cmのものに大別されるため、これは4~5cmの高台径をもつものをこのタイプにした。文様は、二重線の斜格子文が施されているものが多い。

(9) 肥前蛇ノ目軸刺ぎ高台径大皿

蛇ノ目軸刺ぎの皿で底部が施軸されており、高台径6~8cmの大きなタイプのもの。染付が中心。文様は、二重線の斜格子文に花文が施されているものが多い。

(10) 肥前器高の低いU字状高台皿

高台断面がU字状を呈し、器高の低いタイプのもの。染付が中心。文様は内面に窓絵、外面には唐草文などを施したものが多い。

(11) 肥前蛇ノ目凹型高台高皿

蛇ノ目凹型高台で高台高の高いもの。深めの型打ち輪花タイプが多く、文様も、内面全体に描かれるものが多い。また、裏文が描かれていないものもある。

(12) 瀬戸磁器木型打込皿

轆轤を使用せず全て型作りしたもの。白磁・染付がある。染付は方形・円形等があり、白磁は見込みに寿文を施したものが多くみられる。

3. 各時期の陶磁器の様相

先述の遺構から出土した陶磁器の様相を見てみたいと思う。遺構の年代観については、江戸時代を通して大きな屋敷替えや自然災害などの痕跡が検出されず、紀年銘資料等も出土されなかったため、絶対的な年代を特定できる遺構はなかった。そこで、出土遺物のなかで普遍的かつ大量に出土する肥前磁器、瀬戸磁器の碗・皿類の生産年代²⁾及びセット関係、丹波焼の播鉢編年³⁾から推定し、様相の古い順番から見てみたいと思う。なお、肥前磁器碗・皿、瀬戸磁器碗・皿の基準とした遺物については、麻田藩陣屋跡で多くみられるものを中心とした(図147・148)。

土坑1267(図122)

土坑1267は、17世紀後半の年代観をもつ遺構である。産地別組成(図149、表3)をみると、肥前磁器と丹波焼がそれぞれ35.0%と2分している。この他に土師質土器15.0%、京焼7.5%、肥前陶器5.0%、中国青花2.5%と続いている。この年代の遺構は、通常、京焼よりも肥前陶器の方が多く見られる。この遺構では京焼7.5%、肥前陶器5.0%の比率になっているが、これは土坑1267の出土破片数全体が多くないからである。

器種別にみると、碗・皿などの食膳具が55%と半数を占め、この食膳具の71%が肥前磁器碗であった。碗以外には、肥前磁器染付小杯や猪口、唐津系陶器器具手碗が出土していた。この他には調理具35%で、その内訳は焙烙と播鉢がみられ、播鉢はすべて丹波焼であった。調度具7%はすべて土師質土器灯明皿である。

肥前磁器碗・皿の特徴は、図147-3のような高台高が高く、高台断面がU字状で、体部が腰張筒型碗タイプのものが中心であるが、高台三角の白磁碗が1点出土していた(図122-12)。肥前磁器皿は、碗に対して出土量は少なく、見込み蛇ノ目軸刺ぎ底部無軸皿、色絵皿の2点のみであった。碗・皿共に、次の段階にみられる高台U字状高台径広碗や高台U字状皿などは出土していなかった。丹波焼播鉢は、大平茂氏の分類D類のみであった。

表3 産地別構成

	落込5	構成比(%)	土坑26	構成比(%)	土坑654	構成比(%)	落込46	構成比(%)	土坑1267	構成比(%)
肥前磁器	430	25.0	129	33.5	51	52.6	65	47.1	14	35.0
瀬戸磁器	73	4.2	4	1.0	0	0	0	0	0	0
中国青花	3	0.2	1	0.3	1	1.0	0	0	1	2.5
京焼系磁器	17	1.0	10	2.6	0	0	0	0	0	0
産地不明磁器	9	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0
肥前陶器	16	0.9	11	2.9	4	4.1	16	11.6	2	5.0
唐津焼	0	0	2	0.5	3	3.1	0	0	0	0
京焼系	0	0	0	0	0	0	0	0	3	7.5
京・伊賀・信楽焼系	609	35.3	98	25.5	13	13.4	25	18.1	0	0
信楽焼	17	1.0	3	0.8	0	0	0	0	0	0
萩焼	6	0.3	1	0.3	0	0	0	0	0	0
瀬戸・美濃焼	52	3.0	16	4.2	2	2.1	0	0	0	0
丹波焼	223	12.9	35	9.1	7	7.2	12	8.7	14	35.0
備前焼	14	0.8	5	1.3	1	1.0	1	0.7	0	0
堺・明石焼	79	4.6	12	3.1	10	10.3	0	0	0	0
大谷焼	1	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0
産地不明陶器	8	0.5	0	0	3	3.1	0	0	0	0
軟質施釉陶器	37	2.1	7	1.8	0	0	2	1.4	0	0
土師質土器	115	6.7	51	13.2	2	2.1	16	11.6	6	15.0
瓦質土器	14	0.8	0	0	0	0	1	0.7	0	0
合計	1723		385		97		138		40	

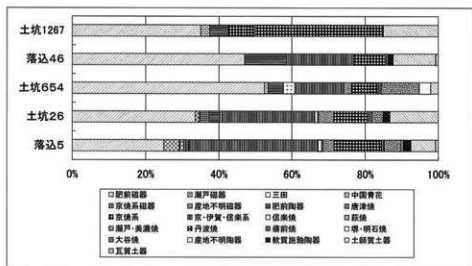


図149 産地別構成比グラフ

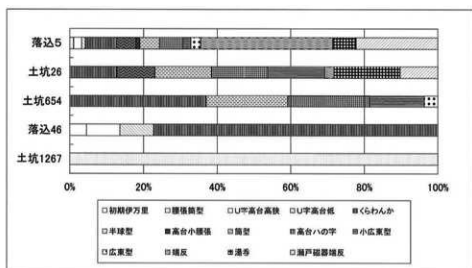


図150 碗タイプ別構成比グラフ

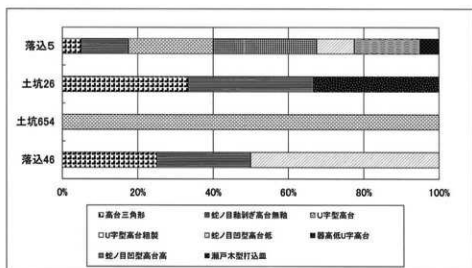


図151 皿タイプ別構成比グラフ

表4 産地別・器種別出土点数(1)

		土坑 1287	落込 45	土坑 654	土坑 28	落込 5			土坑 1287	落込 45	土坑 654	土坑 28	落込 5	
肥前磁器	染付	1	8	5	30	26	肥前磁器	瓶	染付	5	3	8	9	
	色繪	2	2		4	1		色繪				1	2	
	白磁		12		4	5		白磁		1			5	
	青磁		3					青磁					1	
	青磁染付			1	2	1	御神酒徳利	染付					3	4
	鉄軸				1	1	水漬	染付		1			2	
初期伊万里	染付		1					色繪						
腰板筒型柄	染付		7			2		白磁					1	
U字高台高狭	染付		2			2		青磁					1	
	白磁					2	蓋	青磁染付					1	
U字高台低	染付		2			1	広東(小)	染付					2	
	白磁					1	広東(大)	染付			1	1	4	
くらわんか	染付		17	10	5	16	八字	染付			4	1	4	
半球	染付				4	10	端反	染付					3	12
高台小腰張	染付					2	蓋物	染付					1	7
筒型	青磁			6	5	9	段重	色繪					1	
	青磁染付				1	1	ミニチュア	白磁			2			
高台ハの字	染付			3	3	5	器種不明						33	
	白磁					3	京焼系磁器	碗	染付			1	3	
小広東	染付			4	6	4		青磁					2	
広東	染付			1	5	5	猪口	染付					1	
端反	染付				1	63	湯呑	染付					1	5
	色繪					3	皿	染付					3	2
	白磁					2		青磁					1	
湯呑	染付					7	鉢	染付					4	
小杯	染付		1	3	2	1	植木鉢	青磁					1	
	白磁		2	1		1	段重	染付					2	
	青磁		1				瓶	染付				1	1	
酒杯	染付				8	2		青磁					3	
	白磁					3	急須	染付					3	
仏飯具	染付			1		3		青磁					1	
	色繪					1	不明	青磁						
	白磁					3	瀬戸磁器	端反碗	染付				4	41
皿	染付		1		5	2		色繪					1	
	色繪					1	小杯	染付					5	
	白磁					1	酒杯	染付					2	
	青磁					4	湯呑	染付					6	
高台三角形	染付		1		1	2		色繪					2	
蛇の目輪割ぎ高台無軸	染付					1	皿	染付					1	
	白磁					2	型皿	染付					1	
U字高台	染付			1		8		白磁					1	
	白磁					1	蓋(端反碗)	染付					4	
U字高台植製	染付					11	中国青花	碗	染付			1		
蛇凹高台低	染付		2			4	皿	染付		3			1	
器高低U字高台	染付				1		蓋	染付				1		
蛇凹高台高	染付					7	漆華	染付					2	
小皿(U字高台)	染付				2	6	産地不明磁器	類反碗	染付				2	
深皿	染付			5	1	8	小杯	染付					1	
紅皿	白磁					2	湯呑	染付					5	
鉢	染付			2	3	34	鉢	青磁					1	
	色繪					4	肥前陶器	碗					1	
	青磁					5		内野山						
植木鉢	染付					1		呉器手		1	1			
猪口	染付		1			8		京焼風陶器			5		3	
	白磁				1	1		唐津系刷毛目			1		1	
そば猪口	染付		1		1	1		小杯	唐津系刷毛目				5	
蓋物	染付				4	6		皿	内野山		1		1	
	色繪					2		鉢	京焼風陶器		1		4	
段重	染付				2	8		唐津系刷毛目			7	4	1	4
	色繪				1	6		三島手					6	
香炉	青磁					2		陶胎染付					1	
								鑊			1			

表5 産地別・器種別出土点数(2)

		土坑 1267	溝込 46	土坑 654	土坑 26	溝込 5			土坑 1267	溝込 46	土坑 654	土坑 26	溝込 5
唐津焼	碗			3	1		丹波焼	器種不明					8
	短				1		備前焼	皿				1	2
京焼系	碗	3						灯明皿	1				
家・伊賀・ 信楽焼系	碗		10	3	10	15		鉢		1			4
	碗反				1			摺鉢					1
	碗反 貫入				5	34		小壺					1
	小杉			1		5		壺					1
	半球 色絵		6		6			壺					1
	碗反 鉄絵					2		瓶					1
	碗反 銅緑釉					2		徳利				2	2
	小杯					3		蓋					1
	灯明皿			1	2	6		きじ				1	
	灯明受皿					5		ミニチュア (摺鉢)					1
	有脚灯明皿					1	堺・明石焼	鉢					2
	鉢		1		3	20		楠木鉢			1		10
	鉄鉢			1	5	9		摺鉢			9	11	67
	蟹水入れ				1			蓋				1	
	湯ざまし					1	大谷焼	壺					1
	蓋物				1		軟質施釉陶器	角皿					2
	片口					4		棒軸灯明皿		1		5	6
	香炉					5		棒軸灯明受皿					21
	瓶			1	2			行灯皿		1			1
	尿瓶				1			楠木鉢					1
	御神酒徳利					1		急須					2
	燗徳利					4		水漬					1
	水注					2		行平					1
	急須					33		土鍋蓋					2
	土瓶		7	1	33	231		兼備					1
	水漬					1		不明					1
	土鍋		1	5	14	74	産地不明陶器	碗					7
	行平					4	81	鉢					1
	蓋 蓋物			1	4	3		瓶			1		
	水注					2		器種不明					2
	急須					2	土師質土器	皿	口く口		1	3	2
	土瓶					35		平づくね	2	8	1	5	1
	行平・土鍋					5	24	楠木鉢					
	カンテラ					1		火消し壺					8
	カンテラ					1		火鉢		1		11	28
信楽焼	鉢					2		燈伊		1			
	火鉢				1			漆伊					6
	壺				2	15		十能					1
萩焼	碗					1		七輪さな					3
	ビラカケ					1		焼塩壺					1
瀬戸・美濃焼	碗				4	4		鍋					1
	天目				1	2		焙烙	不明	1	3		6
	行灯皿					4		C					1
	鉢					1		D		3			1
	水漬			1		20		E					1
	楠木鉢				4	10		G				9	19
	香炉・火入れ					1		蓋					1
	火鉢				4	4		焼塩壺					1
	壺			1				火消壺					1
	徳利					1		兼備					1
	蓋					6		ミニチュア					1
	不明					2		器種不明		3			6
丹波焼	鉢			1	2			瓦質土器			1		
	楠木鉢					11	39	火鉢					4
	摺鉢		14	4	3	2	8	不明					10
	瓶						1						
	徳利				2	8	61	合計		40	138	97	385
	壺			7		14	106						1723

落込 46 (図 82)

落込 46 は、18 世紀前半の遺構である。産地別組成をみると、肥前磁器 47.1%、京・伊賀・信楽焼系 18.1%、肥前陶器 11.6%、丹波焼 8.7%、土師質土器 11.6%、備前焼 0.7%、軟質施釉陶器 1.4%、瓦質土器 0.7% であり、土坑 1267 に引き続き、肥前磁器が多く出土しているが、他の産地が増えている。前回までみられなかった京・伊賀・信楽焼系製品の色絵半球型碗や土瓶・土鍋が、この段階から出土し始め、陶器類において肥前陶器との割合が逆転している。肥前陶器は、碗・皿類が中心となっているが、唐津系陶器刷毛目鉢、京焼風陶器鉢など鉢類が新たに出土し始めたことにより出土量が増えている。

器種別にみると、土坑 1267 と同様に食膳具が 56% と半数を占める。食膳具の中心は、土坑 1267 と同様に碗が 80% と大半であった。碗の次が鉢 8%、小杯 5%、皿 2% と続く。また、新たな器種として火鉢や焔炉などの調理具や土瓶・土鍋などの調理具が見られ始める。

肥前磁器碗・皿の特徴は、碗が初期伊万里、高台 U 字状高台径狭 (図 82-6)、高台 U 字状高台高低 (図 82-5)、くらわんか手 (図 82-7) が出土し、磁器碗の組成比を見るとくらわんか手が約 77% を占めている (図 150)。くらわんか手は、比較的丁寧に文様が描かれているものが多く、高台内の銘は、「大明年製」の銘をもつものが大半であった。肥前磁器皿は、出土量が少なかったが高台三角、蛇ノ目凹型高台高低が見られた。この他のもので、京焼風陶器碗の高台内の削りについては、高台脇と同じか浅く削られているものが多かった。丹波焼播鉢は大平茂氏の分類 D・E 類が中心であった。

土坑 654 (図 105)

土坑 654 は、18 世紀後半～19 世紀初頭の遺構である。産地別組成をみると、肥前磁器 52.6%、京・伊賀・信楽焼系 13.4%、堺・明石焼 10.3%、丹波焼 7.2%、肥前陶器 4.1%、唐津焼 3.1%、産地不明陶器 3.1%、土師質土器 2.1%、瀬戸・美濃焼 2.1%、中国製青花 1.0%、備前焼 1.0% であった。前代に引き続き肥前磁器が半数以上を占めている。新たに堺・明石焼、瀬戸・美濃焼が加わり、産地が増えている。堺・明石焼の製品は、すべて播鉢で、出土数をみると丹波焼播鉢より多く出土している。

器種別にみると、食膳具が中心で、前代に引き続き磁器碗が大半を占めている。鉢類が唐津系陶器刷毛目などの肥前陶器が中心となっているが、肥前磁器染付鉢が新たに見られ始めている。

肥前磁器碗・皿の特徴は、碗の中心がくらわんか手と筒型碗で、この他に、ハの字状高台碗、小広東型碗がみられ、若干ではあるが広東型碗が出土している (図 151)。肥前磁器皿は U 字状高台皿が出土している。京・伊賀・信楽焼系は、落込 46 までは食膳具がほとんどであったが、この遺構からは鉢類や灯明皿など調理具が加わる。

土坑 26 (図 81)

土坑 26 は、1871 年の廃藩置県による陣屋の移転の際に廃棄された遺構に切られた 1 時期古い遺構である。出土物からも、くらわんか手碗・筒型碗、小広東型碗などを中心とするが、土坑 654 に比べると、瀬戸磁器が出土していることと、丹波焼播鉢が出土していることから、19 世紀前半でも中頃に近い段階と思われる。

土坑 26 の産地別組成をみると、肥前磁器 33.5%、京・伊賀・信楽焼系 25.5%、土師質土器 13.2%、丹波焼 9.1%、瀬戸・美濃焼 4.2%、堺・明石焼 3.1%、肥前陶器 2.9%、京焼系磁器 2.6%、備前焼 1.3%、瀬戸磁器 1.0%、唐津焼 0.5%、軟質施釉陶器 1.8%、中国製青花 0.3%、萩焼 0.3% であった。肥前磁器がここでも一番多く出土しているが、新たに京焼系磁器⁴⁾、瀬戸磁器などが出現し、肥前磁器・中国青花以外の生産地が加わる。

器種別にみると、やはりこの遺構でも食膳具が中心で、肥前磁器が多く出土しているが、京焼系磁器型押皿・瀬戸磁器端反碗など、肥前磁器以外の産地のものが見られ始める。調理具は、土瓶・土鍋・行平などの器種が増えている。また、調度具において、丹波焼、瀬戸・美濃焼の植木鉢が新たにみられるようになる。

肥前磁器碗の特徴は、くらわんか手碗・筒型碗、小広東型碗が中心であるが、端反碗(図81-4)が少量だが出土している。くらわんか手碗・筒型碗は、文様が簡略化されたものが多く、特にくらわんか手碗タイプのもは、器厚が厚くて、やや大がりで、高台内には銘がなく、体部には丸意文が描かれているものが多かった。筒型碗は、高台脇まで文様を施したものがほとんどなかった。肥前磁器皿は、器高低U字状高台、U字状高台などが出土している。また、この遺構からは、瀬戸磁器端反碗が出土している。口径11cm、器高6.5cmと、やや大きめの碗で、藤澤良祐氏の編年第9小期Ⅱ期⁵⁾に属し、瀬戸磁器の初期のものと思われる。陶器においては、京・伊賀・信楽系端反碗が現れる。高台無軸で、体部に掛けられた灰軸が貫入状になったものである。また、前代に引き続き、色絵の半球型碗は一定量出土している。瀬戸・美濃焼も香炉や植木鉢などの調度具を中心に出土量が増えている。

落込5 (図90~92)

第4章第4節でも述べたが、1871年の廃藩置県による陣屋機能停止の際の廃棄遺構と考えられる遺構である。

落込5の産地別組成は、京・伊賀・信楽焼系35.3%、肥前磁器25.0%、丹波焼12.9%、土師質土器6.7%、堺・明石焼系4.6%、瀬戸磁器4.2%、瀬戸・美濃焼3.0%、京焼系磁器1.0%、信楽焼1.0%、肥前陶器0.9%、備前焼0.8%、瓦質土器0.8%、軟質施軸陶器2.1%、産地不明陶器0.5%、産地不明磁器0.5%、萩焼0.3%、中国製青花0.2%、大谷焼0.1%と、さらに生産地が増えている。京・伊賀・信楽焼系が肥前磁器と逆転しているが、落込5と同じく廃藩置県による陣屋停止後に廃棄された遺構の落込25・落込61のうちでは、肥前磁器が一番多く出土しており、このことから、陣屋の時代を通して、肥前磁器が主流を占めていたことが分かる。

器種別にみると、食膳具が前代に引き続き多い。中心は肥前磁器製品の碗・皿類であるが、瀬戸磁器端反碗、京焼系磁器碗なども多く出土している。また、新器種として肥前磁器・京焼系磁器の湯呑茶碗が見られ始める。陶器においては、京・伊賀・信楽焼系端反碗も、肥前磁器・瀬戸磁器の端反碗に続いて多く出土している。調度具は、磁器は肥前磁器が中心で、紅皿・段重などの化粧道具や水滴などの文具、陶器では京・伊賀・信楽焼系が中心で、灯明皿や灯明受皿の灯明具に偏っている。調理具は、京・伊賀・信楽焼系土鍋・行平・土瓶は、土坑26に比べて急増している。この他には播鉢や焙烙が見られる。播鉢は堺・明石焼製品が中心で、丹波焼播鉢も少量だが出土している。外面に鉄軸を施したもので、鉄軸に光沢観が見られるようになる。貯蔵具は丹波焼甕が出土し、大谷焼鉢型のものが見られ始める。

肥前磁器碗の特徴は、染付端反が半数近く占め、くらわんか手碗、ハの字状高台碗、広東型碗などがみられる。肥前磁器皿は、蛇ノ目凹型高台高低タイプが半数近くあり、U字状高台粗製、U字状高台、蛇ノ目軸刺ぎ高台無軸などがみられた。京焼系磁器では、型作り成形された急須や水注がこの遺構からは多く出土しており、内面に指押さえ痕がみられるものが多い。(赤松)

4. 各時期の土師質土器の様相

計測に使用した遺構における土師質土器の様相と共に、皿と焙烙について他遺構出土製品も含めて、出土傾向の検討を行った。

土坑 1267 (図 122)

皿・焙烙の2種類が出土している。出土した皿は手づくね成形の皿のみである。焙烙は形態のわかる破片が無いが、区画1土坑48のように同時期の遺構などからは難波分類D類の焙烙(図76-4)が出土している。

落込 46 (図 82)

ここでは皿・焙烙以外に大型製品(火鉢類)が出土しており、全体の9.2%を土師質土器が占める。皿は手づくね成形で、指頭圧調整痕の他に手掌圧調整痕を持つ皿がある。麻田藩陣屋ではこの時期から柿釉灯明皿が出土するようになる。焙烙は難波分類D類であり、区画4土坑827などの同時期の遺構からの出土品(図98-6)もD類が大半を占める。

土坑 654 (図 105)

ここは土師質土器の出土数が2点と極端に少ない。同時期の遺構(図79-10 区画2井戸9・図121-13 区画8溝324・他)からの出土遺物を見ると、皿は手づくね成形とロクロ成形がある。焙烙はG類が大半を占め、D類が若干混じる程度である。この他火鉢類などの大型製品については、次の土坑26と基本的に様相は変わらない。

土坑 26 (図 81)

皿は手づくね成形とロクロ成形であるが、この時期のロクロ成形の皿は同時期に見られる柿釉灯明皿と同じ形態を呈する。焙烙はC・D・E類が出土している。しかし、同時期の遺構を見るとG類の焙烙(図110-11 区画6井戸13・他)が圧倒的に多い。火鉢・焔炉などの大型品、人形・ミニチュア製品も目立って増える。

落込 5 (図 90~92)

さらに器種は増えているが、基本的に土坑26と同様の様相を示す。気になる点として、近隣の遺跡ではこの時期になると京・伊賀・信楽焼系の灯明皿が増加し、土師質土器灯明皿や柿釉灯明皿が減少傾向にある。しかし、この遺構からはそのような傾向は見られなかった。今回は破片数計測を行っているため、割れやすい土師質土器の破片数の方が多くなる傾向がある。そのため、これが麻田藩陣屋跡の傾向であるかどうかはもう少し資料の検討が必要である。

皿の変遷

17世紀初頭にはロクロ成形と手づくね成形のものがある。どちらも資料的には数が少ないが、口径11.0cmのサイズが出土している。

17世紀中頃から後半になると手づくね成形の皿のみで、ロクロ成形の皿は見られなくなる。手づくね成形の皿は底部からの立ち上がりがはっきりしているもの(図122-15)と、底部から丸みを帯びて立ち上がるもの(図104-2)がある。サイズは口径9.0、10.0、12.0cmのものが出土している。大坂城下町遺跡において、17世紀中頃から後半にかけてロクロ成形の皿がほとんど見られなくなるという⁶⁾。麻田藩においても同様の傾向が見られた。

18世紀初頭を含む資料になるとロクロ成形の皿が出土するようになる。続く18世紀前半にかけては手づくね成形の皿の中に、手掌圧調整の痕を持つものが見られる。18世紀前半の手づくね成形の皿は口径8.0、10.0cm、ロクロ成形の皿は口径7.0cmのサイズがある。この時期に柿釉灯明皿が出土するようになる。

18世紀後半には手づくね・ロクロ成形の皿の他に外面をヘラ削り調整する皿が見られ、口径8.0、

10.0cmのサイズがある。手づくね成形の皿は口径10.0～12.0cmと口径の大きな皿が目立つ。それに対しロクロ成形の皿は口径6.0、8.0、10.0cmのサイズの皿があり、6.0、8.0cmの小型の皿が目立つ。この時期のロクロ成形の皿は同時期に出土する柿釉灯明皿と器形・サイズ共に比例する。

これ以降19世紀に入っても同様の様相を示す。

焙烙の変遷

17世紀中頃までの遺構からは焙烙の出土量は少ないが、A・C・E類が出土している。17世紀後半になるとD類が出現して主流となり、E類が少量出土する。18世紀に入り、18世紀中頃までD類主体の状態は続く。これが18世紀後半に入るとG類がD類と取って代わるようになり、19世紀代に入ってもG類が主流である。(渡辺)

5. まとめ

各時期の陶磁器の様相を見てきた。産地別では、肥前磁器が江戸時代を通して陶磁器全体の主流であった。19世紀代に入って、瀬戸磁器・京焼系磁器など肥前磁器以外の磁器製品が出土し始めるが、これらのごく限られた器種のみで、幕末まで陶磁器の中心であり続けた。陶器では、17世紀代は肥前陶器、18世紀前半以降は京・伊賀・信楽焼系が中心となっており、この傾向は、大坂城跡や堺環濠都市遺跡と共通する⁷⁾。焼締製品は、丹波焼製品が江戸時代を通して、ほぼ8割を占め続けるが、播鉢だけは18世紀後半以降、堺・明石焼製品にシェア奪われる。土師質製品は、時代を通して出土しているが、他の近世遺跡に比べると出土量が少ないのが特徴である。

器種別にみると、碗・皿などの食膳具が江戸時代を通して多くみられた。また、碗・皿の器種別組成をみてわかるように、18世紀前半以降に器種や出土量が増え、この時期に画期がみられる。また、磁器の碗・皿の分類を行ったが、今回取り上げた遺構からは、分類したものが見られないものもあったが、これらの遺構以外からは出土している。個別に見ると、磁器碗は常に食膳具の中で半数以上を占めていたが、それに反して、皿は19世紀代から出土量が増えているが、幕末期の一括廃棄遺構からは、17世紀代や18世紀代の伝世品と思われる皿が出土する例が多く、このことから、皿は碗に比べて長期に使用されていたと思われる。

また、調理具の土瓶・土鍋は、18世紀前半から出土しているが、少量であり、出土量が増えてくるのは19世紀前半以降である。焙烙は、17世紀前半から見られるが、17世紀後半以降に出土量が増える。17世紀後半～18世紀中頃までは、難波洋三氏の分類D類⁸⁾が主流であり、18世紀後半以降はG類が主流となる。しかし、近接する伊丹郷町遺跡では、17世紀後半～18世紀中頃はE類が中心で、D類は極少量しかなく、出土の様相が異なっている。18世紀後半以降は伊丹郷町でもG類が中心となっており、この傾向は同じであった⁹⁾。調度具については、化粧道具は17世紀後半頃から見られ、増えるのが18世紀後半以降である。灯明具は、17世紀代には土師質土器皿、18世紀代に入ると柿釉灯明皿が出現し、土師質土器皿と2分する。18世紀後半以降は京・伊賀・信楽焼系製品が加わる。

以上のように、麻田藩陣屋跡の陶磁器は、18世紀前半以降に器種や産地の増加など様相が変化していく傾向があった。大まかな様相は、大坂城跡や堺環濠都市遺跡と共通するが、伊丹郷町遺跡とは共通するところは少なかった。今回、限られた資料のみで検討したが、今後の調査報告の過程で追加訂正を迫られる可能性が考えられるが、大まかな傾向は変わらないと思う。(赤松)

注

- 1) 成瀬晃司・堀内秀樹 1990 「第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析—東京大学構内遺跡病院地点出土資料を例に—」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告 3 東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点』東京大学遺跡調査室
- 2) 大橋康二 1993 『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
藤澤良祐 1998 「近世瀬戸磁器編年の再検討—磁器埋戻しを中心に—」『楠崎彰一先生古希記念論文集』楠崎彰一先生古希記念論集発行会
- 3) 大平茂 1992 「近世丹波焼播鉢の型式分類と編年」『三田市下相野遺址 近畿自動車道舞鶴線開保埋蔵文化財調査報告書XV II』兵庫県教育委員会
- 4) 京焼系磁器と分類したものは、兵庫県三田市の三田焼、同県篠山市の王地山焼の窯資料に類品がみられるものである。三田・王地山焼は、京都の陶工欽堂亀祐から磁器焼成技術の指導を受けているため、類品が多く、特に、土型による型物は区別が困難である。また、欽堂亀祐は、三田・王地山焼以外にも和歌山県の男山焼でも技術指導しており、窯跡資料から類品が出土している。このようなことから、京焼の影響を受けてはいるが、生産地の特定が難しいため、これの製品であると考えられるものは京焼系磁器と分類した。
- 5) 藤澤良祐 1999 「瀬戸・美濃の天目について」『開館 20 周年記念秋季特別展 茶の湯の名碗—和物茶碗—』茶道資料館
- 6) 積山洋 1999 「大坂の土師質土器—主要器種を中心に—」『関西近世考古学研究』VII
- 7) 積山洋 1994 「近世陶磁器の諸様相—消費地における 18・19 世紀の器種構成—」第 6 回関西近世考古学研究会
- 8) 難波洋三 1992 「徳川氏大坂城時代の焙烙」『難波宮址の研究第九』財団法人 大阪市文化財協会
- 9) 川口宏海 1995 「江戸時代の土師質土器の製作技法—兵庫県伊丹町遺跡出土遺物を中心として—」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第 15 号』大手前女子学園

第5節 近世出土窯道具と溶着磁器の様相

今調査において、大量の近世遺物が出土し、その中で、匣鉢を中心とした窯道具が多数出土している。本節は、これら窯道具の特徴と他の生産地遺跡出土の窯資料と対比してみたいと思う。(赤松)

1. 出土状況

窯道具は調査区全域から出土しているが、その分布状況をみると区画2・3と7・8、それぞれを中心とした地点から出土していることがわかる(図152)。区画3は攪乱が大きく占めるので、本来の分布状況を示しているとは言えず、周辺の分布状況を見てもう少し出土点数があったことが想定される。また、これらを使用した窯本体や付属施設等は検出されておらず、いずれも2次的な出土状況といえよう。(市本)

2. 窯道具について

麻田藩陣屋跡から出土した窯道具は、匣鉢・ハマ・カワセである。

匣鉢(図128-7~16)

匣鉢は、焼成時に灰や他の製品との熔着を防ぐために製品を入れる筒型の窯道具である。

出土した窯道具の中で一番多くみられ、計測可能なものだけで116点出土している。器形は筒型を呈し、大きさは、口径20cm前後で、器高が8cm前後と12cm前後に大別される。ロクロ成形で、底部に糸切り痕がみられる。底部はいずれも平底であった。また、匣鉢の底部や口縁部に団子状粘土塊や粘土紐状のものが付着しているもの(図128-15・16)がある。瀬戸・美濃ではヨク土と呼ばれているもので、匣鉢を重ね積みする際、ズレないように固定するためや、匣鉢を密閉するために使用されるものである。さらに、出土した匣鉢の中に青磁製品が熔着したもの(図128-13・14)があった。

モノレール調査トレンチから口径18.6cm、器高12.0cmの匣鉢が出土している(P.71 図60-4)。

匣蓋(図128-4・5)

匣蓋は匣鉢の蓋である。器形は方形を呈する。大きさは、長さ17cm前後、幅15cm前後、厚さ5cm前後を測る。大半のものが、焼成時に変形されたものが多かった。また、1点のみであったが、図128-5のようにカワセが熔着したものがみられ、上面に小型品を載せて焼成したと思われる。

カワセ(図128-3)

カワセは、焼成時に、棚板やタコハマ上で製品を効率よく焼くために高低差をつけて、製品が熔着しないようにするための窯道具である。出土したものは陶器質で、上面には糸切り痕がみられる。麻田藩陣屋跡からは1点しか出土していない。

ハマ(図128-2)



図152 匣鉢の出土分布

ハマは、陶磁を焼成する際、器物の歪みを防ぐため、器物の下に敷く焼台である。出土したものの素地は陶質である。底部には三足の脚がみられる。当調査区では1点のみの出土であるが、モノレール調査5Aトレンチの包含層から1点出土している(P.56 図46-1)。三足の脚が欠損しているが同一形態である。上面に直径3.3cmの磁器高台痕が観察できる。

溶着資料(図128-1・4・13・14)

図128-1は、染付磁器の溶着資料である。器種は急須・鉢と思われる。鉢の文様は丸文内に捺子文・四方禪文を描いている。急須は、文様はわからなかったが、内面に指押え痕がみられた。この鉢と同じタイプのものが、2点(図88-11・127-14)出土している。

図128-4・13・14は、匣鉢に青磁製品が溶着している資料である。13・14はおそらく鉢と思われる。これらの胎土はN8/灰白色の色調を呈し、釉調は10GY6/1 緑灰色、或いは7.5Y6/3 オリーブ黄色で釉厚は薄い。また、器面にピンホールがみられる。このような特徴をもつ青磁は、溶着資料以外にも出土している。主に瓶類が多く、中でも、図81-15、84-16のような算木型瓶が多くみられ、各区画から1~2点の破片が出土していた。瓶類以外では図91-6の植木鉢、図91-3の瓶が見られた。これら以外にも、胎土・釉調など共通する青磁が見られ、青磁の溶着資料と同じ窯で焼かれたと現時点では断言できないが、共通するところは多い。

3. 他の生産地遺跡と比較

窯道具に関しては、匣鉢は肥前や瀬戸などでみられる丸底のものが見られず、すべて平底のもので、この特徴は京都系と共通する。また、肥前では18世紀後半以降から、型成形によって作られた匣鉢が多くみられるようになり、麻田藩陣屋跡のものとは異なる。また、匣鉢以外の窯道具については、足付ハマとカワセが1点づつであった。足付きハマは、肥前や瀬戸・美濃、三田、王地山に同形のものがみられる。

製品については、溶着資料から青磁、染付製品に焼かれていたことがわかった。青磁は、三田や王地山などの京焼系のものに比べて、釉は薄く、器面にピンホールがみられるのが特徴である。

染付製品は少量で、器形や文様の意匠が肥前と似ているが、急須は、同じようなタイプのものが三田・王地山の窯跡から出土しており、技術が京焼系と共通していると思われる。

また、溶着資料と共に同じ窯で焼かれたと類推される染付磁器、青磁の胎土分析をおこなった。結果は第5章第6節に掲載した通りであり、瀬戸・砥部・備前との近似性が低いことのみが明らかになった程度であり、明瞭な他生産地との共通性を見出すには至らなかった。

4. まとめ

このように、窯跡は確認されておらず、記録・文献資料でも磁器を生産していた資料は見られないが、19世紀前半~19世紀中頃の遺構から多くの窯道具や溶着資料が出土した。また、当調査地の東側に隣接するモノレール建設時調査の5Aトレンチ井戸1と包含層から窯道具が出土していることから、麻田藩陣屋跡付近で磁器窯が操業していたと考えられる。この窯は、窯道具や溶着資料からみると、肥前や瀬戸・美濃から陶工が来た可能性はほとんどないと思われ、むしろ三田・王地山などの京焼系磁器技術の影響を少なからず受けていると考えられる。(赤松)

参考文献

石神由貴 1999 「三田焼の変遷について—三輪明神窯跡出土品より」『平成11年 第12回歴史講演会 日本の青磁 三田の青磁』別添資料

大橋康二他 1988 『有田町史』古窯編 有田町

大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社

佐藤隆他 1999 『壱島龍屋堂跡』(財)大阪市文化財協会

三田市教育委員会 2000 「三輪明神窯 開窯200年」『平成11年度 さんだのいせき 46~50 企画展』

藤澤良祐他 1993 『瀬戸市史』陶磁史篇9 瀬戸市

表6 匣鉢計測表

屋敷 区画	トレン チ	地区	遺構	器高 (残存)	底径	口径	器厚	屋敷 区画	トレン チ	地区	遺構	器高 (残存)	底径	口径	器厚
1	2D	E3-e1	落込8	8.2	21.0	20.0	1.1	3	3D	E2-g7	落込3	(5.4)	-	22.0	1.8
1	2D	E3-d1	ヒット27	9.5	22.0	20.0	1.3	3	1D	E2-h7	落込5	(7.6)	20.0	-	1.4
1	2D	E3-d1	ヒット27	-	-	-	2	3	1D	E2-h7	落込5	(3.0)	19.0	-	2.7
1	2D	E3-e1	ヒット72	11.8	18.0	18.4	1.5	3	1D	E2-h7	落込5	8.5	-	17.0	1.6
1	3D	E2-b9	ヒット157	11	21.0	18.8	1.2	3	1D	E2-h7	落込5	(5.3)	-	24.5	1.7
1	2D	E2-e10	1層	9.4	27.0	27.4	2.3	3	1D	E2-h7	落込5	(3.3)	-	11.0	0.8
1	2D	E3-d2	3層	7.6	20.0	19.6	1.7	3	1D	E2-h7	落込5	(5.3)	-	17.0	1.5
1	2D	E3-d2	3層	(6.5)	-	18.0	1	3	1D	E2-g7	落込5	(4.3)	18.0	-	1.1
1	2D	E3-d2	3層	(4.7)	-	18.0	1	3	1D	E2-g7	落込5	-	-	-	1
1	3D	E2-d9	3層	(4.2)	22.0	-	1.8	3	1D	E2-g7	落込5	(6.8)	-	24.0	1.5
2	3D	E2-f7	溝62	(1.5)	6.4	-	0.8	3	1D	E2-g7	落込5	-	-	-	1.2
2	2D	E2-g6	井戸5	12.3	18.2	15.8	1.3	3	3D	E2-g7	落込5	6.5	20.0	18.6	1.4
2	2D	E2-g6	土坑18	(8.5)	-	22.0	1.4	3	1D	E2-g7	落込5	(9.6)	17.0	-	1.8
2	2D	E2-g6	土坑18	(5.5)	20.0	-	1.7	3	4D	E2-h7	落込6	7.7	22.0	21.2	1.6
2	2D	E2-g6	土坑25	11.5	16.6	15.4	1.3	3	4D	E2-h7	落込6	(6.6)	-	17.0	1.2
2	2D	E2-g6	土坑25	12.6	19.0	15.4	1.7	3	4D	E2-h7	落込6	(7.6)	-	19.0	1.5
2	3D	E2-g6	土坑26	(10.2)	18.8	-	1.6	3+4	5D	E2-j7	溝211	-	-	-	1.3
2	3D	E2-g6	土坑26	(7.1)	-	18.0	2	3+4	7D	E2-i6	溝211	(11.6)	-	20.0	1.4
2	3D	E2-g6	土坑26	(7.7)	-	20.0	1.3	3+4	8D	E2-j8	溝211	(2.3)	-	-	2
2	3D	E2-f7	土坑101	(5.5)	17.5	-	1.5	4	6D	F2-a8	土坑836	(5.1)	20.0	-	2.4
2	4D	E2-g9	土坑1335	(6.7)	23.0	-	1.3	4	5D	F2-a6	1層	(5.5)	18.0	-	1
2	4D	E2-g9	土坑1335	(3.1)	20.2	-	2.2	4	5D	E2-i7	1~3層	(3.4)	18.0	-	2.5
2	4D	E2-g9	土坑1335	(4.5)	23.8	-	1.8	4	5D	E2-i7	1~4層	(6.2)	-	14.0	1.7
2	4D	E2-g9	土坑1335	(8.3)	-	28.0	1.7	5	4E	F2-d7	井戸17	(3.1)	22.0	-	1.7
2	4D	E2-g9	土坑1335	-	-	18.0	2.5	5	4E	F2-d6	井戸18	12.3	21.5	20.0	1.7
2	4D	E2-g9	土坑1335	8	18.0	17.4	1	5	4E	F2-d6	井戸18	(15.2)	-	32.0	1.5
2	4D	E2-g9	土坑1336	(2.7)	-	-	1.8	5	4E	F2-d6	井戸18	-	-	-	1.4
2	4D	E2-g10	土坑1337	12.3	20.0	16.2	1.4	5	4E	F2-d6	井戸18	(2.9)	18.0	-	1.5
2	4D	E2-g10	土坑1337	10.8	19.5	17.0	1.4	5	4E	F2-d6	3層	(9.2)	-	20.6	1.8
2	4D	E2-g10	土坑1337	8.7	21.0	19.0	1.8	7	2E	F2-h2	落込68	11	17.0	15.6	1.1
2	4D	E2-g10	土坑1337	8.5	21.0	19.0	1.5	7	8E	F2-i1	落込118	(5.7)	22.0	-	1.6
2	4D	E2-g10	土坑1337	7.8	22.0	19.0	1.7	7	5E	F1-i1	3層	(7.7)	-	18.0	1.7
2	4D	E2-g10	土坑1337	(5.7)	25.0	-	1.7	7	5E	F1-i1	3層	(8.7)	19.0	-	1.5
2	4D	E2-g10	土坑1337	11.3	24.0	23.4	1.6								
2	4D	E2-g10	土坑1337	(9.5)	18.0	-	1.4	7	5E	F2-i1	3層	(6.7)	17.7	15.8	3.2
2	4D	E2-g10	土坑1337	11.2	19.0	18.0	1.9	7-8	5E	F1-i10	溝293	(6.1)	-	17.0	1.1
2	3D	E2-f7	落込25	7.1	20.0	19.4	1.4	7-8	5E	F1-i10	溝293	11	17.5	16.0	1.4
2	4D	E2-g10	1層	9.9	24.0	23.8	1.8	7-8	5E	F1-i10	溝293	(6.7)	23.0	-	1.9
2	4D	E2-g10	1層	-	-	-	1.1	7-8	8E	F2-i10	溝397	11.6	-	26.0	1.5
2	4D	E2-g10	1層	(7.7)	-	19.0	1.4	7-8	8E	F2-j1	溝397	(3.4)	27.0	-	2.2
2	4D	E2-g10	1層	(6.5)	-	18.0	1.6	7-8	8E	F2-j1	溝397	(5.2)	21.0	-	2.4
2	4D	E2-g10	1層	(5.9)	-	23.0	1.6	7-8	8E	F2-j1	溝397	(6.2)	-	20.0	1.3
2	4D	E2-g10	1層	(8.0)	-	16.0	1.3	7-8	8E	F2-j1	落込118	(5.8)	19.0	-	1.4
3	1D	E2-h7	落込3	(5.3)	21.0	-	1.5	7-8	8E	F2-j1	落込118	-	20.0	-	1.8
3	1D	E2-h7	落込3	-	-	-	1.7	7-8	8E	F2-j1	落込118	(7.9)	-	19.0	1.5
							5.0 x	7-8	8E	F2-j1	落込118	9.8	19.0	16.4	1.3
							3.0	7-8	8E	F2-j1	落込118	(2.7)	18.0	-	2.3
							3.5 x	7-8	8E	F2-j1	落込118	(5.8)	-	18.0	1.5
3	1D	E2-h7	落込3	-	-	-	5.9	8	8E	F1-i10	1~3層	-	-	-	2
3	1D	E2-h7	落込3	(9.5)	18.2	-	1.2	8	8E	F1-i10	3層	(5)	22.0	-	1.3
3	1D	E2-h7	落込3	(5.1)	-	23.0	1.4	8	8E	G1-a10	3層	-	-	-	1.8
3	1D	E2-h7	落込3	-	-	-	1.4	8	8E	G1-e10	3層	(10)	23.0	-	1.4
3	1D	E2-h7	落込3	(7.5)	-	19.0	1.6	8-9	8E	G1-a9	1~3層	(3.9)	27.0	-	1.9
3	1D	E2-h7	落込3	(6.8)	-	17.0	1.4	8-9	8E	G1-a9	1~3層	(3)	24.0	-	2.3
3	1D	E2-h7	落込3	(6.9)	21.0	-	1.4	9	8E	G1-b10	溝324	13.6	20.0	19.3	1.3
3	1D	E2-g7	落込3	(2.7)	22.0	-	1.8	9	8E	G1-b10	溝324	(9.1)	-	15.0	1.5
3	1D	E2-g7	落込3	-	-	-	1.4	9	8E	G1-b10	土坑1221	(7.3)	-	20.0	1.5
3	1D	E2-g7	落込3	(5.0)	-	22.0	1.6	9	8E	G1-b10	土坑1221	(8.6)	-	17.0	1.5
3	1D	E2-g7	落込3	(4.5)	-	16.0	1.1	9	8E	G1-c10	1層	(6.8)	4.2	-	-
3	1D	E2-g7	落込3	7.4	13.2	12.5	0.9								

第6節 近世遺物の胎土分析

麻田藩陣屋跡出土の窯業関係試料、各地域推定試料の他に各産地の協力を得て、窯出土試料の提供を受けた。分析方法はX線回折試験及び化学分析試験であり、以下の通りの成分相関図を作成し、各グループの様相を明らかにした。使用遺物は表7・8である。(市本)

1. 実験条件

1) 試料

分析に供した試料は表9胎土性状表に示す通りである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切斷し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

2) X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

3) 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15KV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素 10元素で行った。

2. X線回折試験結果の取り扱い

実験結果は表9胎土性状表に示す通りである。表9右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に見られる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

3. 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法 (10元素全体で100%になる) で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $SiO_2-Al_2O_3$ 、 Fe_2O_3-MgO 、 K_2O-CaO の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

1) X線回折試験結果

タイプ分類

表9の胎土性状表には麻田藩陣屋跡出土土器 34個と対比試料として各地の原産地窯から出土した土器 27個が記載してある。表9に示すように土器胎土はAタイプだけが検出された。

Aタイプ: Mont, Mica, Hb, Ch の4成分に欠ける。磁器や陶器は高温で焼成されているために鉱物が分解し、ガラスに変質している。そのため、4成分が検出されない。

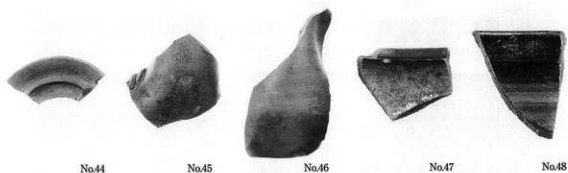
石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

表7 麻田藩陣屋跡出土遺物 胎土分析試料一覧

試料番号	器種	押印番号	遺構名	トレンチ	地区名	備考
1	産地不明青磁(匣鉢付着)	128-14	溝324	6E	G1-b10	麻田製品の可能性
2	産地不明青磁(匣蓋付着)	128-4	包含層 3層	5E	F2-i1	麻田製品の可能性
3	京焼系青磁算木蓋鉢	81-15	土坑26	2D	E2-g8	麻田製品の可能性
4	京焼系青磁瓶	91-3	溝込5	1D	E2-g7	麻田製品の可能性
5	産地不明青磁瓶	—	溝込5	2D	E2-h7	麻田製品の可能性
6	京焼系磁器染付磁器(溶着)	128-1	溝293	5E	F1-i10	麻田製品の可能性
7	京焼系磁器染付鉢	127-14	包含層 1層	8E	G1-a9	麻田製品の可能性
8	京焼系磁器染付灰落し	104-16	土坑659	4E	F2-e6	麻田製品の可能性
9	京焼系磁器染付鉢	88-11	溝込6	1D	E2-h7	麻田製品の可能性
10	肥前磁器染付仏花瓶	81-16	土坑26	2D	E2-g8	麻田製品の可能性
11	京焼色絵碗(道八銘)	95-8	溝282	6D	E2-j8	
12	京・伊賀・信楽焼系色絵丸碗	95-14	井戸22	6D	E2-j7	
13	京・伊賀・信楽焼系鉄絵碗	96-9	井戸23	6D	F2-a8	
14	京焼鉄絵碗(仁清銘)	97-7	土坑835	6D	F2-j8	
15	京焼鉢(帯山銘)	84-20	溝105	4D	E2-hi7	
16	京焼系磁器染付碗(道八銘)	93-1	包含層 1層	4D	E2-i7	
17	京焼系青磁罐鉢	91-6	溝込5	1D	E2-h7	麻田製品の可能性
18	京焼系陶器土瓶注ぎ口(道八銘)	118-18	溝込65	2E	F2-g2	
19	肥前磁器染付端反碗	84-4	溝211	6D	E2-i6	
20	瀬戸磁器染付端反碗	98-2	土坑920	7D	E2-i5	
21	瀬戸磁器染付端反碗	98-4	土坑920	7D	E2-i5	
22	瀬戸磁器染付端反碗	84-3	溝211	6D	E2-i6	
23	肥前磁器染付広東型碗	90-9	溝込5	1D	E2-g7	
24	京焼系磁器染付急須	91-2	溝込5	1D	E2-g7	
25	京焼系青磁染付端反碗	86-2	溝込3	1D	E2-g7	
26	肥前磁器染付碗	106-1	土坑677	4E	F2-d3	
27	肥前磁器染付碗	106-2	土坑677	4E	F2-d3	
28	肥前磁器染付端反碗	79-17	井戸5	2D	E2-g8	
29	肥前磁器染付端反碗	88-5	溝込6	1D	E2-h7	
30	肥前磁器染付広東型碗	103-2	井戸17	4E	F2-d7	
31	備前焼灯明皿	82-12	溝込46	4D	E3-f1	
32	備前焼小壺	82-24	溝込25	3D	E2-f7	
33	備前焼壺	127-15	包含層 1層	6E	G2-b1	
34	備前焼人形徳利	89-7	溝込6	1D	E2-h7	

表8 他産地胎土分析試料一覧

試料番号	産地	器種名	遺跡名	年代
35	砥部	染付広東碗	大下田2号窯埋土内	19C
36	砥部	染付端反碗	大下田窯捨場B-3	19C
37	砥部	染付広東碗	大下田2号窯灰原	19C
38	三田	染付磁器急須(道八)	三輪明神窯跡	19C
39	三田	染付(半磁胎)鉢	三輪明神窯跡	19C
40	三田	染付磁器茶器手皿	虫尾新田窯跡	19C
41	三田	染付(半磁胎)大皿	三輪明神窯跡	19C
42	三田	青磁徳利	三輪明神窯跡	19C
43	三田	青磁皿	虫尾新田窯跡	19C
44	備前	灯明皿	西1号窯跡(天保窯)	19C中
45	備前	人形徳利	西1号窯跡(天保窯)	天保11(1840)~
46	備前	人形徳利	西1号窯跡(天保窯)	明治初年頃(1868)
47	備前	壺	西1号窯跡(天保窯)	鎌倉の窯
48	備前	壺	西1号窯跡(天保窯)	
49	波佐見	染付瀧文端反碗	中尾上発窯跡物原	19C前半代
50	波佐見	染付重輪文端反碗	三股発窯跡物原	19C前半代
51	波佐見	染付二重格子文端反碗	永尾本発窯跡物原	19C前半代
52	三川内	染付紅嘴口	西窯1区1層上土坑	19C
53	三川内	染付碗	西窯1区1層上土坑	19C
54	三川内	染付皿	西窯1区1層上土坑	19C
55	瀬戸	染付端反碗	蜂窪山	19C前半代
56	瀬戸	染付端反碗	蜂窪山	19C前半代
57	瀬戸	染付碗	力三夕	19C前半代
58	瀬戸	染付碗	力三夕	19C前半代
59	有田	染付銅蓮草文碗	小樽2号窯跡	1810~1860年代
60	有田	染付草花文碗	年木台3号窯跡	1810~1860年代
61	有田	青磁染付中皿	外尾山窯跡	18世紀後半
62	有田	青磁染付草花文中皿	黒牟田新窯跡	1810~1860年代



No.44

No.45

No.46

No.47

No.48

写真6 備前胎土分析試料



No.49

No.50

No.51

写真7 波佐見胎土分析試料



No.55

No.56

No.57

No.58

写真8 瀬戸胎土分析試料



No.52

No.53

No.54

写真9 三川内胎土分析試料



No.59

No.60

No.61

No.62

写真10 有田胎土分析試料

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

図 153・158・163 の $Qt-Pt$ 図に示すように Qt の強度が低い領域から高い領域にかけて各地の窯の土器が分布する。

瀬戸： Qt が 200～700、 Pt が 120～160 の領域にあり、瀬戸：経塚山窯跡の土器が集中する。瀬戸：カミタ窯跡の土器は Qt が 1500～2300、 Pt が 100～170 の領域に分散する。

麻田藩推定瀬戸-20、22、23 の 3 個は経塚山窯跡の土器の領域に分布する。麻田藩推定瀬戸-19 と 21 はカミタ窯跡の土器の領域に分布する。

備前： Qt が 700～1200、 Pt が 70～110 の領域と Qt が 1200～2000、 Pt が 80～130 の領域に分れる。麻田藩推定備前-32、33、34 の 3 個は Qt の低い領域に集中し、麻田藩推定備前-31 は Qt の高い領域の備前と共存する。

麻田藩磁器： Qt が 700～800、 Pt が 120～140 の領域と Qt が 1600～1800、 Pt が 100～110 の領域に分れる。

三田： Qt が 800～1200、 Pt が 110～150 の領域と Qt が 2300～2400、 Pt が 80～120 の領域に分れる。

麻田藩青磁： Qt が 1000～1600、 Pt が 100～130 の領域に分布する。

麻田藩推定肥前： Qt が 560～2300、 Pt が 80～130 の領域に分布する。

波佐見・有田： Qt が 1000～1700、 Pt が 90～120 の領域に分布する。

砥部： Qt が 2000～2200、 Pt が 90～120 の狭い領域に分布する。

三川内： Qt が 1500～2000、 Pt が 90～120 の狭い領域に分布する。有田、波佐見、備前は領域が重複する。



写真11 三田胎土分析試料



写真12 砥部胎土分析試料

4. 化学分析結果

表 10 化学分析表に示すように、麻田藩陣屋跡出土土器 34 個と対比試料として各地の原産地窯から出土した土器 27 個が記載してある。

分析結果に基づいて図 154・159・164 の $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図、図 155・160・165 の $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-Na}_2\text{O}$ 図、図 156・161・166 の $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図、図 157・162・167 の $\text{TiO}_2\text{-MnO}$ 図を作成した。

1) $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ の相関について

図 154・159・164 の $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図に示すように SiO_2 が低い領域から高い領域に向けて各窯跡の土器は分布する。

瀬戸、備前、三田はともに SiO_2 が低い領域と高い領域に分れ、低い領域のものは瀬戸 I、備前 I、三田 I、 SiO_2 が高い領域のものは瀬戸 II、備前 II、三田 II とした。砥部は SiO_2 が高い領域に集中する。麻田藩推定肥前は肥前 I～II のタイプに分類された。

波佐見・有田・三川内と麻田藩磁器、麻田藩青磁は近接した領域にあり、この $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ の相関では分別は難しい。麻田藩京焼系は SiO_2 が低く、 Al_2O_3 が高い領域に集中する。

2) $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-Na}_2\text{O}$ の相関について

図 155・160・165 の $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-Na}_2\text{O}$ 図に示すように、 Fe_2O_3 が 2.5%以上の領域には備前 I と II が分布し、明らかに胎土には Fe_2O_3 が多く含有されることがわかる。 Fe_2O_3 が 0～2.5%の領域には備前以外の窯跡の土器が分布する。瀬戸は Na_2O が高い領域に瀬戸 I (経塚山窯跡)、 Na_2O が低い領域に瀬戸 II (カミタ窯跡) が分布する。三田も Na_2O が高い領域に三田 I、 Na_2O が低い領域に三田 II が分布する。三川内も Na_2O が高い領域に三川内 I、 Na_2O が低い領域に三川内 II が分布する。砥部は Fe_2O_3 が 1.5～3.5%の高い領域にあり、備前 II と領域が近く、異質である。波佐見は有田に対して Na_2O が高く、有田は Na_2O 低い。

麻田藩推定備前-33、34 は備前 II の領域にあり、麻田藩推定備前-31、32 は備前 I の領域にあり、 Fe_2O_3 の含有量で、明瞭に分れる。麻田藩推定肥前は Na_2O が低い領域に推定肥前 I、 Na_2O が高い領域に推定肥前 II が分布する。麻田藩；磁器は Na_2O が低い有田の領域に分布する。麻田藩；磁器と青磁は明瞭に異なる領域にある。麻田藩京焼系は 11・13～15 の 3 個と 12・25 は領域を異にし、分れる。麻田藩推定三田は三田 II の領域に分布する。

3) $\text{K}_2\text{O-CaO}$ の相関について

図 156・161・166 の $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図に示すように、 K_2O が低い領域には備前 I と II、中間領域には麻田藩；磁器、青磁、京焼系、推定三田、推定肥前と三河内、砥部、有田、波佐見の土器が混在する。 K_2O が高い領域には瀬戸 I が分布する。

麻田藩推定備前-32、33、34 の 3 個は備前 I と II の領域に分布する。麻田藩推定備前-31 は CaO が高い領域にあり、異質である。麻田藩推定瀬戸-20、22 の 2 個は瀬戸 I の領域に分布する。

4) $\text{TiO}_2\text{-MnO}$ の相関について

図 157・162・167 の $\text{TiO}_2\text{-MnO}$ 図示すように、瀬戸 I と II、有田、波佐見、三田、三川内の各窯跡の土器と麻田藩磁器、麻田藩青磁、推定肥前、推定三田、推定瀬戸は TiO_2 と MnO が低い領域に混在する。砥部、備前と麻田藩京焼系の土器は TiO_2 が高い領域に集中する。

5. 土器分類結果

1) 麻田藩青磁

麻田藩陣屋跡出土の青磁は図 153 の $Q_t\text{-P1}$ 図 (青磁)、図 154 の $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図 (青磁)、図 155 の